

911.108-Mo88-(3)7 911.108
Mo88
1200800303175
(3) ㊟

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

始



33.6.25

F18

011108
MASS
01

木村正辭井上賴圀監修
松下大三郎編纂

增補改版

吉田待郎氏
寄贈本

續國歌大觀

歌集



東京 紀元社發行

例言

- 一 本書は歌集索引の二部より成り、古歌の一句に由りて其の出典を求むるに便するものなり。
- 一 歌集部は主として家集を採り、又諸種の歌合及び私撰集なる古今和歌六帖を收む。原本は皆流布本に據り異本を以て之を校訂せり。勅撰集及び萬葉集、新葉集は正編に收めたるを以て之を載せず。
- 一 歌集部には索引に便せむが爲に、各歌に數字番號を附せること正編に同じ。但し巻首より巻末に至るまで單一なる通し番號を用ゐたるを以て索引の際書名を須たずして直に其の歌の所在を求むべし。又その數字は五字の多きに互るが故に、各歌の頭には略して終の二字のみ記し、別に欄外に其の頁の最初の歌の番號の全數字を記せり。
- 一 索引部は歌集部に存する歌句を五十音順に排列し、且つ各句の下に歌集部と符合する番號を記入せるものなり。而して同一の句五つ以上ある時は其の句の次行に「―」を以て其の句を代表せしめ「―」の下に其の次の句を記し、以て徒に一々歌集部を繙くの煩を軽減せり。
- 一 今左に索引の方法を例示す。

或る人の歌に「鳴立つ澤の」云々の詠あり。今其の全歌を求む 索引部「し」の部を引くに「しきたつさはの 七五七」ごあり。歌集部を繙き欄外の標記「七四三七」に由つて其の頁に「七五七」を求むる時は

心無き身にも哀は知られけりしぎ立つ澤の秋の夕ぐれ
ごあるを知り、同時に山家集所載にて西行の詠なるを知る。

平家物語小督の條に、「小鹿なく此の山里と詠じけむ嵯峨のあたりの秋の頃」ごある引歌の本歌を求む。索引部「を」の部を引くに「をしかなく」とありて下に番號無く、次に「このやまさとの 二五〇三」とあり。

歌集部の欄外の標記番號「二五八〇」の頁に「二五〇三」を求むる時は
嵯峨にまかりて鹿の鳴くを聞きてよめる

小鹿なく此の山里のさがなれば悲しかりけり秋の夕暮
ごあるを知り、且つ基俊集所載同人の歌なるを知る。

一 今回の新版は和泉式部集を補ひたり。記載の位置は時代順に據らずして特に之を卷末に置き、他の集の番號を舊版と異なる無からしめ、舊版をして索引に支障なからしめたり。

大正十四年十月

編 者 識

續國歌大觀歌集部目次

六家集

- 長秋詠藻(俊成).....一
- 秋篠月清集(良經).....二
- 拾玉集(善範).....三
- 山家和歌集(西行).....四
- 拾遺愚草(定家).....五
- 拾遺愚草員外(定家).....六
- 壬二集(家隆).....七

歌仙家集

- 柿本集.....三九七
- 躬恒集.....四〇
- 素性法師集.....四〇三
- 猿丸大夫集.....四一五
- 家持集.....四二六
- 業平集.....四三二
- 兼輔集.....四三三
- 敦忠集.....四三六
- 公忠集.....四三九
- 齊宮集.....四四二
- 敏行集.....四四五
- 宗子集.....四四六
- 清正集.....四四七
- 興風集.....四四八
- 是則集.....四四九
- 小大君集.....四五〇
- 能宣集.....四五〇
- 兼盛集.....四五三
- 貫之集.....四五三

諸家集

- 伊勢集.....四八七
- 赤人集.....四八七
- 遍昭集.....四八七
- 源順集.....四八七
- 元輔集.....四八七
- 朝忠集.....四八七
- 高光集.....四八七
- 友則集.....四八七
- 小南集.....四八七
- 忠岑集.....四八七
- 賴基集.....四八七
- 源重之集.....四八七
- 信明集.....四八七
- 元真集.....四八七
- 仲文集.....四八七
- 忠見集.....四八七
- 中務集.....四八七
- 大江千里集.....五八二
- 元良親王御集.....五八二
- 清慎公集(藤原實賴).....五八二
- 西宮左大臣御集(源高明).....五八二
- 海人手子良集(藤原師氏).....五八二
- 御堂關白集(藤原道長).....五八二
- 本院侍從集.....五八二
- 清少納言集.....五八二
- 紫式部集.....五八二
- 伊勢大輔集.....五八二
- 曾丹集(曾爾好忠).....五八二

實方朝臣集……………六三三
 前大納言公任卿集……………六三〇
 祭主輔親卿集……………六一一
 藤原長能集……………六一一
 馬内侍集……………六二六
 惠慶法師集……………六四四
 安法法師集……………六六九
 小馬命婦集……………六九四
 爲朝朝臣集……………七〇〇
 閑院左大將朝光卿集……………七〇〇
 藤原義孝集……………七〇三
 權中納言定賴卿集……………七〇三
 大貳三位集……………七二六
 辨乳母集……………七三三
 出羽辨集……………七三三
 祐子内親王家紀伊集……………七三三
 源賢法眼集……………七三三
 大納言經信卿集……………七三七
 津守國基集……………七四三
 讚岐入道集(藤原顯綱)……………七五三
 藤原基俊家集……………七五三
 左京大夫顯輔卿集……………七六〇
 清輔朝臣集……………七六〇
 故刑部卿集(平忠盛)……………七六〇
 寂然法師集……………七六六
 北院御室御集(守覺法親王)……………七六六
 式子内親王集……………七八八
 待賢門院堀川集……………七八八
 權中納言俊忠卿集……………九八八
 中納言雅兼卿集……………八〇〇
 成通卿集……………八〇〇
 登蓮法師集……………八〇六

續國歌大觀

長秋詠藻

長秋詠藻上

久安の頃崇徳院に百首の歌召し、時たてまつりし歌

春來ぬと空に著きは春日山嶺の旭のけしき也けり
 霞立ち雪も消ぬや三吉野の御垣が原に若菜摘みてむ
 梅が枝にまづ咲花ぞ春の色を身に占初むる始也ける
 我が圃を宿とはしめよ鶯の古巢は春の雲につけてき
 冬枯の裾野の原をやしより早蕨あさり雉子鳴く也
 哀にも思ひ立つ哉歸る鳥流石に見ゆる春のけしきを
 ながめする緑の空もかき曇り徒然ささる春雨ぞふる
 紫の根はふよこ野のつば菫ま袖に摘まむ色も睦まし
 山櫻咲くより空にあくがるゝ人の心やみねのしら雲
 いか計り花をば春も惜むらむ且は我身の限と思ひて
 一つらき哉なごて櫻の長閑なる春の心に倣はざるらむ
 散る花の惜しさを暫し知せばや心がへせよ春の山風
 味氣なき何連花の惜からむ我身は春のよそなる物を
 櫻花思ふ餘りに散るとの憂きをぞ風におほせつる哉

夏歌十首

吹く風の心と散らす花ならば梢に残す春もあれかし
 六道遠く何たづぬらむ山櫻おもへば法の花ならなくに
 七櫻花待つと惜むとする程に思ひもあへず過す春かな
 八櫻花麓の小田の苗代はたねよりさきに花ぞ散りける
 九丈夫は同じ麓をかへしつゝ春の山田においにける哉
 〇行末の霞の袖を引止めて絞るばかりや恨みかけまし

夏くれば衣更して山賤のうつぎ垣根も白がさねなり
 二早振かもの社の葵草かざす今日にもなりにける哉
 三さらぬだに臥す程もなき夏の夜を待ても鳴郭公哉
 四郭公鳴き行く方にそへてやる心幾度こゑを聞くらむ
 五五月こそなれが時なれ郭公いつを迄とか聲惜むらむ
 六夏もなほ哀はふかし橘の花散るさとに家居せしより
 七五月雨はたく藻の煙打しめり潮たれ増る須磨の浦人
 八庭の面の苔路のうへに唐錦しとねにしける常夏の花
 九小舟さし手折りて袖に移しむ蓮の立葉の露の白玉
 〇いつとも惜くやは非ぬ年月を御襖に捨る夏の暮哉

秋歌二十首
 八重葎さし籠りにし蓬生に争てか秋の分て来つらむ
 三萩の葉も契ありてや秋風の訪づれ初むる妻となる覺
 三七夕の舟路はさしも遠からじなど一年に一渡りする
 三水溢つき植し山田にひたはへて又袖濡す秋は來に鬼

松下大三郎編

私撰集並歌合

古今和歌六帖……………九三〇
 寛平御時后宮歌合……………一〇二一
 亭子院歌合……………一〇三七
 天徳四年内裏歌合……………一〇四一
 高陽院七番歌合……………一〇四九
 千五番歌合……………一〇五四
 六百番歌合……………一一三三
 補遺……………一一三四
 和泉式部集……………一一四四

何事も思ひすつれば秋は尙野邊の錦の妬くもある哉
 終夜妻とふ鹿の胸分にあだしまはぎの花散りにけり
 身も憂も誰かはつらき淺茅生に怨ても鳴く虫の聲哉
 夕されば野邊の秋風身にしてみても鳴くなり深草の里
 露繁き花の枝毎に宿りけり野原や月のすみかなる覽
 石ばしる水の白玉かす見えて清瀧川にすめる月かな
 月よりも秋は空社哀なれ晴すばすまむかひ無らまし
 月の秋數多經ぬれと思はえず今宵計の空のけしきは
 いかにして袖に光の宿る覽雲居の月は隔てし身を
 その時暫く爲地下一故

冬歌十首

秋の月も又もあひ見む我が心盡しなはてそ更科の山
 月も日も別の物を秋來れば夜を長しとも誰定めけむ
 夢さめむ後の世迄の思出に語るばかりも澄める月哉
 此の世には見るべくも非ぬ光哉月も佛の誓ならすば
 衣うつ響は月の何なれや冴えゆく儘に澄み昇らむ
 山川のみづの水尋ねきて星かぞ見る白菊のはな
 元結の霜置添へて行秋はつらき物から惜くもある哉

戀歌二十首
 思ふより頼て心の移りぬる戀は色なる物にぞ有ける
 散らば散れ岩瀬の杜の風に傳へやせまし思ふ言の葉

大經

惜む哉月の御顔も影消えて鶴の林にけふり絶えけむ
 無常二首

世の中を思ひ列ねて詠むれば虚しき空に消ゆる白雲
 常にすむ鷺のみ山の月だにも思知れどぞ雲隠れける
 離別一首

羈旅五首

浦づたふ磯の苦やのかち枕聞きも習はぬ波の音かな
 遙なるあしやの沖の浮寝にも夢路は近き都なりけり
 山楯の下葉を折敷きて今宵はさねむ都戀しも
 我が思ふ人に見せばや諸どもに隅田川原の夕暮の空
 住馴れしすみかも常の柄かは旅を旅とも何思ふらむ
 慶賀歌二首

物名二首

君が代は斧の柄くちし山人の千度歸らむ時も變らじ
 誠にや松は十返花咲くと君にぞ人の問はむとすらむ

霞柳櫻

花の色の飽すみれば歸らめや渚の宿にいざ暮してむ
 月鈴蟲紅葉

短歌一首

やまご島根の 風として 吹き傳へたる
 言の葉は 神の御代より かは竹の よゝに流れて
 絶せねば 今もはこやの やま風の 枝も鳴らさず
 静けきに むかしの跡を 尋ねれば 峰の木すらも
 懸しより 四つの海にも 波立たず 和歌のうらら
 敷そひて 藻汐のけふり 立ち増り 行く末までの
 例しとぞ しまの外にも 聞ゆるな これを思へば
 君が代に あふくま川は 嬉しきを みわたに懸る
 埋れ木の なづめる言葉 から人の みよ迄あはぬ

年經れど人の心はつれなくて涙は色の變りぬるかな
 味氣なや思へばつらき契哉戀は此世に燃るのみかは
 深くしも思はぬ程の思ひだに煙の底と成るなる物を
 おく山の岩垣沼のうきぬなは深き戀路に何亂れけむ
 人心浮田の杜に引くしめの斯てや頓てやまむとす覽
 涙川袖のみわたに沸返りやる方もなき物をこそ思へ
 露結ぶまの、梢のすが枕かはしてもなご袖濡すらむ
 戀をのみ飾磨の市に立つ民の堪ぬ思に身をや替てむ
 いかせむ蟹のさかてを打返し恨ても尙飽すも有哉
 忘草つみにこしかど住吉の岸にしもこそ袖は濡けれ
 思侘び見し俤はさて置きて戀せざりけむ折ぞ戀しき
 いか計り我を思はぬ我心わが爲つらき人を戀ふらむ
 人をのみ何恨けむ憂きを尙こふる心もつれなかり鬼
 戀しきに憂もつらきも忘られて心なき身に成にける哉
 厭ふべきこは幻の世中をあな淺まし戀のすきびや
 七し忍ぶ床だに堪ぬ枕にも戀は朽せぬ物にぞ有ける
 七始なき昔思ふぞ哀なるいつより戀にむすばれけむ

雜歌二十首

幾返り波の白木綿懸つらむ神さびにけり住の江の松
 思ふこと三輪の社に祈りみむ杉は尋ぬる印のみかは
 釋教五首

華嚴
 旭さす高根の花は匂へども麓の人は知らずぞ有ける
 方等
 聞初めし鹿の苑にはとかへて色々なる四方の紅葉
 般若
 雲も皆空しとく空晴て月ばかりこそ澄増りけれ
 法華
 遙にも匂ひけるかな法の花後の五百年なは盛りなり

大經

嘆きにも 變らざりける 身の程を 思へばかなし
 春日やま 峰のつゞきの 松が枝の いかにかしける
 末なれや 北のふちなみ 懸てだに 云にもたらぬ
 下枝にて した行く水に こそたつ、 いつの品に
 年ふかく ことをせ三も 經にじより よもきの門に
 さし籠り みちのしげ草 老果て、 春のひかりは
 こと遠く 秋は我が身の 上ごのみ つゆけき袖を
 如何ども 訪ふ人もなき 横の戸に なほあり明の
 月かげを まつとがほに 詠めても 思ふこゝろは
 おほ空の 虚しき名をぞ 自づから 残さむことも
 綾なくに 難波のことも 津の國の 蘆のしをれの
 刈捨て、 荒びにのみぞ 成にしを きし打つ波の
 立ち返り かゝるみとの 畏こさに 入江の藻くづ
 搔つめて さまらむ跡は 陸奥の 信夫もちずり
 亂れつゝ 忍ぶばかりの 節やなからむ

反歌

山川の瀬々の泡消ざらば知られむ末の名こそ惜けれ
 堀河院の御時の百首の題を述懐によせて詠み
 ける歌保延六年の頃のことゝかや

春歌

去年も借暮にきこ思へば春立と聞より兼て物ぞ悲き
 立春
 春日野の松の古枝の悲きは子日にあへど引人も無し
 霞
 いつしかと春は霞の越て行く音羽の山や我身なる覽
 鶯
 花咲かぬ宿の梢はなかくに春とな告げそ鶯のこゑ
 若菜
 澤に生る若菜ならねど徒に年を積むにも袖は濡けり
 残雪

知春知らぬ越路の雪も我計り憂きに消せぬ物は思はれ
 梅 梅
 知數ならぬ袖には古し梅の花此世に止る妻もぞなる
 柳 柳
 春雨に玉ぬく柳かせ吹けば一方ならで露ぞこぼるゝ
 早蕨 早蕨
 知歎かめやおごろの道の早蕨跡を尋ぬる折しありなは
 櫻 櫻
 埋木となり果てぬれど山櫻惜む心はくちすもある哉
 春雨 春雨
 一春に逢はぬ身を知雨の降込めて昔の門の跡や絶なむ
 春駒 春駒
 二かばかりと今は我身を水のえに何とて駒の立廻る覽
 歸雁 歸雁
 三雲の上に行通ひても音をぞ鳴く花咲時に逢はぬ雁音
 喚子鳥 喚子鳥
 一堪ぬだにあらましかばと思人戀しさ添ふる喚子鳥哉
 苗代 苗代
 一侘の共ひきはありかじ山水の有に任せむ小田の苗代
 菫菜 菫菜
 一菫咲く淺茅が原に分けきても唯ひと道に物ぞ悲しき
 杜若 杜若
 一世を厭ふ宿には植ゑじ杜若思ひ立つ道かこひ顔なる
 藤 藤
 一播磨海藤江の浦にみつ沙の辛くて世にも沈みつる哉
 秋冬 秋冬
 一身のうさに重て物を思へどや移ろひぬらし山吹の花
 三月盡 三月盡
 一世の中を歎く涙は盡きもせて春は限となりける哉
 夏歌 夏歌
 更衣 更衣

一花の色は今日脱更ついつか又昔の衣にならむとす覽
 卯花 卯花
 二山賤の垣はあたりに宿るかな世を卯の花の盛なる頃
 葵 葵
 三神山にひき残さるゝ葵草時にあはでも過しつるかな
 郭公 郭公
 一身のうさは問ふべき人も訪はぬ世に哀に來鳴く鴈哉
 萬蒲 萬蒲
 二けふは又萬蒲の根さへかげ添へて亂ぞ増る袖の白玉
 早苗 早苗
 一早苗をば懸し我身よ奥手とも思はれ頼あらまし物を
 照射 照射
 一丈夫は鹿まつとのあればこそ繁き歎に堪へ忍ぶらめ
 五月雨 五月雨
 二五月雨はまやの軒端の雨瀧き餘なるまで濡るゝ袖哉
 花橋 花橋
 一思ひきや花橋に斯ばかり憂身ながらにあらむ物と
 螢 螢
 一闇の内も螢飛びかふ物思へば床のさ葦朽やしぬらむ
 蚊遣火 蚊遣火
 一白雨の瀧きて過ぐる蚊遣火の濕りはてぬる我が心哉
 蓮 蓮
 一濁にもしまぬ蓮の身也せば沈む共世を歎かざらまし
 氷室 氷室
 一埋れて消ぬ氷室の例にや世に長らへばなむとす覽
 泉 泉
 一我といへば涼しき水の流さへ岩間に咽ぶ音きかす也
 六月祓 六月祓
 一思ふ事皆盡きねとて御禊する川瀬の波も袖濡しけり
 秋歌 秋歌
 立秋 立秋

一秋きぬと聞より袖に露ぞおく今年も半過ぬと思へば
 七夕 七夕
 一何事を我なげくらむ星合の空を見るにもみつ涙かな
 萩 萩
 一見るからに袖ぞ露けき世の中を鶉鳴く野の萩萩の花
 女郎花 女郎花
 一身のうさにえぞなづきは女郎花の名をさへ惜と思へば
 薄 薄
 一浮世には門させりどや思ふ覽出がてにする篠の小薄
 刈萱 刈萱
 一萩原や繁みにまじる刈萱の下葉が露に萎れはてぬる
 蘭 蘭
 一藤袴あらしたちぬる色よりも碎けて物は我ぞ悲しき
 萩 萩
 一我袖は萩の上葉の何なれや戦めくからに露こぼる覽
 初雁 初雁
 一歸りては又來る雁よ言とはむ己が常世も斯や住憂き
 鹿 鹿
 一世の中よ道こそなけれ思入る山の奥にも鹿ぞ鳴なる
 露 露
 一菜する櫛の葉柴に散露のはらゝと社音は泣れけれ
 霧 霧
 一夕まぐれ霧立渡る鳥部山そこはかどなく物ぞ悲しき
 榎 榎
 一咲てこそ消ゆとも消えぬ露の間もあな美まし榎の花
 駒迎 駒迎
 一東路や引も休めぬ駒の足の稍なづみける身に社有けれ
 月 月
 一慰むと誰か云けむ詠むれば月こそ物は悲しかりけれ
 搦衣 搦衣
 一長き夜に衣搦つる榎の音のやむ時もなく物ぞ思よ

一蟲 蟲
 一さりとともと思ふ心も蟲の音も弱り果てぬる秋の暮哉
 菊 菊
 一憂身には餘なるまで見ゆる哉匂みたる宿の八重菊
 紅葉 紅葉
 一嵐吹く峰の紅葉の日にそへて脆くなり行く我が涙哉
 九月盡 九月盡
 一うき身故何かは秋もどまるべき理なくも惜みける哉
 冬歌 冬歌
 初冬 初冬
 一冬されは野原もいと霜枯れて物寂しくも成増る哉
 時雨 時雨
 一時雨るもよそにや人の思ふ覽憂には袖の物にぞ有ける
 霜 霜
 一皆人の霜となれどや露の身を草の末葉に結び置けむ
 霰 霰
 一さゆる夜におつればこぼる涙こそ枕の本の霰也けれ
 雪 雪
 一山や梢におもる雪折れて堪へぬ嘆きの身を碎く哉
 蘆 蘆
 一身の憂に折臥ぬれば亂蘆の世をば難波の何か怨みむ
 千鳥 千鳥
 一修行方なくあくがれぬ共濱千鳥止らむ跡を誰か忍ばむ
 水 水
 一春日山いかに流れし谷河の末を氷のどち果てぬらむ
 水鳥 水鳥
 一水の上に争でか鴛の浮ぶ覽陸にだに社身は沈みけれ
 網代 網代
 一身を寄む方社無れ宇治河の網代を見てや日を送らまし
 神樂 神樂
 一つくづくと寢覺て聞けば里神樂詭言がましき世に

鷹狩 鷹狩しあはする鷹の岑越に行く末知らぬ程ぞ悲しき
 炭竈 炭竈立つ小野の炭竈我なれや歎を積みて下にもゆらむ
 爐火 山賤の掃差合せ埋む火のあるとも無て世をも經る哉
 除夜 〇さり共と思し程の年だにも暮るゝは易き空無りしを
 戀 初戀
 初戀 洩しては袖や萎れむ數ならぬ身を耻かしの杜の雫は
 忍戀 忍戀にのみ沈む三稜のくり返し下に亂れて已ぬべき哉
 不逢戀 恨すや君にのみかは大方向の世にも逢ふてふとし無れば
 初逢戀 初逢見ても夢かさのみぞ辿らるゝ嬉しきとは現ならじと
 後朝戀 暮にしも契ざりせば世中に待事無てやみぞしなまし
 遇不逢戀 遇不逢戀に重ねし袖は更に又返してさへは歎くべしやは
 旅戀 旅戀の中はうき節繁し篠原や旅にしあれば妹夢にみゆ
 思 思 片思 片思にせく煙は高く立つ物を我身は人のしもに成ぬる
 恨 恨 恨 憂身をば我だに厭ふいとへ共ををだに同心と思はむ
 雑歌 雑歌 〇うき身也かけて思はじ中々にいふ限なき君が千年は
 曉 曉

一あかつきとつげの枕を歌て、聞くも悲しき鐘の音哉
 松 松 〇うかりけり昔の末の松山に波こそや思置きけむ
 竹 竹 〇いかにせむ賤が園生の奥の竹かき曇る共世中ぞかし
 苦 苦 〇岩たゝむ山の片その苦むしろ長なへにも物思ふかな
 鶴 鶴 〇年だにも若の浦わのたづなら雲みを見つゝ慰てまし
 山 山 〇憂身をば我心さへふり捨てゝ山のあなたに宿求む也
 河 河 〇最上川瀬々に堰るゝ稻舟の暫しぞとだに思ましかば
 野 野 〇露けさは我身のさがぞ小倉山麓の野邊の秋ならね共
 關 關 〇世中は關戸にふせる逆も木のかれ果ぬる身にそ有けれ
 橋 橋 〇年經とも宇治の橋守我ならば哀と思ふ人もあらまし
 海路 海路 〇磯隠れま楫しげぬき漕ぐ舟の早く浮世を離てしかな
 旅 旅 〇天離鄙の長路に日數經て落ふれぬべき身をいかにせむ
 別 別 〇思ふ人なしと思ひし世中には又いかに惜しき別ぞ
 山家 山家 〇谷川も枕の本に聞くほどに頓て寢覺の床ぞうきぬる
 田家 田家 〇世の中は秋の山田の庵なれや畦の通路忙しかるらむ
 懷舊 懷舊 〇我心あれ行く宿となりけり昔を忍ぶ草のまもなし

夢 夢 〇うき夢は名殘迄こそ悲しけれ此世の後も尙や歎かむ
 無常 無常 〇石をうつ光の内によそふなる此身の程を何歎くらむ
 述懐 述懐 〇四方の海を硯の水に盡す共我思ふ事は書もやられじ
 祝 祝 〇うき身也かけて思はじ中々にいふ限なき君が千年は

長秋詠藻中

春歌

家に十首歌人々詠せける時立春の歌とて讀める
 〇年のうちに春立ちぬとや吉野山霞かゝれる峰の白雪
 正月朔日の頃大原に詣つて松原の霞めを
 〇春霞立ちにけらしな小鹽山小松が原の海みどりなる
 右大將實定廟の許に十首の歌詠むとて贈られし
 題の中遠村の霞といふ心を
 〇朝戸あけて伏見の里に眺むれば霞に咽ぶ宇治の川波
 故女院白河の押小路殿にて彼岸の御念佛あり
 し七日の程人々毎日會せむとて歌詠みし中に觸
 中霞といふ心を
 〇何となく物哀にも見ゆるかな霞やたびの心なるらむ
 刑部卿賴朝朝臣歌合すとて歌加ふべき由云ひし
 かばよみて贈りし五首の中、歸雁
 〇聞く人ぞ涙は落つる跡るかり鳴きて行くなる曙の空
 崇徳院近衛殿に御幸ありし日遠尋山花といふ
 心をよませ給ひし時詠める
 〇面影に花の姿をすき立てゝいくへ越えきぬ峯の白雲
 山家にて望山待花と云ふことを此彼詠みしに

〇山櫻咲やらぬ間は暮とに待たでぞ見ける春の夜の月
 大炊御門右大臣まだ納言に物せられし時三條の
 對の前に櫻盛りなるとて會せられし時
 〇君が住む宿の梢の花盛けしきことなる雲ぞ立ちける
 其の後幾何の年も隔てず皇太后宮后に立ち給ひし
 時わざと此の歌の喜云はれたりき
 保元四年の春内裏の御會に花有「喜色」といふと
 を詠ませ給ひし時
 〇九重に匂をそふる櫻花いく千代春に逢はむとすらむ
 同じ春内裏の御會に禁庭の柳垂といふ心を
 〇春來れば玉の砌をはらひけり柳の糸や伴のみやつこ
 家の十首の歌の中に花
 一み吉野の花の盛を今日見れば越の白嶺に春風ぞ吹く
 三月朔日頃日吉に詣で、歸るに法成寺の花面し
 ろかりしかば参りて金堂前花の散る下に佇みて
 二古りにける昔を知らば櫻花ちりの末をも哀とは見よ
 歌好む者共法勝寺に會して十首の歌よみし時花
 の歌とて詠める
 一花に飽て遂に消なば山櫻あたりを去らぬ霞とならむ
 左大將實定の十首の題のうち花留客と云ふとを
 一尋ね來る人は都を忘るなどねにかへり行く山櫻かな
 故女院彼岸御念佛の會の中關路落花と云ふ心を
 一足柄の山の手向に祈れどもぬさどちりかふ花櫻かな
 同じ會の中の橋邊
 一八橋に翠の糸をくりかけてくもでにまがふ玉柳かな
 西行西住などいふ上人共詣で來て對花思西と
 いふ心をよみしに
 一散花を惜むにつけて春風の吹やる方に眺めをぞする
 田家鶯、彼岸の御念佛會の中
 一ますらをが秋のをしねを松垣にまだ春深き鳥の聲哉
 三月盡日法印靜憲が許より贈りたりし
 一花は皆四方の嵐に誘はれて獨や春のけふは行くらむ

返し
〇惜しと思ふ人の心し後ればねば獨しもやは春の歸らむ
夏歌

夏歌

十首の歌の中に、更衣
一いつしかも更つる花の袂哉時に移るは習ひなれども
夏の初によめる
二時鳥暫しな待たじ歸りにし春の名残の忘れもぞする
樹蔭の卯花と云ふ心を
三身を知らば哀ぞ思ふ照日疎き岩陰山に咲ける卯花
暮見卯花と云ふ心を
四柴人の歸るみたにの追風に波よせまざる岸の卯の花
花橋を人々よみけるに
五誰かまた花橋に思ひ出でむ我も昔のひととなりなば
伏見にて相知れる僧の禿經に詩歌供養すこと
近聞郭公と云ふ心をよみに
六哀にもともに伏見の里に來て語らひあかす郭公かな
左大將の許に會すこと歌くはふべき由有りしか
ば詠みて贈りし三首の中、時鳥
七我心いかにせよとて郭公もまの月の影に鳴くらむ
家の十首のうち、郭公
八さやかに鳴き渡る哉郭公なれや早月の光なるらむ
はやく常磐にて百首の歌よみける中に、曉時鳥
九忍びづまおき行く空に郭公名残多くも鳴き渡るかな
法住寺殿にて院の御供花の時の會に兩方聞郭
公と云ふ心を
〇時鳥ふたむら山を尋ねれば峰を隔て、鳴き交すなり
同じ御供花の時旅宿五月雨といふ心を
一梅雨をきそのみ坂を越佐びて懸路に柴の庵をぞさす
左大將の會に贈りし中の、五月雨
二梅雨は蘆の八重葺ふきそへて空の氣色も露なかり鼻
崇徳院の御會の時六月朔日更懸時鳥といふ心

を詠ませ給ひし時
三尋ね見むまばろしもがな郭公行方も知らぬ六月の空
頼輔朝臣の歌合の歌、納涼
四夏の日を厭ひて來つる奥山に秋も過ぎたる松の風哉
崇徳院にて泉邊納涼といふ心を
五水の面に夏の日敷を擲遣ればまだ袂に秋風ぞ吹く
秋歌

秋歌

初秋の歌とて詠みける
六草木も木も色づく秋の初風は吹初るより身にぞ浸ける
保延の御時内裏の御會に七夕の心を詠める
七七夕はうら珍しく思ふらむこよひは雲の衣かへさで
頼輔朝臣の歌合のうち、七夕
八七夕の絶えぬ契をそへむとや羽根をならぶる鶴の橋
遠郷萩といふ心を
九此里のま萩にすれる衣手をほさで都の人に見せばや
二條院の御時東三條におはします頃應製五首の
中、風動野花
〇君が代は遠里小野の秋萩も散さぬ程の風ぞ吹きける
鹿聲何方
一吹き迷ふ風にたぐふ鹿の音は一方ならず袖濡しけり
左大將の十首の題の中、夜泊聞鹿といふ心を
二やよやかに蟲明の松の風に又遙に鹿の聲おくるなり
八月十五夜崇徳院の御會
三世に知らぬよはの空哉秋毎に牙ゆるは月の習なれ共
法勝寺の十首の中の月二首
四月清み都の秋を見わたせば千里にしける氷なりけり
いかなれば沈み乍らに年を経て代々の雲の月を見覽
二條院の御時也爲四代之侍臣尙在雲客之列故
左大將十首の題の中、江上月
五思出でよ神代もみきや天の原空も一つに住の江の月
前馬助教頼住吉の御社にて歌合すこと當世の歌

よみごもに歌す、め侍りし時三首の中、社頭月
〇心なき心もなほぞつきはつる月さへすめる住吉の濱
家に月の五首の歌よみし時、山居月

山居月

住佐びて身を隠すべき山里に餘り隈なきよはの月哉
田家月
〇丈夫は鳴子も曳す寝にけらし月に山田の庵は守せて
家の十首の歌の中に月
〇世を憂しと何思ひけむ秋毎に月は心に任せてぞ見る
老の後の月を見てよめる
一眺むれば六十の秋も覺えけり昔をさへや月はみす覽
九月十三夜崇徳院にて月照菊花と云ふ心を詠
ませ給ひし時
二常よりも隈なき空の氣色哉月も此花見るにや有る覽
擣衣何方と云ふことをよみける
三擣つ音はよその枕に響來て衣は誰になれむとすらむ
二條院の御時内裏の五首の中紅葉出牆といふ
心を
四山姫や岩垣隠れたはらむ紅葉雙ねの袖の見えつる
西山に住みける比暮見落葉といふ心を
五木のもとに今唯暫し來ざりせば誠の夜に錦ならまし
院の九月御供花の時の會に鹿聲何方といふ心を
六鳴く鹿は峯か麓かこの山たびの枕に聲おくるなり
殘菊夾路
七匂ひ來る山下水をどめ行けばま袖に菊の露ぞ移ろふ
九月盡日崇徳院にて山路秋過といふ心を詠ませ
給ひしに
八山路をば送し月も有る物をすて、も暮る、秋の空哉
家の十首の會の中、九月盡
九暮ればつる夕の空を詠むれば雲こそ秋の名残也けれ
冬歌
十月朔日時雨しける日

〇早晩に降添ふ今朝の時雨哉露もまだひぬ秋の名残に
海路時雨といふことを
一袖ぬらす小島が磯の泊かな松風さむみ時雨ふるなり
敦頼が住吉の歌合の三首の中、旅宿時雨

旅宿時雨

二哀にも夜半に過ぐる時雨哉汝もや旅の空に出つ、
嘉應二年十月法住寺殿の殿上の歌合に關路落葉
といふ心を
三色々の木の葉に道も埋れて名をさへたぐる白河の關
頼輔朝臣の歌合に贈りし中、落葉
四降音も袖の濡るも變らぬを木葉時雨と誰かわきけむ
法住寺殿の殿上の歌合の中、水鳥近馴
五君が代をのどかなりとや水鳥も玉の砌に翼しくらむ
左大將の十首の題の中、曉天千鳥
六すまの關有明の空に鳴く千鳥傾ぶく月は汝も悲しや
關中雪、おなじ題の中
七降初めて友まつ雪は待附けつ宿こそ最ぞ跡絶にけれ
保延の御時二條内裏におはしまし、時雪庭樹花
といふことを詠ませ給ひし時
八百敷やみ垣の松も雪ふれば千代の印の花ぞ咲きける
法勝寺の十首の會の雪
九獨立つ小野の炭竈雪積て富士の高ねの心ちこそすれ
師走の十日餘り雪いさいたう降りたる旦左大將
新大納言と聞えし時贈りし
〇今朝は若君もや訪ふと眺れどまだ跡もなき庭の雪哉
返し
十今ぞきく心は跡もなかりけり雪かき分けて思遣れ共
同じ日大宮權大夫經盛卿まだ彼の宮のすけと云
ひし時近き程に住みけるより贈れりし
十一雪ふれば憂身を最ぞ思し踏分て訪ふ人しなれば
返し
十二降果る憂身は雪を哀なる今日しも人の訪につけても

家の十首の會の中、雪
積れ唯道は絶ゆるも山里に日をふる雪を友と頼まむ
鳥羽院北殿におはしまし、比水留水聲と云ふ
心を殿上の人々よみしに
冬くれば水と水の名を換て岩もる聲をなご忍ぶらむ
歳暮雪といふことを詠みける
暮れ果て、越路を歸る新玉の年ふりこめよ雪の白山
十首の會の中、歳暮
中々に昔は今日も惜しかりき年や歸ると今はまつ哉
賀歌
鳥羽院田中殿におはしまし、比八條院姫宮と申
し、時彼御方にて竹週年友といふ題を講せられ
し時よめる
我友と君が御禊の吳竹は千世に幾世の影をそふらむ
故右大臣大炊御門の家に渡り初めて詩歌講せら
れし時鶴契週年といふことを
君が植る松に住む鶴幾千代は長閑き宿に馴むとす覽
仁和三年正月のことにやありけむ攝政閑院にて
始めて詩歌講ありし時對松争齡といふことを
植えて見る君が齡は限なし千たび花咲けやどの若松
同じ人宇治にて河水久澄といふ題を講せらるべ
しとて或る人の詠ませし時人に代りて
水上に千年すめとや定めけむ八十うち川の絶ぬ流は
又人に代りて
千早振宇治の橋守言とはむ幾世すむべき水の流れぞ
これはいださわりけるなるべし
家の十首の中、祝
君が代は普くそ、春の雨の數ぞ千年の數となるべき
仁和元年の大嘗會の悠紀方の歌よみて奉るべき
よし宣旨有りしかばさき、つねは儒者なごつ
かうまつるをいかりと辭し申すを尙よみて奉る

春の日の光は際もなけれどもまつ花咲くは梅原の山
乙帖三四月
櫻山 櫻花盛開松樹交枝
山吹崎 歎冬臨岸水
水の色に花の匂も一つにて八千代ぞすまむ山吹の崎
大瀧山 卯花蔓開山脚民家多
布さらす麓の里のかすそへて卯の花咲ける大瀧の山
丙帖五六月
長澤池 端午日人採菖蒲
長澤の池の菖蒲を尋ぞ千代の例にひくべかりける
吉田郷 植田之所多
堰く水も吉田の里に植る田は兼て年經む影が見えける
玉蔭井 水邊水陰有納涼之人
岩間もる玉の井の涼しきに千年の秋を松風ぞ吹く
丁帖七八月
高宮郷 七夕有引絲之家一所
七夕に今朝ひく絲も長かれ君をぞ祈るたか宮の里
志賀浦 月浮水上人見所
照る月も光をそへて見ゆる哉玉よせ返す志賀の浦波
玉野原 秋花開敷
露繁き玉野の原の萩ざかり風も長閑に見ゆる秋かな
戊帖九十月
吉水郷 多人家菊花臨水
幾ちよの秋かすむべき菊の花匂をうつすよし水の里
大藏山 山脚民家多積稻之所
敷しらす秋の刈穂を積てこそ大藏山の名には負けられ
松賀江岸 松樹茂盛邊山有紅葉
紅葉ばを染むる時雨は降來れど緑を増る松が枝の岸
己帖十一月
千坂浦 千鳥群飛行客見所

べきよし御氣色有るよし行事辨俊經朝臣度々し
めし送りしかばよみて奉りし歌
悠紀方 近江國
風俗歌十首
稻舂歌 坂田郡
近江路や坂田の稻を刈積て道ある御代の初にぞつく
神樂歌 長岑山
萬代を祈りぞかくる長岑の山の神をさねこじにして
辰日參入音聲 鏡山
嬉しくも鏡の山を立て置きて曇なきよの影を見る哉
同日樂破 余吾海
四方の海も風靜にぞなりぬちし聲治れるよこの浦波
同日樂急 眞木村
君が代はちへのなみくらもなく作重ねよ眞木の村人
同日退出音聲 音高山
吹く風は枝も鳴さで萬代とよばふ聲のみ音たかの山
巳日參入音聲 石根山
行く末を思ふも久し君が代はいはねの山の峯の若松
同日樂破 安河
安川に群居て遊ぶ眞鶴も長閑なる世を見する也けり
同日樂急 木綿園
ゆふ園の日影の蔓かざしもて樂しくも有るか豊明に
同日退出音聲 高御倉山
動なき高御倉山祈置きつ治めむ御代は神のまに
同悠紀方御屏風六帖和歌十八首別紙にあり
甲帖正二月
小松崎 子日有遊客眺望湖海
子日して小松が崎を今日見れば春に千代の影ぞ浮べる
龜岳 有探若菜女人
少女も君が爲とや龜岳に萬代かねて若菜摘むらむ
梅原山 梅花多開敷

幾千年幾葉ゆかむ御代なれや千坂の浦に千鳥鳴く也
勢多橋 白雪積敷人馬過所
東路や日次の貢絶えじとて雪ふみ分くる勢多の長橋
吉身村
君が代は吉身の村の民も皆春をまつとや急ぎ立ちむ
仁安元年十一月三日詠進之
戀歌
保延の御時幾見戀と云ふ心を詠ませ給ひし時
一谷深み岩片かくれ行く水の影ばかり見て袖濡せとや
同院の御會に思不言葉戀と云ふことを
一我が戀は浪こす磯の濱沈み果つれど知る人もなし
又曉戀と云ふことを詠ませ給ひし時
一逢でのみ伏見の里に立つ鴨の羽數におつる我が涙哉
未對面戀と云ふことを詠みける
一人知れぬ心や兼てなれぬらむあらしとの傳ぞ立つ
月の五首の歌よみし中に月前戀と云ふことを
一戀しさの眺むる空に満ぬれば月も心の内にこそすめ
顯輔卿の家に歌合すとて歌加ふべきよし云ひ遣
したりしかば詠みて贈りし中、後朝戀
一心をば留めてこそは歸りつれ怪しや何の暮をまつ覽
秋の比さがの山のかたに遊びけるに行きくらし
てはの見ける女の許に屢文遣しけれど返事もせ
ざりければ遣しける
一うかりける秋の山路を踏初て後の世迄も感ふべき哉
つれなくのみ見えける女に遣しける
一好さらば後の世に頼めむけつらまに堪ぬ身共社なれ
返し定家の母と新古今にあり
一頼めおかむ只計を契にて浮世の中の夢になしてよ
逢ひ難くて逢うたりける女に
一つらさにも落ちし涙の今は唯おし只管に戀しかる覺
いかなるあしたにか人に遣しける

二 いかせむいかにかせましいかに寝て起つる今朝の名残なる覽
 返し
 三 いか寝過ぎいかなる夢の名残ぞと怪き迄に我ぞ眺る
 又女に遣しける
 二 戀しても言はゞ愚に成ぬべし心をみる言の葉もがな
 返し
 三 戀してふ偽いかにつらからむ心を見る言の葉無ば
 怨むることありて暫し言はざりける女に又文遣
 すとて
 二 怨ても戀しき方や増る覽つらさは弱る物にぞ有ける
 春の比忍ぶことある女の許に遣しける
 二 思ひ餘り其方の空を眺むれば霞を分けて春雨ぞふる
 又雨のふりける日人に遣しける
 二 思遣れ降ぬ空だにある物を今日の霖雨の袖の氣色を
 返し
 二 歎つゝ目をふる宿は春雨も袖より外の物にやは見る
 怨むることありける女に遣しける
 〇 唐土の人迄遠く尋ねばやか計りつらき中はありやと
 返し
 二 尋ね見よ類ひもあらば慰むか計りつらき中の契を
 人の許にこまかに書きて遣りける文の奥に
 三 何となく落る涙に任すればをことも見えぬ筆の跡哉
 返し
 二 見れば先そこはかどなく流れて涙落ちそふ筆の跡哉
 忍びて物いひける女のことさまになりぬべしと
 聞くことありける比遣しける
 〇 人知れぬ入江の浪に潮垂ていかなる空の煙と見む
 忍びたる所にいきたりけるに人目しげく夜もむ
 げに明けぬべかりけるをどかく構へて歸りてつ
 だめて遣しける
 二 包み餘り袖の涙にせきかねて顯れぬとも覺えつる哉

三 せきかぬる涙也せば小夜衣袖にのみやは包果つべき
 返し
 二 忍びけることありて逢ひ難かりける女の許に夜
 ぶけていきたりけるに今夜はびんなき由云ひけ
 れば曉近くなるまで門の外にありて侍りける朝
 になほ文遣したりける返しに女
 三 歸しは如何ありけむ我身だに静心なく明しつる夜を
 返し
 二 歸きは夢路かごのみ辿り来て今朝とふに社現さしれ
 忍びて物いふ女の住所少し近き所に日比ありけ
 るを又遠く罷りなむとての日みづから言はずな
 りぬることなど言ひ遣りたる文のうらに女の書
 きつけたりける
 三 問ひはつる心細さに我世さへ今日を限と成ぬべき哉
 返し
 〇 戀侘る命は知らぬ命あらば問ふ言葉のいつか絶べき
 故女院の彼岸の御念佛の時の會白河の押小路殿
 にて文をたかふる戀と云ふ心を
 二 これや誰有りしやそれと思ふにも心を亂る筆の跡哉
 戀隣女
 二 知るらめや宿の梢を吹き交す風につけても思ふ心を
 隠名戀
 二 蜜のかるみるめを波に紛へつゝ名草の濱を尋ねぬる
 人におほする戀
 〇 眞柴こる賤の妻木と名告らせて我が人知れぬ思にぞたく
 閑居増戀
 二 思ひやれ春の朝の雨のうちに軒に争ふ袖のけしきを
 會後戀
 二 いかにしてかげ絶ぬ覽諸共に井手の玉水掬ひし物を
 以上六首彼岸の御念佛の時の會也
 怨むることありける女に遣しける

長秋詠藻下

雜歌

二 戀しさも忘るばかりの憂きとに弱きは袖の涙也けり
 をごこいかにぞなりける女に遣しける
 〇 慰めて暫し待ちみよ先の世に結置きける契もぞある
 四月朔日比雨のふりける夜忍びて人に物言ひて
 後びんなく過ぎければ五月雨の頃遣しける
 〇 袖ぬれし其夜の雨の名残より頓て晴せぬ五月雨の空
 法勝寺の十首の會の中、戀
 〇 よと共に絶えずも落つる涙かな人は哀もかけぬ袂に
 左大將の家に會すとて歌加ふべき由有し時戀歌
 二 戀せずば人は心もなからまし物の哀も是よりぞ知る
 同じ人の十首の題のうち、戀二首
 寄催馬樂一戀
 二 逢下のみ歸る野原の露なれどかふるは惜き萩が花摺
 寄三源氏名一戀
 二 恨みてもなほたのむ哉落標深き江にある印と思へば
 二 條院の御時思三出舊女一戀といふことを高倉の
 内裏の御會
 〇 昔見し野中の水に尋ね来て更に袖をも濡しつるかな
 一院の法住寺殿の五月の御供花のときの會契後
 隠名戀といふことを
 〇 頼めこし野邊の道芝夏深し眺くなる覽もすの草ぐき
 同院の九月の御供花の時遠人を戀ふと云ふ心を
 〇 同じ世にいさの松とは聞き乍ら心盡しの中ぞ悲しき
 家の十首の會のうち、戀
 〇 難波江の蘆の古根は我なれや戀路にひきて年の經ぬ覽
 頼輔朝臣の歌合によみて贈りし五首の中、忍戀
 〇 いかにして知るべなく共尋見む信夫の山の奥の通路
 法住寺殿の殿上の歌合の時臨期變約戀といふ
 ことを
 〇 思ひきや榻の端書搔つめて百夜も同じ間寝せむとは

〇 保延元年のことなるべし七月九日故人 保延元年の忌
 日に鳥部野の墓所の堂に参りて懐法にあひて夜
 更けて歸るに草の露しげかりければ
 〇 分け來つる袖の雫か鳥べ野のなく、歸る道芝の露
 保延五年ばかりのとにや母の服なりし年法輪寺
 に暫し籠りたりける時より嵐の痛く吹きければ
 〇 浮世には今は嵐の山風にこれやなれ行く始なるらむ
 日比籠りて出づる日籠りたる僧の庵室の障子に
 かきつけゝる
 〇 草の庵に心は止ついつか又頓て我身も住まむとす覽
 同じ比西山なる所に籠りたるに正月司召など
 過て雪のふりたる朝人の訪らひたる返事の序に
 〇 思ひやれ春の光も照しこぬみ山の里の雪のふかさを
 永治元年にや御讓位近くなりての比霜月十餘日
 面白かりしに土御門内裏の南殿の御前にあけが
 たまでありてよめる
 〇 忘れじよ忘るなどだに云てまし雲の月の心有せば
 其時春宮昇殿未だ聴故
 〇 又の年こもりありたりけるに新嘗會の日皇后宮の
 御方に侍りける親しき人につかはしける
 〇 珍しき日影をみても思はずや霜枯はつる草の緑りを
 崇徳院より御草子かきて進らせよとて給はりし
 書きて奉るとつゝみ紙に
 〇 數ならぬ名をのみと社思しか斯る跡さへ世にや残らむ
 御返りごと女房の手にて
 〇 水菫の跡計りしていかなれば書流す覽人はみえこの
 四品に叙してのち崇徳院の御方の還昇はまだ申
 さりし比百首の歌部類して奉るべきよし仰せ

られたりし次でに奉りし
雲よりなれし山路を今更に霞隔て、なげく春かな
御返りごとはなくて還昇仰せ下されしをぞ仰せ下
されたりける教長卿奉書也

前左衛門佐基俊と云ひし人に古今の本をかりて
返すこと

君なくばいかにしてかは晴けまし古今の覺東なさを
返す
基俊の君

かきたむる古今の言の葉を殘さず君に傳へつるかな
左京のかみ顯輔卿撰集承りたること歌尋ねて侍
りしにまづ故中納言の歌をつかはすこと

木の本に朽果ぬべき悲さよ古りにし言の葉を散す哉
返す
顯輔卿

家の風吹傳へずば木の本にあたら紅葉の朽や果まし
故左の大臣の仁和寺の徳大寺の堂に上西門院前
齋院と申し、時の女房あまたわたりて歌ども詠
み置かれたりけるを後に見出で、其の返事せよ
と大炊御門右大臣のありしかば書きさへつ
遣しける歌ども

おおく霜も君が爲にさ心してさかり久しきやごの白菊
返す

千代迄も匂はむ宿の菊なれば心長くを人も來て見よ
又女房の

花は枯れ紅葉散ぬる折しもぞ雪見まほしき冬の山里
返す

折につけ哀をそふる山里は雪ふる儘を思ひおこせよ
又

風寒み紅葉残らぬ木の本に花見し春は劣らざりけり
返す

花の春紅葉の秋に非ぬまも唯には見えぬ木の本ぞ是
又

のいみじく降りし朝に侍從大納言入道けふ御
山につかせ給ふらむことなど消息ありし返事の
次でにつかはしける

後れりて思遺る社悲けれ高野の山のけふのみゆきを
かへし
入道大納言

悲しさは云盡すべき方ぞなき我心にて人を知らなむ
同じ十日比押小路殿にて御かうなごまだしきは
ご久我の内のおほいまうち君源大納言と聞
えし時物語などして日數の過ぐるにつけて夢の
心ちのみすることなど云ひて又の日彼の大納言
の許よりおくられし

定めなきこのよの夢の儂さを言ひ合せても慰めし哉
かへし

悲しさの慰め難き心には云合せても夢かぞ思ふ
御三七日のそふくの人々など數多参りたりしに
御かう果つるほどにたう紙にかきつけて云ひ
たりし
清輔朝臣

人なみにあらぬ袂は變らねど涙は色になりける哉
かへしいでにければ夕かたぞつかはしける

墨染にあらぬ袖だに變るなり深き涙の程をしらなむ
年も返りて御忌日に御誦經の使にていづとて親
隆の卿のもとにいひ置きける

墨染の袖をつらねて慰めし日數にさへも別れぬる哉
返す
親隆卿

日數さへ過ぎ別れぬと思ふにも離れぬ物は涙也けり
前中納言師仲卿下野國より歸京して後配所にし
て詠みたりける歌どもとて見せに遣したりしを
返すこと添へてつかはしける

いか計り露繁ければ東路の言の葉にさへ袖のぬる覽
返す
師仲卿

思遺れむろの八島に潮たれて煙になれし袖の氣色を

水の上の月に心のしみぬれば疾氷りつゝえ社歸らね
かへし
〇冬の池に影を止ても澄まば社月に浸ける心とも見め
又

曇なく磨ける宿の池水はちりもまよはぬ鏡ぞ見る
かへし

うれしくも池の鏡を研き置きて人の心の程を見る哉
又

見る人の立つ空もなき宿なれば汀の鶯も住馴にけり
かへし

よと共に見馴はせまし水鳥の立空もなき宿と思は
又

此やさは常に住なる月ならむ鷺のみ山に入時もなき
返す

見る人の心も常に澄ぬれば入る時もなし山の端の月
近衛院の御時四位の後昇殿ゆりて初めて御物忌
に籠れる夜近衛殿の遣水に月宿りたるを見て土
御門の内裏のみかは水思ひ出でられてよみける

古の雲の月はそれながら宿りし水のかげぞ變れる
近衛院かくれおはしまして御葬送の又の日近衛
殿に参りたるに日のおましの御さうぞくもあら
ためて佛なごかけ奉りたるを見ておぼえける

登りにし夜はの煙の悲しきは雲の上さへ變る也けり
鳥羽院かくれおはしまして諒闇なりし秋鳥羽の
北殿に故女院おはします頃庭の前裁いとおもし
ろき中に蘭の殊に萎れて見ゆるを折りて人に贈
りける

なべてよの色さば見れど藤袴分けて露けき宿にも有哉
故女院霜月の二十三日かくれさせ給ひて後御遣
誠にて御舍利をば高野の御山になむ納め奉りし
を師走の四日にや彼の御山につかせ給ひし日雪

西行法師高野に籠りて侍りしが撰集の様なる
物すなりと聞きて歌かき集めたる物おくりて包
紙にかきたりし
西行法師

花ならぬ言の葉なれど自ら色もやあると君拾はなむ
返す

世を捨て入にし道の言の葉ぞ哀も深き色は見えける
釋教歌

康治のころほひ待賢門院の中納言の君法華經二
十八品の歌結縁のため人々に詠ますことて題を送
りて侍りしかば詠みて贈りし歌

序品 廣度諸衆生 其數無有量

渡すべき數も限らぬ橋柱いかにたてける誓なる覽
方便品 深著於五欲 如犂牛愛尾

高砂の尾上の櫻みし毎に思へばうゑし色にめでける
譬喻品 其中衆生 悉是吾子

孤と何嘆きけむ世の中に斯る御法の有りけるものを
信解品 無上寶聚 不求自得

迷ひける心に晴る、月影にもとめぬ玉や袖に映りし
藥草喻品 無有彼此 愛憎之心

春雨は此而彼面の草も木もわかず縁に染むる也けり
授記品 於未來世 咸得成佛

如何計嬉かり初さらでだに來む世のとは知ま欲きに
化城喻品 以大慈悲身 度苦惱衆生

世の中の苦しき道は憐れびの力車のはこぶなりけり
弟子品 世尊於長夜 常慈見教化

長夜も尙偕のみや過ぐさまし哀と見つゝ教ざりせば
人記品 壽命無有量 以慈衆生故

限なき命となるもなべてよの物の哀を知る也けり
法師品 漸見濕土泥 決定知近水

武藏野の堀兼の井も有る物を嬉く水の近づきにける
寶塔品 若暫持者 我即歡喜

二卷々をかざれるひもの玉ゆらもたもてば佛喜び給ふ
 提婆品 探薪及菓福 隨時恭敬與
 三薪こり峯の木實を求めてぞえ難き法は聞き始めける
 勸持品 我不愛身命 但惜無上道
 數ならば惜くやあらまじ惜からぬ憂身を聞ば嬉かりける
 安樂行品 深入禪定 見十方佛
 一靜かなる庵を占て入りぬれば一方ならぬ光をぞ見る
 涌出品 從地而涌出
 六池水の底より出づる蓮葉の争で濁にしますなりけむ
 壽量品 現有滅不滅
 七かりそめに夜はの類と昇りしや鷲の高ねに歸る白雲
 分別功德品 若座若經行 除睡常攝心
 一息平常に心を治めつゝいつか浮世のねぶり覺むべき
 隨喜功德品 最後第五十 開一偈隨喜
 六谷川の流の末をくむ人も聞くはいかいは驗有りける
 法師功德品 又如淨明鏡 悉見諸色像
 〇濁なく清き心に研かれて身こそますみの鏡なりけれ
 常不輕品 而打擲之 避走遠住
 二其かみの荒きたぶさの杖に社遂に懸りて導かれけれ
 神力品 於我滅度後 應受持斯經 是人於佛道
 決定無有疑
 二この法をこの頃保つこれぞこの佛の道に定めたる人
 囑累品 今以附囑汝等
 二哀けふ御法のするを聞くとも譲り置きける驗也けり
 藥王品 即往安樂世界
 二頼むかな露の命の消ゆる時連の上になうつし置くなる
 妙音品 及衆難處 皆能救濟
 二荒き海巖しき山の中なれど妙なる聲は隔てざりけり
 普門品 弘誓深如海
 二誓ひける心のやがて海なれば人を渡すも煩ひもなし
 陀羅尼品 乃至夢中 亦後莫惱

七現には更にも云すぬば玉の夢の中にも離れやはする
 嚴王品 又如一眼之 龜值浮木孔
 八我や此浮木に逢る龜ならむ甲はふれ共法は知らぬを
 勸發品 即往兜率天上
 九遙なるその曉を待たずとも空の氣色はみつべかり息
 無量義經 船師大船師
 〇纜は生死の岸に解き捨て、解脱の風に舟よそひせよ
 普賢經 衆罪如霜露 惠日能消除
 一露霜と結べる罪の悔しさを思ひとくこそ旭なりけれ
 心經
 二春の花秋の紅葉の散るも見よ色は空しき物にぞ有ける
 阿彌陀經
 三法の御名きえなむ後の末迄も彌陀の教ぞ尙殘るべき
 故女院より極樂の六時の讚の繪にかゝれたるを
 其の心ごも歌をかゝるべきに歌なき所其のな
 は多かる詠み添へて奉れと仰せられしかば詠み
 て奉りし所々の歌
 六時讚
 晨朝
 朝に定より出づる程曉に天の樂を聞く
 二仄なる雲のあなたの笛の音も聞けば佛の御法也けり
 黄金瑠璃の庭に出で、人々ともに花を採る
 三未明露けき玉を折るほどは玉しく庭に玉ぞ散りける
 次に被加を蒙りて十方諸佛供養せむ虚空界を飛
 び過ぎて歡喜の國をさして往かむ
 四手折つる花の露だにまた干ぬに雲の幾重を過ぎてきぬ覽
 彼至霞の地を歩みて進み行けば香像白香像
 此等の大士に値遇す
 五春のくる方をさしつる微にやこち吹く風に花の散覽
 日中時
 他方界より還りては次に飲食經行す

八遙かなる佛の御國めぐりても時の程にぞ立歸りける
 飲食畢座より起て經行せむ七重寶樹の風に
 一實想の理を調へ八功德池の浪には無生滅の
 義を唱ふ
 九影清き七への植木移りきて瑠璃のとぼそも花かど
 〇おり立て世をすぐせとや池水の淺き深さも心なる覽
 或は宮殿樓閣に上りて他方界を見む
 一曇なき玉の臺に登りてぞ香なる世のことも見えける
 日没時
 金色世界の文殊師利菩薩ともに來至す
 二たらちめの來ますけしきに此國も更に光は増る也見
 或國界悉く白銀光さかりにて普賢大士來至す
 三白妙に月か雪かど見えつるは西をさしける光也けり
 或國界悉く無數大雲遍滿す聞けば地藏大薩埵聲
 聞出家の形とて今又爰に來至す
 四夕暮の哀立ちそふ雲間より家を出でたる姿をぞ見る
 毗舍離城に住せりし維摩居士來至す
 五古は静けき室にゆか立て、住みし人にも逢見つる哉
 時に大衆法を聞きて彌歡喜瞻仰せむ即時に自然
 に無數妙花散亂す
 六色々に空より花どちり紛ふ此をや法の雨と云ふらむ
 七今ぞ是入る日を見ても思來し彌陀の御國の夕暮の空
 初夜時
 見佛開法事畢て本の坊に歸るべし或は金の花の
 中金色淨土の如く也或は瑠璃の間の上淨瑠璃淨
 土のごとくなり
 八歸り來る玉の臺も花のうちも光はおなじ住か也けり
 半夜
 九夜の境靜にて漸く中夜に至る程三五の人々共に
 出て金繩界道歩みつゝ衆寶國土の境界の寂靜安
 樂なるを見光も聲も靜にて晝の界に異ならず

十深きよの光も聲も靜にて月のみ顔をさやかにぞ見る
 後夜
 曉到て浪の聲金のきしに寄するがほご欲曙す
 一風の音玉の簾をすぐるあひだ多し
 〇古へののをへの鐘に似たるかなきしうつ浪の曉の聲
 二明方は池の連にひらくればたまの簾に風かざるなり
 見佛開法縁なくば此地を踏者難し有
 三佛を見法を聞べき身ならずば斯る汀を争で踏まし
 人の弔二品經供養しける時序品の心を
 四残りなく照す光に尋ねれば昔のともくもざりけり
 又ある所の一品經に方便品の其知惠門難難難入
 の心をよめる
 五入り難く悟り難しと聞く門を開くは花の御法也けり
 譬喩品の號曰花光如來の心を
 六行末の花の光の名をきくに兼てぞ春にあふ心ちする
 今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子の心をよめる
 七子を思ふ道こそ聞けば嬉しけれ心の闇も悟晴るなり
 道因法師書妙覺寺にして一品經の供養して八講
 を行ふとて以佛教文出三界苦と云ふ文を人々に
 よませし時よみける
 八谷川や三の峽にや沈まし山路の月の送らざりせば
 妙覺寺の八講のはての日聽聞に女車のさまにて
 罷りて講はつるほどに車より見出しける歌
 九和歌の浦波に年ふる諸人も法の浮木に今日も逢ぬる
 妙音品の心也其の日さかれし也
 道因が住吉の社の歌合の時一品經人々にすゝめ
 て歌加ふべきよしひ侍りしかば信解品をかき
 て奉りて周流諸國五十餘年の心をよみける
 十或所の一品經の供養にかひある浦に廻りあひけむ
 又或所の一品經の供養に法師品の 寂寞無人聲
 讀誦此經典 我爾時爲現 清淨光明身

訪ふ人の跡なき柴の庵にもさしくる月の光をぞ待つ
或る法師の一品經すゝめし時法師品に歌加ふべ
きよし云ひしかば懸衆生故生於惡世廣演此經の
心をよみける

是ぞ此憂世の爲と生れきて斯は御法をそくと社聞け
又人の許に一品經供養せし時提婆品の心を
袖の上の玉の光のほどもなく南の空の月とすむらむ
勤持品 我等聞記 心安具足

かくばかり心はれける月影を娘捨山と何おもひけむ
安樂行品 若於夢中 但見妙事

様々に妙なる花ぞ散りまがふ法を保てる春の夜の夢
壽量品 常在靈鷲山

末の世は雲の遙に隔つとも照さくらめや山の端の月
同品 爲度衆生故 方便現涅槃の心をよめる

花の散り紅葉流るゝ山河も人を渡さむ爲とこそ聞け
法師功德品の是人有所思惟籌量言說皆是佛法の
心をよめる

二つなき道に心のすみぬれば思ふと皆法とこそ聞け
神社歌

三品に叙してのち初めて諸社の奉幣使に参りた
るに賀茂の使にあたりて下の御社より夜更けて
上の御社に参る程むかし若くて百度詣などしけ
るを久しく参らで河原の有様もはやく見しには
變りたる心ちするも思ふこと多くてよみける

昔わが祈りし道はあらねども此は嬉しな賀茂の河渡
住吉の社の歌合に述懐の歌とよめる

徒らにふりぬる身をも住吉の松はさざりとも哀知る覽
其の後廣田の社に御うらやみあるよしの夢の告
げ有りて同じく歌合すゝめし時よみて加へし
三首の中、社頭雪

潔よき光にまがふちりなれやおまへの濱に積る白雪

鶯のゐる池の水のどけ行くは己が羽ぶきや春の初風
年暮れし涙の水柱解けに息苦の袖にも春や立つらむ

いつしかとたかきに移れ春日山谷の古巢を出づる鶯
山深み霞のそこの鶯に春をあさしと聞くぞあやしき

雪間よりよそに聞くこそ哀なれあさくら山の鶯の聲
春來ても谷に残れる鶯はうらみたる音に聲ぞ聞ゆる

惜しきかな誰か聞くらむ陸奥のしのぶの奥の鶯の聲
初戀

驗あれど祝ひぞ初むる玉簪とる手ばかりの契也とも
何せむに踏初つらむ山路の苦しかるべき岩の氣色を

戀草に萎れ初めぬる袂哉露霜おかむほどぞ知らるゝ
照射する端山が裾の下露やいるより袖は斯萎るらむ

知らるらむ君をみ嶽の初いもひ心のしめも今日懸つとは
忍戀

人とは袖をぞ露と云つべし涙の色をいかに答へむ
身の上の涙に馴ぬ袖ならばいかに云てか戀を包まむ

袖は見ゆ枕にもまだ知せねば遣る方もなき我が涙哉
散すなよ篠のは草の假にても露懸るべき袖の上かは

如何にせむ室の八鳥に宿もがな戀の煙を空に紛へむ
花

雲の上の春こそ更に忘られね花は數にも思出でじを
今は我吉野の山の花を社宿の物と見るべかりけれ

雲の波岩こそ瀧と見ゆる哉名に流れたる白河のはな
照月も雲のよそにぞ行きめぐる花ぞ此世の光也ける

吉野山花や散るらむ天の河雲のつゝみをくづす白浪
初逢戀

怨侘び命堪すばいかにして今日と頼むる暮を待まし
たさり共とたのむの雁を頼來て入さの里に今日ぞ入ぬる

これ今深きえにこそ思知れ淀の若菰假寝なりとも
頼まずば飾磨の楊の色を見よ逢初て社深くなるなれ

述懐
千早振神に手向る言の葉は來む世の道の知べともなれ
賀茂の神主しげやす彼の社に歌合といふこと人
々に勤めてよませ侍りし三首の歌

霞
そまくだし霞たなびく春來れば雪げの水も聲合す也
花

身に占しそのかみ山の櫻花雪降りぬれば變らざり見
述懐

立歸り捨てし身にも祈る哉子を思ふ道は神も知る覽
撰集の様なることしける時ふるき人の歌どもの
哀なるなどを見てよめる

行く末は我をもしのぶ人やあらむ昔を思ふ心習ひに
安元二年にや九月二十日比より心ち例ならず覺
えて二十七八日限になりければさまかへむと
する程皇太后宮大夫辭し申すよしなど左大將の
許に消息つかはす次でに副へける歌

昔より秋の暮をば惜みしに今年は我ぞ先だちぬべき
かへし

霧はれぬ心ありとも止りゐて尙此秋も惜めこそ思ふ
通世の後にぞありける

其の度希有にいざとまりにける年の暮に人の消
息したる返事の次でに

身に積る年の暮こそ哀なれ昔の袖をも忘れざりけり
又の年の秋九月十餘日の月殊に隈なく見えけるに
思きや別れし秋に廻合ひて又も此よの月を見むとは
右大臣家百首

立春
天の月の明る氣色も長閑にて雲より社春は立けれ
逢坂に今朝は來にけり春霞よはにや立ちし白河の關
今日といへば唐土迄も行く春を都にのみぞ思ける哉

子規
待つとも今はなけれど郭公馴し心の空にもある哉
待つ程も聞くにもいかに郭公心を盡す妻と成らむ

むかし思ふ草の庵のよるの雨に涙なそへそやま時鳥
三雨そゝぐはな立花よ風過ぎてやま郭公雲に鳴くらむ

郭公鳴くやと思へば聞かぬ夜もさ月の空は哀なる哉
後朝戀

曉の別を知て悔しくも逢はぬつらさを怨みけるかな
逢坂を越えてしもこそ中々にしが浦波袖に乾かね

別れつる涙の程をくらべばやいづる袂とこまる枕と
なせ川岩間にたゝむ筏士や浪に濡ても暮を待つ覽

忘るなよ世々の契をすがはらや伏見の里の有明の空
五月雨

降初て幾日になりぬ鈴鹿河やせも知らぬ梅雨の空
梅雨はみなそこの橋名に負ひて浪社渡れ人は通はず

下草は葉末ばかりになりけり浮田の森の梅雨の比
いかなれや雲間も見えぬ梅雨に晒添ふらむ布引の瀧

梅雨は高ねの雲のうちにして長きぞふじの煙也ける
遇不逢戀

よと共に仰にのみ立ち乍ら又見えじとはなご思ふ覽
よそならば借も止なむうき物は馴てもつらき契也鳥

蘆分の程こそあらめ難波舟沖に出ても漕合はじとや
ねに立ていざは戀む笛竹の一よの節も逢ならぬかは

浅ましやいかに揃ひし山の井の又もあひ見契也けむ
月

月は秋は月なる時なれや空も光を露添て見ゆらむ
眺むれば雲は浪路に消盡きて明石の沖にすめる月哉

我庵はをば捨山のふもこかはなぐさめ難き秋の月影
數ならぬ光を空に見せ顔に月やどかす袖の露かな

世の中を背きて見れど秋の月同じ空にぞ猶廻りける

三 明けき雲の上をば萬代と天つやしろも照しますらむ
三 百千度浦島の子は歸る共はこやの山は常磐なるべし
七 いく千代と契りおきけむ春日山枝さし交す峯の松原
八 千とせども中々さゝじ笠山松吹く風に聲聞ゆなり
九 柳葉を小鹽の山に挿添へて祝ひし千代や君が代の爲
草花

○秋はまづ都の西を尋ねれば嵯峨野の花ぞ咲始めける
一 露にふし風に靡くも女郎花秋の妻と見する也けり
二 最斯や袖は萎れし野へに出て昔も秋の花は見しかぞ
三 小秋咲く野べをぞ人の栖にて鹿は宿にや鳴かむとす
四 可惜しや露けき野べに立つ鹿の上毛に移る萩が花摺
旅

五 見るまゝに慰みぬべき海山も都の外は物ぞかなしき
六 日數行く草の枕を敷ふれば露おきそふるさよの中山
七 哀れなる野じまが崎の庵哉露おく袖に浪もかけけり
八 清見瀉浪路さやけき月を見て頓て心や時をもちるべき
九 難波人蘆火焚屋に一人ゐてすゝろに袖の潮たるゝ哉
紅葉

○染め渡す梢を見てぞ山里は秋深くなる日を敷へける
一 雲となり雨となりてや立田姫秋の紅葉の色をそむ覽
二 心とや紅葉はすらむ立田山松は時雨にぬれぬ物かは
三 秋深み青葉の山も紅葉名をば時雨に染じと思ふに
四 春は花秋は紅葉とぞや此よもの山べよ人誘ふらむ
述懐

五 儂くぞ昔の末を歎きこし家を出てぞとふべかりける
六 醒て思ふ過ぎにし方は古の六十の夢を見けるなり見
七 今も尙心の闇ははれぬ哉思ひすてし此のよなれ共
八 春日野のをごろの道の埋水すゑだに神のしるし願せ
九 枯々に成來し藤の末なれどまた下枝とは思ざりしを
雪

春二十首
八 重霞やそ鳥かけて立ちにけり千代の初の春の曙
九 鶯も千代をや契る年を経て變らぬ聲に春を告らむ
一 春きぬとみ垣が原は霞共尙雲さゆるみ吉野の山
二 春毎の子日の松の千代は皆我が君が代の例也けり
三 袖の香に梅は變らず薫りけり春は昔の春ならぬ共
四 春はなほ柳がえだも限りなし緑の絲に露のしら玉
五 詠め侘ぬ誰かは訪はむ山里の花待比の春雨のうち
六 いくとせの春に心を盡しきぬ哀と思へみ吉野の花
七 白妙にゆふ懸てけり 柳葉に櫻咲きそふ天のかぐ山
八 警へてもいはむ方なし山櫻霞に薫る春のあけぼの
九 君が代に春の櫻も見ける身を谷に朽ぬと何思けむ
一 今ぞ我吉野の山に身を捨む春より後を訪人もがな
二 白山や尙雪深き越路には歸る雁にや春をしるらむ
三 御狩せし交野の冬やつらからむ春の山路に雉子鳴也
四 哀にも空に啼る雲雀かな芝生の巢をば思ふ物から
五 美し苗代水をせく賤も心のはごはまかせこそすれ
六 尙誘へくらゐの山の呼子鳥昔の跡をたぬ程をば
七 松陰に咲ける葦は藤の花散敷く庭と見えもする哉
八 春暮ぬ今や咲らむかはづ鳴く神なび川の山吹の花
九 惜むとて春は止らぬ物故に卯月の空は厭ふとやみむ

夏十五首
○衣社かふとも更へめ春の色に染し心はいつか移らむ
○卯の花のかきねの露に宿り來て春忘れよと夕月夜哉
○夏も尙心はつきぬ紫陽花のよひらの露に月も澄けり
○忍び妻待つにぞ似たる郭公語らふ聲はなれぬ物ゆゑ
○郭公五月の雲にちぎり置きて人の心を空になすらむ
○夏の夜の長くもあらば郭公今一聲も待たましものを
○よそへても昔は今はかひもなし花橘の袖の香もがな
○橘にあやめの枕かをる夜ぞ昔を忍ぶかぎりなりける
○早苗月五月雨初むる初とやよもの山雲曇り行くらむ

○空晴てちり來る雪は久方の月の桂の花にや有らむ
一 卷もくのたまきの宮に雪ふれば更に昔の朝をぞ知る
二 紫の庭の雪には尙しかじ昔しうたへのみよしの山
三 白妙のいさごまきしく天の河月の都のみ雪なるらし
四 訪ふ人もさらてもあらじ山里に深くも道を埋む雪哉
神祇

○神垣やいすゞの河の宮柱幾千代すめと立て始めけむ
一 其かみに祈りし末は忘れじを哀はかけよ賀茂の河波
二 秋の暮民の家をば出でしかぞ尙春の日の頼まるゝ哉
三 敷波に頼みをかけし住の江の松とや今は思ひすつ覽
四 なべて世を照す日吉の神なれば遍く人も頼む也けり
歳暮

○暮果つる年は我身に積る也冬の行らむ方ぞ知られぬ
一 暮れて行く冬は北にや歸らむ尙越路には雪積る也
二 引止むる方社なけれ行年は紀の關守が弓ならなくに
三 哀なりよに數ならぬ老の身を尙尋ねても積る年かな
四 老いぬとて又もあはむと行年に涙の玉を手向つる哉
釋教

法華經
○方便品 無量無數劫 聞是法亦難
一 量なく數なき世々を盡しても一たび聞くは難き法也
二 安樂行品 不親近諸外道梵志尼繼子等及世俗文
筆讀詠
三 和歌の浦や波にかきやる藻鹽草此も由なき住ひ也見
四 善量品 出釋氏宮去 伽耶城不遠
五 昔はや悟晴れにし月影を今宵み山を出てしとや見む
六 普門品 受其理珞分作二分
七 哀とやとも光を照しけむ二つに分けし玉の飾りを
八 勸發品 從東方來所經諸國皆震動雨寶蓮花
九 花更にまた花ぞふりし鷺の山法のむしらの夕暮の空
千五百番歌合之百首 沙彌釋阿

○梅雨は沼の浮草岩越えてかはづの床もねや絶ぬらむ
一 梅雨はすまの鹽屋も空ごちて煙計りぞ雲に添ける
二 大夫や山わくらむともしける螢に紛ふ夕闇の空
三 大井川籌さし行く鶴舟幾瀬に夏のよを明すらむ
四 山の井を掬て夏は暮ぬべし秋や立なむ志賀の浦波
五 鳴瀧や西の河瀬に御袂せむ岩こそ波も秋や近きと
秋二十首
一 沙路より秋や立ちらむ明方は聲變るなりすまの波風
二 風の香を萩の葉のみと聞來しを萬の裏にも秋は見え見
三 七夕の飽かぬ名残の袖よりや秋は露けき比となる覽
四 夕月夜木の間もり來る宵の間は心盡しの初也けり
五 夏の野は草の茂みのさゆり葉も秋は露にや萎れ果覽
六 朝露に儂くうつす月草も秋の形見の色となるらむ
七 波に洗ふ唐錦も見ゆるかな野鳥が崎の秋萩の花
八 名社あらめ見も懐かし女郎花枝さへ花の色に匂て
九 紫の色をば残せふちばかま露は嵐に碎けちることも
一〇 花も露もいかに心を碎けて秋に野分の吹始めむ
一一 しめおきて今やと思ふ秋山の蓬が本に松蟲の鳴く
一二 荒渡る秋の庭こそ哀なれまして消えなむ露の夕暮
一三 秋の夜は光を殊にそへよとや月の都に定置きけむ
一四 秋の月畫とは見えて訝え寒し雪と思ふは庭の白露
一五 人とはいかに語らむ秋の山松の風にはさそふ也見
一六 月はこれ哀を人につくさせて西に終にはさそふ也見
一七 故郷に獨も月を見つるかな娘捨山をなに思ひけむ
一八 衣うつ音社あやな頼まるれ夜の枕のさゆる霜夜は
一九 立田姫立田の山は我などや紅葉も殊に思ひ染めけむ
二〇 頼めおく形見やあらむ歸る雁心を遣て惜むけふ哉

冬十五首
○おき明す秋の別の袖の露霜こそ結べ冬やきぬらむ
一 染捨て立田姫もや神無月風に任せて散る紅葉哉

七 植置きて秋の形見と見る菊の冬の色こそ尙優りけれ
八 山廻る時雨は頓て過ぬれど木葉にぬる袖の上哉
九 初瀬山夜深き鐘に驚けば旅寝の床も霜ぞさえける
一〇 霜さゆる枯野の草の原に來て涙を頓て氷る也ける
一一 霧ら雲の時雨し空はそれ乍ら冴ゆる嵐に散ふる也
一二 夕暮は己が焼くさや炭がまの煙にきほふ大原の里
一三 敷忍び夜はの枕は冴つれど今朝は嬉しき庭の初雪
一四 雪よ是雲さへ氷る冬の雨の空に結べる名に社有けれ
一五 澄月も千里の外は氷りけり雪の且ぞ限りだになし
一六 埋火のあたりは汐ひの波も氷けり玉ぞ碎くる床のさ蓆
一七 千鳥鳴繪島が崎を繪にかへば友呼聲や聞えざるべき
一八 けふ毎に今日や限と思へ共又も今年に逢にける哉
祝五首

〇 神風や御裳濯河の細れ石も君が御代にぞ岩と成べき
一 君が代は幾千年にか葵草變らぬ色に神もまもらむ
二 君が代を日吉の神に祈置けば千年の數や志賀の浦波
三 住吉の松も涼しく思ふらし君が千年の和歌の浦風
戀十五首

尋入る道もしられぬしのふ山袖計りこそ葉也けれ
哀なり轉寝にのみ見し夢の長き思に結ばれぬ
色に出ず人の袖には露かくる君はうけらの花にや有覽
關守は打も寝ぬとも徒に歸る戀路はかひなかり鬼
年も經ぬ宇治の橋守君ならば哀も今は懸まし物を
暖き俵びぬ逢瀬もしらぬ涙河片しく袖や井手の柵
幾年に馴にし床のふりぬらむつげの枕も暮生に見
陸奥の荒野の牧の駒だにもこればさられて馴行物を
綾なしや戀すてふ名は立田川袖をぞくゝる紅の波
思出よ忘やしぬる若狭ちや後世の山と契りし物を
夢にだに逢瀬ありやと待べきに枕のみうく涙川哉

隔て來て 初がりかねも 言づてす 馴れにし方は
音も絶ぬ 本のこゝろし 變らずは 玉につけつゝ
君はなほ 言葉のいづみ 湧らぬど 見しは斯だに
汲て知る 人もまれにや 成ぬらむ 更にもいはす
悲しきは 心をたちにし から國の つかしの跡に
習ひてや 深きうきめに ねも絶ぬ かつ身の程を
厭へども こゝろの水し 淺ければ 胸のはちす葉
いつしかま ひらけむとは 難けれど たぐるくも
暗きよを いづべき道と 入ぬれば 一たびなごも
いふ人を 捨ぬひかりに 誘はれて 玉をつらぬる
木の下に 花ふりしかむ 時にあは ちぎり同じき
身と成て むなしき色は 染置きし 言の葉ごとも
ひる返し まことの法と なさむ迄 あひ語らばむ
とをのみ 思ふこゝろを 知るや知らずや
一 夢のうちになれし契朽もせでさめむ且に逢ともがな
宮におはしませし時かやうの道にもつかうま
つりし人は多かりしをさとりわきおぼしめし出し
けむこどもいと悲しくて人知れず御返事をかき
ておたぎのへんになむ遣らせける

須磨浦や 藻鹽たれけむ 人もなほ 今を見るには
うき波の うき例しには なほ淺し 哀れうき身の
其かみを 思ふにつけて 悲しきは 荒れにし宿の
壁に生る みなしご草と 成しより ふるすに殘る
葦たづの 澤べにのみぞ 年經しを はじめて君が
御代に社 雲のかけはし 踏み通ひ たつのみ顔に
近づきて 時につけつゝ 空しくは 過ぐさす見ゆ
あづさ弓 まごひし末に 連なりて 花のはるより
時 鳥 待つ曉も 秋の夜の 月を見るにも
九重に 九の重を 出した迄 物思ふこども
慰さめし 天の羽ごるも 脱替へて はこやの山に
いかに有し

〇 現には思絶行く逢事をいかに見えつる夢路なる覽
一 云通ふ道だに絶えぬ逢事の長良の橋はさ社朽なめ
二 昔見し人のみ今は戀しきを又逢まじきとぞ悲しき
三 逢事は交野の里の笹の庵しのに露散る夜はの床哉
雜十首

〇 夜を重ね寂しき床にすが枕幾度鐘の聲を聞くらむ
一 押照や濱の南の松原も幾きの千代を君にそふらむ
二 色替ぬ御垣の内の吳竹も君が御代にぞ千代は知覽
三 和歌浦の風になづさふ友鶴の君が千年に逢を嬉しき
四 海治れる世は音にきく龜の山も波ぞよせ來む
五 昔し聞のべの岩やぞ哀なる嵐の底を夢に見えけむ
六 掛ていへば厭ひもす覽春日山さりとて如何頼ざるべき
七 吉野河岩こそ浪を詠むれば絶せぬ水の心をぞ知る
八 落ちたきつちの流は積れ共變らぬ物は沖つ白波
九 いかにして憂身乍に君が代の千代の初の今日に逢覽

崇徳院讃州にしてかくれさせ給ひて後御供なり
ける人の邊より傳へられて斯るまむありしと
て折紙に御宸筆なりける物を傳へ贈られしなり
〇 古への 須磨の浦には 藻鹽たれ 蜚のなはたき
漁りせし その言の葉は 閑しかど 身の類ひには
鳴き渡る 岩うつなみの 懸てだに おもはぬ外の
名を止て 沈み果てぬる われ舟の 我にもあらず
年つきも 空しくすぎの 板ぶきの ならはぬとに
目も合で 思ひしどげば 前の世に つくれる罪の
種ならで かゝる歎きに なるとは あらしの風の
激しさに 亂れしへの 糸すき 葉末にかゝる
露の身の 置きどめ難く 見えしかば そのくれ竹の
よを籠て 思ひ立ちにし 麻ごろも 袖もわが身も
朽ぬれど 流石にむかし 忘れねば 袖もわが身も
もて遊び やまぢの菊を 誰かまた 時につけつゝ
圓ゐして 春あきおほく 過にしを 今は千とせを

移りしも やまぢの菊を 手折つゝ 過るよはひも
忘れしを いかに吹にし はつ秋の もりのまつ風
山しろの 鳥羽田の面に 日影くれ 人のこゝろも
悲しみて ゆふべの空と 亂れつゝ 迷ひしほどは
推なべて 野べのかや原 亂れつゝ 更にもいはす
むば玉の 夢うつゝとも わかざりき 波路はるかに
わたの原 むなしき船を 漕き離れ たどへむ方も
隔てつと 聞きし別れの 悲しきは 掻てもやらむ
無に似て 蜚のかるてふ もしほ草 掻てもやらむ
方もなく むなしき空に 仰げども こゝろ計りは
まつ山の 嶺のくもにも まつしむ可 唯かたみごは
留め置し 大和みここの 言の葉を 見れば涙も
もろ共に 玉のこゝろく 連なりて 錦いろく
たち混り かゝる類ひは 古へも 今行くすゑも
如何あらむ さても年つき 移りゆく しきしまの道
立ち返り くもあつ月に 誘はるゝ 夜なゝゝ稀に
有しかど 月のまへには 昔おぼえ 花のものにも
君を思ふ しづめるとは 嘆きつゝ いつも變らぬ
埋れ木の 立てし道と 通れつゝ 昔したちけむ
をによせむ 立てし道と 通れつゝ 昔したちけむ
空しさは あゆむ草には 袖ぬれて ことばの露は
自づから 溜るゝせより 人もなし 淺芽がしたに
かつ消て 哀れしるべき 人もなし 浅芽がしたに
立ち返る 波もやあると 思ひしを つひに千里の
外にして 秋のみそらに 月かくれ 旅のみゆかに
露けぬと 沙路へだてゝ 吹く風の 原にもこえし
夕べより 今のはかなき 夢の中に あひ見むとは
泣々も 後の世にだに 契あらで はちすの池に
生れあは むかしも今も この道に 心をひかむ
もろ人は この言の葉を えむとして おなじみ國に
さそはざらめや

八月十五夜月蝕ありし年右少將こまひきの引わけにすけの参るまじとて殿下より催されしかば参れどて月現じたりと申し、かばあたりとてなむと申し、たる程曉歸りたるつとめて駒りて來たりと申すをあれぞあけなる駒なりしかば

攝政内大臣うせ給ひて後おもひながらへ申さりし程に四月五日とて法印の御もとより絶えて少將入道寂蓮にて故内大臣并に二位中將の御歌どもを遣したりしにつけて御返事申す次でに

又内府の御歌のごとおぼしくて
 其の後に三日ありて法印の御もとより言の葉思ひの程になほえ仰せられず法印返事おほせらるべきよし仰せらるればとてつかはしける

又別にし名残の春はくれぬれど長き恨は盡せざりける
 又内府の御返事とおぼしくて
 今の内府の御返事とおぼしくて
 今の内府の御返事とおぼしくて
 今の内府の御返事とおぼしくて

又内府の御返事とおぼしくて
 今の内府の御返事とおぼしくて
 今の内府の御返事とおぼしくて
 今の内府の御返事とおぼしくて

古の跡はさしても忍ぶべしわが其家と見るぞ悲しき
 年頃もちながら知らざりけるなどありつゝ返事
 公衛中將

一世々を経て偕のみ過し言の葉の今梢にぞ色を染ける
 歌合と云ふことする人々勝負定むることをこな
 たかなたよりふれ遣すことのみあるをどうかうか
 つさひ申しながらいな、ひ難きは覺えぬかたな
 がら誓ひたりとてせめことになりしを圓位聖
 にと云ふは昔より申し交すものなりしをわがみ
 みつめたる歌どもを三十六番につかひて伊勢の
 太神宮に奉らむするなりとてこれを勝負しるし
 と強ひて申し、かばおろ、かきつけて遣は
 しける歌合のはしに聖人かきつけたる歌

返事に歌合のおくにかきつけたる
 藤原も御裳濯河の末なれば下枝もかけよ松の百枝に
 藤原ももとは大臣なりし故にや

又おくの歌
 契置し契の上にそへおかむ和歌の浦わの蟹の藻鹽木
 この道の悟り難きを思ふにも蓮開けばまづ尋ね見よ
 返し二首後日に送る 圓位上人

和歌浦に沙木飾れる契をそけりなくまの跡にぞ有ける
 悟得て心の花し開けなば尋ねぬさきに色そそむべき
 少將成家の朝臣賀茂の祭の使せし時出立は右の
 おとりの六條堀河なりき權大納言定家卿とぶら
 ひ渡りて舞人の座の二献の勸盃といふことなど
 せられて後又の日これより昨日のしたくことご
 と宜しかりしこといでたちの右大臣家なかにて
 御座當時おられて事行はれきありがたき例なり
 などいはれて侍りし返事の次で遣はし侍りし
 かけなびく玉の臺の筵にも澄み給ひてぞ光そひにし

立ち歸りて返事
 立ち歸りて返事
 立ち歸りて返事
 立ち歸りて返事

又返事
 又返事
 又返事
 又返事

村雨も時にあふひの印とは君がどふにぞ思知りぬる
 村雨も時にあふひの印とは君がどふにぞ思知りぬる
 村雨も時にあふひの印とは君がどふにぞ思知りぬる
 村雨も時にあふひの印とは君がどふにぞ思知りぬる

法性寺座主 百首の歌をよみて人々にもすゝめ
 法性寺座主 百首の歌をよみて人々にもすゝめ
 法性寺座主 百首の歌をよみて人々にもすゝめ
 法性寺座主 百首の歌をよみて人々にもすゝめ

手向べき心計りは有ながら花に並ぶる言の葉ぞなき
 手向べき心計りは有ながら花に並ぶる言の葉ぞなき
 手向べき心計りは有ながら花に並ぶる言の葉ぞなき
 手向べき心計りは有ながら花に並ぶる言の葉ぞなき

許より
 許より
 許より
 許より

今朝やしる花咲増れと思ふ哉三笠の山に枝は連ねつ
 今朝やしる花咲増れと思ふ哉三笠の山に枝は連ねつ
 今朝やしる花咲増れと思ふ哉三笠の山に枝は連ねつ
 今朝やしる花咲増れと思ふ哉三笠の山に枝は連ねつ

冬籠り跡かき絶ていとしく雪の内にぞ薪つみける
 冬籠り跡かき絶ていとしく雪の内にぞ薪つみける
 冬籠り跡かき絶ていとしく雪の内にぞ薪つみける
 冬籠り跡かき絶ていとしく雪の内にぞ薪つみける

冬籠り跡かき絶ていとしく雪の内にぞ薪つみける
 冬籠り跡かき絶ていとしく雪の内にぞ薪つみける
 冬籠り跡かき絶ていとしく雪の内にぞ薪つみける
 冬籠り跡かき絶ていとしく雪の内にぞ薪つみける

今ぞ知る雪より花は咲くと云し其言の葉に驗有こは
 今ぞ知る雪より花は咲くと云し其言の葉に驗有こは
 今ぞ知る雪より花は咲くと云し其言の葉に驗有こは
 今ぞ知る雪より花は咲くと云し其言の葉に驗有こは

文治六年正月三日主上御元服なり同日十一日は
 文治六年正月三日主上御元服なり同日十一日は
 文治六年正月三日主上御元服なり同日十一日は
 文治六年正月三日主上御元服なり同日十一日は

殿下女御の御入内なりきその料の御屏風十二帖
 殿下女御の御入内なりきその料の御屏風十二帖
 殿下女御の御入内なりきその料の御屏風十二帖
 殿下女御の御入内なりきその料の御屏風十二帖

よしさきの年の霜月頃より仰せられしかばよみ
 よしさきの年の霜月頃より仰せられしかばよみ
 よしさきの年の霜月頃より仰せられしかばよみ
 よしさきの年の霜月頃より仰せられしかばよみ

正月
 正月
 正月
 正月

小朝拜列り立つ所
 小朝拜列り立つ所
 小朝拜列り立つ所
 小朝拜列り立つ所

九重や玉しく庭にむらさきの袖を連ぬる千代の初春
 九重や玉しく庭にむらさきの袖を連ぬる千代の初春
 九重や玉しく庭にむらさきの袖を連ぬる千代の初春
 九重や玉しく庭にむらさきの袖を連ぬる千代の初春

子日小松原山野に霞立ち渡りたる所、住吉の松
 子日小松原山野に霞立ち渡りたる所、住吉の松
 子日小松原山野に霞立ち渡りたる所、住吉の松
 子日小松原山野に霞立ち渡りたる所、住吉の松

あり
 あり
 あり
 あり

二月
 二月
 二月
 二月

花中鶯ある所人の家あり
 花中鶯ある所人の家あり
 花中鶯ある所人の家あり
 花中鶯ある所人の家あり

人の家並に野べに梅の花咲きたる所
 人の家並に野べに梅の花咲きたる所
 人の家並に野べに梅の花咲きたる所
 人の家並に野べに梅の花咲きたる所

三月
 三月
 三月
 三月

澤邊春駒あり
 澤邊春駒あり
 澤邊春駒あり
 澤邊春駒あり

春駒の野澤になる、氣色にて蘆の若葉の程は知る、
 春駒の野澤になる、氣色にて蘆の若葉の程は知る、
 春駒の野澤になる、氣色にて蘆の若葉の程は知る、
 春駒の野澤になる、氣色にて蘆の若葉の程は知る、

山野并に人の家に櫻の花咲きたる所霞立ちたり
 山野并に人の家に櫻の花咲きたる所霞立ちたり
 山野并に人の家に櫻の花咲きたる所霞立ちたり
 山野并に人の家に櫻の花咲きたる所霞立ちたり

一峰の雲野べの霞も薫り合て春に結べる宿とこそなれ
 一峰の雲野べの霞も薫り合て春に結べる宿とこそなれ
 一峰の雲野べの霞も薫り合て春に結べる宿とこそなれ
 一峰の雲野べの霞も薫り合て春に結べる宿とこそなれ

人家の庭に藤の花盛りに咲きたり山吹もあり
 人家の庭に藤の花盛りに咲きたり山吹もあり
 人家の庭に藤の花盛りに咲きたり山吹もあり
 人家の庭に藤の花盛りに咲きたり山吹もあり

四月
 四月
 四月
 四月

更衣、人の家に卯の花のかきねあり
七白妙に今日立着たる夏衣千代に變らぬ色こそ有けれ
賀茂の社に葵つけたる人参りたる所
八神代よりいかに契て御誕ひく今日は葵を翳し初らむ
早苗植ゑたる所
九數知す田子の多くも見ゆる哉千町の早苗とれば也見

五月

一 人の家、雲るに時鳥あり
二 雲るにてよはに語ふ鴈千年聞くともあかじと思ふ
あやめ刈りたる所、人の家にふきたる所もあり
三 絶えずひく淀野の里の萬蒲草尙萬代もねは留むらむ
人の家の庭に撫子咲きたる所
四 宿からに盛久しき常夏は千代の秋にも逢むとやす

六月

一 山井の邊に人々納涼したり又人の家もあり
二 立止る程だに涼し山の井に住らむ里の人をしぞ思ふ
野への杜の夏草しげき所
三 夏深き野へのさゆりば風過ぎて秋は覺ゆる森の蔭哉
河邊に六月はらへしたる所
四 君がため今日の禊にいづみ川萬代すめと祈りつる哉

七月

一 山野并に人の家秋風吹きたる所、萩もあり
二 松風を裾野の萩の傳へきて千年の秋と宿に告ぐなり
野の花さかりに開けて人々あつまり見る又刈り
取る所もあり
三 諸人のちぐさの花の時にあへる心々を野へに見る哉
春日山に鹿あり
四 春日山萬代呼ぶ松風に鹿も秋をば知るにや有るらむ

八月

一 人の家池の上に人々詠月所
二 池水にのどけき月を映しても心はれたる宿のもろ人

一 ひきつれて山路に松のこゆる哉春の迎へに急ぐ也鳥
二 泥繪の御屏風に和歌二首夏の樹蔭に納涼したる所
三 君が代の四方の山へも繁ければ木蔭涼しく清水汲鳥
池の水雪つもり水鳥あり
四 冬くれば池の鏡に氷居てみかきそへたる千代の影哉
かくて人々同じ數に三十六首泥繪二首よみて奉ら
れたりけるをみな給はせてよろしからむ歌どもに
しるしつけて奉るべきよし侍りしかばしるして奉
りて後又左のおとやの御もどもつかはしたりけ
ればしるしつけ奉られたりけるを又殿にて定めら
れたるごぞこれよりは自らの歌はむげにやはとて
且一首ぞしるしつけて奉りしにかに定められける
にか七首を御屏風にぞかゝれける左のおとやの歌
の數も同じ數なりけり歌奉りける人々殿下左右の
おとや左大將殿季經卿隆信朝臣左少將定家朝臣入
道以上八人なり
五 少將またいさゝか若き者の數にいれられた
ることは事の外のことなれども若きものなればよ
しなるにや三首ぞ入りたりけるされど初の小朝拜
の歌いりたるなむ面目なりと承りし七首入りける
はこのてんあひたるもなり其のうちに思はず
に入るまじき歌こそ入りにつれ屏風の歌久しく絶
えたるを上東門院の御入内に長保の例にて此の度
おこされけるなるべししきしかたは大納言忠親卿
左大將殿中務少輔伊經とむかきける此の道めづ
らしき手にておろしし侍るなり
六 圓位ひじり歌どもを伊勢の内宮の歌合とて判う
け侍りし後又同じき外宮の歌合にて思ふ心あり
七 新少將にかならず判してとてどかきければしる
しつけて侍りけることに其年文治河内のひろか
はと云ふ山寺にて煩ふことありと聞きて急ぎつ

あふ坂の關に駒むかへ
一 君が世にあふ坂山のせき水も影靜かなるもち月の駒
田の中に人の家ある所
二 秋の田の五百代田より家居して千東や食稻積まむとす覽
九月

九月

一 ある山の中菊盛に開けたる所、仙人これを見る
二 仙人のをる袖匂ふ菊の露打拂ふにも千代は經ぬべし
三 山野并に人の家に紅葉さかりにして人々詠ふ所
四 尋ね見る麓の里の紅葉にこれより深き奥ぞ知らるゝ
海のほとりに霧立ち渡りたる所
五 須磨の關秋の日數をやらじとや心を込て霧立にけり
十月

十月

一 海べに千鳥あり海士人の沙やくもあり
二 四方の海蟹の鹽屋も數そひて浦わの千鳥千代呼ぶ也
網代に入あつまりたる所に紅葉あり
三 絶えず住む八十字治河の網代木に幾世紅葉の錦懸く覽
江澤の邊に寒蘆しげりたる所、つるあり
四 難波瀉蘆への冬のけしきにて變らぬ物はつるの毛衣
十一月

十一月

一 五節の舞の所
二 少女子が雲の通路空晴れて豊のあかりも光そへけり
賀茂の臨時の祭上の御社の社頭のけしき
三 月さゆるみたらし川に影見えて氷にすれる山藍の袖
野べに鷹がりしける所
四 またもなほ人に見せばや御狩する交野の原の雪の曙
十二月

十二月

一 内侍所神樂のけしき
二 理りや天の岩戸も明けぬらむ雲の庭の朝ぐらの聲
山野の樹竹に雪つもりたる所、人の家あり
三 冬籠り野山しめたる氣色まで花の春ともなせる雪哉
年の暮に山より妻木こりて出でたる所

秋篠月清集

秋篠月清集一

花月百首

花五十首

一 昔誰かゝる櫻の種をうゑて吉野を春の山となしけむ
二 谷川の打出づる浪に見し花の峰の梢になりける哉
三 尋ねてぞ花と知りぬる初瀬山霞の奥に見えし白くも
四 花なれや山の高ねの雲居より春のみおとす瀧の白糸
五 立田山折々見する錦かなもみむし嶺に花咲きにけり
六 かづらきの嶺の白雲かをるなり高間の山の花盛かも
七 比良の山は近江の海の近ければ浪と花との見ゆる哉
八 更に又麓の浪もかをるなり花の香おろす志賀の山風
九 秋はまだ鹿のね告げし高砂のをのへの程に櫻一むら
十 明け渡る外山の梢ほのく霞をかをる宇治の春風
十一 世の中よさくらに咲ける花なくば春と云ふ頃も蕪莫
十二 九重の花の盛になりぬれば雲ぞ雲居のしるし也ける

音づれし木の葉散りぬるはては又霧の籬を拂ふ山風
霧深き明石の沖に漕行くを鳥隠れぬと誰ながむらむ

擣衣五首

昔より白き衣をうつなれど聲には色のありける物を
山賤の谷のすみかに日は暮れて雲の底より衣うつ也
衣うつ折しもつらき鐘の音の紛るゝ方ならぬ物故
一夜もすがら月にしてうつ膚衣空まですめる槌の音哉
槌の音はみねの風にひびき来て松の梢も衣うつなり

鹿五首

野か山か遙に遠き鹿の音を秋の寢覺に聞き明しつゝ
露深き籬の野べをかき分けて我に宿るさを鹿の聲
紅葉ふく風につけて聞ゆなり林の奥のさを鹿のこゑ
稲葉吹く門田の風に埋もれて仄に鹿の聲たぐふなり
秋の夜はをのゝ篠原風さえて月影わたるさを鹿の聲

時雨五首

片山に日影はさしながらしぐる共なき冬の夕暮
物おもふ寢覺の床のむら時雨袖より外もかくや雪は
程もなく過つる時雨いかにして月に宿貨名残とむ覽
過ぎ來ぬる嵐にたぐふ村時雨竹のさ枝に聲は残りて
昨日けふ都の時雨風さむしこれや越路のはつ雪の空

水五首

志賀のうら梢にかよふ松風は氷に残るさやなみの聲
大井川せいの岩波音たえて井せきの水に風凍るなり
けさ見れば池には氷跡もなし借水鳥の夜枯しけるを
山深き水のみなみ凍るらし清瀧川の音のさもしき
難波がた入江のあしは霜がれて氷にたゆる舟の通路

寄雲戀

知らぬ山の雲を遙に尋ねつゝ昔は人にあひける物を
今宵とて入日の空を眺めわび雲の迎へを待たぬ傳さ
量なき戀の煙やこれならむ空に満ちたる五月雨の雲
戀死む身ぞと云しを忘すば此方の空の雲をだに見よ

神社五首

御裳濯のひろき流に照す日の普き影は四方の海まで
石清水すむも濁るも世中の人の心をくむにぞ有ける
我が祈る心の末を知れとてや袂にとほき賀茂の川風
契あれや春日の嶺の松にしも懸り初めける北の藤波
住吉の岸に生ひける松よりも猶おく深き秋風のこゑ

佛寺五首

長き夜に朝日まつまの心こそたかのゝ奥に有明の月
雲にふす人の心ぞ知られぬる今日を初瀬の奥の山本
難波江や座のあとに年くれぬ月日の入るを思送りて
絶えずたく香の煙や積るらむ雲の林に風かをるなり
浪にたぐふ鐘の音こそ哀なれ夕さびしき志賀の山寺

山家五首

山里に心の奥の淺くてはすむべくもなき所なりけり
自から便りに聞けば都には我が住む谷を知人もなし
奥の谷に煙もたゞば我宿を猶淺しとや住うかれなむ
山深み人疎かりし友猿のともとなりぬる身の行方哉
心ありし都の友も山人となりて思へば岩木なりけり

海路五首

明石より浦傳ひゆく友なれや須磨にも同月を見る哉
播磨海をりよき今朝の船路かな浦の松風聲弱るなり
秋の夜の哀も深き磯巖かな苦もる雨の音ばかりして
颯うかぶ波を遙に漕ぎ出でぬよそめ計やおきの友舟
哀なり雲に連なる波の上に知らぬ船路を風に任せて

十題百首

天象十首
空さえし去年の景色も打解けて朝日ぞ春の始也ける
知ひさかたの雲居に見えし伊駒山春は霞の麓なりけり

曉の風に別るゝ横雲をおき行く袖のたぐひとぞ見る

寄山戀

三吉野の山より深き物やあると心に問へば心也けり
知るや君末の松山こそ波に尙も越えたる袖の氣色を
なほ通へうつの山への現には絶えにし中の夢路計を
峻捨の山は心のうちなれや頼めぬ夜はの月を眺めて
消え難き下の思はなき物を富士も淺間も煙たてども

寄川戀

昔思ふすみた川原に鳥も居ば我も昔のと問はでやは
いかにも身を宇治川の網代木に心をよする人の有かは
廣瀬川袖つくばかり淺きこそ絶えなれ結ぶ契也けれ
石ばしる水やはうとき貴船川玉ちるばかり物思ふ頃
飛鳥川瀬なる末もある物を袖には淵の朽果つる迄

寄竹戀

友と見よ鳴尾に立てる一つ松夜々我も借過ぐる身ぞ
枝繁き松の隙より洩る月の僅にだにも逢見てしがな
前世にいかなる種を結びけむうしども今は岩代の松
來ぬ人をまつに恨むる夕風に友思ふ鶴の聲ぞ悲しき
浪かくる繪島に生ふる濱松の朽ちぬ歎に濡らす袖哉

禁中五首

紫の庭の春風のぞかにて花にかすめる雲のうへかな
春をへて盛久しき藤のはな大宮人のかざしなりけり
萩の戸の花の下なるみかは水千年の秋の影ぞ映れる
冬の朝衛士の煙を立つる屋のあたりは薄き九重の雲
春も秋も葉替ぬ竹は昔より常磐なるべき君が御影に

地儀十首

昨日けふ千里の空も一つにて軒端に曇る五月雨の宿
秋よ又夢路はよそに成にけりよ渡る月の影に任せて
はるゝ夜の星の光に類ひ来て同じ空よりおける白露
かくてこそ誠は秋は寂しけれ霧閉ちてけり人の通路
秋は猶吹き過ぎにける風迄も心の空に餘るものは
天の川水をむすぶ岩波のくだけて散るは霞なりけり
長き夜の人の心におく霜のふかさを鐘の驚かすなり
春の花あきの月にも残りける心のはては雪の夕ぐれ

草部十首

百敷や玉のうてなに照る月の光をえたる秋のみや人
天の下樂しき御代は煙立つ民の窺のけしきなりけり
我思ふ人だに住まば陸奥のえびすの里も疎き物かは
疎なる不破の關屋の板廂久しくなりぬ雨も溜らで
七古郷はあさむが末になりはてゝ月に残れる人の面影
七つれもなき人やは待ちし山里は軒の下草道もなき迄
山嵐の穂波を寄する夕暮に袖こそ濡るれ山田もる庵
我宿は野路の笹原かき分けて打ぬる下にたえぬ白露
夕なぎに波間の小島顯れてあまの伏屋を照す藻湖火
山伏の岩屋の洞に年ふりて昔にかさぬる墨染のそで

大井川なほ山陰に鶴飼舟厭ひかねたる夜半の月かな
 夏夜 せうたゝねの夢よりさきに明けぬなり山郭公一聲の空
 夏衣 かくさねても涼しかりけり夏衣うすき袂にやざる月影
 扇 片手にならず夏の扇と思へども唯秋風のすみか也けり
 夕顔 七片山の垣根の日影はの見える露にぞうつる花の夕顔
 晩立 七入日さす外山の雲ははれにけり嵐にすぐる夕立の空
 蟬 七鳴く蟬のはにおく露に秋かけて木蔭涼しき夕暮の聲
 殘暑 七うちよする波より秋の龍田川さても忘れぬ柳蔭かな
 乞巧 七星合の空の光となるものは雲居の庭に照すともし火
 稻妻 七はかなしや荒れたる宿の轉寢に稻妻かよふ手枕の露
 鶉 七獨ぬる蘆のまろやの下露に床をならべて鶉鳴くなり
 野分 七昨日迄逢にごぢし柴の戸も野分にはるゝ岡のべの里
 秋雨 七降り暮す小萩が本の庭の雨を今宵は萩の上にくく哉
 秋夕 七物思はでかゝる露やは袖におく詠めて鳧な秋の夕暮
 秋田 七山遠き門田のすゑは霧はれて穂なみに沈む有明の月
 鳴 七波よする深の蘆邊をふしわびて風に立つ也鳴の羽振

廣澤池眺望
 心には見ぬ昔こそうかびけれ月にながむる廣澤の池
 萬 八うつの山こえし昔の跡ふりて萬の枯葉に秋風ぞ吹く
 柞 八柞はら華も色やかはるらむ森の下ぐさ秋ふけにけり
 九月九日 八雲の上に待來し今日の白菊は人の詞の花にぞ有ける
 秋霜 八霜結ぶ秋の末葉の小篠原風には露のこぼれしものを
 暮秋 八龍田畑いまはの頃の秋風にしぐれを急ぐ人の袖かな
 落葉 八散果てむ木葉の色を殘しても色こそなけれ嶺の松風
 殘菊 八様々の花をば菊に分けとめて垣根に知らぬ霜枯の頭
 枯野 八見し秋を何に殘さむ草の原一つに變る野邊の景色に
 寒 八風さむみ今日も寒の古郷は吉野の山の雪げなりけり
 野行幸 八芹川の波も昔に立ち返りみゆきたえせぬ嵯峨の山陰
 冬朝 八雲深き峯の朝げのいかならむ横の戸しらむ雪の光に
 寒松 八清水もる谷の戸ぼそも閉ぢはてゝ氷を叩く嶺の松風
 椎柴 八山里の寂しさおもふ煙ゆるたえゝ立てる嶺の椎柴
 念 八さゆる夜に鴛の念を重ねきて袖の水を拂ひかねつゝ
 佛名

一とせの儂き夢は覺めぬらむ三世の佛の鐘の響きに
 初戀 八知らざりし我戀草や茂る覽昨日はかゝる袖の露かは
 忍戀 八もらすなよ雲居る嶺の初時雨木の葉は下に色變る共
 聞戀 八谷ふかみ遙に人をさくの露觸れぬ袂よ何しをるらむ
 見戀 八忘れずよほのゝ人を三島江の黄昏なりし葦の迷に
 尋戀 八たどりつる道に今宵は更けにけり杉の梢に有明の月
 祈戀 八幾夜われ波にしをれて貴船川袖に玉ちる物思ふらむ
 契戀 八いけらばと誓ふ其日も猶こすば邊りの雲を我と眺よ
 待戀 八蓬生の末葉の露の消え返り猶此世にと待たむ物かは
 逢戀 八唐衣かさぬる契くちすしていく夜の露を打拂ふらむ
 別戀 八忘れじの契をたのむ別かな空ゆく月の末をかぞへて
 顯戀 八袖の波胸の煙は誰も見よ君がうき名の立つぞ悲しき
 稀戀 八有し夜の袖の移香消果てゝ又あふ迄の形見だになし
 絶戀 八休らひに出にし人の通路を古き野原と今日は見る哉
 恨戀 八波ぞよる借もみるめは無物を恨馴れたる志賀の里人
 舊戀 八末迄といひし計に淺茅原宿も我身も朽ちやはてなむ

曉戀 一月やそれほの見し人の面影を忍びかへせば有明の空
 朝戀 一獨寝の袖の名殘の朝じめり日影に消えぬ露も有けり
 晝戀 一物思へば隙行く駒も忘れて暮す涙をまづ抑ふらむ
 夕戀 一君もまた夕やわきて詠むらむ忘れず拂ふ萩の風かな
 夜戀 一見し人のねぐたれ髪の面影に涙かきやるさ夜の手枕
 老戀 一君故に厭ふも悲し鐘の聲頓て我が世も更けにし物を
 幼戀 一行末の深きえにとぞ契りつるまだ結ばれぬ淀の若菰
 遠戀 一戀しとは便につけて云やりき年は還りぬ人は歸らず
 近戀 一葦垣の上吹きこゆる夕風に通ふもつらき萩の音かな
 旅戀 一枕にもあとも露の玉ちりて獨起き居るさ夜の中山
 寄月戀 一袖の上になるゝも人の形見かは我と宿せる秋夜の月
 寄雲戀 一君がりとさきぬる心迷ふらむ雲はいくへぞ空の通路
 寄風戀 一いつも聞く物とや人の思ふらむこぬ夕暮の松風の聲
 寄雨戀 一深き夜の軒の雫を数へても猶あまりある袖の雨かな
 寄煙戀 一忍びかね心の空に立つ煙見せばや不盡の嶺に紛へて
 寄山戀

遇不_レ會戀

一忘るなよとばかりいひて別れにし其曉や限なるらむ
二影とぬ床のさ筵露おきて契らぬ月は今も夜がれす
三鳥羽玉の夜の契は絶にしを夢路にかゝる命なりけり
四見し人の歸らぬ宿はあともなし唯朝夕の葛のうら風
五うつろひし心のはなに春くれて人も梢に秋風ぞ吹く
祝
四方の海久しくすめる春に逢て蓬が鳥の宿も思はじ
古郷に千世へて歸る蘆鶴や變らぬ君が御代に逢らむ
五代々の春秋の宮人をりかざせ雲居の庭にはぎの盛を
六松風を竹の籬に隔てても千年に千世のつく宿かな
七末までと八十氏は祈りけりふるき流の絶えぬ川波

檀波羅密

南海漁夫百首

八出しより荒れまく思ふ故郷に聞もる月を誰ぞ見らむ
九三島江に一夜かりしく亂蘆の露もや今朝は思置く覽
一浦傳ふ袖に吹きこす潮風のなれてとまらぬ波枕かな
二あけがたのさ夜の中山露おちて枕の西に月を見る哉
三宮城野の木の下草に宿かりて鹿鳴く床に秋風ぞふく
述懐
世中はくだりはてぬといふ事や偶々人の誠なるらむ
誰も皆植てだに見よ忘草世に故郷はげにぞ住み憂き
埋れぬ後の名さへやとめざらむ做事無て此世暮なば
憂世かなひと岩屋の奥に住む昔の袂も猶萎るなり
いか計り覺て思はうかりなむ夢の迷に猶迷ぬる
神祇
鈴鹿川八十瀬白波分け過て神路の山の春を見しかな
濁る世もなほすめとてや石清水流に月の光とむらむ
かも山の麓の柴のうす緑こゝろの色も神さびにけり
春日山森のした道ふみ分けて幾度なれぬさを鹿の聲
ももしほ草傳くすむ和歌の浦に哀をかけよ住吉の神
釋教 五波羅密

一消返り岩間にまよふ水の泡のしばし宿かる薄水かな
二今宵たれ眞菅片敷き明すらむそがの川原に衛鳴く也
三枕にも袖にも涙つらゝ居てむすばぬ夢をとふ嵐かな
四麓ゆく井せきの水や凍るらむひと音する嵐山かな
五山人の袖に馴たる松の風雪げになればいと烈しき
六浮雲を嶺に風の吹きためて月の名残を雪と見るかな
七限ありて春明方になる年を宮も藁屋も急ぎくらしつ
戀十五首
大方に眺めし暮の空乍らいつよりかくは思初めけむ
それとも猶風のしるべはある物を跡なき浪の舟の通路
〇鶏鳥の隠れも果ぬさいれ水下に通はむ道だにもがな
一横の戸もさゝで更けゆく轉寢の袖にぞ通ふ道芝の露
二誰が爲ぞ契らぬ夜半を臥わびて眺果てつる有明の月
三問べしと待たぬ物故萩の葉に夜々露のおき明すらむ
四今こむの宵々ごとに眺むれば月やおそき長月の末
五朽ちぬべき袖の雫を絞りても馴にし月や影離れなむ
六曉の嵐にむせぶ鳥の音に我もなきとぞ起き別れにし
七秋の田のかりねのはとも白露に影みし程や宵の稻妻
八尋ぬべき海山とだに頼まねばげに懸路こそ別也けれ
九思はえず今や藻に住虫の名も人を恨のねに返りつゝ
一其かみに絶なましかば注繩の斯引はへて物は思はじ
二見し人の袖に浮にし我魂の頓て空しき身とや成なむ
三戀死なむ我世の果に似たる哉かひなく迷ふ夕暮の雲
羈旅十首
一もろ共に出でし空こそ忘れね都の山の有明のつき
二菅原や伏見に結ぶさゝ枕一夜の露もしほりかねぬる
三岩がうへの苔の狭筵露けきにあらぬ衣をしける白雲
四まだ知らぬ山より山に移り來ぬ跡なき雲の跡を尋て
五袂こそ潮くむ海士の友ならめ同じ藻屑の煙立ちつる
六又人の結捨てつる野べの草雙ふ枕と見るかひぞなき
七忘られず都の夢や送るらむ月は雲居を宇都の山とえ

夏十首

一山の端も霞の衣なれく一夜の風に立ち渡るなり
二夏の夜も闇はあやなし橋をながめぬ空に風薫るなり
三卯の花をおのが月夜と思ひけむ聲も曇らぬ郭公かな
四雨はるゝ軒の雫に影見えて萬蒲にすがる夏の夜の月
五名残まで暫し聞けどや郭公松の嵐に鳴きて過ぐなり
六故郷の庭のさゆりば玉ちりて螢とびかふ夏の夕ぐれ
七杉ふかきかた山陰の下涼みよそにぞ過ぐる夕立の空
八柳川の岩間すゝし暮ごごに復の床を誰ならすらむ
九柀原しぐれぬ程の秋なれや夕露涼し日ぐらしのこゑ
一今日暮ぬ秋は一夜と吹風に鹿の音ならず小野の篠原
秋十五首
一袖に散る萩の上葉の朝露に涙ならはす秋のはつかせ
二暮れかゝる空しき空の秋を見て覺えず溜る袖の露哉
三秋の色やいましほの露ならむ深き思の染みし袂に
四かた山の麓の稻葉すゑさわき月よりおつる嶺の秋風
五外山より鹿の音おくる秋風にこたへて落る萩の下露
六露宿す蓬を庭のあるじにてよるゝ蟲の音信ぞする
七はるかなる常世離れて鳴く雁の雲の衣に秋風ぞ吹く
八松に吹くみ山の嵐いかならむ竹うちそよぐ窓の夕暮
九寂さに人は影せず成行けど月やはすまぬ淺茅生の宿
一長き夜の月は遙に更けにけり板まに影のさし變る迄
二須磨の浦のさま屋も知らぬ夕霧に絶々照す螢の漁火
三下草は秋にもたへず片岡のつれなき松に時雨もる頃
四三吉野の花は雲にもまがひしを獨色づく嶺の紅葉ば
五まの浦波間の月を氷にてをばなが末にのこる秋風
六深草の鶉の床を今日よりやいと空しき秋のふる里
冬十首
一八月宿す露のよすがに秋くれて頼みし庭は枯野也けり
二猪名野山道のさゝ原理もれて落葉が上に嵐をぞ聞く
三もりかはる軒端の月に雲すぎて時雨を殘す庭の春風

一消返り岩間にまよふ水の泡のしばし宿かる薄水かな
二今宵たれ眞菅片敷き明すらむそがの川原に衛鳴く也
三枕にも袖にも涙つらゝ居てむすばぬ夢をとふ嵐かな
四麓ゆく井せきの水や凍るらむひと音する嵐山かな
五山人の袖に馴たる松の風雪げになればいと烈しき
六浮雲を嶺に風の吹きためて月の名残を雪と見るかな
七限ありて春明方になる年を宮も藁屋も急ぎくらしつ
戀十五首
大方に眺めし暮の空乍らいつよりかくは思初めけむ
それとも猶風のしるべはある物を跡なき浪の舟の通路
〇鶏鳥の隠れも果ぬさいれ水下に通はむ道だにもがな
一横の戸もさゝで更けゆく轉寢の袖にぞ通ふ道芝の露
二誰が爲ぞ契らぬ夜半を臥わびて眺果てつる有明の月
三問べしと待たぬ物故萩の葉に夜々露のおき明すらむ
四今こむの宵々ごとに眺むれば月やおそき長月の末
五朽ちぬべき袖の雫を絞りても馴にし月や影離れなむ
六曉の嵐にむせぶ鳥の音に我もなきとぞ起き別れにし
七秋の田のかりねのはとも白露に影みし程や宵の稻妻
八尋ぬべき海山とだに頼まねばげに懸路こそ別也けれ
九思はえず今や藻に住虫の名も人を恨のねに返りつゝ
一其かみに絶なましかば注繩の斯引はへて物は思はじ
二見し人の袖に浮にし我魂の頓て空しき身とや成なむ
三戀死なむ我世の果に似たる哉かひなく迷ふ夕暮の雲
羈旅十首
一もろ共に出でし空こそ忘れね都の山の有明のつき
二菅原や伏見に結ぶさゝ枕一夜の露もしほりかねぬる
三岩がうへの苔の狭筵露けきにあらぬ衣をしける白雲
四まだ知らぬ山より山に移り來ぬ跡なき雲の跡を尋て
五袂こそ潮くむ海士の友ならめ同じ藻屑の煙立ちつる
六又人の結捨てつる野べの草雙ふ枕と見るかひぞなき
七忘られず都の夢や送るらむ月は雲居を宇都の山とえ

〇高砂の松も別や惜むらむ明けゆくなみに嵐たつなり
〇清見がたひより岩屋の秋の夜に月も嵐も頃ぞ悲しき
〇古郷に主やいづく人とはいあづまの方を夕暮の空

山家十首

〇三吉野の横立山に宿は有ぞ花見がてらの音信もなし
〇折々の深山を出る鳥の聲眺めわびぬと人に告げこせ
〇山深み露お袖に影見えて木の間わけゆく有明の月
〇山かげや友を尋ねし跡ふりてたゞ古への雪の夜の月
〇己れだに絶えず音せよ松の風花も紅葉も見れば一時
〇つま木をる便りに見れば片岡の松の絶間に霞む故郷
〇心ぞうきたる物と恨みつる頼む山路もまよふ白雲
〇この里は雲の八重立つ峯なれや麓にしづむ鳥の一聲
〇待つ人の知べ計の葉せば歸果つべき身とや知られむ
述懐十五首

君が代にいでむ朝日を思ふかないす川原の春の曙
あきらかに昔の跡を照さなむ今も雲居の月ならば月
神を崇め法を廣むる世ならむ借社暫し國を治め
ははかなくも花の盛を思哉浮世の風はやすむ間もなし
借もさはすまば住むべき世中の人の心の濁果てぬる
思解けば此世はよしや露霜を結びさける行末の夢
我乍ら心のはてを知らぬ哉捨て難き世の又厭はしき
人の世は思へばなべてあだししの、蓬が本の一つ白露
大方に夢を此世と見てしがな驚かぬこそ現なりけれ
山寺の暁がたの鐘の音にながき眠をさましてしがな
三月のすむ都は昔感ひ出でぬ幾世か暗き道をめぐらむ
心こそ浮世の外宿なれどすむこと難き我身也けり
さりととも光は残る世なりけり空ゆく月日法の燈火
水上に頼みはかけき佐保川の末の藤波波にくたすな
和歌の浦の契も深し藻汐草沈まむよ、を救へとぞ思
西洞隠士百首

夕立の名残の雲を吹く風に鳥羽田の早苗末騒ぐなり
七憂きとも知らぬ螢の己のみ燃ゆる思はみさを也けり
七秋ならで野への鶴の聲もなし誰に問はまし深草の里
〇志賀の海士の袖吹返す山下風にまだき秋立つ鳩の湖
〇夏深き入江の蓮咲きにけり波にうたひて過ぐる舟人
〇亂れ葦の露の玉ゆら船どめてほの三島江に涼む頃哉
〇外は夏あたりの水は秋にしてうちは冬なる氷室山哉
〇時鳥おのが阜月の暮れしよりかへる雲路に聲恨む也
〇今日迄は色に出でじと篠末葉に秋の露はおけども
〇秋風はなほ下草にこがくれて森の空蟬聲ぞすいしき
〇早き瀬の歸らぬ水に御禊して行年波の半ばをぞ知る

秋

〇梢ふく風より秋の龍田山下葉に露やもらしそむらむ
〇七夕にかせる衣の朝じめり別の露を干しや初めつる
〇渡の原いづも變らぬ波の上に其色となく見ゆる秋哉
〇秋といへば宿野に馴す敏鷹のすいろに人を懸渡る哉
〇昔たれ誰がすみかとも白菅のまの、萩原秋は忘れず
〇湖の鳴く山陰は暮れはて、虫の音になる萩のした露
〇秋風の紫くたく草むらに時うしなへる袖ぞつゆけき
〇よしのやま麓の野邊の秋の色に忘れやしなむ春の曙
〇三吉野の里は荒にし秋の野に誰をたのむの初雁の聲
〇古郷は軒端の萩を詫言にて寝ぬ夜の床に秋風ぞ吹く
〇山陰や眺め暮せる霧の中を横の葉わけてとふ嵐かな
〇白雲の夕ある山ぞなかりける月を迎ふる四方の嵐に
〇清見瀉むら雲はる、夕風に關もる波をいづる月かげ
〇久方の月を宮人誰が爲に此の世の秋を契りおくらむ
〇衣うつ袖にくたくる白露の散るもかなしき秋の故郷
〇露霜のおくての稲葉風を痛み蘆の丸屋の曉覺とふ也
〇霜迷ふ庭のくす原色かへて恨みなれたる風ぞ烈しき
〇我涙木々のこの葉も誘ひ落ちて野分悲しき秋の山里

春

〇冬のゆめの驚きはつる曙に春の現のまづ見ゆるかな
〇誰にとて春の心を筑波山このもかの風に風渡るなり
〇はれやらぬ軒ばの梅や咲ぬらむ雪に色づく春の山里
〇さけにけりこほりし池の春の水又袖ひちて結ぶ計に
〇鶯の鳴きにし日より山里の雪間の草も春めきにけり
〇霜がれし春の萩原うちそよぎ裾野に残る去年の秋風
〇歸る雁雲のいづこになりぬらむ常世のかたの春の曙
〇霞も雲もわかぬ夕暮に知られぬ程の春雨ぞ降る
〇谷川の岩ねかたしく青柳のうちたれ髪をあらふ白浪
〇花に似ぬ身の浮雲のいかなれや春をばよそに三吉野の山
〇色にそむ心の果を思ふにも花に見るこそ憂身也けれ
〇山深み花より花に移りきて雲のあなたの雲を見る哉
〇三吉野の花の影にて暮れはてぬ臘月夜の道や感はむ
〇花はなみまき立つ山は末の松風こそ越ゆれば春の山路
〇今年またいかに心を碎けて花さきぬれば春の山路
〇心あてにながめし山の櫻花うつろふまゝに殘る白雲
〇狩人の入野の露を命にて散りかふ花に雉子鳴くなり
〇主もなき霞の袖をよそに見て松浦のおきを出る舟人
〇悔しくぞ月と花とになれにける三月の空の有明の頃
〇行てみむと思ひし程に津の國の難波の春も今日暮ぬ也

夏

〇花のいろの面影に立つ夏衣ころも覺えず春ぞ戀しき
〇卵の花は雲にも疎き月なれば波ぞ立ちそふ玉川の里
〇橘の花ちるささこにみるゆめは打ち驚くも昔なりけり
〇はと、ぎす外山を渡る一聲の名残を聞けば嶺の松風
〇菅原や伏見の暮の寂しきに絶す里とふほど、ぎす哉
〇山里の卯の花くたす五月雨に垣根をこゆる山川の水
〇軒の雨枕の露も今日は唯同じ萬浦のねをかくるかな
〇梅雨の雲間待出で、眺むれば傾きにける夏の夜の月
〇池の上の菱の浮葉もわかぬまで一つに茂る庭の蓬生

〇有明の月より後の秋かれて山にのこれる松風のこと

冬

〇秋を惜む袖の時雨の今日は又今年の冬の景色なる哉
〇古郷の本荒の小萩枯しより鹿だに鳴かぬ夜半の月哉
〇霜さゆる刈田のはらに居る鳥のすみか空しき冬の曙
〇若草のつまもあらはに霜枯て誰に忍びむ武蔵野の原
〇神無月木の葉吹きおろす明方の嶺の嵐に殘る月かげ
〇秋の色は己が木蔭に残りけり四方の嵐を松に残して
〇照す日を掩へる雲の暗きこそ憂身にはぬ時雨也けれ
〇しぐれこし外山も今は藪ふり正木の葛散やはてぬる
〇住吉の松の下枝を洗ふ波こほらぬ聲ぞいと寒けき
〇明石瀉浦こぐからに友千鳥朝霧がくれ聲かはすなり
〇風をいたみ波に漂ふ鴉鳥の浮巢ながらに氷居にけり
〇難波がた蘆のしをれ葉氷とち月さへ寒しをしの一聲
〇山人のくむ谷川の朝ぼらけ叩く氷もかつむすびつ、
〇山下風の吹きそふ儘に雪落ちて軒端の外に靡く白雲
〇我宿の薄おしなみ降る雪に籬の野への道ぞ絶えぬる
〇旅人のみの代表うち拂ひ吹雪をわたる雲のかけはし
〇此頃の小野の里人いとまなみ炭やく煙山にたなびく
〇霜八度おきにけらしな神垣や氷室の山にされる神葉
〇一年を眺めはてつる山の端に雪消えなば、花や待つ覽
〇窓のうちに曉ちかき灯の今年のかげは残るともなし

雜

〇敷島や大和言の葉尋ねれば神の御代より出雲八重垣
〇玉津島たえぬ流を汲む袖に昔をかけよ和歌の浦なみ
〇風の音も神さび増る久方の天のかぐ山幾代へぬらむ
〇浪さわぐ蟲明のせこのかち枕都にかかぬ濱風ぞ吹く
〇山深き雲の衣をかたしきて千里の道に秋かせぞ吹く
〇今朝みつる雲のあなたの山風に月をば出て獨り寝む
〇はるかなる沖ゆく舟の敷見えて波より白む須磨の曙
〇山の端は有か無かの浪の上に月を待つる八重の潮風

住侘ぬ世の憂よりはと計も覚えぬ迄の草のどざしに
 故郷に通ふ夢路もありなまし風の音を松に聞かずば
 山に残る雲も煙もたえなく昔の人の名残をぞ見る
 浮世かなと計ひて過しけむ昔に似たる行末もがな
 曇なき星の光を仰ぎてもあやまたぬ身をなほぞ疑ふ
 人の身の途には死ぬる習ひだに心々に任せざりけり
 前世の報の程の悲しきは見に附けてもつらさそふ覽
 苦の下に朽ちざらむ名を思にも身をかへてに浮世也鳥
 斯てしも消えやはてむと白露の置所なき身を惜む哉
 數ならば春を知らまし山木の深くや谷に埋果なむ
 永き世の末思ふこそ悲しけれ法の燈火きえがたの頃
 頓てさは心の闇のはれねかしみ空の月に雲の懸れる

院初度御百首

久方の雲居に春の立ちぬれば空にぞ霞む天のかぐ山
 吉野山こそしも雪のふる里に松の葉白き春の明ぼの
 春はなほ浅間の嶽に空さえて曇る煙は雪げなりけり
 春日野の草のはつかに雪消えてまだうら若き鶯の聲
 都人野原に出で、白妙の袖もみどり若菜をぞ摘む
 梅の花うすくれなるに咲きしより霞色づく春の山風
 氷のし池のをし鳥うち羽ふき玉藻の床に小波ぞ立つ
 霜枯のこやの八重葎ふき替て蘆の若葉に春風ぞ吹く
 唐衣すそ野の雉子うらむなり妻もこもらぬ萩の焼原
 常磐なる山の岩根にむす若の染めぬ緑に春雨ぞ降る
 春は又いかに問はまし津の國の生田の森の明方の空
 長閑なる春の光に松島や鳥のあまの袖や干すらむ
 清見がた心に闇はなかりけり曉月夜のかすむ波路に
 歸る雁いまはの心有明に月と花との名こそをしけれ
 枝かはす花ささぬれば青柳の梢にかゝるたきの白糸
 春の池の汀の櫻ささぬればくもらぬ水にうつる白雲
 休はで寝なむ物は山の端にいざよふ月を花に待つ

更科の山のたかねに月さえて麓の雪は千里にぞしく
 幸崎やははる沖に雲さえて月の氷に秋かせぞ吹く
 月みばといひし計の人はこで横の月たゝく庭の松風
 三日月の有明の空に變る迄秋の幾夜を眺めきぬらむ
 ぬしや誰いづくの秋に旅寝して残る里人衣うつらむ
 きりくす鳴くや霜夜のさ簾に衣片敷き獨かもねむ
 龍田川ちらぬ紅葉のかげ見えて紅越ゆる瀬々の白波
 忘るなよ秋は稲葉の山の端に又こむころを松の下風
 今年みる我が元結の初霜に三十餘の秋のふけぬる

冬

明方の枕の上に冬はきて残るもなき秋のともし火
 棹鹿も分こぬ野への古郷に本荒のこ萩枯まよも惜し
 山下風の人やは庭を檜柴の暫しもふれば道もなき迄
 村時雨すぐれば晴る、高嶺より嵐に出る冬の夜の月
 笹の葉は深山もさやに打そよぎ凍れる霜を吹く嵐哉
 風を痛み深ふ池の萍もさそふ水なくつらゝむにけり
 吉野川たきつ白波こほりゐて岩ねにおつる嶺の松風
 明石瀉須磨も一つに空さえて月に千鳥も浦傳ふなり
 一片敷の袖の氷も結ばれ解けて寝ぬ夜の夢ぞ短かき
 時雨より霰に變る横の屋の音せぬ雪ぞ今朝は寂しき
 木枯につれなく残る奥山のまきの梢も雪をれにけり
 誰を訪ひ誰を待たましと計に跡たえはつる雪の山里
 花残る頃にや分かむ白雪の降り紛へたる三吉野の山
 かきくらす嶺の吹雪に炭竈の煙の末ぞ結ばれ行けり
 一夜とや春を待つらむ年月は今日吳竹の雪の下をれ

戀

戀をのみ須磨の蠻人漢潮垂れ干敢ぬ袖の果を知ばや
 吉野川岩もる水の湧き返り色こそ見えね下騒きつ
 伊勢島や潮干に拾ふ偶々も手にとる程の行方知せよ
 楫を絶え由良の湊による船の便も知らぬ沖つしほ風
 せき返す袖に時雨や餘るらむ人も梢に秋ぞ見えぬる

夏

今日も又とて暮ぬる古郷の花は雪とや今は散る覽
 泊瀬山移ろふ花に春くれてまがひし雲を嶺に残れる
 明日よりは志賀の花園稀にだに誰かは訪む春の故郷

夏

夏きぬといふばかりにや足引の山も霞の衣かふらむ
 春の色も遠ざかる也菅原や伏見に見ゆる小泊瀬の山
 郭公忍びくりに來鳴くなり卯の花月夜ほの見ゆる頃
 今こむと頼めやはせし時鳥ふけぬる夜はを何恨む覽
 七たちばなの花ちる里の夕暮にわすれめぬる春の曙
 五月雨に雲間待出で、もる月は軒の萬蒲に曇る也鳥
 郭公今いくよをか契らむおのが早月の有明のころ
 いさり火の昔の光ほの見えて蘆屋の里にぞお登かな
 玉鉞の道の行く手のすさびにも契ぞ結ぶ山の井の水
 袖川の山陰くだす筏士よいかうきねの床は涼しき
 我妹子が宿のさゆりの花鬘長き日暮しかけて涼まむ
 富士の山きゆれば頓て降雪の一日も夏になる空ぞなき
 小山田の昨日の早苗取も敢ず頓てや秋の風も立なむ
 秋近きけしきの森に鳴く蟬の涙の露や下葉染むらむ
 御禊川波のしらゆふ秋かけて早くぞ過ぐる六月の空

秋

風の音に今日より秋の龍田姫身にしむ色を争て染覽
 七夕の待ちこし秋は夜寒にて雲にかきぬる天の羽衣
 萩の葉に吹くは嵐の秋なるを待ける夜半の棹鹿の聲
 亂蘆の穂向の風の片よりに秋をぞ見る真野の浦波
 押しなべて思ひし事の數々になほ色まさる秋の夕暮
 こ萩咲く山のゆふかげ雨すきて名残の露に刺ぞ鳴く
 漢に住まぬ野原の蟲も我からと長き夜すがら露に鳴也
 世出でし旅の衣や初雁のつばさに懸る峰の白雲
 秋の田の稲葉の露の玉ゆらも假寝さびしき山陰の庵
 山本のあけのそぼ舟ほのく、と漕出る沖は霧罩て鳥
 天つ風みがきてわたる久方の月の都に玉や散るらむ

鳥

我がかくて寝ぬ夜の果を詠む共誰かは知らむ有明の頃
 しかすがに馴こし人の袖のかの其かど計いつ残り劍
 稀にこし頃だにつらき松風を幾夜ともなき寢覺にぞ聞
 是は皆空しきとぞど計は契るにつけて思ひ知りなき
 いはざりき今こむ迄の空の雲月日隔て、物思へとは

露旅

昨日まで雲のあなたにみし山の岩根に今宵衣片敷く
 散り積る森の落葉を掻つめて木の下午ら煙立てつる
 雲は閨月は灯かくしても明かせばあくるさ夜の中山
 武藏野に結べる草の緑りとや一夜の枕露なれにけり
 うき枕風の寄邊も白波のうちぬる宵は夢をだに見す

山家

白雲の八重たつ山を深しとも覺えぬ迄に住馴にけり
 菜せで獨分けこし奥山に誰まつかせの庭に吹くらむ
 山深み岩しく袖に玉ちりて寢覺ならはす瀧の音かな
 雲かゝる山の梯踏分けて入りし路は若生ひにけり
 忘れじの人だにとはぬ山路哉櫻は雪に降り變れども

鳥

渡の原沖のこじまの松風に鶉の居る岩をあらふ白波
 遠方や岸の柳にある鶯のみのげなみよる川風ぞ吹く
 惜き哉人もてかけぬ敏鷹のと蹄る山に頭も經にけり
 夕まぐれ木高き森に住む鳩の獨り友よぶ聲ぞ悲しき
 筵田のいつぬき川のまき波に群居るたづの萬代の聲

祝

玉椿二度色は變るともはこやの山の御代はつきせじ
 曇なき雲居の末ぞ遙なる空行く月日はてを知らねば
 吳竹の園より移る春の宮兼ても千代の色は見えにき
 若葉さす玉のうつ木の枝毎に幾代の光磨きそふらむ
 敷島や大和島根も神代より君が爲とや固めおきけむ

院第三度百首

春

おしなべて今朝は霞の敷島や大和諸人春を知るらし

九落ちたきつ岩間打出づる泊瀬川初春風や氷とくらむ
 〇吉野山雪ちる里もしかすがに慎の葉白き春風ぞ吹く
 一時しもあれ春の七日の初子日若菜摘野に松をひく哉
 二鶯のはね白妙に降るゆきを打拂ふにも梅の香ぞする
 三妻戀る雉子なく野の下麻したに燃えても春を知る哉
 四野も山も同じ緑に染めてけり霞より降るこのめ春雨
 五わたの原雲にかりがね波に舟かすみてかへる春の曙
 六津の國の難波の春の朝ほらけ霞も波も果を知らばや
 七更科やをばすて山の薄霞かすめる月に秋ぞのこれる
 八山櫻いまか咲くらむ陽炎のもゆる春べに降れる白雪
 九誰を今日待つとはなく山陰や花の雪に立ぞ濡ぬる
 〇春風は花と松とに吹替て散るも散ぬも身にしますやは
 一葦鴨の下の氷はとけにしを上毛に花の雪ぞ降りし
 二櫻花うつろはむとや山の端の薄紅に今朝はかすめる
 三明果てば戀しかるべき名残哉花の影もる可惜夜の月
 四うち眺め春の三月の短夜を寝もせで獨あかす頃かな
 五初瀬山花に春風ふきはて雲なき峯にありあけの月
 六花散て木の本疎くなるまゝに遠ざかりゆく袖の移香
 七手に掬ぶ石井の水の飽でのみ春に別る志賀の山越
 八三島江や茂り果ぬる蘆の根の一夜は春を隔て來に鳧
 九鶯のひざりかへれるおく山に心あるべきおそ櫻かな
 〇有明のつれなく見えし月は出ぬ山郭公待つ夜乍らに
 一須磨の浦の浪に折はへ降るに沙垂衣いかにほさまし
 二時しもあれ花ちる里の軒の雨に己が皁月の鳥の一聲
 三飛ぶごりの飛鳥の里の郭公昔の聲になほや鳴くらむ
 四鶯の雲のかけはしほごやなき夏の夜渡る山の端の月
 五真葛原玉まく敷やまさるらむ葉におく露に螢飛ぶ也
 六水鏡江の菱の浮葉にかくろへて蛙鳴くなり夕立の空
 七塵をこそ据えじとせしか獨ぬる我常夏は露も拂はず
 八山ひめの瀧の白糸くりためて織るてふ布は夏衣かも

九松風のはらふ汀のはちす葉に清き玉るなつの夕暮
 〇蜩の鳴く音に風を吹きそへて夕日涼しき岡のべの松
 一萩原や聲もほに出ぬさを鹿の深く夏野に戦ぐなる哉
 二織女の天の川原に戀せじと秋を迎ふる御禊すらしも
 三秋
 四深草の露のよすがを契にて里をばかれず秋は來に鳧
 五大方の夕はさぞと思へども我がために吹く萩の上風
 六白露も色そめあへぬ龍田山まだ青葉にて秋風ぞ吹く
 七旅びとの入野の尾花手枕に結びかはせる女郎花かな
 八さを鹿の鳴初しより宮城野の萩の下露置ぬ日ぞなき
 九葦草葉にあらぬ我が袖の露を尋ねていかで鳴くらむ
 〇常世にていつれの秋か月は見し都忘れぬ初雁のこゑ
 一物思へどする業ならし木間より落たる月に棹鹿の聲
 二古郷はわれまつ風をあるじにて月に宿かる更科の山
 三秋なればとて社濡す袖の上を物や思ふと月は訪ひ鳧
 四蟲の音はならの落葉に埋もれて霧の籠に急雨ぞふる
 五かち人の道をぞおもふ山科の木幡のみねの秋の夕霧
 六千度打つ砧の音を數へてもよを長月の程ぞ知らる
 七裾野ゆく衣に摺れる月草の移り易くも過ぐる秋かな
 八秋風にはし鷹ならす片岡の柴の下草いろづきにけり
 九秋は猶葛の裏風恨みてとほす枯れにし人ぞ戀しき
 〇露の袖霜のさなぎまきのふ方こそなけれ淺茅生の宿
 一寝がてに庵もる田子の假枕よはに奥手の露ぞ隨なき
 二苔の上は風吹きしく唐錦たまくをしき森の蔭かな
 三答ふべき萩の葉風も霜枯れて誰にとほまじ秋の別路
 四冬
 五風の音も早晩寒き楨の戸に今朝より馴る埋火の本
 六篠原や忍びに秋の置きし露凍りなはてそ忘れ形見に
 七夕暮の一むら雲の山廻りしぐればつれば軒ばもる月
 八霜埋む刈田の木葉踏みしだき群居る雁も秋を戀らし
 九難波瀧ひかりを月の満つ潮に葦べの千鳥浦傳ふなり

〇霜の上にて己が翅をかたしきて友なき鶯のさ夜深き聲
 一網代もる宇治の里人如何計いだよ波に月を見る覺
 二朝日さす氷のうへのうす煙まだ晴れやらぬ淀の川岸
 三御室山峯の檜原のつれなきを軒端にかへる松の下折
 四山里はいくへか雪の積るらむ軒端にかへる松の下折
 五嵐吹く空に亂る雪の夜に氷をむす夢はむすばす
 六鶯の海や釣するあまの衣手に雪の花ちる志賀の山風
 七雲はる雪のひかりや白妙の衣はすてふ天のかぐ山
 八袖くたす丹生の川波あど絶えぬ汀のこほり峯の白雪
 九月よめば早くも年の行く水に數かきとむる柵ぞなき
 〇祝
 一ぬれてはす玉串のはの露霜に天照る光幾世へぬらむ
 二君が代に法の流をせきとめて昔の波や立ち返らむ
 三久かたの空の隈もなき世かなみつ座のすまむ限は
 四ある塵の山を幾重に重ねてもげに我國は動なき世を
 五人の世を何定めなく思けむ君が千年のありける物を
 〇戀
 一知せばや戀を駿河の田子の浦恨に浪の立ぬ日はなし
 二うち忍びいはせの山も谷隠れ水の心をくむ人ぞなき
 三我戀はまだ知る人も白すげのまの萩原露もらす哉
 四荒磯の波寄せかくる岩根松云ねどねには願ぬべし
 五よそながらかけてぞ思ふ玉かづら葛城山の峯の白雲
 六下萌の名にやは立てむ難波なる蘆火焚屋に煙る煙を
 七木隠れの身は空蟬の唐衣ころもへにけり忍びく
 八行き通ふ夢の中にも紛るやと打ちぬる程の心休めよ
 九繰返し頼めても猶あふ事の片糸をやは玉の緒にせむ
 〇暮しつる日はすがの根の菅枕交しても猶盡ぬよは哉
 一身にそへし其俣も消えなむ夢なりけりと忘る計に
 二廻り合む限はいつぞ知らね共月な隔てそよその浮雲
 三我涙もどめて袖に宿れ月さりとて人の影は見えぬぞ
 四我とこそ眺め馴にし山の端にそれと形見の有明の月

七歎かすよ今はた同じ名取川せいの埋木朽果てぬとも
 〇雑
 一昔人の世にふる道を哀なる思ひいるも思入れぬも
 二かり人も哀知れかし嶺の鹿野への雉子のおのが聲々
 三船の内波の下にぞ老にける煙のまわさも暇な世や
 四岩がねの凝敷く嶺を踏鳴し蒼なる男のいかや苦しき
 五春の田に心を作る民もがなおり立てのみ世をそ厭はむ
 六我心その色としは染めぬも花や紅葉を眺め來に鳧
 七月日のみ爲す事無て明暮ば悔しかるべき身の行方哉
 八押返し物を思ふは苦しきに知す顔にて世をや過まし
 九浮沈み來む世は借もいかにぞ心に問て答へ兼ぬる
 〇君に斯逢ぬる身社嬉しけれ名やは朽せむ世々の末迄
 〇春
 一今朝よりは都の空もかすみぬと櫻に告げよ春の初風
 二古の子日の御幸跡しあればふりぬる松や君を待らむ
 三冬枯の梢にのこる去年の雪こそしの花の初なりけり
 四霞よりつみかねたる梅が枝の臘月夜に誰誘ふらむ
 五葛城や高間の山の雲間より空にぞ霞むうぐひすの聲
 六明石瀉かすみて歸る雁がねも鳥隠れ行く春の明ぼの
 七梓弓おしてはるさめ小山田に苗代水も今やひくらむ
 八いつまでか雲を雲とも詠めけむ霞響く三吉野の山
 九風ふけば己が雲よりおのが雪を散して見する山櫻哉
 〇夏
 一花の色は彌生の空に移ろひて月ぞつれなき有明の山
 二昨日まで霞みしものを津の國の難波あたりの夏の曙
 三里人の卯花かこふ山かげに月とゆきとの昔をぞこふ
 四郭公なく夜はいはす鳴かぬ夜も詠めぞ明す軒の立花
 五五月山雨にあめそふ夕風に雲よりしたを過ぐる白雲
 六長閑に袖のあやめを片敷きて枕も夢も結ぶともなし
 七鶯飼舟下す戸無瀬の水馴棹さしも程なく明るよは哉

秋 尋ねきてこゝには夏も嵐山木隠れてこそ秋は有けれ
 秋 郭公なくねも稀なる儘にや、影すし山の端の月
 秋 床夏の花も玉るる夕暮を知らずや鹿の秋を待つらむ
 秋 秋を秋と思ひ入りても詠めつる雲の旗手の夕暮の空
 秋 朝なく野へのしのやに一夜ねて袂ならはす萩の下露
 秋 白露の頼めか置きし人はこで霧の真垣に松蟲のこゑ
 秋 誰が秋の寢覺さほむ分かず其唯我爲のさそ鹿のこゑ
 秋 露の上に雁の涙も置きてみむ暫しな吹きそ萩の上風
 秋 雲は皆拂ひはてたる秋風を松に残して月を見るかな
 秋 狹筵に獨寢待のよはの月しきのふべき秋の空かは
 秋 月のこる古郷人のあさぢふに忘れず秋の衣うつなり
 秋 見渡せば松に紅葉をこきまて山こそ秋の錦也けれ
 秋 草も木もおのが色々改めて霜になりゆく長月のすゑ

秋風にあへず散りにし檜柴の空しき枝に時雨ふる也
 秋風吹く梢に波のおとほして松の下水うすこほりせり
 水上や絶えぬこほる岩間より清たき川に残る白波
 月ぞすむ誰かは爰に紀の國や吹上の千鳥獨なくなり
 まきの戸を朝げの袖に風さえて初雪おつる嶺の白雲
 朝妻やをちの外山に出る日の水をみかく志賀の唐崎
 山人のたきすすみたる椎柴の跡さへしめる雪の夕暮
 吳竹の葉末にすがる白雪も夜頭へぬれば氷ぞなる
 吉野山花より雪に詠めきて雪より花も近づきにけり
 我國は天照神の末なれば日の本としも云にぞ有ける
 昔より三國つたはる法の水流れてすめる四の海かな
 民もみな君に心をつくば山しげき惠の雨うるふ世に
 此頃は關の戸さす成果て道ある世にぞ立返るべき

初春待花
 山路尋花
 山花未遍
 朝見花
 遠村花
 故郷花
 田家花
 古寺花
 花似雪
 河邊花
 深山花
 深山出で花の鏡なる月は木間わくるや曇るなる覽

初春待花
 山路尋花
 山花未遍
 朝見花
 遠村花
 故郷花
 田家花
 古寺花
 花似雪
 河邊花
 深山花
 深山出で花の鏡なる月は木間わくるや曇るなる覽

古溪花
 關路花
 縣中花
 湖上花
 橋下花
 花下送日
 庭前落花
 暮春惜花
 初秋月
 月前草花
 雨後月
 松間月
 山家月
 月前竹風
 野徑月
 澤邊月

月影の忘れずやどる忘れみづ野澤に誰か秋を契りし
 月前開雁
 浦邊月
 月照瀧水
 杜間月
 月前秋風
 江上月
 月前蟲
 月前開鹿
 旅泊月
 月前草露
 菊籬月
 暮秋曉月
 寄風戀
 寄雨戀
 寄風戀
 寄雨戀

寄草戀
 一休らひに頼めて出でし跡しあれば猶待物を庭の蓬生
 寄木戀
 誰秋の心木葉に枯に劍待とし聞かば世々もへぬべし
 寄鳥戀
 深き江に思ふ心はみがくれて通ふばかりの鴉の下落
 寄風戀
 秋はて、深山烈く吹く嵐あらじ今はのなげの言の葉
 寄舟戀
 波高き蟲明の瀬戸に行く船のよるべ知せよ沖の潮風
 寄琴戀
 戀侘びてなくねも通ふ琴の音に凍れる水の下結つゝ
 寄衣戀
 我戀は大和にはあらぬ唐藍の八しほの衣深く染てき

秋篠月清集三

春部

春立つ日雪の降りければ
 吉野山なほしら雪のふる里は去年とやいはむ春の曙
 春のはじめに
 牽くれし雲居の雪げ晴初めて絶えく青き東雲の空
 動きなき山の岩根は答へねど春をぞ告ぐる雪の下水
 此頃は谷の杉むら雪きえて霞も知らぬ春のやまかせ
 千里までけしきにくむる霞にも獨春なきこしの白山
 鶯
 雪はのこり花も匂はぬ山里にひどり春なる鶯のこゑ
 残雪
 逢坂の杉の木蔭に宿かりて關路にとまる去年の白雪
 春の歌よみける中に

春やこき軒ばの梅に雪さえて今日迄花の枝に残れる
 院の十首の歌合、若草
 春風の吹にし日よりみ吉野の雪まの草ぞ色増り行く
 同し歌合に落花を
 可惜夜の詠めし花に風吹けば月を殘して晴る、白雲
 院の選歌合の十首の中、霞隔、遠樹
 詠めこし沖つ波まの濱楸ひさしく見せぬはる霞かな
 同し歌合に霧中花
 今日もまた櫻に宿をかり衣着つゝなれ行く春の山風
 同し御會に、松間鶯
 雪折の松を春風吹くからにまづ打ち解くる鶯のこゑ
 同し御會に、朝若菜
 一都人けふの爲にとしめし野に朝露拂ひ若菜をぞ摘む
 同し御會の三首、春風不分、處
 押なべて民の草葉も打靡き君が御代には春風ぞ吹く
 梅花薰、晚袖
 折袖の露の詔言に影見れば有明の月も梅の香ぞする
 晚霞隔、春山
 重ぬべき霞の袖もたゞ一重いかにやざらむ山の夕陰
 建仁三年春 上皇大内の花御覽じけるに散りた
 る花を御手箱の蓋に入れて給ける 御製
 今日だにも庭を盛さみつる花消すば有さも雪かとも見よ
 御返し
 誘はれぬ人の爲とや残りけむ明日より先の花の白雪
 大原に罷りて花見侍りけるに日の暮れにければ
 花にあかぬ名残を思ふ春の日の心も知らぬ鐘の音哉
 家の歌合に曉霞
 岩戸あけし神代も今の心地して仄に霞む天のかぐ山
 池岸梅花
 春の池の汀の梅の咲きしより紅くゝるさゝ波ぞ立つ
 朝花

朝嵐に峯立つ雲の晴れぬれば花をぞ花と三吉野の山
 山花
 七都には霞のよそにながむらむ今日見る峯の花の白雪
 春の歌よみける中に
 七程もなく枯野の原を焼しより春の若草萌え變るなり
 七霧おつる臘月夜に窓をあけて衣手さむき春風ぞ吹く
 七霜きえて打出づる波やこたふらむ霞める山の曉の鐘
 七寝ぬる夜の程なき夢と知られぬる春の櫻に殘る灯火
 歸雁
 眺むれば霞める空の浮雲と一つになりぬ歸る雁がね
 春の歌よみける中に
 七紫の庭も長閑にかすむ日の光ともなふうぐすの聲
 七里わがす眺めし秋の月よりも深山の花のしをる聲
 七あしの屋のなだの鹽燈暇あれや磯山櫻かざす海士人
 七ふるきあどぞ霞みはてぬる高圓の尾上の宮の春の曙
 初瀬山春
 一はつせ山花に浮世や殘るらむ庵哀なる春の木のもと
 内裏の直廬に侍りける頭大乗院座主無動寺より
 申しおくれりける
 二都には彌生のそらの花盛しるや深山はまだ雪のちる
 返し
 三知らざりつ今日九重の花を見て猶白雪の深き山とは
 同し頃又山より
 四見せばやな志賀の唐崎麓なる長柄の山の春の景色を
 返し
 五我思ふ心や行て霞むらむ志賀のあたりの春の景色は
 花盛に大内におはしましける頃公衛卿の許より
 女房の中へ
 六風の音は長閑けれ共日敷へて花や雲居の雪とふる覽
 返し女房に代りて
 七此春は君を待ける花なれば散で日敷をふると知すや

同じ頃南殿の花を折りて人の許へ遣しける
 八宮びどのかざす雲居の櫻花この一枝は君がためとて
 前齋院大炊御門におはしましける頃女房の中よ
 り八重櫻につけて
 九古郷の春を忘れぬ八重櫻これや見し世に變らざる覽
 返し
 一〇八重櫻折知る人の微せば見し世の春に争であはまし
 宇治平等院にて一切經の會の後朝の會に
 一法の水八十字治川に堰止めて花の友にや春を待けむ
 同し日當座の會に依り花留客といふ心を
 一春ごとの花の契に馴々て風よりかれむ頃をしぞ思ふ
 またの日中宮の女房ども船に乗りて公卿殿上人
 など物の音ならして遊びけるにはてつかたに入
 々、舟中見り花といふことを詠みけるに
 一詠籠ゆく舟路は花になりはて、波に波をふやま嵐の風
 當世の女房の歌よみどもに百首の歌よませて披
 講せしついでに五首の歌詠みける中に春の心を
 一あたら夜の霞み行きへ惜しき哉花と月との明方の山
 花の歌よみける中に
 一櫻さく比良の山風ふく儘に花になりゆく志賀の浦波
 一はれくもり峯定まらぬ白雲は風に天ぎる櫻なりけり
 一深山路や散敷く花をふまじとて松の下ゆく谷の岩橋
 一散り紛ふ櫻を風の吹きよせて深き浪たつ勝間田の池
 一喚子鳥を舍利講の次でに
 一時しもあれ我答へよと呼子鳥傾ぶく月の西の雲居に
 春の暮に
 一山里の人もこすゑに春くれて淺芽が末に花は移りぬ
 一古巢うづむ雲の主となりぬらむ馴れし都を出づる鶯
 三月盡
 一驚かす入相の鐘に眺むれば今日まで霞む小泊瀬の山
 夏部

更衣
 〇佐保姫に馴し衣を脱ぎかへて戀しかるべき春の袖哉
 〇花の袖かへまく惜しき今日なれや山郭公聲は遅きに
 夏之歌よみける中に
 〇片岡のはなも残らぬ梢より緑かさなる松のしたしば
 卯花
 〇自から心に秋もありぬべし卯の花月夜うち眺めつゝ
 薄暮卯花
 〇眺めつる月よりつきは出でにけり卯花山の夕暮の空
 曉更廬橋
 〇たち花の匂にさそふいにしへの面影になる有明の月
 廬橋を
 〇風薫る軒の立花年ふりてしのぶの露を袖にかけつる
 院の選歌合の十首の中、雨後郭公
 〇五月雨を厭ふとなしに郭公人に待たれて月を待ける
 松下晚涼
 一蟬の羽に置く夕露の木がくれて秋を宿せる庭の松風
 院にて人丸の影供ありしに、海邊夏月
 〇夏の夜を明石のせとの浪の上に月吹き返す磯の松風
 同じ御會の次での當座の御會に、竹風夜宿
 〇吳竹の起臥し風にそなれきて夜なく秋と驚かす也
 山家五月雨
 〇軒近きまきの梢に居る雲の重なるまゝに五月雨の空
 院の十首の歌合に、菅蒲を
 〇今日といへば袖も枕も萬蒲草かけてぞ結ぶ長き契を
 郭公
 〇をちかへり軒端にきなけ郭公はな橋に雨そゝぐなり
 院の城南寺の御會に、雨中郭公
 〇早苗とる鳥羽田の面に雨をえて折はへ來鳴く郭公哉
 野亭水涼
 〇野中なる松の木蔭に堰入れてぬるき清水の庭に涼き

家の歌合に、暮郭公
 〇郭公月ごともや出でぬらむ外山の峯の夕暮のこゑ
 郭公
 〇忍びねぞ色はありける郭公卯花やまの露にしをれて
 〇足引の山はとゞきす來鳴く也待ちつる宿の夕暮の空
 〇聞く人の袖に譲りて郭公なく音に落つる涙やはある
 〇分きて鳴け物思ふ宿の郭公ねに類ふべき心ある身ぞ
 海上郭公
 〇尋ねべき方こそなけれ郭公行方も知らぬ波に鳴く也
 〇五首の題の中に、夏の心を
 〇打ちしめり萬蒲ぞかをる郭公鳴くや早月の雨の夕暮
 早苗
 〇梅雨に取らぬ早苗の流るゝをせく社頼て植る也けれ
 古池萬蒲
 〇浮草は野邊も一つの縁にてあやめぞ池の匂なりける
 萬蒲を
 〇隠れぬに今日引残す萬蒲草いつかぞ知で朽や果なむ
 〇五月五口中宮大夫の許よりあやめの長根を贈れ
 りける返事に
 〇君を思ふ心の底の深さにや斯る萬蒲の根を宿しけむ
 返し
 〇思ふらむ心の底は君よりも深き萬蒲に引き増りけり
 五月雨の歌とて
 〇空は雲庭は波こそ五月雨に詠めも絶えぬ人も通はず
 鳥羽殿にて五首の歌講せられける中に城外納涼
 〇山城の鳥羽田の早苗取も敢ず末こそ風に秋ぞ仄めく
 池上見月
 〇池にすむ光を見よと思ひけり木の下くらき庭の月影
 家々納涼
 〇大方の夏なき年となりやせむ又此の里に清水せく也
 關路晚涼

〇暫しこそ小川の清水むすびつれ月も宿りの相坂の關
 夏之歌よみける中に
 〇龍田川岸の柳の下かげに夏なきなみを風のよすなり
 〇夏は猶くれもおそくや思ふらむ柚山月をおろす筏士
 雨後夏月
 〇夕立の風に別れて行く雲におくれて昇る山の端の月
 船中夏月
 〇夏の夜をやがて明石の楫枕波に傾ぶく月をしぞ思ふ
 夏月
 〇夏の夜は雲のいづくに宿る共わが面影に月は残さむ
 〇月影に涼み明せる夏の夜はたゞ一時の秋ぞありける
 蚊遣火
 〇すゝなる難波わたりの煙霞火焚屋に蚊火立つる頃
 〇風そよぐ梢の木蔭の夕涼み涼しくもゆる盤なりけり
 〇戀ひわたる宵の盤もかけ消えぬ軒ばに白き月の初に
 〇音に立て、告ぬ計ぞ盤こそ秋は近しと色にみせけれ
 盤火秋近
 〇ゆく盤兼て雲路や思ふらむ雁鳴きぬべき風の景色に
 院にて影供に、草野秋近
 〇宮城野の露をよすがに立つ鹿は己鳴かや花を待らむ
 水路夏月
 〇高瀬舟棹も取敢ず明くる夜にさきだつ月の跡の白波
 雨後聞蟬
 〇村雨の跡こそ見えぬ山の蟬なげども未だ紅葉せぬ頃
 〇影供の次でに、夏月を當座
 〇大空は霞も霧もたなびかて木蔭ばかりに曇る月かな
 〇此頃は富士の白雪消えそめて獨や月の峯にすむらむ
 秋部
 立秋
 〇下草に露置きそへて秋の來るけしきの森に蛸ぞ鳴く

〇くる方は西と聞け共今日の日の出るより社秋は立けれ
 水邊立秋
 〇松蔭や夏なき年の清水にもげに秋風は今日を立ける
 秋の始に
 〇淺茅原秋風立ちぬ是ぞこの眺めなれにし小野の古郷
 〇己れのみ岩に砕くる波の音に我もありとや磯の松風
 〇露の下に道あり連や秋はこし葎の庭に月のみぞすむ
 〇色變る露のみ袖に散りやせむ峯の秋風木の葉青くて
 〇梢ふく風の響きに秋はあれどまだ色わかぬ嶺の椎柴
 院の選歌合の十首の内山家秋月を
 〇時しもあれ古郷人は音もせて深山の月に秋風ぞ吹く
 湖上晚霧
 〇志賀の浦の漣白む霧の内にはのゝ出づる沖の友舟
 院の八月十五夜の選歌合に十首の歌に月多秋友
 〇月ならで誰かは知む君が代に秋の今宵の幾廻りとも
 月前松風
 〇秋の夜の光も聲も一つにて月のかつらに松風ぞ吹く
 月下擗衣
 〇里は荒て月やあらぬと恨みても誰淺茅生に衣打らむ
 海邊秋月
 〇立返り煙な立てそ須磨の蟹の潮くむ袖に月を宿れる
 湖上月明
 〇逢坂の山越えはて、眺むれば鴉てる月は千里也けり
 古寺殘月
 〇鐘の音に初瀬の檜原尋來て分くる木の間に有明の月
 深山曉月
 〇深からぬ外山の庵の寢覺だに嘸な樹間の月は寂しき
 野月露涼
 〇秋の野の篠に露置すゝの庵はするに月も濡るゝ顔なる
 田家見月
 〇秋の雲しくとは見れど稻籬伏見の里は月のみぞすむ

河月似水
 一是もまた神代は知らず龍田川月の水に水くゝるなり
 同一夜の當座の御會に、月前雁
 雁がねも雲の衣を厭ひけり己が羽風にすめる夜の月
 院の十首の歌合に、浦月
 二月かげや波をむすばぬうす氷敷津の浦によする舟人
 山嵐
 三打しぐれ四方の木葉は色づきて深山の嵐秋を吹く也
 院にて和歌所始之後初度之影供歌合に初秋曉露
 秋の來て幾日もあらぬ萩原や曉つゆの袖に馴れぬる
 關路秋風
 大人すまぬ不破の關屋の板廂あれにし後したゞ秋の風
 開旅月鹿
 故郷 鹿
 院の影供の歌合に、江月開雁
 七高圓の尾上の宮の秋はきを誰きて見よと松蟲のこゑ
 院の影供の歌合に、江月開雁
 七夜を重ね玉えにおるゝ雁の聲葦間の月に立空やなき
 夜風似雨
 〇宮城野の木とした風のほらふ夜は音も幸も村雨の空
 同日夜の當座の御會に、山家擗衣
 八古郷を夢にだに見む山賤の夜はのさ衣打も寝なゝむ
 同行返り月と松とに吹く風はれての雲に露ぞこぼるゝ
 水路秋月
 九久方の天の川より歸るらしくだうき木を透る月影
 關路曉霧
 〇忘るなよ霧の迷に一やねて關こぎ出づる須磨の友舟
 院にて八月十五夜の當座御會に秋月の和歌五首
 〇嵐ふき村雲迷ふ夕より出でやらぬ月も見る心地する
 〇聞捨てぬる夜も一有なまし庭の松風月に吹ずば

のち見むと行末遠く契る哉今宵はふけぬ秋の夜の月
 〇露といへば必ず月ぞ宿りけるそれ故おかぬ雁の涙も
 〇昨日迄秋の半ばと待ちし夜は唯今宵ぞとすめる月哉
 〇八幡若宮の歌合院より侍けるに六首之内初秋風
 〇八幡山にしに嵐の秋吹けば川なみ白き淀のあけぼの
 野徑月
 一遠近の隈も知らぬ野べの月行きつくはてや峰の白雲
 故郷霧
 二大和にも敷島の宮しきしの昔をいど霧や隔てむ
 海邊雁
 三白雲に翅しをれし雁がねの下ある磯も波やひまなき
 宇治の御所にて院の御會に、山嵐
 〇末遠き朝日の山の嶺に生ふる松には風も常警也けり
 水月
 〇今宵しも八十字治川に澄む月を長柄の橋の上に見哉
 野路
 〇都より分ける人の袖みれば露深草の人ぞ知らるゝ
 〇八月十五夜の五首五辻殿の初度の御會に松間月
 〇今よりは爰に千年を松蔭にすまむ月とは知や知すや
 野邊月
 〇この里は北野の原の近ければ隈なき月の頼もしき哉
 田家月
 〇寝がてに幾夜を積てみたや守苦も願はの月に臥す覺
 羈旅月
 〇都には月の雲居にながむらむ千里の山の岩のかけ道
 名所月
 〇今宵ならで外に見し夜は開なれや今社月はすまの浦波
 〇八月十五夜瓶月、同じ當座の會に
 〇行秋も今や半ばに過ぎぬらむ月にねぬ夜の鐘の一聲
 家の選歌合に、山月
 〇足引の山の高嶺は久かたの月の都のふもどなりけり

野風
 〇袖の露斯れとてやは古し野にすゝの篠屋を拂ふ秋風
 秋の夕暮に
 〇何故と思ひもわかぬ快かなむなしき空の秋の夕ぐれ
 〇秋の色を心にそめて後ぞ思ふ露も時雨も人の爲どは
 〇秋といへば夕暮毎の詠めゆる其の故もなき物思かな
 〇袖の上は唯此頃露おきて世をば恨みず秋ぞ悲しき
 〇見もしらぬ昔の人の心まで嵐にこもる夕ぐれのもの
 古郷秋
 一來ぬ人をうらむる宿の夕暮に思ひすつれど萩の上風
 一秋風に萩のはすさむ夕まぐれ誰か住捨てし宿の籬ぞ
 一出ていにし人は歸らで葛の葉の風に恨むる古郷の秋
 一眺めわび誰いでにけむ古郷の秋を殘せる萩のうは風
 一露の袖霜の狭筵いかならむ淺茅かたく小野の古里
 秋の歌よみける中に
 一みよし野を秋の春にて眺むれば曙よりも夕暮のそら
 一春こそは明ばのごとに眺めしか又この頃の薄霧の空
 一露深しと計見つる淺茅原くるれば蟲の聲もみちぬる
 一庭深き籬の野への蟲の音を月と風との下に聞くかな
 一雨は程なく過ぎて日ぐらしの鳴く山陰に萩の下露
 〇草深き野へは一つに見しかども思ひわくべき花盛哉
 〇野中なる葦の九屋に誰住みて鶉の床の友となるらむ
 〇打靡く入江の尾花はの見えて夕波まがふまの浦風
 庭草露滋
 〇置く露を拂はで見れば淺茅原玉しく庭と成にける哉
 蟲聲非レ一
 〇様々の淺茅が原の蟲の音を哀一つに聞きぞなしつる
 田家秋
 〇風の音は蘆の丸屋に時雨來て非ぬ雲しく秋の小山田
 〇見る夢は深山嵐に絶果てゝ月は軒端の嶺にかゝりぬ
 風破二曉夢

〇古郷の庭の小萩の花盛鹿なけとてや野邊になりにし
 女郎花
 〇嵐ふけば玉ちる野邊に折れふして枕露けき女郎花哉
 鹿
 〇秋の風尾上の松に言とへば人はこたへすさを鹿の聲
 〇武藏野のしのゝ薄寒き夜に妻も籠らぬを鹿鳴く也
 初雁
 〇秋も來ぬ風も涼しく成ぬとや寒き越路を出る雁がね
 〇初雁の涙おちそふ萩のうへに下露よりも色ぞ有ける
 水風
 〇清水せく松の下風吹き迷ひ波にぞ浮ぶ口ぐらしの聲
 〇うちなびく岩もる小菅玉ちりて嵐もおつる山川の水
 名所を四季よせて詠みける中に、宮城野秋
 〇宮城野の木の下露を片敷て袖に小萩の形見を見む
 須磨關月
 〇須磨の關ふけゆく波のうき枕伴ふ月ぞ浦づたひゆく
 月前草花
 〇晴るゝ夜におのが下露數見せて月にぞ宿る庭の萩原
 〇吳竹は窓うつ雨の聲ながら曇らぬ月のもり明すかな
 林中曉月
 〇諸共に嶺の木の間を分け行けば袖に溜らぬ有明の月
 連夜見月
 〇曇らばと頼む夢路も忘れて幾夜の窓に月を見る覺
 〇詠月五首、未レ出月
 〇やすらひに山越えやらぬ長月のつき待暮す袖の白露
 初昇月
 〇山陰の水に光もみちぬらむ峰をはなるゝ秋の夜の月
 〇停午月
 〇秋の夜もふけぬる程は残りけり暫し急くな月の行末

院の影供に、寒野冬月
 二行く年を飛火の野守出で、見よ今幾日迄冬の夜の月
 又影供に、山家朝雪
 二打拂ひ今朝だに人のとひこにし軒端の杉の雪の下折
 家の會に、野徑雪深
 二白雲も一つに互て武蔵野の雪より遠は山の端もなし
 千鳥聲遠
 二遠方の浦人今や寢覺してとわたる千鳥近く聞くらむ
 行路雪
 二玉鉾の道ゆく袖の白妙にそれとも見えす置ける朝霜
 遠山雪
 三行きて見ば今日も暮れなむ足引の山の端白き雪の曙
 行路朝雪
 二行人の跡にぞ雪は知られる月より後の山の端の月
 遠近千鳥
 二遠方や友よび捨て、立つ千鳥後る、聲ぞ空に残れる
 家の選歌合の十首の内、庭雪
 三ふる雪に籠かたしく奥竹の庭のふしどは下凍りつゝ、
 家の歌合に、寒樹交松
 三しぐれこし色や縁に返るらむ木葉晴れのく松の嵐に
 池水半氷
 三池水をいかに風の吹分けて凍れる程の凍らざるらむ
 山家夜霜
 三草結ぶよはの戸さしの枯しより内も願はに置ける霜哉
 關路雪朝
 三鈴鹿山せきの戸あくる東雲になほ道たゆる峯の白雪
 水鳥知主
 三鴉鳥の波に任する浮巢だに馴れぬ汀にわきてよる覽
 旅泊千鳥
 三已だに問ひこなむさよ千鳥須磨の浮寝に物や思ふと
 霧中曉嵐

風吹く露のかども敷そひては山の裾に宿りわびぬる
 湖上冬月
 二志賀の浦の汀ばかりは氷にて鴉てる月をよする白波
 爐邊懷舊
 二下にのみ忍ぶ昔のかひなきや掻き顧さぬ夜はの埋火
 寄歳暮戀
 三忘れずば逢ふ夜を待たむ涙川流るゝ年の末を敷へて
 家の會に河水を
 三かつこほる浪や嵐に碎くらむ清瀬川のあかつきの聲
 吉野山寒月
 二一年を詠めはてつる吉野山むなしき枝に月ぞ残れる
 伏見里雪
 三里わかぬ雪のうちにも菅原や伏見の暮は猶ぞ寂しき
 雪の朝座主のもとへ遣しける
 切雪の跡惜からぬ迄なりにけり君待つ宿の庭を詠めて
 返し
 三我宿は人を分てぞ跡を惜むしづしも雪を厭けるにぞ
 雪の朝三位入道の許へ遣しける
 三分來べき人なき宿の庭の雪にわれ跡つけて君を訪哉
 三君が住む松の扉の雪の朝猶降りゆかむ末をこそ思へ
 返し
 三君がとふ跡つけそむる初雪を積む覺末も頼まるゝ哉
 三ふりはて、雪消えぬ共君が代を松の扉は猶尋ねみよ
 田家時雨
 三をしねつむ山田の庵は秋過て袖を時雨にはさぬ頃哉
 山家冬月
 三山嵐の氣色ばかりや冬ならむ都なりせば秋の夜の月
 十月ばかりに宇治にて
 三秋の色は今に残らぬ梢より山風おつる宇治の川なみ
 三草枕まだ音づれのなきまゝに浪におどろく古郷の夢
 三霜さゆる杉の板間のめも合す誰まつ袖に月凍るらむ

三笠山昔の月を思ひ出で、ふりさけ見れば嶺の白雪
 雪中遠望
 三雪白き四方の山邊を今朝みれば春の三吉野秋の更科
 雪ふりけるに定家朝臣が許へ遣しける
 三難面くば君もや訪と思つる今朝の雪にも遂にまけぬる
 返し
 三我宿の庭の跡にも難面くてとはむ心の深さをぞ知る
 山里にて雪の朝に詠める
 三都にはしぐれし程とおもふよりまづ此の里は雪の曙
 冬の歌よみける中に
 三重ねても人まつ庭の氣色かな雪に宿れる冬の夜の月
 三下折の竹の響きに散る雪を拂ふとすれど袖ぞ寒けき
 三寂しさはいつもながめの物なれど雲間の嶺の雪の曙
 三行く年の流るゝ影は早けれど折しも聞くか谷川の水
 歳暮雪
 三世の中は春の隣になりぬれど垣根のはかも同じ白雪
 三雪つもる木末に雲は隔つれど花に近づく三吉野の山
 歳暮
 三明けぬより春の霞も立やせむ今宵はさすな白川の關
 家の選歌合に、冬述懐
 三世に住めば早くも年の暮るゝ哉心の水はかつ凍れ共
 院於春日御社、歌合三首の内、落葉を
 三鹿のたつ森の木蔭の唐錦ふきしく風は神のまにゝ
 北野の宮の歌合、時雨
 三村雲に後れ先だつ夜はの月知らず時雨の幾廻りども

三笠山昔の月を思ひ出で、ふりさけ見れば嶺の白雪
 雪中遠望
 三雪白き四方の山邊を今朝みれば春の三吉野秋の更科
 雪ふりけるに定家朝臣が許へ遣しける
 三難面くば君もや訪と思つる今朝の雪にも遂にまけぬる
 返し
 三我宿の庭の跡にも難面くてとはむ心の深さをぞ知る
 山里にて雪の朝に詠める
 三都にはしぐれし程とおもふよりまづ此の里は雪の曙
 冬の歌よみける中に
 三重ねても人まつ庭の氣色かな雪に宿れる冬の夜の月
 三下折の竹の響きに散る雪を拂ふとすれど袖ぞ寒けき
 三寂しさはいつもながめの物なれど雲間の嶺の雪の曙
 三行く年の流るゝ影は早けれど折しも聞くか谷川の水
 歳暮雪
 三世の中は春の隣になりぬれど垣根のはかも同じ白雪
 三雪つもる木末に雲は隔つれど花に近づく三吉野の山
 歳暮
 三明けぬより春の霞も立やせむ今宵はさすな白川の關
 家の選歌合に、冬述懐
 三世に住めば早くも年の暮るゝ哉心の水はかつ凍れ共
 院於春日御社、歌合三首の内、落葉を
 三鹿のたつ森の木蔭の唐錦ふきしく風は神のまにゝ
 北野の宮の歌合、時雨
 三村雲に後れ先だつ夜はの月知らず時雨の幾廻りども

秋篠月清集四

祝部 女御入内の月次の御屏風の歌

第一帖 小朝拜列立所

立初むる雲居の春は諸人の袖を連ぬる庭に見えけり

野邊の小松原に子日する所

春日野の小松に雪を引添へてかつく千世の花咲に見

山野に霞立ちわたりたる所、住吉の松もあり

詠めやる遠里をのは灰かにて霞にのこる松の風かな

第二帖 花竹の間に鶯ある所、人の家もあり

春の日の長閑にかすむ梢よりうちとけそむる鶯の聲

春日祭社頭儀

幾春の今日のまつりを三笠山みねの朝日の末も遙に

人の家并に野邊に梅の花さきたる所

梅の花匂ふ野べにて今日くれぬ宿の梢を誰尋ぬらむ

第三帖 深邊春駒

霜枯れし原の、澤のあき緑駒も心ははるにそめけり

山野并に人家、櫻花盛に又咲きたる所、霞もあり

おしなべて雲に際なき花盛いづくも同じ三吉野の山

人の家の庭に藤盛に花咲きたる所、山に木もあり

萬代の春知りそむる藤の花宿は雲居にみする也けり

第四帖 人の家に更衣したる所、卯の花垣もあり

今日よりは千代は重ねむ始とてまづ一重なる夏衣哉

賀茂社祭神儀式奏つけたる人の参詣したる所

今日みれば賀茂の御誕に葵草人の髪にも懸てける哉

早苗植るたる所

早苗さる田子の心は知らね共戦さし秋の風ぞ待る、

第五帖 雲間郭公鳴き渡る所、人の家あり

思ひ知れ有明がたの郭公さこそは誰もあかぬ名残は

秋霧の晴行く儘に色みえて風も木葉をそむる也けり

海邊に霧たちたる所

六のくくと明石の浦を見渡せば霧の絶間に沖つ白波

第十帖 海邊に千鳥ある所、海士人の鹽屋有り

友千鳥沖の小島にうつるなり岸の松風夜寒なるらし

網代に人集りたる所、落葉あり

紅葉ばを都の人の心迄日をへてよする瀬々の網代木

第六帖 菅浦かりたる所、人の家に葺きたる所もあり

風吹けばよほの枕にかはすなり軒の菅浦の同じ匂を

人の家の庭に碧麥咲きたる所

ませの内に君が種まく常夏の花の盛を見るぞ嬉しき

第七帖 山井の邊に人々納涼したる所、泉あり

山かげや出る清水のさゝ波に秋をよすなる櫓の下風

野邊の杜の間に夏草茂る所

涼みにと分け入る道は夏深し裾野につやく杜の下草

河邊に六月祓したる所

夏の日を兼て御禊にする哉あすこそ秋の初と思に

第七帖 山野并に人の家秋風吹きたる所、萩あり

夕されば野山の景色いかならむ秋風立ちぬ庭の萩原

野の花さかりに咲きて人々集りたる所また搦り

取る所もあり

秋の野の千草の色を我宿に心よりこそ移し初めつれ

山野并林間鹿有所

春日山松の嵐に聲そへて鹿も千年のあきとつぐなり

第八帖 人家池邊人々翫月所

一雲はるゝみ空や池に映るらむ水底よりも月は出けり

相坂の關に駒迎に行きむかふ所、清水あり

一東よりけふ相坂の關越えて都に出づるもち月のこま

田の中に人の家ある所

山田もる下賤が處に音づれて稻葉にやざる秋の夕風

第九帖 山の中に菊さかりに開きたる邊に仙人有る所

君が代に匂ふ山路の白菊は幾度露のぬれてはすらむ

山野并に人の家に紅葉盛りにしたる所、人々こ

れを翫ぶ

霞 春霞しのに衣を織りはへて幾日はすらむ天のかぐ山

若草 三吉野は草のはつかに淺緑高嶺の深雪今朝や消らむ

花 老らくの今日こむ道は残さなむ散かひ曇る花の白雪

夏帖 郭公 騎しをる人や頼めし郭公三輪の檜原に來つゝ鳴く也

五月雨 五月雨を山田に引注繩の打はへて朽ちやしぬらむ梅雨の頃

納涼 紀の國や吹上の濱による浪の寄邊涼しき磯枕かな

秋帖 秋野

ささを鹿の入野の秋の下露に誰つま籠めて草結ぶらむ

月 此頃は秋つしま人ときを得て君が光の月を見るかな

紅葉 山越ゆる雁の翅に霜おきて四方の梢は色づきにけり

冬帖 千鳥 濱千鳥跡ふみつけよいもが紐ゆふは河原の忘形見に

水 初瀬女の白木綿花はおちもこそ氷にせける山川の水

雪 光をふ雲居の月をみかさ山千代の始は今年のみかは

中宮の初度の御會に、月契秋久

萬代の月をば秋の光にて絶えぬ契はくもにぞ見る
庭梅久芳
我袖に軒端の梅の香をこめよ花は幾代も春ぞ匂はむ
渡新所之後初度之會に、松延、齡友
千代までと契る心や通ふらむ松に答ふる風の音づれ
大臣の後の初度の會に、松不、改、色
春くれば今一しほの緑こそ變らぬ松の變るなりけれ
春日山を祝によせて詠みける
曇なき千代の光は春日山松より出づる朝日なりけり
祝の歌とて詠みける
其も猶千代の限の有ければ松だに知らぬ君が御代哉
霜や度置けど變らぬ松も猶君が御代に生ひ替るべき
深山より松の葉分けて出る月千代に變らぬ光也けり
千代やちよ年波こゆる末の松朽ち變る共君は常磐に
自ら治まれる世や聞ゆらむはかなくすさむ山人の歌
神風や御裳濯川の流こそ月日と共にくすむべかりけれ
院於鳥羽殿初度の御會に、池上松風
傳へこし深き流の池水になほ千代までと松風ぞ吹く
院の選歌合に、寄、神祇、祝
君が代のしるしとこれを宮川の岸の杉村色も變らず
院の十番の歌合、神祇
神風や御裳濯川にちぎりおきし流の末ぞ北の藤なみ
同じ庭の松
庭の石も岩と成べき君が代に生添ふ松の種ぞ籠れる
院の影供に、松邊千鳥
高砂の松を友とし鳴く千鳥君が八千代の聲や添らむ
家の歌合に、春祝
春日山都の南しかを思ふ北の藤なみはるに逢へとは
院の御會に、初春祝
春と云へば八重たつ霞重ねても幾萬代を空にこむ覽
和歌所おかれて初度の御會に、松月夜深

松風に今日より秋を契り置て月に住べき和歌の浦人
城南寺にて祈、雨御會に、社頭祝
民の戸も神の恵にうるふらし都の南みやあせしより
京極殿の初度の御會に、松有、春色
押なべて木芽も春の淺緑松にぞ千代の色は見えける
戀部
高陽院の初度の御會に戀の歌よみけるに
氷ある志賀の浦吹く春風の打解けてだに人を戀ばや
白雲のた靡く空に吹く風の思ひたえなむ果を悲しき
君が邊り分てと思時しもあれそこはかさなき夕暮の空
契、春、秋、戀
秋は惜し契は待たるごとかくに心にかゝる暮の空哉
北野の宮の歌合に、久戀
石上ふるの神杉ふりぬれど色には出でず露も時雨も
構、他人、戀
知れても厭れぬべき身ならずばなをさへ人に包むべしやは
嵐前戀、人
獨ぬるよはの衣を吹き返してても嵐は見せぬ夢かな
聞、虫、聲、増、戀
獨寐の枕に蟲は宿りけりおのが聲より露をおかせて
晝は夜よるは晝なる思かな涙にくらし床に起きゐて
月前戀
君に我疎くなりし其の日より袖に親しき月の影哉
舟裏戀
浮舟の便も知らぬ波路にも見し第のたゝぬ日ぞなき
戀、耻、傍、輩、一
とふ人は忍ぶ中とや思ふらむ答へ兼たる袖の氣色を
三島江戀
高瀬舟はのみしま江に漕返り葦間の道の猶や障らむ
後朝戀

曉の霧の迷に立ち別れ消えぬる身とも知せてしがな
五首の歌被、講し中に戀を
吹く風も物や思ふと問ひがほに打眺むれば松の一聲
戀の歌よみける中に
凄まじく床も枕もなりはて、幾夜有明の月を宿しつ
物思ふたゞ獨寐の狭筵にあたりの塵よ幾夜つもりぬ
おもひねの夢に慰むほごばかり枕の露のよはの村消
よせ返る荒磯浪のしき波に間なく時なくぬる、袖哉
涙せく袖に思やあまるらむ眺むる空も色かはるまで
夕暮の雲の旗手の空にのみ浮きて物思ふ果を知らばや
とめこかし君松風のかひなくば物思ふ宿の花の折々
落たぎつ川瀬の波の岩越て堰取ぬ袖の果を知らばや
忍ぶと思はざる覽難波女のすくも焚火も下ぞ焦る、
それなほ夢の名残もながめけり雨の夕も雪の朝も
山の井にむすびもはてぬ契哉あかぬ雪にかつ消る泡
水無瀬殿にて九月十三夜戀の十五首の歌合に、春戀
霧のこほれる涙解けぬれど猶わが袖の結ばれつ、
夏戀
草深き夏野分行きを鹿の音を社たてね露ぞこぼる、
秋戀
せく袖に涙の色やあまるらむ詠むる儘の萩の上の露
冬戀
葦鳴の拂ふ翹におく霜の消え返りても幾夜へぬらむ
曉戀
もり明す水の白玉岩こえてたゆむも知らぬ袖の上哉
夕
何故と思も入らぬ夕だに待ち出でし物を山の端の月
霧中戀
うつの山うつ、悲しき道たえて夢に都の人は忘れず
山家戀
山がつの麻のさ衣襟を荒みあはで月日や杉ふける庵

故郷戀
すままでと契りてとはぬ故郷に昔語の松かせぞ吹く
旅泊
待てとしも頼めぬ磯の假枕蟲明の波の寝ぬ夜問ぬる
關路戀
我戀や此よを關と鈴鹿山すゝろに袖のかくは萎れし
海邊戀
打忘れ葉に棲蟲はよそにして須磨の餘りに恨發つる
河邊戀
泊瀬川井手こす波の岩の上に己れ碎けて人ぞ戀しき
寄、雨、戀
この人を待夜乍らの軒の雨に月をよそにて侘つ、や寝む
寄、風、戀
萩原やよそに聞來し秋の風物思ふ暮は我が身一つに
院の選歌合に、遇、不、會、戀
暫し社この夜許多と數へても猶山の端の月を待しか
院の影供の歌合に忍戀を
泊瀬川なびく玉藻の下亂れ苦しや心みがくれてのみ
同じ影供の當座に、月前戀
わくらばに待ちつる宵も更に見さや契し山の端の月
同じ影供に、依、忍、増、戀
せきかへす袖の下水したにのみ咽ぶ思の遣方をなき
同じ影供、旅、曉、戀
わくらばの風のつてにも知せばや思をすまの曉の夢
和歌所の初度の影供に、初戀
須磨の海士の蕩沙の煙忽にむせぶ思をどふ人のなき
久戀
難波人いかなる江にか朽果む逢事波に身を盡しつ、
家の選歌合に、夏戀
空蟬の鳴音やよそに森の露はし敢ぬ袖を人のとふ迄
家の會に、變、契、絶、戀
一引かへてあだし心の末の松待夜の果は波ぞ越しぬる

宇治にて院の御會の五首の中、夜戀
一待ちわびぬ今宵もさてや山階の木幡の峯の遠の白雲
二北野の宮の歌合、忍戀
三もしわび氷り纏へる谷川の没人なしに行惱みつゝ
釋旅部

旅の歌よみける中に

一復泥むせいの岩間の波の音に幾夜馴たる浮寝なる覽
二隔て行く都の山の白雲を幾重にならざる誰に問はまし
三草結ぶ野原の露の深き誰があかしけるよはの枕ぞ
四綱手引く竹の下みち霧こめて舟路にまよふ淀の川岸
五水あをき麓の入江霧はれて山路秋なる雲のかけはし
六茂りあふ鳥も楓も跡ぞなきうつの山邊は道細くして
七明方になるや白露敷そひぬかりの庵の葦のすだれに
八友なくて草葉に宿る秋の野に螢ばかりやよはの燈火
九有明のつきせざりける詠かないく浦傳ひ心すましつ
一〇隔てゆく雲と波とを幾重とも知らぬ泊りの夢の通路
一一あふ人もなき夢路より言づけて現悲しきうつの山越
一二馴にけり一夜宿かす里の螢の今朝の別も袖萎れつゝ
一三昨日けふ野にも山にも結びおく草の枕やつゆの古郷
一四國かはる界幾度越えすぎても多くの民に而馴れぬらむ
一五浪枕一夜ばかりに馴れそめて別もやらぬ須磨の浦人
物へまかりけるに天の川原といふ所を過ぎ侍る
とて

昔きく天の河原に尋ねきて跡なき水を詠むばかりぞ
公卿勅使に伊勢へくだりける道にて

相坂の山越えはて、眺むれば霞につよく志賀の浦波
遙なる三上の嶽をめぐりかけて幾瀬渡りぬやすの川浪
海路眺望

忘るなよ今はの月をかたみにて浪に別る、沖の遠舟
海路秋

行く舟の跡の白波さえ盡きてうす霧のこる須磨の曙

青
九波あらふ岩根の苔の色までも松の木蔭を寫す也けり

黄
〇秋の日の光の前に咲く菊の枯野の色にまがひぬる哉

赤
一赤ねさす峯の入口の影そへて千入そめたる岩躰躰哉

白
二霜うつむ賀茂の川原に鳴く千鳥氷に宿る月や寒けき

黒
三雲ふかき深山のさとの夕間に時もとむる鴉鳴くなり

曉
四横雲の消えにし空におもふかな悟はれにし月の光を

夕開
五入相の鐘の音こそ類ふなれ是とて法の聲ならぬかは

夜尋
六ふけぬれば露と共によ宿らまし岩屋の洞の苔の筵に

曉
七惜しきかな入方近き曉のまだ闇深き此の世と思へば

山家の心を

八獨さは深山の春に暮せとや今日まで人のとほぬ櫻を
九山かげや軒端の苔の下朽ちてかはらの上に松ぞ傾く
〇山里に枯れにし草は春の夢一夜に秋の風をおごろく
一六月見ばといひしばかりの人はこそ蓬が上に露滋き庭
二世のうさのねをや絶えなむ山川の嬉しく水の誘ふ萍
三葉せで入りにし山のかひぞなき絶えず都に通ふ心は
四かりそめの浮世出でたる草の庵に残る心は古郷の夢
五三吉野も春の人めは枯なく花なき谷の奥を尋ねむ
六麓までおなじ篠原あともなし深山のいはの露の下道
七いか計り夢の世あだに思らむ深山の庵のよはの嵐に
八待つ人のなきに懸れる我が身哉物思ふ秋の入相の空
九瀧の音松の響きの寂しきにつれなくあかす岩枕かな

家の選歌合に、秋旅
一松島や秋風寒き磯寝かな海士の刈藻をひじき物にて
二院の宇治の御會の五首、秋旅

三橋姫の我をば待たぬさ筵によその旅寝の袖の秋かせ
四院より八幡若宮にて歌合有し六首の中霧中戀を

五古郷を命あらばと松浦湯かへる人をし夕なみのそら
六院の影供の次でに當座、月前旅を

七忘れじと契りて出でし面影は見ゆらむ物を古郷の月
八院にて當座に旅の心を

九都人そのことづてはとだえして雲ふみつたふ山の梯
雜部

五行を詠める、木
一五年へたる檜原の袖の久しきにたつきの音の仄なる哉

火
二思ふべし薪の上に燃ゆる火は世の理を明すなりけり

土
三押なべて天下なる物は皆土を本とて有りどこそ聞け

金
四こむ世まで永き寶となるものは佛と磨く金なりけり

水
五清くすむ水の心の空しきにさればと宿る月の影かな

東
六月も日もまづ出初むる方なれば朝夕人の打眺めつゝ

西
七秋風も入日の空もかねの音も哀は西に限るなりけり

南
八玉づさを待つらむ里の秋風に遙にむかふはつ雁の聲

北
九其方しも冬の景色の烈しとや閉たる戸をも叩く風哉

中
一昔より都しめたる此里はたゞ我が國のものなかも也けり

〇獨こそ思ひ入りにし奥山に鹿も鳴くなり峯の松かせ
一足引の山陰ならず夕まぐれ木葉色づく日ぐらしの聲
二をばり思ふ住ひ悲しき山陰に玉ゆらかる朝顔の露
三院より八幡若宮の歌合六首之内、山家松

四住みすて、人は跡なき岩の戸に今も松風庭拂ふなり
五院より春日の社にて歌合三首之内、松風

六露しぐれ袖にもらすな三笠山くも吹き拂へ嶺の松風
七夢中述懐

八轉寝のはかなき夢の中にだに千々の思の有ける物を
九賦にも世の理を知る人はともおろかに厭ふべきかは

述懐

一〇世のうきは人の心の憂きぞかし獨をすまむ都也ども
一一淵も瀬もひまなくかはる飛鳥川人の心の水や流るゝ
一二はらはでや軒ばの草に任せまし古きを忍ぶ心茂りて
一三葉置きし憂世の色を捨てやらで猶花思ふ三吉野の山
一四番むより散るべき色の物なれや嵐に花は宿る也けり
一五をりゝの心にそめて年も経ぬ秋毎の月春ごこの花
一六長き夜の更行く月を眺めても近づく闇を人ぞなき
一七照すらむ月日の光曇らずば空を頼みて世をや過まし
一八皇太后宮大夫入道が許へせうそこして侍りし返
一事にかくいひ遣したりける

返し
一九秋の時すて、し谷の埋木を嬉しくもとふ松の風かな

返し
二〇君をこふかひなき頃の松の風我しも花をよそに聞哉

前大僧正の許より
二一世中を思ひつらぬる枕には涙の玉のせくかたぞなき

二二徒に蓬が露と身をなして消えなむ後の名こそ惜けれ
返し

二〇世中に猶立廻る袖だにも思ひ入るれば露ぞこぼるゝ
二〇君もし蓬が露と身をなせば頓てや消えむ法の燈火
天王寺にて

一種しあれば佛の身共成ぬべし岩にも松は生ひける物を

岸に到る風の知べを思ふ哉苦しき海に舟よそひして

秋深く成果てにける深山哉花見し枝に木の葉色づく

報 過來ける世々にや罪を重ねむ報悲しき昨日今日哉

本末究竟等 露もとの雫を一つぞと思果てゝも袖は濡れけり

内秘菩薩行 獨のみ苦しき海を渡るぞや底を悟らぬ人は見らむ

舍利講を 願はくは心の月をあらはして鷺の御山の跡を照さむ

同じ講のはてに花を 草木まで心あるべし法には花たてまつる春の山風

喚子鳥 喚子鳥うき世の人をさそひ出でよ入於深山思惟佛道

立秋 西を思ふ心の最ぞ涼しきはそなたより吹く秋の初風

吹き返す衣のうらの秋風に今日しも玉をかくる白露

旅 手時七月十五日 旅の世に迷ふ諸人今宵こそ出でし都の月を見るらめ

川 爲人詠之 濁る江に法のながれの道を得て人をぞ渡す白川の里

池 遂に我が願ふすまかは極樂の八功德池の蓮なりけり

舍利講の次でに蓮を 此の世より蓮の糸に結ばれ西に心のひく我が身故

拾玉集

拾玉集卷第一

百首和歌

花十首

山高み嶺の櫻の散るときは鏡のささに雪ぞふりける

押なべて風の咎にも云なきし心に花の散にも有る覽

山櫻咲きなむのちは春霞梢をよきてへだてましかば

盛なる花を二たび見つる哉散りしく庭さちらぬ梢と

山櫻みるにつけてぞ惜るゝ花なき里にいざ住ひせむ

一人毎にとひて聞かばや櫻花散るを惜まぬ心ありやと

花故に故郷人に逢見てはまた來む春を契りけるかな

春くれば櫻狩すどあぐれてはたがふ花を今は恨みむ

春風を厭ふ心をひきかへてはたがふ花を今は恨みむ

咲き散す散につけても苦しきは花社御代の例也けれ

郭公十首 來鳴くやと卯花垣はしたれどもまだ音もせず山郭公

郭公初音を聞くや山賤のあやしき身にもどり所なる

時鳥まだ里なれぬ忍び音を聞くらむ人の心いかにぞ

なかくに何か語らふ時鳥もの忘れたき夜はの一聲

郭公一聲にこそ尋ねつれ名残なしとて何かうらみむ

ふり積る雪と見まし卯花を山郭公來鳴かざりせば

山里に家居しすれば郭公待つも待ぬも同じ音ぞ聞く

郭公はな橋になく聲は思ひなしにやなつかしきかな

五月雨の隙しなれば郭公笠どり山をさして鳴く也

諸共に語らひおきて郭公死出の山路の知べにもせむ

月十首 大井川すむ月影のいるを見て小倉山とや云初めけむ

中々の池に映れる月の光あはれは薫の下葉の露も隠れず

山のはを何か厭はむ清見瀉浪間に月は入りける物を

何となく物ぞ悲しき詠むればあな味氣なの月の光や

山里に我は年頃住みぬればさし入る月の主がほなる

中々にもりくる月の爽けきは暗き木蔭にはゆる也見

秋の月牙行くよはの哀れさを何に喩へて人に語らむ

宿もあれ主もなけれど月のみぞ澄も變らぬ廣澤の池

津の國の蘆のしのやに泊る夜は難波のとも哀なる哉

露しげき秋の野原を朝立てば思はぬ袖の萩が花すり

さらぬだに草の枕は露けきに涙すゝむる蟲の聲も

眺むればそこも見えず春霞都の方は立ちな隔てそ

波のよる磯の苦やに旅寐してき非ぬ袖を濡しつる哉

儂も都の方ぞ戀ひらるゝ我を思出る人はあらじな

我のみぞ何思ふらむ草の庵月も宿をばかりける物を

祝十首

述懐十首

花十首

百首和歌

拾玉集

拾玉集卷第一

花十首

山川にかき流しつるうたかたを傳きとの例とは見よ
三人知れぬ歌の本に積りぬる此言の葉を散さずもがな
身の上と思ふしつゝ誰も皆哀なるべき筆すさみかな
千日の山ごもりのころおもふことはたゞ諸佛の本
懐なれば心もすみておぼえしことを書きつけしか
ば百首になりけりそのかみのことにて無下に左
道之

百首和歌 堀川院題
春二十首

立春
春たつといふばかりにも霞むなり吉野の山の曙の空
春日
春來ては子日の松に類ひつゝ憂身も人に引れましかば
霞
春霞印の杉をこめつればそこも見えず三輪の山本
鶯
千年ふる千年の松の枝にゐて百色となく百千鳥かな
若菜
改まる春にしなければ人毎に年も若菜も摘にぞ有ける
残雪
越路にはいつも消せぬ雪なれば冬の形見と見人も有じ
梅
飽なく手折る袂の移香や散行く梅の形見なるべき
柳
春雨に降りかゝれども縁なる柳の眉は亂れざりけり
早蕨
武藏野の草葉にまじる早蕨をげに紫の塵かぞを見る
櫻
花に飽て遂に此世を背きなば吉野の山を栖にはせむ
春雨

まさは姫は睦月にくだる雨にてや春の色をば染始む覽
春駒
望月のみまきにある、春駒は秋の半や人にひかれむ
歸屬
時しもあれ歸屬る也こし方に花に優れる花や咲らむ
呼子鳥
呼子鳥霞の關に聲すなり過ぎ行く人を立ち止れどや
苗代
苗代の種まく賤はかねてより秋の盛や先づ覺ゆらむ
菫菜
數ならであれ行く宿に獨りて心すみれの花を見る哉
杜若
おしなべて澤邊に茂る杜若何を隔つる名には立らむ
藤
松は岸庭は水かど見ゆるかな藤なみかゝる宿の砌は
款冬
花毎に散る習ひこそ悲しけれ又山吹も惜むかひなし
暮春
諸人の惜むに止る今日ならば春にてのや年の暮まし
夏十五首
更衣
櫻色のひとへを尙も懐かしみ夏の衣にやがてする哉
卯花
卯花の波か雪かとおぼへ見えしとは櫻のみかは
葵
我宿のこす糸をはやす葵こそ賀茂の社の恵なりけれ
郭公
郭公計り待つかひ有て郭公里なれぬ間の知べにもせよ
菖蒲
あやめ草ふくべき隙も見えぬ哉葱茂れる宿の軒端は
早苗

早苗とる安のわたりの片嵐去年の刈田は寂しかり見
照射
さを鹿の聲立て鳴秋ならばいかに照射の哀ならまし
五月雨
梅雨の日をふる儘に水馴川水馴し瀬々も面變りつゝ
蘆橋
我宿に花橋を植え置かむなからむ跡の忘れがたみに
蚊遣火
蚊夕されや立出て涼むかひぞなき蚊遣火燦る賤が垣ねは
螢
夏ふかみ螢とびかふ背の間は秋の哀になる心ちして
水室
すべらぎの長閑き御代の微とて夏も水の消せざる覽
泉
眞清水の岩間を瀾る音聞けば柳ばぬ先に涼しかり鳥
蓬
我願ふ蓬の上にある見ればあだなる露も美まれけり
荒和祇
昔より命のぶてふ例とてなごしの祇せぬひとぞなき
秋二十首
立秋
ごごごとはに秋の心になれる身は風の音にも驚かぬ哉
七夕
ひこ星の妻迎舟けふこそは天の川風こぎ出でぬらむ
萩
住吉の遠里をのきて見れば眞萩が枝に花咲にけり
女郎花
世を捨つる我墨染の袖ふれてをるも優しき女郎花哉
萩
侘人の宿には萩をうゑおかし風吹く度に哀そひけり
薄
を薄に吹く秋風は行く人を招きとめよと思しもせじ

刈萱
刈萱になに亂るらむ刈萱のわきても風の吹かぬ物故
關
年をへて秋の野毎に匂へども着る人もなきふち袴哉
雁
あし方を思ひ列ぬる時しもあれ折知顔に雁の鳴らむ
鹿
鹿の音を心にしめて聞く人や秋の哀を殊にしるらむ
露
草木まで秋の哀を忍べばや野にも山にも露こぼる覽
霧
霧隠れ裾野の鹿の鳴くなべに外面の萩も音計りして
駒迎
東路や秋の半にひく駒はみな望月の影にや有らむ
月
隈もなく牙行く月を見る程や身の浮雲の晴増らむ
權
一儻さを思はむ宿の垣ねにはたゞ權を植うべかりけり
摺衣
秋の夜を寢覺て聞けば菅原や伏見の里に衣うつなり
蟲
蓬生に蟲うちわぶる曉は我が夜床まで露けかりけり
菊
いとせめて移ふ色の惜しき哉菊より後の花し無れば
紅葉
紅葉する秋しもなれば音に聞青葉の山も名のみ也鳥
暮秋
幾秋もわかれぬ年はなき物を習はず顔に何惜むらむ
冬十五首
初冬
散り残る秋の紅葉をけふは又我物顔に冬の見ららむ

時雨
 一山里の庭の木葉にふる時雨散ぬる色を尙や染むらむ
 霜
 二霜冴て衣手寒し尾上にはうつ人もなき鐘やなるらむ
 霰
 三しなが鳥猪名の笹原分行けば拂ひもあへず降る霰哉
 雪
 四庭の雪に我跡附て出でつるを訪はれに鬼と人や見覺
 千鳥
 五さよの浦千鳥しばなく夕さればをり哀なる松の風哉
 寒蘆
 六津の國の難波わたりを來て見れば茂し蘆も霜枯に鬼
 水
 七廣澤の池に氷はみちにけり何にかやざる冬の夜の月
 水鳥
 八水鳥のすだく音こそ聞ゆなれ浮寝の床や氷らざる覺
 網代
 九年をへて瀬々の網代に寄るひなを哀と見見る宇治の橋姫
 神樂
 一〇曉の星のほごにや古へのあまの岩戸をあけ初めけむ
 鷹狩
 一一狩衣朝たつ野べにいか計りうら悲しくも雉子鳴らむ
 炭竈
 一二冬くればやく炭がまの煙故よそにもしるし大原の里
 爐火
 一三終夜わが枕なる埋火のしたに燻るをよそにやは見る
 歳暮
 一四春秋に別しよりも行年の身に止るこそ悲しかりけれ
 戀十首
 一五君に今日知せ初めつる微にややがて涙の色に出らむ
 初戀

忍戀
 一嬉しさにあらぬ物ゆゑ忍ぶごとて涙を袖に包みつる哉
 初逢戀
 二隙もなく落つる涙の積りては逢そめ川と成にける哉
 不逢戀
 三身に換て思是とは知らる共借戀しさはかひや無らむ
 片戀
 四強ちに厭ふをしひて戀る哉片思とは是にや有るらむ
 後朝戀
 五従ふと見えつる今朝の面影を暮待つ程の慰めにせむ
 遇不逢戀
 六馴て後變る氣色に戀死なば逢に替つる名をや留めむ
 旅戀
 七草枕まごろむ夢に君を見て寢馴ぬとこそ思ひける哉
 思
 八汲てしる人や無らむわたつ海の千尋の底の深き思を
 恨
 九漢鹽やく磯への蟹に非ねども恨みて年の積りぬる哉
 雜二十首
 一〇すむ月の山のは近くなるまゝに物哀れなる有明の空
 松
 一一宮のして年を津守の浦なれば神さびにけり住吉の松
 竹
 一二唐人の共に頼みし吳竹を我もまがきに添へて見る哉
 鶴
 一三薑たづは晴たる空に遊べども千年の雪は消せざり鳥
 山
 一四憂身迄樂しかるべき萬世と呼ばふ三笠の山の峽かは
 河
 一五葵草飯にさせる其日こそ賀茂の川原は優しかりけれ

野
 一露結ぶ淺茅が原に風過ぎて哀はかなき野への暮かな
 關
 二東路を遙に來つるかひありて都の人にあふ坂のせき
 橋
 三世を渡る橋をもちか造べき心工もなき身と思へば
 海路
 四漕出で果なき海を見渡せば先だつ舟の雲に消ぬる
 旅
 五都をも遠かりぬと思ふより最ぞ山路を苦しかりける
 別
 六旅衣つひにそぼちむ折々は別れし袖を思ひおこせよ
 山家
 七物毎にものゝ哀をすゝむるは片山里の住ひなりけり
 田家
 八なるこひく賤が門田の村雀哇傳ひして立ち騒ぐなり
 夢
 九長き夜の夢のうちにて見る夢は儚き中に儚かりけり
 懷舊
 一〇同じくば思出ある我身にて過にし方を忍ばましかば
 無常
 一一儚なしや今日も暮ぬと云々て夜はの煙と何か昇らむ
 釋教
 一二鷺の山五つの雲の晴れてこそ波間の月も顯れにけれ
 祝
 一三さしれ石に苔のむすまで座せど君をぞ祝ふ今も昔も
 述懐
 一四墨染の袖を絞る垂乳根のたらましかばと思續けて
 百首和歌
 一五さほ山に霞の衣懸てけり春のきぬとや人の見らむ
 春二十四首

山深み月日の数を數へずば春立今日を争でしらまし
 山深み都のかたは霞めども水もどけず鳥も來鳴かず
 朝霞我より先にたなびきて子日の松も見えぬ野べ哉
 谷深み岩木小芹摘みに出てそをだに春の微と思はむ
 今よりは宿のまがきに竹うゑて鳴く鶯の時さだめむ
 いつしか霞みけりにけりな鶯は谷の古巢を今や出らむ
 梅の花飽ぬ匂も惜しからず佛の爲にをるにしなれば
 野べ毎にもゆる厥の煙こそ四方の山への霞なるらめ
 兼てより見に物うき厥哉をられじとてや手を握る覺
 春毎に四方の山べに咲く花を宛ら宿に移してしがな
 皆人の吉野の山と急ぐかないづとも同じ櫻なれども
 浦ならぬ長柄の山の小波は散交ふ花のよそめ也けり
 吉野山尋入にし其かみは花見むとしも思はざりしを
 花の色に心を染めて常盤なる身の歎をば忘れぬる哉
 柴の戸に匂ふ櫻を見て先吉野の山の峰をしぞ思ふ
 何事も思ひ捨てたる山里に忘れよしなく匂ふ花かな
 咲ぬれば七日も待たで且ぞ散る哀あだなる花の上哉
 なべて吹く風の氣色も唯ならじ花の梢を渡る折には
 櫻花惜み乍も木の本にちりかもくると持つぞ割なき
 春深み吉野の里を來て見れば花の八重葎せぬ宿ぞなき
 浅ましや散行花を惜む間に橋も摘すあかもくまれず
 こし方を思ひつらぬる夕暮に山飛越えて歸る雁がね
 山田の苗代水をまかするやながき春日の賤が慰み
 夏十五首
 今日とて何かは替む常とはに只一重なる墨染の袖
 郭公さ夜ふけがたの一聲は夢に聞つる心ちこそすれ
 數ならぬ身の浮雲の類哉晴るゝ間もなき五月雨の空
 澤田川横のつき橋うきぬれば人も渡らず五月雨の比
 五月雨の日をふる儘に眞菰生る沼の岩垣隠れ行めり
 世を背く宿には暮かじ萬蒲草心のこまる妻となり鳥
 住侘ふる山里からす郭公おなじなくも哀そひけり

三法の道知へはすとも老の身の杖とならずば惜む也見
 三山深く入行く人の別をば嬉しと見るぞ惜むなりける
 三世を背く心の友となる身社我物からに嬉しかりけれ
 三尋入る誠の道を知らぬ間は雲の鶴にのる由もがな
 三雲雀あがる春の山田に拾ひおく罪の報を思ふ悲しき
 三悲しとよ心の闇にくらされて出でし都の月を詠めぬ
 三世々をへてもこの都を尋ぬとも三の界に迷ひぬる哉
 三いつか我苦しき海に沈行く人皆すくふ網をおろさむ
 三睡みて又驚くは夢路よりやがて夢ぢに傳ふなりけり
 三聞くとも驚く人もなき物を明暮鐘を何とうつらむ
 三蓬生にいつかおくれき露の身は今日の夕暮あすの曙
 三末の露本の雫をよそに見て浦傳する海士ぞはかなき
 三阿彌陀佛と十度唱へて睡まむ願て誠の夢もぞなる
 三出る息の入を待たぬは我なれや歸らぬ道に思ひ入ぬる
 三人さそふ峰の嵐の耳なれて驚かれぬは夢路なりけり
 三暗きより暗く成なば如何せむやよ待て暫し山端の月
 三開路には過る月日を徒に眺めし社もは悔しかるべき
 三夢の世は罪を罪とも知らね共報いひ折や思合せむ
 三世と共にあるか身もなき身にしあれば世を捨てん哉
 三納置千々の金も身にそひて黄なる肌ならけ社あらめ
 三位山さかゆく峰にのぼるとて誠の道をよそに見る哉
 三春の日の長き命と見し人も峰の櫻にたぐひぬるかな
 三紅葉ばの散るは理り色かへぬ松の下葉も浮世也けり
 三世を渡る心の蘆は難くとも隙行く駒の味氣な世や
 三渡川我れ沈むともいかにして人を助くる舟装ひせむ
 三鳥邊野に送りて歸る人も皆死出の山路のつひの友哉
 三山櫻我が手にたをる家苞も古里人ははかなくや見む
 三先ちて落つる涙やつひに行き空し野邊の道芝の露
 三とび鴉とくゞとやせむ兼てより我身の枝も怖しき哉
 三心有て折につけては世を厭ふ人だにもなき此世さぞみる
 三阿彌陀佛やあらまはしとは深江に其言の葉は沈ぬる哉

三津の國の蘆の八重葎もなく唱て過よ南無阿彌陀佛
 三思ひあへず心ぞ感ふ終になほ別の道の別れなれども
 三僧晴真擬草庵同行者也偷有思事先熱居大
 三原別所其刻諷吟百首之詠予不堪感情則時和
 三件詠耳

拾玉集卷第二

楚忽第一膽百首

讀及不知

立春
 三朝まだき春の霞は今日立ちぬ暮れにし年や岡の古里
 三子日
 三子日しにいさ諸人よ春日野へ待こし物を春のけふをば
 三霞
 三八重霞春をばよそに見すれ共哀を籠むる三吉野の山
 三鶯
 三鶯の出でぬる聲を聞き初めて舊巢にぞ見る春の面影
 三若菜
 三遺莫春の野ざはの若菜ゆゑ心を人につまれぬるかな
 三残雪
 三消え残る垣ねの雪の隙毎に春をしみする日影草かな
 三梅
 三咲きぬれば大宮人も打むれぬ梅こそ春の匂なりけれ
 三柳
 三霞しく春の川風うちはへてのどかになびく青柳の糸
 三早蕨
 三早蕨の折にしなければ賤の女が眷手にかくる野への夕暮
 三櫻

三散りまがふ花に心の結はれて思亂るゝ志賀の山こえ
 三春雨
 三春かさは雨うちそゞく山里に物思ふ人のあたる夕暮
 三春駒
 三水くもりに角ぐむ蘆をはむ駒の影道さまになれる此世か
 三歸雁
 三雁がねよ名残をいかで忍ばまし花無き山の別也せば
 三喚子鳥
 三眺めする心を知るか喚子鳥おのが栖の山はいづくぞ
 三苗代
 三哀なり山田のしづは苗代の水にのみこそ心ひくらめ
 三蕙菜
 三蕙だに匂はざりせば故郷の庭の淺茅の枯葉ばかりを
 三杜若
 三紫の色にぞにほふ杜若ゆかりの池もなつかしきかな
 三藤
 三紫の雲にぞまがふ藤の花つひの迎へを松にかゝりて
 三款冬
 三春深み井手の河風長閑にてちらでぞなびく山吹の花
 三三月盡
 三くれなるに霞の袖のなりてけり春の別の暮がたの空
 三夏
 三更衣
 三飽なくに春は過ぬる衣手に厭ひし風の立ぞわりなき
 三卯花
 三三輪の山身を卯花の垣占て世をすさみくる微もせず
 三葵
 三年を経て賀茂の御誕に葵草かけてぞ思ふ御代の契を
 三時鳥
 三郭公聞きつとや思ふ五月雨の雲の外なるよはの一聲
 三蕙蒲

三蕙蒲草軒の雫は隙なきをいかなる沼に根を残すらむ
 三早苗
 三堰も敢ず谷の小川も流めり山田の早苗探るに任せて
 三照射
 三照射する賤が行への哀さも思ひしちする五月間かな
 三五月雨
 三梅雨はいかにせよとて山里の軒ばそ雲の絶間也ける
 三廬橋
 三橘の花散る里のすまひかな我もさこそ昔語るよ
 三蚊遣火
 三涼しきか涼しからぬか蚊遣火の煙吹巻く野への夕風
 三螢
 三螢よそにかく見ても儂し夏蟲の思ひ計の身に餘るかは
 三氷室
 三皇の長閑き御代の氷室山あたりまでこそ涼しかりけれ
 三泉
 三吉野山もこの住ひも涼しきに重ねてぞせく山川の水
 三逆
 三池水にめでたく咲ける蓮かなことも愚に心かくらむ
 三荒和祇
 三みそぎする立田川原の河風にまだき秋立つ夕暮の空
 三秋
 三立秋
 三今日よりは如何はすき世中に秋の哀の無らましかば
 三七夕
 三織女の待ちこし程の哀をば今宵一夜に盡しはつらむ
 三萩
 三賤の男が麻の衣の花摺は萩のなをれの物にぞ有ける
 三女郎花
 三をみなへし花の匂に秋立ちて情おはかる野への夕暮
 三萩

思寝に結ぶ夢路の萩の音はさめても同じ哀なりけり
 薄 〇わきてしもなになびくらむ花薄風の哀は己のみかは
 〇主あれど野となりける籬哉尾花が下に鶉鳴くなり
 〇秋の野に誰が爲さてか染置きし主ほしげなる蘭かな
 〇雁 〇花をこそ振捨しかど雁がねの月をば愛づる心有けり
 〇鹿 〇鹿の音をおくる嵐にしぐれけり山の奥なる秋の哀は
 〇露 〇侘人の秋の夕の眺より野原の露をおくにぞ有りける
 〇霧 〇思へ唯とほつ霧の里の哀まで一つにこむる霧の夕を
 〇權 〇朝顔の口影待つ間のはかなさも浮世の花と同じ匂を
 〇駒迎 〇いかにして駒にちきりを結びけむ秋の半の望月の空
 〇月 〇秋の月過ぎ影をながめてぞ千鳥のえぞも哀知るらむ
 〇搦衣 〇これにしれ賤が衣の穂の音に秋の哀の籠るべしやは
 〇蟲 〇なれにしも劣らぬものを我が宿を逢が袖の蟲の主よ
 〇菊 〇浮世哉齡のべても何かせむ汲ますば汲ます菊の下水
 〇紅葉 〇柀原色づき初むる梢よりかねてぞ思ふ秋のなごりを
 〇九月盡 〇今宵唯露におくちね我袖よ時雨にとても乾べきかは

冬 初冬 〇寂しさよ秋は過ぎぬといひがほに皆山里は冬の夕暮
 〇時雨 〇眺れば袖こそかねて時雨めれ云計りなき空の氣色に
 〇霜 〇草枕むすぶ袂に霜さえて尾上のかねの音ぞ身にしむ
 〇散 〇秋風を人に知らせて萩の葉の枯れにし上に散ふる也
 〇雪 〇降閉ちて庭に跡絶えにけれ雪にぞ見ゆる人の情は
 〇寒蘆 〇心あてに眺め行くかな難波漏雪の花咲く蘆の枯葉を
 〇千鳥 〇なにはがた夕波千鳥心せよあはれは松の蔭に籠りぬ
 〇水 〇結びおく水も水も一つぞと思解けどもなほ憂身かな
 〇水鳥 〇寢覺する心の底のわりなきに答へても鳴く鶯の聲哉
 〇網代 〇網代もる賤の心もさえぬらむ宇治の川風波に宿りて
 〇神樂 〇神垣やして吹く風に誘はれて雲るになびく朝倉の聲
 〇鷹狩 〇思ひあへず袖にぬれぬる狩衣交野のみの、暮方の空
 〇炭竈 〇をの山も大はら山も炭がまの煙はおなじ哀なりけり
 〇爐火 〇人知るや夜はの埋火下燃て空しく暮る、年の行へを
 〇歳暮 〇諸人の身に止りぬる年月の別れぬさへぞ尙惜まる、

戀 初戀 〇茂合はむ筋をも知らず戀種の宿の籬に芽ぐみ初ぬる
 〇忍戀 〇我が戀は忍の岡に秋暮れて穂に出でやらぬ篠のを薄
 〇初逢戀 〇盡しこし心に兼て知られに逢見る迄の契ありとは
 〇不_レ會戀 〇筈木のよそにのみやはと思つゝ清き伏屋に身を任す覽
 〇後朝戀 〇歸るさをあらましとにせしよりも尙類なき横雲の空
 〇逢_{不_レ}遇戀 〇借もいかに逢見ぬ先を厭しはよそ耻しきかたは也見
 〇旅戀 〇一時しもあれすみだがはらの郭公昔の人の心知れどや
 〇思 〇我が思煙をみする世也せば虚しき空にみち社はせめ
 〇片思 〇是もこれ心づからに思ふかなおもはぬ人を思ふ思よ
 〇恨 〇夕まぐれ玉まく葛に風たちて恨みにかゝる露の命か
 〇雜 〇曉 〇寂しとよやこゑの鳥の聲さえて月も傾ぶく有明の空
 〇松 〇住吉の神さびわたる松風も聞く人からの哀なりけり
 〇竹 〇雪降らで冴たる夜はの風の音は籬の竹の物にぞ有ける
 〇鶉 〇蘆たづの沙ひに餘る諸聲に繋がれにける海士小舟哉
 〇苔

山 〇岩のさる昔の衣の寂しきも春の色をば忘れざりけり
 〇河 〇世の中を心高くもいとふかなふじの煙を身の思にて
 〇野 〇ながむれば廣き心も有りぬべしみもすそ川の春の曙
 〇野 〇深きかな玉ちる秋の暮よりも春の焼野の跡の哀れは
 〇關 〇旅寝する不破の關やの板廂雨する夜の哀知れどや
 〇橋 〇かつしかや昔のまゝのつき橋を忘れず渡る春霞かな
 〇海路 〇藻蘆草しきつの浦に船ごめて暫しよ聞かむ磯の松風
 〇旅 〇雲懸る都の空を眺めつゝ今日ぞ越えぬるさやの中山
 〇別 〇獨さへ涙すゝむるたよりかな別れしほどの袖の面影
 〇山家 〇岡のべの里のあるじを尋ねれば人は答へず山嵐の風
 〇田家 〇賤の男はなごや語ぬ小山田の庵もる夜はに止る哀を
 〇懷舊 〇世の中を今はの心つくからに過にし方ぞい_レ戀しき
 〇夢 〇思ひとけ夢のうちなる現こそ現の中の夢には有けれ
 〇無常 〇皆人の知り顔にして知らぬ哉必ず死ぬる別ありとも
 〇述懷 〇こはいかに返々もふしぎ也暫もふべき此世とやなる
 〇祝 〇君を祝ふ心の底を尋ねれば貧しき民をなづる也けり

都遠からぬ山寺に幼きちこありけり學問なごもし
つべしどておやの師につけたりけるなり俱舎など
もいさようよみけり晝つかた若き僧達聚りて遊び
けるに今の世の歌よみたちの百首どて観み合ひけ
るをこの外のどまうて聞きければ僧達歌よみ
てむやさいさむるを聞きて題書きたる物や侍るこ
いひけるけしきとさま購たく覺えて堀川院の百首
を取り出で取らせたりけるをどりて我がるたる
方にたて籠りにけり次の日もさしいでざりければ
いかにたて籠りける程に第三日午の時ばかり此の
百首を幼きやうなる手にて書きつけて堂の廣廂の
かたに要文うちふがしてたて籠りけり僧ども集り
てよみ罵りければ房主も聞きて皆なきにけりさて
しもあらじこれがやうに人々に詠ませて末の世の
物語にもせばや大人だにかやうの百首はいと有り
難きとなりなご云ひけるを聞きて詠まむなど申す
人々数多出で來にけりとなむ十二月十一日の申の
時ばかり十三日の午の時ばかりまでにそれもひき
ついで苦もなくひま／＼にぞ詠み果てたりける古
く人のよみたりけるかなぞ申し合ひければ住吉大
明神の憎まれかぶらむとぞ誓言立てける世の未な
れどかゝるともある物かな／＼さて此の百首の名
をば早卒露膽の百首と名づけてぞ披露し侍りける

詠百首和歌

元日立春
 兼侍三子日
 君がへむ千代の例と思ひより松は久しき子日也けり
 霞隔二行舟
 八重櫻神沖こく舟を隔て、や波路の宿の通慣るらむ

三咲きそめて松にかゝれる藤波は残多かる句なりけり
 惜春似友
 情ありて東の方へ別れにし人にたがはぬ春の暮かな
 夏
 貴賤更衣

八賤のをが麻の衣の袖までも夏來にけりと思ひ顔なる
 卯花繞の家
 卯花の垣ねをこめて咲ぬれば夏に入ぬる宿と社見れ
 水鶏何方
 さよふけて宿も定めす叩く也人には非じ水鶏鳴く也
 郭公數聲
 まみにかへて待ちける宿と知顔に聲も惜まぬ郭公かな
 沼邊風蒲
 年をへて引人絶す見ゆる哉ありすの沼に生る菖蒲は
 雨中早苗
 小山田に流るゝ水を堰止て今日の早苗は雨に任せむ
 藤橋遍砌
 軒近き花たちばなの夕風に萩吹く秋の暮はものはか
 久愛三鞠麥
 撫子のめがれぬ色におく露を朝な夕なに打拂ひつゝ
 螢火透し簾
 軒近くまがふ螢のすき影にげに玉垂のみ簾かけて是
 深更鷓鴣
 大井川更行く夜はの鷓鴣舟是も世渡る道にぞ有ける
 夜々照射
 夜を重ね絶せず見ゆる照射哉鹿すむ山の此面彼面に
 馬上聞蟬
 何ぞなく駒に任せて行道を事あり顔に蟬ぞ鳴くなる
 近見池蓮
 心すむ池のみぎはの蓮こそ濁にしまぬ色も見えけれ
 泉爲夏橋

雪中聞鶯

鶯の聲は隠れず梅が枝に天きる雪はなべてふれども
 獨摘二若菜
 若菜摘野澤に宿る影をのみまだ數ならぬ友と見る哉
 梅有二遅速
 梅の花越路の枝にちる雪は咲き遅れたる句なりけり
 門前垂柳
 我がを尋ても見よ春のくるしるしの杉は青柳の糸
 早蕨未二遍
 村むらにかゝる霞を煙にてどころ／＼にもゆる早蕨
 櫻花盛開
 芳野山峰の白雪深きかな花の盛りに成りぞしぬらむ
 遙見二春駒
 難波江の汀をあさる駒ながら蘆手にみなす蟹の釣舟
 曉天歸雁
 こしの山雪げの雲も晴れのきて縁を分くる雁の譜聲
 晚啼子鳥
 蛙鳴二苗代
 蛙鳴の苗代水をまかせればすだく蛙の聲を流るゝ
 故郷桃花
 故郷はかきねの桃の花のみや昔の春を忘れざるらむ
 杜若浮水
 杜若影も隠れず見ゆる哉水をばえこそ隔てざりけれ
 杜間葦菜
 なつかしく句ふ葦の色はえて薄みどりなる森の下草
 款冬傍岸
 來ても見よるでの河岸水たえて波に後れぬ山吹の花
 樵路脚躑
 山人の爪木に咲ける岩躑躅心ありてや手折ぐしつる
 藍花初綻

八山陰の岩井の水に宿しめて夏をよそにも過しつる哉
 家々夏被
 孰くにか荒ぶる神は宿るらむ今日被せぬ宿し無れば
 秋
 風音秋使
 萩の葉に告つる風は何なれや秋の袂に秋ぞ來にける
 庚申七夕
 今年社待えてかひも無るらめ今日は寝ぬ夜の星合の空
 萩散二澗渡
 野べうつす宿の籬に風吹けば下行く水に萩が花すり
 女郎花糺交二墟
 女郎花本は垣ねに隔つれど末は一つに尙なりにけり
 刈萱亂二籬
 刈萱かやの茂る籬に風過ぎて心みたるゝ秋の夕ぐれ
 蘭香薰二枕
 蘭草の枕に匂ふなり誰れぬきおけるありかななるらむ
 萩聲驚二眠
 夜もすがら物思ふ宿の獨ねに夢だに見せぬ萩の音哉
 薄妨二往友
 花薄招けば野べに留ること人さへ風に靡くなりけれ
 寢覺聞二鹿
 山里の哀いかにと人とはゞ寢覺の鹿の聲をかたらむ
 雲間初雁
 つれてこし友はいくらぞ初雁の雲間を分る聲聞ゆ也
 淺茅露重
 白露の宿となりぬる淺茅生も人の住かの行へ也けり
 霧中間二鶉
 一夕霧のへだてぬ宿の垣ねだに鶉の聲は寂しきものを
 隣家植花
 隣家を今日までよそに聞きつるや宿より外の植の花
 夜半駒迎

三ひく駒の影こそ見えぬあふ坂の中空にすむ月の光に
 湖上瓶月
 志賀の浦や浮寝の床に夢さめて長柄の山に月傾きぬ
 掃衣聲幽
 一槌の音を誘ふ風だにある物をいかなる里に衣掃らむ
 蟲聲非一
 一色ノに身にしむ野邊の蟲の音は千種の花に譬ふ也見
 菊花色々
 一秋深み移ろひ果てぬ白菊に心の色を添へて見るかな
 雨後紅葉
 一紅葉には時雨過ぬる濡色に染てけりとは見ゆる也見
 毎人惜秋
 一皆人の袖に露こそかゝりぬれさこそは秋の暮方の空
 冬

閑居初冬

一蔭と見し籬の草も冬がれて物の哀ぞ身にはそひける
 庭草帯霜
 一故郷の庭の淺茅に霜おりて眺じとても寂しからずや
 草庵聞寂
 二目もあはぬ草の庭にいとゞしく散ふる也小野の山里
 雪朝眺望
 一詠めやる心にあとはつきにけりあしやの里の雪の曙
 寒蘆滿江
 一難波江の水の面なるやへ葎は蘆の枯葉の積る也けり
 古渡千鳥
 一昔思ふ淀のわたりの友千鳥通ひなれたる聲聞ゆなり
 水閉瀧水
 一冴る夜の深き水に閉られて音羽の瀧も名のみ也けり
 水鳥駭復
 一後おろす清瀧川のをし鴨は心ならずや床をたつらむ
 嗣代群遊

一さ夜更て嗣代になる、諸人も心すめとや宇治の川風
 禁中神樂
 一雲のうへのをみの衣に霜さえて星歌ふなり明方の空
 鷹狩踏路
 一御狩野よ朝たつ音は急がれてかへき物うき夕暮の空
 遠近炭竈
 一炭竈のあたりの空を眺むれば外の煙も匂ひ來にけり
 爐火忘冬
 一埋火のあたりをぬるみ思寝に夢に見えぬる花櫻かな
 五節舞姫
 一少女子が姿もよそになりけり豊明に影さぬ身は
 除夜佛名
 一靜にぞ三世の佛の御名を聞く今夜限りの今年なれ共
 戀

老後初戀

一敏鷹の戀てふとをよそに見し老の波こそ立歸りけれ
 忍尋縁戀
 一人知れず尋てぞ行く妹せ川戀渡るべき橋は有りやと
 馴不逢戀
 一鴛鳥の逢瀬もしらぬ河に來て人め計はみなる哉
 俄初逢戀
 一思ひきや心も空になる神の俄に人にあひ初めむとは
 歸無書戀
 一歸るさに又立歸る玉章の君に初めて書き絶えにけり
 絶互悔戀
 一諸共に大かた通ふ心かな絶えしつらさも悔ゆる情も
 城外間戀
 一故郷に片しく我も露けきを今宵孰處の旅寝なるらむ
 等思兩人
 一こゝへの妹と心ぞ隙もなき夜枯る今宵身には夜枯て
 尋常片思

三ごころはに心かよはぬ濱に來て鮑の貝を拾ふ悲しさ
 人傳恨戀
 一恨むとは風の傳にぞ知れぬる葛の葉茂き野への夕暮
 雜
 一曉見漁舟
 一島かけて沖のつり舟かすむなり明石のうらの春の曙
 淵底古松
 一谷深みいくら千年の残るらむ松の木立の神さびに見
 窓前栽竹
 一七千代ふべき宿の籬に植つれば竹もや君を友と見らむ
 苦爲石衣
 一山川のながれ久しき谷かげに昔の衣をきぬ岩ぞなき
 仙洞鶴多
 一をのゝえの朽し砌や是ならむ群居る鶴の主あけになる
 遊山催興
 一吉野山花や紅葉の折々はならずかひある岩の蔭かな
 白鷺立汀
 一凄き哉賀茂の川原の河風に身毛亂れて驚たてるめり
 野亭聞鐘
 一庵さす野邊吹く風に村消えて尾上の鐘の聲ぞ物うき
 夜過關路
 一足柄の關をよるさへ越ゆる哉空行く月に駒を任せて
 行客休橋
 一橋の上にあぐる人も止りけり元より休む友に引れて
 海路日暮
 一湊川今日の泊りをめにかけて夕日にいそぐ沖の友舟
 關中風吟
 一さらぬだに都戀しき旅の庵を身にしみ渡る松の風哉
 遣唐使餞
 一君ゆるよしのぐ波路を立ち歸り見ぬ唐土の物語せよ
 山家送年

一山里はあはれなりけり獨りて今幾年かとしを送らむ
 田家老翁
 一ごぞよりも老にける哉苗代の水に映れる知らぬ翁は
 社頭祝君
 一三笠山松の村立隙をなみさらでぞしるき君が千年は
 夢語故人
 一古の人に逢見る通路はまごろむ夢の裡にぞ有りける
 深觀無常
 一目の前に變り行くめる世中の心の底に留りぬるかな
 山寺懷舊
 一おもひ出る心露けき山寺のひじりの跡に秋風ぞ吹く
 開法述懷
 一法の門に心を入て思ふ哉唯浮世をばいづべかりけり
 文治三年十一月二十一日詠之
 自九條殿給題與寂蓮禪門相共風吟頗不宣
 詠歎
 一日百首 十首 但三首 詠之

花

一また咲かぬ花の梢を眺むれば枝にまごある春の山風
 六たざり來て花とは知りぬ山櫻よそめは尙や峯の白雲
 六九重の人さへ春はうつりきぬよし野の山は花の都か
 六我宿は花に譲りて立出でぬ尋ぬる人をよそに數へて
 六春をへて心を花につくば山櫻ならでは繁らざりけむ
 六身の程も心もおはす人なみに唯花咲けばしがの山越
 七春來れば櫻が枝に風ちりてはなの波こそ末のまつ山
 七散たれば小波寄する心ちして風も嬉しき志賀の花園
 七あかで散る花より後の白雲は花よりも尙嬉しかり見
 七散も尙ねに歸行く花なれば又くる春も春にぞ有ける
 郭公
 七年をへてさのみは如何郭公尋ても聞く折もあれかし

春雨

待てどはむ物思なき人をすゑて春雨晴れぬ山里の暮
 春駒 東路の奥のまさなるあら駒をなつくる物は春の若草
 歸雁 己が秋の月を思ひて雁がねは並ぶる春の花に別る
 喚子鳥 喚子鳥聞きわくともなけれど眺めに止る夕暮の空
 苗代 山里の外面の小田の平せ町あらしめはへて種蒔に見
 菫菜 古里の春を忘れぬつぼ菫むかしの袖の名残を見よ
 杜若 旅人を絶えず三河のやつ橋のくも手隔つる杜若かな
 藤 榮ゆへべき末に遙けき千年ふる松の梢にかゝる藤波
 款冬 立田川岸の山吹咲きにけりしばしなをりそ水の白波
 三月盡 我物といかなる人の惜らむ春は憂身の外よりぞ行く
 夏 夏の花の色に我墨染は染めざりき衣更うき今日と思はじ
 更衣 卯花 垣ねをば皆卯花と見るばかり絶間に晒せよ作りの布
 葵 年をへて神も知らなむもは草一方ならさかくる心を
 時鳥 夏の月光は秋に霜さえてほととぎす鳴く明ぼのは春
 萬蒲 東路や野澤のかつみ今日計萬蒲の名をも假てける哉

早苗

小山田のをしれの苗の取々に見ゆる植ゑ女の姿なる哉
 照射 五月雨 心はれぬ類ともせむよしさらば曇らば曇れ梅雨の空
 廬橋 昔おもふたよりなりけり立花の花咲く宿の軒の葱は
 螢 終夜われこそは見え飛ぶ螢宇治のを川のまつ梢を
 蚊遣火 蚊遣の男が垣根にたつる蚊遣火に涼み煩ふ夕まぐれ哉
 蓮 鷺の山八歳の法をいかにして此花にしも喰置きけむ
 水室 夏も尚水室と共にあるをしの涼しく見ゆる谷の山陰
 泉 谷かげやいは間の水に夏過ぎて今は秋なる峯の松風
 六月祝 月を見る身の浮雲も六月の祝にはる、秋のみぞ来る
 秋 立秋 何となく心のすみで覺ゆるは是にもたりぬ秋の微は
 七夕 織女の待つとか今日の思より秋のあはれは夕暮の空
 萩 我が物と移す計りの袖もがなけふ宮城野の萩が花摺
 女郎花 女郎花 女郎花いかなる花の姿ぞと見ざらむ人の我に問へかし
 薄海 花薄夏野の鹿をまねきとりて我が物とする夕暮の聲

刈萱

みだれたる籬の萱が下折に宿のあるじの心をぞ知る
 蘭 藤袴我が旅衣幾日へて園をたよりにぬしとなるらむ
 萩 音せずば誰か忍ばむ吹過ぐる風こそ萩の情なりけれ
 雁 夕月夜ほのめく秋の黄昏に初雁がねの聲なかりせば
 鹿 一さを鹿の聲せぬ宿に住む人の秋の哀を争でしるらむ
 露 野べ毎にこぼる、秋の夕露を宛ら袖の物となしつる
 霧 誰れよそに思ひやりけむ山里の哀につく霧の梢を
 楳 花よりもはかなき身こそ楳の花に見らる、朝顔の花
 駒 月影に今日逢坂と見ゆるかな駒にひかる、雲の上人
 月 秋の月曇らぬとは習ひなり心はれては誰か見らむ
 袴衣 衣うつ哀はこゝに止らじな穂の音をば風にゆづりて
 蟲 有兼ねて後は頼む山里の垣ねにも又蟲のわぶなる
 菊 山川に移ふ菊のいかならし流汲みけむ人に問はや
 紅葉 かはらすな風を厭ふも吉野山秋の櫻は紅葉なりけり
 九月盡 きてもいかに秋の哀に慰むか心にも又こよひ別れぬ
 冬

初冬

今日よりは冬に成ぬとつげに來て柴の戸叩く風の風
 時雨 晴曇り山廻りする絶間にも尚時雨る、は涙なりけり
 霜 草枕露に霜をばおきかへてかはく間もなき旅衣かな
 霰 笠のうへに霰たばしる旅人は互によその哀をぞしる
 雪 草も木も同花こそ咲にけれおい、雪のよそめ也鳥
 千鳥 月影によさの浦波ふけ行けば松の風さへ千鳥鳴く也
 寒蕨 深き江に茂りし物を難波濁かれては聞きし蕨の浦風
 水 波の音は夜はの水にこちられて梢に残る志賀の浦風
 水鳥 須磨の浦見渡す沖にゐる鳴は人の哀の浮ぶなりけり
 網代 風さゆる宇治の網代の夕波は物の哀をまづ寄する哉
 神樂 庭火たく煙は空に曇れ共尙さやかなるあかほしの聲
 鷹狩 御狩する片岡山の村柴にふるべかりけり今日の霰は
 炭竈 ながめやる人の思は大原や芹生の奥のまきの炭がま
 爐火 移夜は、ひの下にも消ぬ火や忍べど絶ぬ思なるらむ
 歳暮 厭兼ね頭の上に積る雪の幾へになりて消えむとす覺
 戀

初戀

三いつしかとおつる涙を時雨にて紅葉始むる衣手の森
 忍戀
 三今はたゞ袖の涙を色に出て物や思ふ人問はれむ
 不逢戀
 三よしさらば後の世と唯契置け其に命を頓てかへてむ
 初逢戀
 三〇人知るや下裳の紐をさき初て君と契を結ぶ夜はとは
 後朝戀
 三明けぬとて歸り初めけむ古に變る例を今朝は残さむ
 會不逢戀
 三戀をのみ飾磨のかちの逢初て歸べしとは思ざりしを
 旅戀
 三離れ來し日數幾らに成ぬらむ眺めに暮る旅の空哉
 思
 三まだ知らぬ人の情を冬にしてかゝる世もなき思草哉
 片思
 三ひたぶるに厭ふ君とは知乍ら思ふ心のつきせぬや何
 恨
 三戀衣ぬる袂をおもひかへすことは恨の限なりけり
 雜
 三東雲や八聲の鳥の聲すなり關の鎖しも今や明くらむ
 松
 三住吉のうらの梢に吹きとめて波にもやどす松の秋風
 竹
 三友となる憂身厭はぬ竹なれば皆斯の君と仰ぐ也けり
 苦
 三みぞわかぬ深き山への山人はころもの苦か昔の衣か
 鶴
 三長世の己が千年も夢なれや吹飯の浦に鶴のねぶれる

山

三世中に山てふ山は多かれど山とはひえの御山をぞ云
 河
 三四方の川は淀の流に落合ひて一つ渡りに成にける哉
 野
 三春も夏も冬も眺はせしか共野へのふしきの秋の夕暮
 關
 三あふ坂の山路も雪にとぢられて關に關ある冬の夕暮
 橋
 三朽ちにける長柄の橋の跡に來て見ぬ昔まで行く心哉
 海路
 三行きとまる心つくしの哀れさは蘆屋の里の松の夕風
 旅
 三東路のくさの枕のあはれをば人にもいはじ有明の月
 別
 三思ひ寝の旅の夜床に夢さめて二度人に別れぬるかな
 山家
 三我が宿を人に見せばや山里の住ひは同じ住ひなれ共
 田家
 三夕風の稻葉の露のこぼるゝを庵もる袖に移しつる哉
 懷舊
 三昨日今日身のうきことを歎くさへ又行末の思出かな
 夢
 三大方に過行くことは夢なるを驚く人のなきぞ悲しき
 無常
 三今日迄はよその枕に眺めきぬ朝おく露も夜はの煙も
 述懐
 三世中をすて出ぬこそ悲しけれ思知れるも思知らぬも
 祝
 三君が代に兼て栽えける住吉の松吹く風は末も遙けし
 少人相語云可詠三吟十ク日百首仍始自建久元年

五月十二日各以風吟大遣丸雖不堪頑質極
 被驅入皇同二十八日令詠畢號三之宇治山百首
 爲勸山家之等輩也
 勸句百首 一第百首

春三十首

三春くれば深山の里の谷の戸も軒の鎖も今朝ぞ明ぬる
 三數へつる今日の子の日の朝霞小松が枝に戀きにけり
 三春ど知れば四方の梢も霞たつ山のかひある曙のそら
 三都よりはや來ても見よ山ごとに鶯來ぬる梅の立枝を
 三賤の女が年と共に物もつむ物は春の七日の若菜也けり
 三雪消えぬ三輪の山べに尋來て春の微にまごひぬる哉
 三袖に移る梅の匂にわきもこが心の内に風や吹くらむ
 三春をへて身はよそ乍ら青柳の厭ふべき世に心亂れぬ
 三東路や焼きすさみたる春の野に早蕨あさる雞子鳴也
 三山里のゆふべの空を眺むれば心もくもる今日の春雨
 三櫻花匂はぬ山はなけれ共み吉野の人のいふらむ
 三難波海澤への駒のなづむにも尙荒行くは心なりけり
 三吉野山はなの梢をかへるかり心えにくき心なりけり
 三山川に冬の風やのこるらむ苗代水にとこほりぬる
 三山里のながめに暮るゝ夕暮に聲哀れなる喚子鳥かな
 三桃の花その紅のあまりには彌生の空を色になすらむ
 三年をへて咲藤波のいかなれば松の梢に懸り初めけり
 三今年更にかへりすめどや董つむ我が古里の春の夕ぐれ
 三年を経で知られむ程の人もなるでの山吹散果ぬ共
 三なかくに物の哀れを知りてむ人には見せじ春の曙
 三無子なくかた岡山の曙に草の戸ざしを問ふ人もがな
 三春の野に揚る雲雀の心をば空にもえこそ量ざりけれ
 三なつかしき春の野澤の杜若色に色ある夕まぐれかな
 三吉野山よしとや人の泥むらむ岩躑躅咲く岩のかけ道
 三君が代は春に春ある時ながら八千代こめたる玉椿哉
 三さば姫の柳の糸を染懸けて花の綾おる春は來にけり

夏二十首

三夏衣かふとはすれど墨染の色は薄くもならぬ也けり
 三山里に卯の花垣ねしめおきて關に眺む夏の夜の月
 三年を経で心にかゝる葵草いかでか神も惠まざるべき
 三雲かゝるまごの梢に雨落ちて山郭公鳴きて過ぐなり
 三宿わかぬさ月の今日の妻なれば賤が庵にも菖蒲葺也
 三早苗とる山田のくるの夕暮に急ぐ植糸女を哀ぞ見る
 三我が宿に花橋の散りぬとも昔の袖をなにかわすれむ
 三日數ふる真野の入江の梅雨に河をば沖と見する浮草
 三大井川星こそ波にうかびぬれ盤どびかふ夕關のそら
 三山里は明けてあけぬる楨の戸を唯にて叩く水鶏也危
 三梢には蟬の諸聲ひき來て暑さを添ふるみな月の空
 三賤のをが煙を立る蚊遣火にそなた知らする夏の夕暮
 三我妹子が物語する夕暮は扇の風のうつ草かにこそ
 三中々にはらはでを見む夕まぐれ露に色ある常夏の花
 三紫陽花の花に心の移る哉秋の野原を待ちもえなくに
 三我宿の池の蓮にそむ心いつかは色にいでむとすらむ
 三友誘ふを野の山べの水山この涼しさは夏かあらぬか
 三夏深み袖に哀はかつ見ゆるむすぶ泉に秋をむかへて
 三たて並ぶいくらのしでの川風に秋をも忘る夏祓かな
 秋三十首
 三秋きぬと驚く風を尋ればめに爽かなる萩のうへ葉ぞ
 三待えたる七夕つめに言はむまだ乾かずや天の羽衣
 三宮城野を尋來たれば秋萩の花は誠にかゝるにこゝめす
 三秋の野を分行く人は一かたに女郎花とや心ひくらむ
 三まねきけり秋の野原を吹過ぐる風に色ある花薄かな

友もなしたゞ汝のみぞ郭公語らひ過ぐるみ山への里
時しもあれ心をすまず黄昏に名のりて過ぐる時鳥哉
聞く人のあかぬ心に郭公とまらばかりの諸聲もがな
過ぎぬるかたゞ一聲のなごりにはあかぬ心か山郭公
ごこなつ

一年ふれど色も變らぬ常夏の花を見る社嬉しかりけれ
秋心に思ほぬれ我が撫子の露重げなる
なべてならぬ物と社見れ我宿のま近く植る常夏の花
露を今朝拂はで見る常夏の色に光をそふる玉ごて
はなたちばな
春過ぎて梅も櫻もなごりなしたはな橋の匂はざりせば
なべて吹く風をおもへば橋の梢にごまる匂なりけり
たぐひなく哀をそふる匂かな昔を戀ふるやごの立花
散りぬれど昔を戀る身にしあれば香をば袂に残す橋
はかなしや昔語りになれる世はみな橋の匂なりけり
何ごを思ふ宿とは知らねどもはな橋の軒に匂へる
秋二十首

をみなへし
思ふとばかりし物を女郎花さく野を過て今日の心は
見の人と同じ心になす物は野べになまめく女郎花哉
何事に露こぼらむ女郎花も思のなるにやある覺
へにけりな四十の秋は女郎花色に染めてし心變らで
鹿の立野もせに見ゆる女郎花夕より妻は己が鳴ぬか
はなすゝき
遙々と野原を行けば花薄とまらぬ人をまねき暮しつ
鳴く蟲の聲にとまるを尾薄の招きえたると思顔なる
あすがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしれせじ
霧罩てそこも見えす栗津野のすする薄靴くなる覺
ふちばかま
故郷に歸り來てこそ聞ぬしなき色をあはれには見え

思をばいかで知らせむ姿こそ其條にあらはれぬごも
物思ふ人の條あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
斯ばかり通ふ心の験あらば我面影もたゞす有らむ
今日までは條にても慰めつ後世までも見る由もがな
濁江と結ぶ契はなりぬれどなほ面影は浮ぶなりけり
こひわひて
此世には年はふれ其懸待てかひなき名をや尙殘す覽
人の世に傳き物は何なれや懸渡る身の行へなりけり
驚の山法の筈にごひきかむ懸待る身の報いかに
引返すかひこそなけれ懸待びて絞る袂の色は深きは
照る月も哀にいかにも思ふらむ涙曇りて懸待る身を
うちもねす
移ろひし人の現を夢と見てねぬ夜の敷の積りぬる哉
千々に思ふ涙の露の碎けつゝ寝ぬ夜の床に玉を敷哉
武夫は打も寝ずぞや思懸する夜はの床も有る世に
寝ぬ夜の敷は幾らか積ぬる敷へても見え榻の端書
する墨を洗ふ涙と思ひ知れ薄く書きつる今日の玉章
あかつきは
秋はなほ妻よぶ鹿を聞き明す其曉のあかしなりけり
萬城の神の心と思ふかな明け行く空や侘しかるらむ
盡もせず物思ふとは絶えね共今ひとさつゝ有明の空
聞く人の心を盡す物やなに嵐にたぐふあかつきの鐘
播磨路やすまの浦わの有明は月の關とぞ云可りける
つゆふかし
罪にのみ譬へおきける露深し乾く計に照す日もがな
夕されば淺茅が末におく露の風まつ程を思知りつゝ
吹過る風もや露を厭ふらむ花の色をば我になしつゝ
斯許り傳き世とは知ながら野原の露をよそに分らむ
知の人にはよも有じかし轉てくも稻葉に懸る露の身もそは
おもふこと

散果て、今は色なき闇誰かは野べに來ても見るべき
花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき闇かな
かゝれてより待ちしものしるゝ蘭秋の野毎に綻びにけり
ませの内に移し植えてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじめみち
あかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
知るらめや我が國生なる儘紅葉其色よりも深き思を
物毎に秋の哀はありしかご心に染むは木葉なりけり
道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
晴れ曇る時雨の空の冴る哉さればよ頓て夜はの初雪
津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
行やちで眺つる哉近江路や爰には降らぬひらみ雪を
昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみあま
大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
軒近く煙をたつる炭がまを我がものと思見大原の里
後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
すごきかなやう炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
見渡せば冬の山べの霞むかぬや炭竈の煙のみかは
かきくらす心ぞはれぬ大原やう炭竈の煙のみかは
まさき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
うしどのみ身を知る轉寝の友とぞ頼む夜はの埋火
罪も無消せざるらむ埋火も灰の下には絶せざりけり
身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
思ふと何ぞと問はむ人もがないと爽やかに云顯さむ
藁藪草いかで此世にかきつめて遠の思に煙立つべき
故郷をいづら傳ひて物思ふ浮世の中に落止まるらむ
九品都占めたる國とのみ願ふこゝろを思ふことにて
常とは思ふと社盡もせぬ欣求淨土と厭離穢土とを
勸旬百首の一具に定羽林結構も同年同月同日翌日
一時半之間詠之自巳半に至り于午四點也
賦百首
春二十首
あさがすみ うめのはな たまやなぎ かきつばた
已上二十字毎歌初可置之以下同之焉以意閑
隨其題名一詠之了仍付此儀一人少々詠之
夏十五首
ほどゝぎすごこなつ 花たちばな
秋二十首
をみなへし はなすゝき ふちばかま はじめみち
冬十五首
はつゆき をのゝ炭竈 うづみ火
戀十五首
おもかけに こひわひて うちもねす
雑十五首
あかつきは つゆふかし おもふこと
一時半詠同御知見濫觴羽林は三時に詠之
花月百首
花五十首 桑門時貞
吉野山花まつ空の朝がすみ咲かぬ梢の色ごそ見れ
はや匂へ獨眺むる山櫻咲かすばたれか尋ねても見む
春ならで誰か訪來し山里に花を待つこそ人を待けれ
梢には花の姿をおもはせてまづ咲くものは鶯のこゑ
山里的の春のあるじを人とは己が尋ぬる花と答へよ
吉野山花を尋ぬる人は皆わが類ひとや我を見らむ

山、海、湖、浦、島、河、橋、池、野、關
末を汲め我が山川の水上に御法の淵は有りぞ知すや
沙路まで哀も深き此世かなむなしき舟も波に沈みぬ
昔思ふながらの山の寢覺には袂につよく志賀の浦波
ながむれば心の上もす煙身を鹽竈の恨めしの世や
かきこめて物の哀を見るならば島島の浦の蟹の釣舟
なにごなく心の底ぞ浮きけるかも河原の春の曙
まだふりぬ憂身をつれて思ふかな長柄の橋の古の跡
廣澤の池の昔を思ふとて月をながむと人に見えぬ
誰も聞け秋の哀は野べなれや鹿聲立て、虫もわぶ也
春と冬と逢坂山の關路には霞よりこそ雪も散れけれ

居所
禁中、都、山家、田家、深山、旅宿、旅泊、關屋、網
代、山科

心して戀ふべかりける萩をしも宿の物とて借も夕風
へにけりな淺茅が末の夕露を心にかけて身は四十迄
茂るべし心にものを忍草うき身の宿の軒端ばかりに
思草茂れるとしもなけれど心あるべきませの内哉
いないはじ此世の人の門毎に植うべき物は忘草かな

木

住吉松、三輪桐、吉野櫻、をふの浦梨、御室神、龍
田川柳、奥山真木、あたちのま弓、あなのふし原、
櫛

鳥

鶯、喚子鳥、郭公、水鶏、雁、鶉、鳴、千鳥、鶯、鶯
深き山に鳥も今はの頃はまた更に待たる、鶯のこゑ
契りおく人どや我を喚子鳥おぼえぬものを黄昏の空
郭公たのむる妹と成に鳥更たればとてぬる夜無れば
まださぬ横の板戸を叩哉我ぞ水鶏と名告なるべし
鳴く雁よ己が涙をかきすも人の咎めぬ袖の上かは鶯
故郷は鶉鳴く野と成ぬれどなほ跡残る庭のませがき
物思ふ心のかすや知りぬらむ此の曉の鳴の羽ねがき
よさの浦獨うき寝のかち枕唯我がための友千鳥かな
難波瀧間の鶯の一つがひ思ひ絶えたるみ吉野の山
何となく涙落ちそふ寢覺かなゆふつけ鳥の曉のこゑ

獸

獅子、象、羊、虎、熊、馬、猿、犬、猪、鹿
位山浮世に社は降る共獅子の座に在る身とも成なむ
如法きやうかく道場の曉に日象天を見ぬはみぬかは
極樂へまだ我が心行きつかす羊の歩しばしとまれ
其心ありもしぬべき我身かはなご此國に虎の無らむ
思ひとりて熊に宿る山伏の心の底は涼しがるらむ
東路やいくその山を越えぬらむ野原篠原駒に任せて
山深みかつゝぬる、袂かな峯のひばらの猿の里聲
詠れば哀もさ夜も更けにけり賤が萱屋の犬の聲まで
これ夢尙睡までありぬべし臥猪の床に身を任す共
鹿の音を山の奥よりさそひ來て籬の萩につたふ秋風

蟲

蝶、蛙、日暮、松蟲、鈴蟲、蜚、蟻、蜘蛛、蝙蝠、紙蟲
もし人の夢や現にあらはれて籬の花の蝶と見ゆらむ
晴れにけり稲葉の緑雨過ぎて山田のくろに蛙鳴く也
夕立の程ばかりこそ絶間にて晴るればやがて蜩の聲
寂しとよ岸のこ萩はうら枯ていざよふ月を松蟲の聲
憂身かなふりぬる上に尙ふりぬ鈴鹿の山の鈴蟲の聲
蟋蟀蓬の宿に秋暮れて哀れをよそのものごなしつゝ
糸薄萩の錦に植ゑませてはた織る蟲の聲を聞くかな
笹蟹のいと哀なる此世かな軒端の宿をよそに思はじ
蝙蝠は夜も戸たてぬ古寺に内外もなく飛びまがふ也
いかにせむ御法の塵を拂にもしみの教や尙殘らむ

釋教

檀、戒、忍、進、禪、惠、方、願、力、智
今是我山のは近き月をだに惜むまじとぞ思知りぬる
北南たもつ心は淺くともさづくる法は深しとぞ知れ
忍びづま忍びなれに心こそやがて眞の心なりけれ
嬉しくも佛に近くなれにける心に悟る身とぞ成ぬる
目を閉ぢて息を數ふる心には御法計りの殘る也けり

神

日吉、貴船、住吉、稻荷、鹿島、大原野、春日、賀茂、
八幡、伊勢
三世までに結びおきける契かな哀とおもへ七の御社
貴船川たぎつ白波袖に見て乾きて歸る春を待つかな
思ふことつもり浦の藻鹽草いくら茂りぬ住吉の神
ちりとなる光に見せよいな山すぎの庵のさとの曙
めぐり逢ふ始終の行へかなかしまの宮にかよふ心は
おとし山松に千年を宿しおきて末も遙けき宮の内哉
忍びこし昔を今に三笠山のどけかるべき天の下かな
志でに吹くかも川風さ夜更けて心に籠る朱の黒垣
石清水流久しき天皇の千代のみかげは神のまに
神風や御裳瀧川の末の波昔の瀬にも立ちかへるかな
秋日詣住吉社 詠三百首和歌

雜五十首

法の如く連の糸をくりしかど尙みだれしな住吉の神
法のはな散りし筵にのぞみてや光をまし、住吉の神
石川のつかの昔を尋ねしをあらはれとや見し住吉の神
たごにかくに昔をすくふおほ網に哀をかけよ住吉の神
心ざし深きあまりに尋ねきぬあはれと思へ住吉の神
さてもさぞ思ふ心の末やなに行くへを守れ住吉の神
世中の深き哀を知りながらよそに過ぎぬ住吉の神
世の中のみやはとぞさもなく世にもへむ哀いざ、住吉の神
世中の世中にもあるならば悔しがるべき住吉の神
松風にまかす舟を極樂のきしまでくれ住吉の神
神もげに今は浮世を厭ふらし住吉の名を改むるまで

一梓弓春九重にちる雪を今日たつひまの袖に見るかな
野遊 左 後京極
二是ぞ此春の野べよと見ゆる哉大宮人の打群れて行く
雉 左 定家朝臣
三鳴きてたつ雉子の宿を尋ねれば裾野の原の柴の下草
雲雀 左 季經卿
四春深き野べの霞の下風に吹かれてあがる夕雲雀かな
遊絲 左 顯昭
五空に知れ春の軒端に遊ぶ絲の思筋なき身の行方をば
春略 左 後京極
六思ひ出では同じ詠めにかへるまで心にのこれ春の曙
運日 左 顯昭
七雲の上につるの諸聲訪づれて哀のどけき春の空かな
志賀山越 左 季經卿
八道もせに花の白雪ふりとちて冬にぞ返る志賀の山越
三月三日 左 兼宗朝臣
九酒盃のながれと共に匂ふらしけふの花吹く春の山風
蛙 左 顯昭
〇まだ採らぬ早苗の末葉靡くめりすだく蛙の聲の響に
残春 左 後京極
一山の端に匂ひし花の雲さえて春の日数は有あけの月
夏 左 定家
二新樹 左 季經卿
三顯れむ秋をも知らぬ楓かな常磐の色を暫しぬすみて
夏草 左 後京極
四夏草の中を露けみ分る野は我が故郷の垣なりけり
賀茂祭 左 顯昭
五昔より齋の宮に吹きそめて今日は涼しき賀茂の河風
鶴川 左 定家
六頼舟あはれとぞ見る武夫のやそうち川の夕闇の空

夏夜
一夏の夜の敷にも入れし郭公聞かぬさきにぞ明る東雲
夏衣 左 顯昭
二夏衣ひとへなれども中々に暑さぞまさる裏と成ける
扇 左 後京極
三夕まぐれならす扇の風にこそかつく秋は立始めれ
夕顔 左 兼宗
四思のをが片岡しめて住む宿をもてなす物は夕顔の花
晩立 左 顯昭
五これもやと人里とほき片山に夕立すこす杉のむら立
蟬 左 定家
六茂りあふ青き紅葉の夕涼み暑さは蟬の聲にゆづりぬ
秋 左 女房
七秋浅き日影に夏は残れども暮るゝまがきは萩の上風
乞巧奠 左 女房
八七夕は雲の上より雲の上に心をかけて嬉しがるらむ
稻妻 左 兼宗
九山の端に残れる雲の絶間より鳥羽田の面に通ふ稻妻
鶉 左 有
一移植えし萩が籬の荒行くをまことの野べになす鶉哉
野分 左 定家
二靡き行く尾花が末に浪こえて眞野の野分に續く浪風
秋雨 左 定家
三日にそへて秋の涼しさ傳ふ哉時雨はまだし夕暮の雨
秋夕 左 女房
四佳もさは如何はすべき身のうさを思果れど秋の夕暮
秋田 左 定家
五わきてなど庵もる袖の萎る覽稻葉に限る秋の風かは
鳴 左 定家
六旅まくら夜はの哀れも百はがき鳴立つ野べの曉の空

廣澤池眺望 左 兼宗
一更級も明石もこゝにさそひ来て月の光はひろ澤の池
馬 左 顯昭
二年をへて昔に埋るゝ古寺の軒に秋あるつたの色かな
柞 左 季經
三山めぐる時雨の宿か柞原我が物顔に色の見ゆらむ
九月九日 左 女房
四今日と云へば八重咲菊を九重に重ねし跡も顯れに見
秋霜 左 季經卿
五紅葉は己が染たる色ぞかしよそげに置る今朝の霜哉
暮秋 左 女房
六哀なる身のたぐひとも思ひこし秋も今はの夕暮の空
冬 左 女房
七落葉 左 顯昭
八雨つる峰の村雲晴のきて風よりふるは木葉也けり
残菊 左 定家
九花もかく雪のませまで見る菊の匂は袖に又残さなむ
枯野 左 兼宗
一〇秋の色に移ふ野べを來て見れば哀は枯ぬ物にぞ有ける
風渡る花のあたりの春雨は冬の空にも有りける物を
野行幸 左 有
一一敏鷹も逢ふを嬉しと思らむ絶にし野べの今日の行幸に
冬朝 左 兼宗
一二軒の内に雀の聲はなるれども人こそ訪ね今朝の白雪
寒松 左 女房
一三梢には夜はのしら雪積るらし音よわり行く峯の松風
椎柴 左 季經
一四椎柴の暫しと思ひし世中の四十の冬に成にけるかな
衾 左 顯昭
一五徒らに明る夜をのみ重ねれば獨ふすまの床ぞ寂しき

佛名 左 女房
一唱へつる佛の御名は朝日にてやがて消行く一年の露
戀 左 女房
二今朝までも斯る思はなき物を哀あやしき我が涙かな
忍戀 左 定家
三我は思ふに斯る涙こそ抑ふる袖の下になりぬれ
聞戀 左 有
四鹿のねも嵐に類ふ鐘の音も聞よりこそは袖は濡しか
見戀 左 兼宗
五見ればげに中々にとて疎くとも尙尙の離るべきかは
尋戀 左 女房
六心こそ行くへも知らね三輪の山杉の梢の夕暮のそら
祈戀 左 顯昭
七思かねそのこゝの本に木綿懸て戀こそ渡れ三川の橋
契戀 左 定家
八只たのめ誓へば人の偽を重ねてこそは又も恨みむ
待戀 左 顯昭
九宵の鐘を聞過ぐすだに苦しきに鳥の音を鳴袖の上哉
遇戀 左 定家
一〇逢見てはまつと思ひし言の葉に心の露の尙重きかな
別戀 左 季經
一一暫しなる今朝の別にみつるかな心がりの行末の夢
顯戀 左 有
一二よしさらば逢で重ぬる濡衣の恨に朽る妻も有らむ
稀戀 左 顯昭
一三絶えはてぬ情の山に雲消えてはるゝ心や星合のそら
絶戀 左 顯昭
一四たさしも我が絶す忍し中にしも渡して見なくめの岩橋
恨戀 左 有
一五ものおもふ心の秋の夕まぐれ眞葛が原に風渡るなり

一 戀ひそめし心はいつぞいそのかみ都の奥の夕暮の空 左 有 家
 二 曉の涙やせめてたぐらむ袖におちくる鐘の音かな 左 定 家
 三 朝戀 左 定 家
 四 いざ命おもひは夜はにつきはてぬ夕も待たじ秋の曙 左 季 經
 五 晝戀 左 定 家
 六 かたぶかぬいもが心の日影かな中空にのみ物思して 左 定 家
 七 夕戀 左 定 家
 八 曙の哀ばかりは忍べども今日をばいです春の夕ぐれ 左 女 房
 九 夜戀 左 兼 宗
 一〇 見せばやな夜床に積る塵をのみ有ましとに拂氣色を 左 兼 宗
 一一 老戀 左 兼 宗
 一二 戀初めし心の色につむ年は我が黒髪に顯はれにけり 左 兼 宗
 一三 幼戀 左 兼 宗
 一四 遠なるい草枕結びてかその下紐のさけむとすらむ 左 女 房
 一五 近戀 左 女 房
 一六 匂ひ來る梢ばかりをなさけにて主は遠き宿の梅がえ 左 季 經
 一七 旅戀 左 定 家
 一八 東路の夜はのねざめを語らなむ都の山にかゝる月影 左 定 家
 一九 寄月戀 左 兼 宗
 二〇 思にも思ひやるかな君もし獨や今夜月を見るらむ 左 兼 宗
 二一 寄雲戀 左 兼 宗
 二二 戀じめる夜はの煙の雲とならば君が宿にはわきて時雨む 左 女 房
 二三 寄風戀 左 女 房
 二四 心あらば吹かすもあらなむ宵々に人待宿の庭の松風 左 女 房
 二五 寄雨戀 左 女 房
 二六 雲とづる宿の軒の夕ながめ戀より餘る雨の音かは 左 定 家
 二七 寄煙戀 左 定 家

一 寄遊女戀 左 有 家
 二 其人とわきて待つらむ妻よりも哀は深き浪の上かな 左 兼 宗
 三 寄傀儡戀 左 兼 宗
 四 立宿る一夜計りの契だにさて長らふる人もある世を 左 有 家
 五 寄海人戀 左 有 家
 六 しはたる袖に哀の深きより心にうかふ海士の釣舟 左 兼 宗
 七 寄樵夫戀 左 兼 宗
 八 賤の男よ思は我もこりぬべし己苦しき爪木ならね 左 兼 宗
 九 寄商人戀 左 兼 宗
 一〇 見し人の舟の昔をおもふにも恨はふかき泪なりけり 左 兼 宗

拾玉集卷第四

詠三百首和歌

左 南海漁父 右 北山樵客

春十五首

一 山深み怪しく霞む梢かな我が通路に春やきぬらむ 左 兼 宗
 二 若水をたが板井にか汲初て今朝年波の立を見るらむ 左 兼 宗
 三 年をへて春に立添ふ朝霞幾よの冬を隔てきぬらむ 左 兼 宗
 四 香羽山今朝の霞をかき分けて心ぞかよふ白河の關 左 兼 宗
 五 たつた川柳のまゆに見ゆるかな芳野の山の花の俤 左 兼 宗
 六 武藏野に春の氣色も知られ梟垣ねに芽む草の縁に 左 兼 宗
 七 焼きすすむ且の原は草立て春雨はれぬ岡のべの里 左 兼 宗
 八 花はまだし心は空に淺みどり春めく頃の白川の里 左 兼 宗
 九 梅が香を己が匂になしはて垣ねを傳ふ春の山風 左 兼 宗
 一〇 三吉野の花の盛を思ひやる心は空に幾かすみしつ 左 兼 宗
 一一 空も海も一つに霞む波路哉海士の釣舟歸る誰がね 左 兼 宗
 一二 中々に花咲かずともありぬべし芳野の山の春の曙 左 兼 宗
 一三 鹿なく秋の有明の哀まで霞にこむる春の夜の月 左 兼 宗

一 花は散りぬ春の鶯こゝろ深く一むら竹に霞かゝれり 左 兼 宗
 二 花の色はむぐらが庭に移ろひて心に殘る故郷の春 左 兼 宗
 三 戀くば野くれ山くれ尋見む春は吾妻へ歸るごぞ聞 左 兼 宗
 四 夏十首 左 兼 宗
 五 卯花の青葉の上に風見えて昔に波こそ玉川のさこ 左 兼 宗
 六 菖蒲昔忍の軒を拂ふなよ宿に生ひたる草の名ぞかし 左 兼 宗
 七 故郷の軒のたち花雨なれて寂しくかざる夕暮の空 左 兼 宗
 八 曇る夜の月に響へむ郭公鳴かではれぬる梅雨の空 左 兼 宗
 九 夏の夜の窓は水鶏に任てむ叩くすれば明くる東雲 左 兼 宗
 一〇 夕立の烈しかりつる名殘哉晴行く野べに殘る雨水 左 兼 宗
 一一 賤のをが更行く闇の門涼好もしからぬ團居也けり 左 兼 宗
 一二 夏たけて尙尋ぬれば郭公老會の杜の下に鳴くなり 左 兼 宗
 一三 手に翔ぶ香羽の瀧に夏寂て涼しくなりぬ杜の下風 左 兼 宗
 一四 夏深きみねの松がえ風こえて月かげ涼し有明の山 左 兼 宗
 一五 秋十五首 左 兼 宗
 一 風の音は鳥羽田の面に先ちぬ淀の渡りに秋やきぬ 左 兼 宗
 二 其も猶けふこそ主の身にはしめ心より吹秋の初風 左 兼 宗
 三 風やあらぬ月もやあらぬ物思ふ我身一つの秋の夕暮 左 兼 宗
 四 人わかぬ萩の上風吹きぬ也山かげならす秋の夕暮 左 兼 宗
 五 萩の音もまねく尾花も松風も一つ哀の傳ふ也けり 左 兼 宗
 六 深草は秋は由なき柄かな鶏の床にそでならしつる 左 兼 宗
 七 粟津野の尾花が下に吹きこめて風は波こそ山嵐哉 左 兼 宗
 八 梢まできぬたの音の誘ひ來て衣うつなり庭の松風 左 兼 宗
 九 月は秋と思ひふりにし空乍ら今更科に驚かれぬる 左 兼 宗
 一〇 雨瀧ぐその雲ながらこめてけり柞の杜の霧の夕暮 左 兼 宗
 一一 秋を秋と思ひぬる心より深く成行く身の愁かな 左 兼 宗
 一二 紅葉のはる、梢に風消えて鹿聲すすむ秋の暮かな 左 兼 宗
 一三 秋の色の深くなり行く限哉露すむ庭のませの夕暮 左 兼 宗
 一四 秋の野の蟲の聲社弱るなれうら枯になん萩に時雨て 左 兼 宗
 一五 秋の歸る道はいづくぞ立田山紅葉散り行く梢也けり 左 兼 宗

時雨くる雲の氣色を眺むれば心も散て物の寂しき
初瀬山霜に答ふる鐘の音をもろくも誘ふ風の音哉
庭の松籬の竹を曇にて風に月すむ夜はのさやけさ
月も出ぬ浦風通ふ高砂の松に答へて千鳥鳴くなり
今朝見れば雪も津守の浦なれや濱松が枝の波に包ま
岡の秋月影冴しよはかどて尾上の雪に鹿や鳴らむ
ふる雪にかもの河原を見渡せば札の竹も下折に鳥
珍しき千年の春の微には三輪の里にも松やきる覽
一歳を送り迎ふる夢路よりかへればやがて春の曙

都へと思立つよりこゆるぎの急ぐ日敷も猶積る哉
歸りこば重なる山の嶺毎にこまる心を榮にはせむ
詠めつる空行く月の行末に思も出でようつ山寺
都思ふ夢だに見えぬ浮寝哉幾夜になりぬ苦の下臥
草枕涙かきあへぬ寢覺哉鳴の羽音に夢をのこして
何ぞなく思ひ續けて眺むれば哀に曇る旅の空かな
一夜見し人の情は立ちかへり心に宿る青はかの里
通ひ馴てあづまも近し足柄の關路遙に思ひしか共

思寝の夢を片しく床までも猶恨めしき鐘の音かな
さりととも頼めて社は貴船川借しも袖の濡増る覽
鳴果てばいざ洩してむ逢坂の關に鳥鳴山のるの水
難波瀉蘆の枯葉に風通へ深き江よりそほには出なむ
いかにせむ忍の山を越兼て歸る路には又迷ひぬる
等閑に誰が引き植ゑし篠薄秋よりのちも露深きにて
氣色せばさも非ぬ様に云做つ散なばいかに我言葉よ
徒に心になふ涙哉待ちたる袖をしぼり侘びつ
強て戀る我が心の難面きを思へば人の恨むべきかは
今は唯空だのめにもこりねとや待かね山の峯の椎柴
玉章の跡だになしと詠めつる夕の空に鴈鳴き渡る
戀といふ心はよもに通へ共一筋に社身をば戀なれ
我袖を猶も時雨に濡せとや詠むる軒にまがふ叢雲
今朝と云へば駒も心やすみぬ覽詠めて歸る有明の月
人こふる心あるべき我が身哉涙をつゝめ墨染の袖

山里に獨詠めて思ふかな世に住む人の心づよさを
物にふれて情ぞ多き山里は心有てぞ住むべかりける
山里に訪來る人の言ぐさは此の住ひこそ羨しけれ
三吉野のまき立山に宿占て思ひしとぞ斯る住ひは
堪へ忍ぶ人なからむ山里は物の哀の栖なりけり
此頃ほもと住む人や厭ふらむ都にかへる大原の里
情ありて花の盛に訪ふ人は風にぞかる、春の山里
ひざり聞く秋にさきだつ松風に鯛鳴きぬ夏の山里
小萩原花に鹿鳴野べの色を垣ねにぞ見る秋の山里
朝夕に柴折りくぶる煙さへなほぞ寂しき冬の山里

いか計嬉かりなむきねが鈴の振捨て行道をせかすば
我たのむ七の社のゆふ禱かけても六の道に返すな
立ち返る昔の秋をうれしとや神も三笠の山のはの月
百番 百番
和歌浦の契も深し藻蘆草沈まむよを捨じとぞ思ふ
山河の流に契るうたかたは幾代をふとも何か沈まむ
神風や御裳濯川のそのかみに契りしとの末を違ふな
神風まで思ひつゞくる涙より心にしげる伊勢の濱萩
夫和歌者非鼓舷鼓棹之歌一非探薪採芝之歌只遊
心四序一放思於萬里之業也而今南海有漁夫
北山有樵客居離隔山海製猶倚芝蘭因茲
隨分綴百番之篇什其終得一首之贈答左依風
波月浦之冷表以心有之眇焉右依松嶺竹溪之
寂抽以意根之森然是則内仰住吉之靈睡外憤
人丸之遺塵之故也若有披閱之客宜決優劣之
詞而已
建久五年仲秋記之
詠三百首和歌
北山樵客

都には鳥も今はほごぞかしいざ鶯の古巢たづねむ
暮しかねつ憂身の末を思ふ空に猶鶯と鳥の鳴くなる
花
雲ははな花は雲ぞぞ今日過ぎぬ高ね遙けし春の夕暮
眺めやる雲の梢に風ふけて花咲きまざる小初瀬の山
花さけば春風いさふ木のもとに雲さへ靡く櫻狩かな
春はけふ今幾日は残るらむ花見るとては庭を詠て
尋ぬべき跡こそなけれ吉野山花よりおくに峰の白雲
郭公
ひとり聞く心の底を知らせばやつひにぞ思ふ山郭公
郭公傾く月に過ぎぬなりこゑより西に聲をのみして
住みけりな思ひも入らぬ夏山の梢知らする郭公かな
有明の月待つとてや郭公夜深き空に鳴きて過ぐらむ
郭公もりの梢の見わたしに中やぞしむる杜の一むら
五月雨
浮世ゆる晴れぬ思や雲ならぬ心にやぐる五月雨の空
夏草も深くぞ春に歸りぬる五月雨越る眞野の入江は
山里はおし遠へたる住ひなれば心ぞほる、梅雨の比
中々に秋は曇りぬ月影にならべつべきは五月雨の空
山里の雪には跡も厭はれき問へかし人の五月雨の比
月
詠めつる心もすまで入ぬれば月より外の月をまつ哉
思入らぬ人には露やおかざらむ我袖にのみ宿る月影
はつせ山月の光にあまり行く心をせむる鐘の音かな
浦風に波の帆かくる月の舟今宵あかしや泊なるらむ
待つ人の心の鳥や鳴きぬらむ雲に宿かる月を詠めて
秋のよにあかて暮れ行く夕暮に風心ある萩の上かな
移植し元の野べにぞ歸行く荒れて嬉しきませの内哉
古里の一むら薄たれかうゑしあるじ戀しき蟲の聲哉
野べ占る籬は野べの内なれば霧の比方に花を見る哉

鹿も蟲も暮て哀とそふ野へに萩こそよるの錦也けれ
紅葉
訪ふ人に峯の紅葉の紅をおろして見せば寢れ社せめ
思ふ哉紅葉散敷く庭のなご我が獨居の山田間にしも
大井川波の外なる紅葉ばやた見残せる錦なるらむ
鶯のはなに鳴きしも忘られぬ紅葉の下にさを鹿の聲
秋も暮て紅葉も散りぬ山里にたまるは物の哀也けり
雪

一横の屋に今は木の葉の音絶えて雪に成行く山嵐の風
一春近き己が村芝ふりさちて雪より下に雉子鳴くなり
一外山には時雨にぬるゝ捲り手の峯には雪を拂佐ぶ覽
一暮れて猶跡なき雪に分佐びぬ野寺の鐘よ音は孰くぞ
一ふりしきて晝こそ夜に返りぬれ千里の雪に出る月影
歳暮
一年の明て浮世の夢の醒べくば暮る共闇を欺かざらまじ
一今日ぞ思ふ年は我身に止る物を春秋とてもけに別かは
一今夜より春の門松立隠せ積ればつらき年にかかはむ
一年の暮て我世もふけぬ山のはに隠れな果そ有明の月
一身にたまる年をも人は送りけり願はれぬべし法の理
初戀
一戀やせしながらめは同じ詠にて昨日にかはる夕暮の空
一我が戀は心づくしに行く舟のけふ清き初むる淀の曉
一君が宿の萩の上葉のいかならむ今日吹初る戀の初風
一詠つる月は板間にもりそめて心の宿ぞ荒れ初ぬぬる
一有るかなきか心の末ぞ哀なる二日の月に雲の懸れる
忍戀
一今暫し我戀路にもかくしてむ尙厭はれぬ末も耻かし
一いかにせむ人めに懸る戀草の蒔てし種は作る世もなき
一御法こそ忍中にも嬉しけれなむあみだ佛もて隠しつゝ
一さを鹿の夏野の草に隠るへてまだ聲立ぬ戀もする哉
一獨だに包むけしきを恨みせば互に物は思はざらまし

初逢戀
一命をば逢ふにかへむと誓ひてき頓て今夜や別なる覺
一慰めし口頃の夢もうさからず重ぬる袖や猶返さまし
一今宵猶心騒きぞせられつる頼めぬをこそ待ちし習に
一見し夢のやがて眞に成ぬれば長らへ行む末も頼もし
一嬉しさを今夜つゝまむ頼めとや袖は泪に朽殘るらむ
後朝戀
一獨のみぬれし袂も乾き敢ず重ねて袖を今朝絞りつゝ
一思べし定なき世はありぬごて歸る習ひも嬉しかり是
一歸るさの月を悲しき睡まで頓て有明を詠めしよりも
一今朝ぞ思ふ歸る別の程を知で待ける宵の身社つられ
一現こそ今朝は中々なしけれ歸る恨は夢にまさりき
逢不逢戀
一更にまた越えて歸らぬ逢坂や人の思の關となるらむ
一暫しこそ忘れ形見の移香も夜頃になれば遠ざかる覺
一契あれば又めぐりけり月影を宿すにつけて袖の白露
一幻の慰めだにも有りなまし別れの野べの別なりせば
一我が戀は庭の村萩うら枯れて人をも身をも秋の夕暮

君が代を松の緑に眺むれば梢にかすむ行く末のそら
はま椿幾たび色を改めてなほ君が代の春を待つらむ
驚の山もこの命をあらはして争ふ程の君が御代かな
君が代の久しき言の音に通ひ千代調ぶなり庭の松風
君が代は清見が關にちり閉て富士の高ねに波越る迄
旅
一覺めて思へ旅ねの床に見る夢は都の宿の現なりけり
一明けぬるか波の上なる横雲は山のはよりも立増り是
一東路やいくへ都を隔つらむかさなる山のみねの白雲
一うつつの山契りし月も出でぬれば昔に越て哀を知る
一月もとはぬ草の枕のうたゝねは夢ぞ傾く有明のそら
述懐

此世くるし今は昔に吹返す休む程こそ山おろしの風
鈴鹿川浮世の波に袖ぬれて振捨てぬべき我身也けり
打返し思ひ定むる恨かなどかゝる世に生れ逢ひ
浅きと摩訶退こゝろぞ起りぬる眞俗一諦末のよの春
人は知らじ誠の道を思ふとて誠の道をもよに見るとは
神祇
一御裳濯や五十瀬川なみ立ちかくれ神風おつる春の曙
一世中よ言葉に出てば石清水心の底にすむをたのみて
一思きや賀茂の川なみ忽にかわきし袖にかけむ物は
一押なべて日吉の影は曇らぬに涙あやしき昨日今日哉
一片そぎの行合はぬまも荒ぬべし此世な捨を住吉の神

佛部
一今は上に光も有じ望月とかがるになれば一きは空
蓮花部
一詠められ同じ理のめぐりあるきりしの蓮胸に開きて
寶部
一かかれぞかし三十の上二そへて寶の中に寶を見る
金剛部
一頼もしな浮世の中はやぶれ屋に獨りだけぬ法の里人
獨勝部
一如何にして我悟らまし諸人の御法の庭を飾る氣色を
一密の矢を高間の弓に差はけて顯密の的に引外しつる
一俊成入道見此百首 奥和
一尚たのむ高間の弓を放ちける手もごに響く密箭の音
一承久三年十二月撰作
三人ならば月なしともや厭まし寝待の宵の山のはの空
詠百首和歌一
春十五首
一今日不ぞ知誰計會、春風春水一時來
志賀の浦や解る氷の春風に今朝を今日さばいつか告御

春風先發苑中花、櫻杏桃李次第開
春花をへて花咲く春の春風に咲く櫻あれば散る梅の花
白片落梅浮三湖水一
一雪を湛る谷の小川に春ぞかし垣ぬの梅の散ける物を
一黃精新柳出城牆一
一春の宿のつゝ垣ねを見渡せば梢にさらす青柳の糸
一春來無伴閑遊少
一浅緑春のながめも宿さびて鈍くねる山の端のそら
一鶯鶯誘引來花下
一うちかへし鶯誘ふ身とならむ今宵は花の下に宿りて
一逐て處花皆好、隨年貌自衰
一春をへてまごなる花の色をこき我元結の霜は消ねぞ
一花を宿の主と頼む春なれば見に来る友を嫌ふ物かは
一花下忘歸因美景一
一春の山に霞の袖を片敷きて幾日になりぬ花の下ふし
一落花不語空解樹、流水無心自入池
一花だにも心清やいかならむ庭に立つ波春の木のもと
一花落城中地、春深江上天
一夕霞深くなり行く住の江の都の花をおもひやるかな
一背燈共憐深夜月、踏花同惜少年春
一有明のつきに背くる灯の影にうつろふ花を見るかな
一歳時春日少、世界苦人多
一暮れて行く春は霞の色ながら怪しく濡るゝ人の袖哉
一留春春不留、春歸人寂寞
一惜めどもとまらぬ今日は吉野山梢にひとり殘る春風
一厭風風不定、風起花蕭索
一山櫻風になりゆく梢より絶えなくおつる瀧のしら糸
夏十首
一微風吹袂衣、不寒復不熱
一夏の風に成行けふの衣手の身にしまわ色ぞ身には染ける

微風吹袂衣、不寒復不熱
夏の風に成行けふの衣手の身にしまわ色ぞ身には染ける

殘鶯素思盡、新葉陰涼多

鶯は夏のはつ音をそめかへてしげき梢に歸る頃かな

盧橋子低山百重

池院芳謝、窓秋竹意深

風生竹夜窓間臥、月照松時臺上行

青苔地上消殘雨、綠樹陰前透晚涼

可憐無事熱到、但能心靜即身涼

暑月貧家何所有、客來唯贈北窓風

蕭蕭風雨、蟬聲暮秋々

夏臥北窓風、枕席如涼秋

小夜ふけて窓をしあくる轉寢の枕涼しき庭の松かせ

秋十五首

夜來風雨後、秋氣風然新

山のはに雨ぞば降て風ぞ行く是より秋の色や見ゆ覽

閉扇先辭手、生衣不着身

大底四時心愁苦、就中斷腸是秋天

あだに思ふ愁へは秋の空ながら雲に心や靡き行らむ

八月九月正長夜、千聲萬聲無了時

槌の音よいくらになりぬ衣うつ長月の夜の有明の空

相思夕上松臺立、盡思蟬聲滿耳秋

暎々鐘鼓初長夜、歌々星河欲曙天

鐘の音を發覺めて聞や秋ならむ袖にまなき天の河波

寂寂深村夜、殘雁雪中聲

岡のへの杉の木の上に雪深み跡なき雁の雲に残れる

望春春未到、可海門東

雪盡終南又欲春

香火一爐燈一盞、白頭夜禮佛名經

二つもり行く頭の雪も消えやせむ三世の佛を拜む光に

戀五首

夜深方獨臥、誰為拂牀塵

見せばやな塵も拂はぬ枕より夢のたえぬる片敷の袖

夕殿螢飛思消然、孤燈挑盡未眠

君故にうちも寝ぬ夜の床の上に思を見する夏蟲の影

行宮見月傷心色

いかにせむ慰むやとて見る月の順て涙に曇べしやは

夜雨聞猿斷腸聲

木の木の雨に鳴る猿よりも我袖の上の露ぞ悲しき

舊枕古衾誰與共

いかにせむ重ねし袖を片敷きて涙にうくは枕也けり

山家五首

從今便是家山月、試問清光知不知

秋の月は曇なれば知れぬらむ我が住庵の行末の空

始知天造空閑境、不為忙人留貴人

思すよ我のみぞ住む山里に世を行く人も立止れとは

草の庵の雨に袂をぬらすかな心より出し都こひしも

殘影燈開、斜光月穿、隔
 秋の夜はかべに灯消えやらで共に傾く月ぞかなしき
 黄茅圓頭秋日晚、苦竹嶺下寒月低
 宿しむるかた岡山のあさち原露に傾く月を見るかな
 月隱雲樹外、螢飛廊宇間
 秋の雨に月さへ曇る軒ばより星さめいはし螢なる豈
 礙日暮山青簾々、浸天秋水白茫茫
 寒鴉飛急、秋盡、隣鷄鳴遲、知夜永
 如何にせむよはに待る、鳥の音を急がね秋と思ましかば
 前頭更有蕭條物、老菊衰蘭雨三稜
 不墮紅葉青苔地、又是涼風暮雨天
 一宿ぞいづれ空のけしきに苦むして秋暮方の松風の聲
 葉聲落如雨、月色白似雪
 一終夜月に霜おく横のやに降るか木葉も袖ぬらすらむ
 萬物秋霜能懷色
 秋の色を冬のものにはなきさて今日より先に霜の置ける
 冬十首
 十月江南天氣好、可憐冬景似春花
 今日を冬と却て告る春の色はいかなる江より思初創
 寒流帶月澄如鏡
 一月故ぞ月は鏡と成にける木の葉隠れを拂ふ波間に
 策々窓戸前、又聞新雪下
 横の戸を叩け方の空さえて庭白妙に雪ふりにけり
 爐火欲消燈欲盡、夜長相對百憂生
 消えぬるかほのめく夜はの灯にたえぬ思は鳴の羽搔
 唯有數衰菊、新開籬落間
 一白菊の霜に移ろふませの内に今は今年の花も思はず
 南窓背燈坐、風霞晴紛々
 一思ひやれ風は霰の音散りて籬引きむすふいはの燈火
 前庭後苑傷心中、只是春風秋月知
 ありし世の宿の氣色をとふ物は秋の夜の月庭の松風
 蒼苔黃葉地、日暮旋風多
 紅葉ばを夕行く風に任すれば苦むす庭は打時雨つ、
 挿柳作高林、種桃成老樹
 一引植ゑし木々の梢に年たけて宿も主も老いにける哉
 閑日一思舊、舊遊如日前
 ながめわぶる軒の窓に露おちて昔をかへす夕暮の空
 黃埃誰知我、白頭獨憶君、唯將老年涙、一灑故人
 故人文
 一かきこむる昔の人の言の葉を老の涙にそめて見る哉
 閑居十首
 但有雙松當樹下、更無一事到心中
 庭の松よおのが梢の風ならで心の宿をとふ物ぞなき
 山林太寂寞、朝闌苦喧煩、唯茲群同門、器靜得
 中間
 一いづくにも心や行かず成ぬらむ只我宿を我宿にして
 偶得幽閑境、遂忘塵俗心、始知眞隱者、不
 在山林
 一柴の庵に住みえて後ぞ思知るいづくも同じ夕暮の空
 更無俗物當人眼、但有泉聲洗我心
 一嬉しくも詠むる空はむなしくて心を洗ふ山の井の水
 盡日塵復臥、不離一室中、中心本無繫、亦與
 出同門
 一獨のみ草の戸ざしに明暮て馬はふ松をよそに見る哉
 外願世間比、内脱途中緣、進不厭朝市、退不
 戀入寰
 一身の外に我身ありとや人は見む心になきは心也けり
 深閉竹間扉、靜掃松下地、獨嘯晚風前、何人知
 此意
 一夕されの詠めを人や知らざらむ竹の編戸に庭の松風

我が心隠さばやぞ思へども皆人も知る皆誰も見る
身計はなきに成ては過ぐれ共情もうせぬは心也
厭ひは心の儘の身なりせばいづく極ぞ知人もなし
世を歎く心の中を引明て見せたらば思人だにもがな
嬉悲我思ふを誰に云てさばさかどだに人に知れむ
人もかく生れたる身の嬉しさを徒になす我が心かな
此身をば水に映れる月の影の浮ぶとや云む沈とや云む
通るべき道は道に有物を知らばやどだに人の思はぬ
人ならば恨もすべしいかにせむ我をすかすは我心也
神よいかにかうや北野の馬場ゆふ輝の外なる人の心は
歎くよ人の心は佛だに思ひ棄てぞ捨てたまひにし
我命いつ迄だに知らねば残るとなく世をば捨てむ
愚也只けふくと思へかし知も知らぬも今幾日かは
吹拂へ何となき塵の身におくを家を出にし山嵐の風
胸の月を心ばかりに磨き来て我も光を見ぬぞ悲しき
昔なれし友は宛ら夢のよを獨残りて見るぞかひなき
佛しや見しよの人の残居て物語するも有ば社あらめ
神も見よ佛も照せ人知れず法の爲とて今日迄はへぬ
朝夕に袖に隠して結ぶ手の憂世の綱を解ざらめやは
いかにして罪の薪を樵果て我智恵の火に燒盡さまし
護摩の火の灰なき灰に種蒔つ蒔つる種は薄き物かは
今は世も惑ひすて六の道の道に歸らじ物を五相成身
頼めどや昔道の立つ柳にたえにし小野の又音のする
逢難き法に近江の山高み三度消えける身を如何せむ
歸り来て見るぞ悲しき諸人の柴舟繋ぐ法のみかきを
休み来て頼む心も有なまし法の坂行く山路なりせば
誠深く思ひ出べき友もがあらざらむ世の跡の情に
有を厭ひ無を忍ぶは習也さて戀れば身社つらけれ
頼むぞよ跡へむ竹の園の中に我後の世を思ひ忘るな
契置かじ契ねばとて忘へくは只忘られて報をも見む

まはりこし餘波は末も久しかればこの山の松の村立
心ざし君に深くて年たけぬ又生れてもまたや祈らむ
手向にも折から神や靡くらむしでに風まく夕闇の空
参る人のまろねの跡を殘す霜は神の心にあけの玉垣
思はなむ思へば袖に露深しそよ春日野のさを鹿の聲
頼む神よいますかいかみ山への深き梢に猿鳴く也
頼むぞよその辛崎に立つ波のたえず心にかゝる計を
法の道奥の知るべと頼む哉尋ねよりぬる心つかひを
法にあひて世に有り難き悟あり心に云て人に語らじ
誠には神ぞ佛の道しるべあどをたるとは何故か云ふ
旋頭歌
古のみ山の寺にむす苦をうちらふにぞ昔にかへる
心ちのみする
混本歌
うき物と我が心をば思ひ知りぬ知るかひはなし君を
久しくまもれ
杏冠 きみはひさしくまもれ
折句 ひえのみや
人毎にえて嬉しきは法の花みよの佛の宿のものとて
物名 はしとの
秋の心習はじとのみ思ふ宿に暫しなつげそ萩の上風
講譜
七月も日も爽かにこそ照すめれいとけ穢きひとの心を
人人心神に違はまの竹の緩まむ方を矯めて見よかし
長歌 既見前
やま川に ながるゝ水の 哀れにも あき瀬しら波
立つ春は 野への景色も 青やぎの いとも畏こき
君が代を 祈るころに 御垣もり 物しることは
あきの蟲 かれ行く聲も 失果てゝ たのむ御法は
春の池の 氷とけ行く 心ちして なげくみ山に

千早ぶる 神もいづちか 行く雁の 心ちはるかに
軒端なる 忍ぶとすれば 昔にも 飽すのみこそ
鳴る神の おどろく夢の よと共 寝にける身の
儂なさを ゆふべの露の 消がてに 法のごもし火
挑げよと すゝむる君を 仰げども そら行く月も
晴道らぬ なみだの雲を よはの風 拂ふまことの
道しばも 老にける身に 置く霜の 變りのみ行く
秋の色に 峯のこがらし 吹來れば 袖のうへのみ
うちしぐれつゝ
神よ如何に心にもあらぬ山風に又消ぬべき法の燈火
百草の花と思ひてたてまつる七ます中のをの聖に
かた山寺にこもりゐてはたゞ二諦の道理より外に
思ひつゝくることもなし其の道理を歌によまむと
思ひけるなるべしさてしも又かやうなれば未だ日
吉に百首など詠みて奉ることのなかりければにや
三度治山寄心於山王 數年興教容身於教門 今
生知縁深來世能引導
于時建曆二年壬申秋九月草之 老僧記

初初在梵王 初未釋尊 漢家者孔子我朝
者神宮三國之言音雖異片州之和字攝 他者賦
道理之揆在中心 始終之一念蓋下愚 忝受
一諾 神之苗裔 彰百首心於風情 而已
神祇月 風 雨 曉 朝 野 海 池
川 田 鳥 松 夕 夜 山 旅 戀
祝 山 家 草 花 杜 述 懷 釋 致
右各寄四季合百首也
詠百首和歌
良山老僧慈鎮
神祇
結頼むぞよ天照神の春の日に契りし末は何かくもらむ
は頼むぞよ頼もしき哉春の日に契りし末の曇なれば

昔年月やあらぬと云ひしよの涙にかすむ有明のそら
夏よの夜のまをだにも慰めよ嶺捨山の山のはの月
海の果は有ける物を秋の夜の月を明石の浦に詠めて
我心木の葉隠れもなき物をさやかに照せ冬の夜の月
冬の夜の月は梢にくまもなし庭の落葉に霜を重ねて
風
つれもなき人の夜枯に習へかし花に待るゝ春の山風
厭はでぞ心のどかに眺めつる花ちりて後の春の山風
圓居して暑さを厭ふ夏山の木の下風にしく物ぞなき
九いつも吹く風とは風も思ふなよ萩の上葉に秋の夕暮
涙よりかつく袖に露ちりて時しもしるき秋の初風
木葉落て染べき色もなしとてや時雨の雲を返す松風
雨
青柳の糸に玉ぬく春雨の雲になり行く夕がすみかな
梅のはな霞のくもの春雨にぬれてぞにはふ夕暮の空
身身のうさをこまかに思ふ夕暮に袖の上迄春雨ぞふる
秋五月雨はみつのみまきの水越えて堤の上に淀の川舟
秋の雨の野分になれば真葛原恨むる風ぞ最ぞ烈しき
秋の雨の餘波の秋の雨のはれ行く雲の末ぞ涼しき
秋の雨の餘波の秋の雨のはれ行く雲の末ぞ涼しき
木葉落て梢寂しき冬の山を空しく過ぐる夕時雨哉
一覺東な雪こそ冬の雨なれや時雨は秋の物ならぬかは
寒からでふり來るとは無物を氷る雨をや雪と云らむ
曉
おぼろなる月は入りぬる峯に又花に光の有明のやま
夏の夜はまだ青ながら明けぬとや木綿附鳥の曉の聲

堅き炭を搔埋む火の消なくに霜に任せて明くる東雲
松と竹と花はまだ見す冬の今朝氷れる雪の消遣り哉
三世迄の佛唱ふる野伏たち春の御まりに参る人かは
黒髪に年を重ねて置霜の雪に成行く身を如何にせむ
雜三十首

雙葉より心にかゝる葵草かさねてすゝ和歌の浦風
君が代は濱の眞砂を一つづ千年の敷に取り盡す迄
偽の舌のさきこそ悲しけれ糺の宮はおはしまさぬ
一月も星もさやかに照すかひなき此世の人の上の空言
こし方を皆悟れどもかひなき今くる道に迷ふ心は
ごにかくに心につかむ言の葉は時雨に任す朱の玉垣
我戀よさしも乾かぬ袂哉あるは逢はむと云し人かは
それもいさ爪に藍しむ言の葉のしいし取置く禪姿よ
山里に住得て住や是ならむ其人だにもなき世也けり
思知る心の綱をよもに引きて老の弊覺の亂行くかな
物の恥を思知る人はごに斯に心ご身ご世に有難き
貧きは誰が咎なれや物を持たば人にのみ社取せし身の
有らせばやご思人のみ失敗であらざれかし思人のみ
昨日今日袖を離れて散る露は昔におつる涙なりけり
をり／＼に厭ふ物から情あるは花さそふ風月に浮雲
善惡を思知る人を難波濁さてもかくても世に有難き
東路や幾度ふじの草枕むすぶ日敷をかぞへわらむ
如何にして二つの山に家なせむ春はみ吉野秋は葛捨
東路や毛深き馬に香懸て我むかはさも溺れがちなる
麻手はずはつきの枝にゐる鴉の静ならばや賤が庵迄
何となくかよふ兔もあはれなり片岡山の庵の垣ねに
思ひくまの人は中々なき物を哀に犬の主を知るらむ
み牧より草おふ馬の口のをを見るも悲しき世の習哉
紺緋の糸紺の淺きを乾てなによくはかや此世なる覽
町くたりよろほひ行てよを見れば物の理皆知られ見
淀大津送り迎ふる年のはて唯道心の道にぞありける

擔持つさうきの入れこ町足駄よを行道の物と社みれ
誰ならむ目をしのごひて立てる人一つ世渡る道のほこりに
有か無かあな儂なやの例哉反古やく灰の風に吹れて
三古の三のみ室ぞしのばる十五大寺の跡を見るにも
これやさは高野の山に住む心關伽振る鈴の夕暮の聲
ひえの山登義や近く成ぬらむよはに汚たる問答の聲
人を見るも我身を見もこはいかに南無あみだ佛く

吾大菩薩者釋尊彌陀一如之和光神宮八幡同體
之本源也以和語和經文以信心信尊神
如在之禮讚法而滿足本有之法樂愛而奉行大神
之擁護道理勿違于道小量之懇念求願豈背
于願於戲法華百句之要文詞花十ヶ之風月今
以眞言深轉法輪雖似狂言又通實道
故妙經八軸之中二十八品之内取百句爲百
題其詞云
詠三百首和歌
序品

如是我聞
我聞くと傳ふる人の微りせば争で佛の法を知らまし
佛には終に成べき身にあらば法の花を我聞くとして
我聞きし鶯のみ山の言の葉は鶴の林の後にこそちれ
石清水は今いふ人の言の葉のさながら浮ぶ流也けり
書をもさやかにぞ見る出る日に迎ふ光の曇なれば
入於深山
芳野山奥の栖かを尋ねつ佛の道はこれよりぞ知る
悉捨王位
法の爲と思にればすべらきの跡をだに社あたに捨しか
其後當作佛號名曰彌勒
鶯の山入りゆく月の跡に又出べき御名を聞ぞ嬉しき
我見燈明佛

燈火の光をさして答へずば御法の花は誰か待ち見む
方便品
佛たち悟れる宿のかごなれば感ふ我らは入り難き哉
諸法實相
津の國の難波のとも誠とは便りの門の道よりぞ知る
止不須説
やめく止めし門も終に尙こふに依てし君が言の葉
禮佛而退
上慢の限なりけり鷲の山五千の人のさをたちしこと
其御法心に入らで出にしはえぬを得たりと思人のみ
出現於世
今ぞ知野べに咲べき蓮葉を照さむとてや山の端の月
開佛知見
世に出で佛の道をひく人は元の心の通るなりけり
唯一乘法
いづ方も残さず行きて尋ぬとも花は御法の花計こそ
如我昔所願
かつしかや涙の道にぞ渡しける昔思ひしまゝの繼橋
常寂滅相
昔より心長閑に行く舟は感ひしなみの末をしぞ思ふ
乃至以一花
惜しけれご一枝折らむ櫻花さてぞ佛の種と成るべき
若有圓是法
こえてみな佛の道に入るなみは此法を聞く末の松山
知法常無性
難波湯深き江よりぞ流れける眞を知るぞ水ぐきの跡
世間相當住
改まることも落による波をかけて顯す君が御代かな
聞是法亦難
譬喻品
法の道にあふ嬉しさを岩躑躅片枝も色に出にける哉

必當得作佛
高き嶺に先だつ人を見からに我も行べき跡を知る哉
猶如火宅
六年ふりて朽行く宿に燃る火は悟らぬ程の栖なりけり
惑ひ行く浮世の中に燃る火を古里とのみ思ひける哉
等一大車
うしやは斯る車を有と知て乗ばやまたに思ざりける
悉是君子
教誡く御法を見もかひぞなき我垂乳根は鶯のみ山に
諸苦所因
心から越え行く道の苦しきは峯の花迄思ふなりけり
信解品
無上寶聚
一思知れかみなき程の寶さへ求めてうるは誰故ぞさは
二沖つ波思ひもよらぬ磯ね松かゝる寶の花の咲きける
三時しもあれば求めぬ人もきてぞ見る柳櫻の春の錦を
淨佛國土
我が心人の爲迄餘り行けば清くも國のなりにける哉
七あだの花心をしめて眺むれば佛のやごにとものみ奴
止宿草庵
草の庵に假初臥しをする迄も我垂乳根の名殘也けり
七如何にして都の外の草の庵に暫しも止る身ご成に劍
報佛之恩
泥て如何に浮世に廻る人の親の報をだにも報盡さぬ
以佛道聲
七松風の聲を傳ふる萩の葉もそれ故にこそ人に知るれ
七松風の聲を傳ふる言の葉も鹿の苑にや靡き初めけむ
藥草喻品
現世安穩
一後世も嬉かるべき道なれば今日行空も長閑かりける
二吹く風も枝を鳴さぬ行末は散らぬ花をや宿に眺めむ

普皆平等
 ①けふの空に普く瀧ぐ雨の色は昔人ごごに心にぞしむ
 汝等所行是菩薩道
 ②志賀の浦に春見し花の色乍ら露も變らぬ鷺のみ山路
 授記品

無有魔事
 ③事をさふる物こそなけれ借も若し有らば宛ら法の里人
 心尙懷憂苦
 ④悟り行く人はふたりに成にけり羨しきに濡る袖哉
 化城喻品

觀彼久遠
 ⑤する墨のいふ計なき古も今日かきつくる心ち社すれ
 從冥入於冥
 ⑥頼むべし闇より闇に移るこも影に影そふ月も出なむ
 願以此功德普及於一切

⑦おこなひの果に唱ふる言草をうるける袖や天の羽衣
 以是本因緣今說法華經
 ⑧見ぬ昔はるかかむすぶ岩代の松も契も今やとくらむ
 權化作此城

⑨かりそめの宿とこそ聞け旅の空ながむる末は紫の雲
 法道の道に今日かりそめに草枕結びし末の宿ぞ嬉しき
 五百弟子品

內秘菩薩行
 ⑩山のはの月にぞ乘し暫しこそ野へ行鹿にかくる小車
 其不在此會汝當爲宣說
 ⑪法の花散れ共失ぬ物なれば今日見ぬ人に尙も傳へよ
 不覺內衣裏

⑫種の上の露の迷をうち返し衣のうらの玉を見るかな
 入記品
 ⑬我が願滿ちて嬉しきまどゝかな誰も望のかなふ席に

法師品
 法華最第一
 ①思きや八百萬世の法の中に勝れて匂ふ花を見むとは
 ②春の山の野原を詠めすて庭に蓮の花を見るかな
 ③三度まで移し替てし大空に數かぎりなき光をぞ見る
 柔和忍辱衣

④墨染の袖をこはや法の師に其ぞ眞の信夫もちすり
 寂寥無人聲
 ⑤草の庵に聲も心も澄ぬらし人はかげせぬ光をぞ見る
 寶塔品

有七寶塔
 ⑥目もあやに雲るにぞ見る古の聖の住みし宿の氣色を
 移諸天人置於他土
 ⑦かへり来て見るらむ物を驚の山天の羽衣うつす袂を
 ⑧移替し鷺の山へのみ空よりいかなる月の澄昇りけむ
 皆在虛空

⑨天の原思ひかゝらぬ雲の上も眞の道の宿となりぬる
 諸寶樹下
 ⑩木の木や寶のどぼそ明く方に數限りなき光をぞ見る
 ⑪世々をへて木の本毎に散花は久しく匂ふ例なりけり
 擔負乾草

⑫法の爲例ふるはよな猛き火に枯たる草のやけぬのかは
 是名持戒
 ⑬一づ法を暫し保てば十の罪も潰さぬ人に成にける哉
 提婆品

皆因提婆逢多
 ⑭有りし昔われ導きし柚人を今日は仇とや人の見らむ
 ⑮又聞成菩提
 ⑯一君も佛われも佛になるならば苦む人は皆のがれなむ
 ⑰渡つ海や月はすまぬと聞からに同じ光は尙山のほに
 ⑱誰か知らむ我身を人に云懸て寄來る波の底の深さを

龍女成佛
 ①玉故に出ぬと見えし海の月やがて南にさし昇るかな
 ②渡つみや願て南にさす光玉をうけしに兼て見えにき
 勤持品

何故憂色
 ③芭蕉葉やいかなる風を傷むらむ秋の心ぞ色に出ぬる
 我不愛身命
 ④諸人の命にかふる法なれば弘むるがひの無らざらめや
 ⑤法の爲惜まぬ命つきせすばうき世の中に唯忍びてむ
 安樂行品

在於閑所
 ⑥嬉しくも心しづかのすみかには誠と知るも又誠かは
 ⑦法の爲安く行べき道や孰處人もとひ來ぬみ山への里
 不可得聞

⑧見す聞す況て手に取とは有じ今日我得たる法の寶を
 ⑨見す聞かぬ法の潮合の國に來て心を引や和歌の浦人
 ⑩思ふべし我現こそ悲しけれ御法の宿とみる夢ぞその
 涌出品

我常遊諸國
 ⑪庭の面にかゝる光は又ぞ見ぬ遊殘せる國はなけれど
 ⑫孰くにも思ぞよらぬ木の本の下より立ちし花の白波
 ⑬父少而子老
 ⑭打ちがぶ親子ながらの姿こそ昔を悟る端となりけれ
 ⑮垂乳根を和歌の浦と見えし儼や子は又老の波を懸ける
 壽量品

無有生死
 ⑯打返し誠を照す目の前に死ぬるも見えず生るゝも無
 ⑰吉野山奥に心のすぬれば散花もなく咲く枝もなし
 ⑱常在靈鷲山

⑳關のゆるも晝をもわかず鶯の山いつも長閑に有明の月

壽命無數劫
 ①是ぞ誠佛の道に入りしよりえてし命はつくる物かは
 ②如醫善方便
 ③げにぞ悟る病にえたる藥より知らぬ印は哀なりけり
 ④風に惱む眞葛が原の朝日影のどけき方の便り也けり
 ⑤得入無上道

⑥山路や感ひ惑はず行き行す思知ること知べ也けれ
 ⑦惑ふ人の心のゆくに従ふや上なき道の知べなるらむ
 分別功德品
 ⑧清淨之果報

⑨浮世をば出でし上に登り行く清き山路の限なき哉
 ⑩不久詣道場
 ⑪急ぎ行く宿しかはらぬ道なれや五の品の四つの誠を
 隨喜功德品
 ⑫如是展轉效

⑬傳ひ行く五十の末の流まで御法の水を汲みて知る哉
 法師功德品
 ⑭父母所生眼

⑮瓶の刈るみるめにかゝる藻屑迄清き光の障る物かは
 ⑯唯獨自明了
 ⑰よそに知らぬ人のけしきは遮莫獨心の月を見るかな
 ⑱皆與實相不相違背

⑳何事も誠の法に顯れてたがはずと知るぞ限りける
 ㉑悟行く心の水に染ぬれば如何なる色も浮ぶ物かは
 ㉒是人持此經
 ㉓嬉しきは終にすむべきみ山路の草も搖がぬ法の秋風
 不輕品

我深敬汝等
 ㉔二十餘り五つのもじに顯れて佛の種は隠れざりけり
 ㉕走遶蓮住
 ㉖うてばにぐ逃ても拜む心より人を輕めぬ名をぞ留る
 神力品

現大神力
十までの神の力と聞く御法げにぞ佛のしるし也ける
即是道場
此の國のなにはの浦の太寺の額の銘こそ誠なりけれ
於我誠度後應受持斯經
法の花に佛の種を結ぶこと疑ふまじと聞くぞ嬉しき
鳴累品
如世尊勅
三度撫て契し君の勅なれば今日迄誰もその示教利喜
各還本土
諸人の返る光は消えはて、其木の木や寂しかりけり
多寶佛塔還可如故
一大空に響し宿の戸ほそをば明けし聖や又もさしけむ
藥王品

而自然身
燈してし其身も元に返りにき返るも燈す報ならずや
最爲第一
遠こそ清き花には勝れたれ星の中には月ぞさやけき
星の中にさやけき月の光よりさしてぞ若き十の誓は
如渡得船
渡し守なからましかば津川苦しき海も此よりぞ知る
綱手なは苦しき海をよそに見て浮世を渡す淀の川舟
於此命終即往安樂世界
我妹子も教ふるまゝに行へば終嬉しき道こそ聞け
夕月夜さすや岡べに露さえて西に開くる女郎花かな
廣宣流布
嬉しくも廣く降りしく法の雨の潤ふ國に生れける哉
雲の山のみ法なるらし年をへて廣く降敷く末ぞ嬉し
一法の花ちらぬ宿こそなかりけれ鷺の高ねの山嵐の風
病即消滅
法の風に秋の霧さへ晴のきて潤む花なきませの中哉

成就日法
嬉しくも佛の御子の緑りとて八歳の法を二度ぞ聞く
法の名を佛のみこに仕ふとて四の心に結び入れ覺
皆是普賢威神之力
霜を拂ふ主とされる力にや又なき法の花を見るらむ
作禮而去
なれ、て涙の雨や曇らむ歸る空なき鷺のみ山路
如何ばかり露けかりけむ鷺の山苔の筵の跡の暮がた
八年まで昔の席になれ、て露分わぶる鷺のみ山路
以暮秋初冬之候入三詠一如之觀忽詠四五之拙
歌法樂三所之權現利他而思觀自念而朝市之春
花勿萎于風關仙洞都鄙之秋風莫覺於佛法王
法依此倭國之風俗欲彰淨土之月輪矣

夫當社者得名於春日末代之天悲光於秋心
濁世之月一和歌者是神國之風俗也便有法
樂一愚短者亦人間之吹也無恐于披陳歷四
序一號成意畫一心號述懷若感應道交
者蓋納受露腋哉其詞云
花 夏月 鹿 落葉 法文
春 夏 秋 冬 雜

花
よそに見て慰みやせむ山櫻まだしき程の峯のしら雲
うれしくも花をたづぬる峯ごとにみな白雲の春の曙
三吉野の雲は霞にうづもれぬ哀に花の匂はざりせば
何事も思捨てし柴の戸によしなや花の匂ふらむ
春くれば花の白波たつ田山こすゑにはまだ瀧の白波
花のちる長柄の山の木に立つ白波は志賀の浦風
花櫻ちるはならひと思へども尙いとはしき春の山嵐
山の奥にわれ獨見る遅櫻いさやたぐひもなき句かな
花は春はるは花とてよしの山青葉櫻にわかれ惜みて
花故に人にとほる、山里は過ぎ行く春の別のみかは
夏月

妙音品
乘寶蓮華
鷺の山あまた蓮の開けしを驚きながら知る人ぞなき
不鼓自鳴
鷺の山妙なる聲のゆかりには風吹かねども峯の松風
觀音品
便得離欲

ねにおふる罪と聞しも君が爲離るとするも嬉かり覺
常に思ふ心の儘によしなやと重ねしつまは思返しつ
七さよ衣うらにも夢を悟るかな重ねし妻を思ひ返しつ
以種々形遊諸國土
三十餘三の誓の嬉しきはさまゝになる姿なりけり
たさまゝの心づくしに行く舟や返る姿にあふの松原
施無畏者
畏なき道に導く光こそ我が名にたて、人にしらるれ
心念不空過
頼みてもなほ頼むかな思ふと空しく過ぎぬ人の誓を
陀羅尼品
無諸衰患
我れしきは花に風なき吉野山月はくもらぬ更科の里
羅刹女等
我妹子もけ疎き様に思ひしよ深く御法の花を詠めて
十の名を法の席に聞きしよりげに懐しき妹が言の葉
嚴王品
願母放我等出家作沙門
垂乳根を導かむとてたらちめに請し暇の末ぞ嬉しき
善知識者
如何にせまし悪き道をも善方へ教る人の無らましかば
八人の來て導く野べに出ぬれば麻の中なる蓬をを見る
勸發品

卯の花の色にさしそふたづく夜道行く末も有明の空
曉む月はのきの菖蒲に影おちて有明の空に鳴く鶉公
秋なつかしや花桶のかをる香を窓に眺むる夜はの月影
夏夏の夜の松風きよき月影を惜むとすれば明るく東雲
夏木立繁き山べにすむ月のもりくる影に涼む頃かな
夕立の洗て過ぐるみ空より出づる隈なき夏の夜の月
一月影の清見が關の夏の夜は波を數ふる程だにもなし
詠訪の海に夏の水をししく物は秋耻かしき夜はの月影
夏の夜は待つも惜むも影清き月に涼しき山の井の水
電の影かあらぬか夏の夜の寝まの月の有明のそら
鹿
ささ鹿の聲ぞ身にしむ春日山秋まちえたる夕暮の空
三笠山さして物こそ悲しけれ浮世の秋のさを鹿の聲
旅衣つまとふ鹿の夕暮に袖しをぬるくさ枕かな
秋は鹿鹿の音無ば如何にせまし獨寢覺のみ山べの里
石上ふる野の小篠踏しだき鹿こそは鳴け三輪の山本
鹿の音に野寺の鐘をうちそへてあるか心の秋の夕暮
杉の庵に夢結び行く窓ふりて初瀬の峯に小鹿鳴く也
菅原やふしみに結ぶよるの夢を殘す鹿の曉のこゑ
春日野に鹿の音たつる夕まぐれ神にぞ祈る秋の心を
さし昇る月に答へて鳴く鹿に我も三笠の山のはの月
落葉
木葉ちる立田の里の横のやに音せぬ風は時雨也けり
一時雨をば時雨と聞けど木葉ちる横の板やに風弱る也
七色變てちるは習の木葉にも思知らる、浮世也けり
秋の葉の冬の風に類はずば風も紅葉もかひ無らまし
か風の行く梢の色はそれながらた、一筋に散る涙かな
風吹く空に木葉の消やらで憂身に告ぐる頃を悲しき
神無月いくたの杜の秋の葉に松かせ過ぐる夕暮の空
山里の道は木の葉に埋もれて梢くまなき月を見る哉
村雲や梢にかゝる夕しぐれ庭の落葉に音ぞさびしき

返し
一思ひやれ雪に花咲く三笠山ならぶ梢をちらす朝日は
兄弟雙願織光花希傍外候又無闕加任已餘身忍候
此兩事面目怍悦之至無物取喻候之處重預御教
書候之間已増萬代之眉目候者也
同じ朝に又寂蓮入道の許へ申遣す初の雪にも訪
れざりしことを思ひてなむ
詠わびけふさへ更に待わびぬ二度雪に跡つけしとや
返し

一幾度も跡をばつけし山人のまた上もなき雪を見る迄
天に口なし和歌をもて云ふべし祝ふ心と思ひてか
くいへるなるべしやさしくこそ
同じ雪の朝静賢法印の房に自院雪山の雪をめ
されてうへの雪なごをかき落しつゝ進らせける
を見て誰ともなき文を投げ入れたりけるをあけ
て見れば

一消行くを惜む宿だにある物を拂てけりな雪のうは昔
かくかきたりけり其の文を隣の実命がしわざと
思ひて此の文は疑なく三位房の所爲也とこそ覺
え候へ誰かはうへの雪をとりなごしつるをば此
隣人ならでは見侍るべきとて返しの歌をよみそ
へて圓開梨が許へおこせたりしを見れば

一拂ふとも消えやらじ年をへて我が頂に積る白雪
の庭の雪に跡踏附けて惜むやと君が柄をいざ行て見む
かく書きたりけるまことにやさしくこそ
其の文は圓開梨の妹の女房右京の大夫のしわざ
なりけりされど知らぬよしにて真にあやししく誰
人のしわざにかぬしを尋ねて傳へ侍らむと云ひ
て後夕暮になりて又静賢の許より三位がしわざ
は悪しく心得侍りにけり大夫殿のにて侍りける
ものをと語ると聞きて實命承ることも侍りて

一三笠山雪ふりにける跡なれば心の春の末もたのもし
家の風傳ふる宿のあたりをば影靡くべき道と社思へ
文治六年二月十六日未の時圓位上人入滅臨終な
ごまことにめでたく存生にふるまひ思はれたり
しに更にたがはず世の末に有りがたきよしなむ
申し合ひける其の後よみおきたりし歌ごも思ひ
つゝけて寂蓮入道の許へ申し傳へし

一君知るや其如月と云ひ置きて詞におくる人の後の世
風に靡くふじの煙に類ひにし人の行方は空に知れて
三早振神に手向くる藻鹽草集めつゝ見るぞ悲しき
これは願はくは花のもとにて我死なむ其きさら
きの望月のころとよみ置きてそれにはたがはぬこ
とを世にも哀れがりけり又風に靡く富士の煙の
空に消えて行くへも知らぬ我が思かなも此の二
三年の程によみたりこれぞ我が第一の自讃歌と
申ししことを思ふなるべし又諸社十二卷の歌合
太神宮にまゐらせむと營みしをうけ取りて沙汰
し侍りき外宮の筆に書かせるに既に見せ申して
き内宮の時の手書ごもに書かせむとて料紙な
ご沙汰することを思ひてかく三首はよめるなり
朝夕に思ひのみやる瑞垣の久しくはぬもろ心かな
三山川に沈みしことは浮びぬるを借も尙すむ我が心哉
三諸其に詠むべかりし此春の花も今はの頃にも有かな
返し

君はよし久しく思へ瑞垣の昔ならむ身の行方まで
返し

一中々に願れてこそ思知れほさじとつる雪のぬれ衣
この返事に袖書して消息してはべりしを見れば
昨日寒苦遍身忘他事之處披不慮歌札勸爐
邊心灰一間重賜三品禪門述懷彌開愁眉訖興
志尤切欲罷不能
三水莖のあとのしわざに願れて面白くなる雪のぬれ衣
賢
世の末にはかやうなる僧もいと有りがたし
信西入道が子ごも一人もあだなるは見えぬ中
にも圓位上人宮川歌合定家侍従判して奥に歌よ
みたりけるを上人和歌起請の後なれどこれは伊
勢御神の御事思ひ企てしことの一つ名殘にあら
むを非可厭止とてかくしたりければそれは
其の文を傳へ遣したりし返事に定家申したりし
三八雲たつ神代久しく隔たれど尙我が道は絶せざり鳥
立ち返り返りに申しやる

一知られにき五十鈴川原に玉敷て絶せぬ道を研べしと
その判の奥書に久しく拾遺にて年へぬるうらみな
ごをほのめかしたりしに其後三十日にだにも足ら
ずやありけむに程なく少將になりたればひとへに
御神の恵と思ひけり上人も判を見てこの恵に必ず
思ふこと叶ふべしなど語りしに詞もあらはになり
にけり上人願念叶神慮かど覺ゆること多かる中
にこれもあらたにこそ
寂蓮入道昔思ふいけにはあるも朽ち果てて
枯野につゞく蘆の浦風と古池寒蘆にのみたりと
語りしあしたに雪ふりしかば詠みて遣す
昨日聞し枯野の風を身に占て今日の心は雪に埋れぬ
返し

一此間所勞大事にて皆も御返事申さず水がきば
かりを所勞述懐に寄せて申し候ふとてかくなむ
後日に所勞のびく令和進とて五首送之
一潔よきさぞすみぬらむ山川に沈むと見えて浮ぶ心は
一思餘り身にしむ風も如何せむ花も今はの頃と成なば
一云おきし心もしなじ圓かなる位の山にすめる月影
一類なく富士の煙を思ひしに心もいかに空しかるらむ
一伊勢の海に播集めてぞ藻鹽草終亂れぬえには成ける
文治六年三月五日實命召されぬと聞きて左大将
の御許より
この内を遂に出ぬる輩たづはこれぞ實の命なりける
御返り事に
千代ふべき君なれば社鶴の子の是ぞ實の命とも知れ
籠り居る事なごとのへ申す序に
憂はよくよきは又うき此世哉尙有ぬべき道に迷ひて
大既に消る法の燈火挑げずば尙うかるべき闇と社見れ
御返事給ふ
今更におもひ知るこそ思なれた何事も定なき世を
大嶽の峯さわがしく吹風をしづめすばいざ法の燈火
隆寛阿闍梨一日百首よみたるとて見せしかばや
がてよまむと思ひて文治六年四月八日午四點未
の初ばかりに筆をとりてやがて云ひつけし程に
申の終西の初程に百首かき果てたりし只二時
などの程にや題十首なり其の百首のごを別當
入道惟方光臨したりしに語りしかば見よと申す
を與じて我もよまむ數日によまむとて三十餘日
によみたるごのたまへし述懐の十首略してた
一首よみて九十一首にてたびたりし其の一首の
歌に云ふ

其の返事に

中々にも、に九つたらぬこそ千尋に餘る情なりけれ
十首づゝのをり歌をよみて口にまかせて申したり
き

郭公の題の返事ばかりあればかきつく
思へどもいはての杜の郭公昔に似たる聲になれてば
我が歌ども忘れたれば書かず

文治六年寂蓮入道思ふことありて出雲の大社へ
詣て、歸りて後文やりたりし返事にかく申した
り

昔思ふ八雲の空にたつものは色をわくべき君が面影
返事
返事
返事
返事

宮城野の木の下露はわけね共三笠と申ことこの繁けむ
返し

我こそは君が爲にはみ笠守雨に増れる露をはよせじ
其の後同じ人の許へ誓つかはすとて

君がため年ふりにける片岡の山路に拾ふ薪をぞ知れ
これは彼の入道よみたる歌どもの有るを思ひてよ
めるなり

返し
返し
返し
返し

錦木の千へかも言の敷なら立ちたる筋は是ぞ見えたる
我が道の御なさを思ふなるべし又そへたる歌
宇治川の石間をわけて泡の舞ひ亂らむ影ぞ悲しき
歌人舞人候ふよし

雙輪寺の前大僧正の許に在りけるをさなき者ご
も白川坊の留守の間來たりけり聞きて大僧正
の御許へ申したりし

山櫻主となるべき身ならねどよその匂は尙ぞ床しき
返し
大僧正
散残る深山隠れの花なれど見にくる人もなきぞ悲き

哀も唯に云てか山城の宇治のわたりの明る夜の空
鳴初むる鳥の初音におきれば唯宇治山の有明の月
河浪の響きにたるも慣ぬ身の頃さへつらき山嵐の風
衣うつ音は都のものにもあれ嵐はうごきわやの枕
今ぞ聞静まる夜はに言聞てふれば近きうちの河波
一風は皆よもの梢を傳ひ來て暗き聲にも色ぞ見えける
二杉の屋の行合はぬまより置霜の結ばぬ夢も月に成る
三假初と思ひし程に身に馴れて忘らるまじき榮の庵哉
四今宵また春日の里に宿からば昔忍ぶやとぞどもなく
五此の里は君も旅ねと思よりとほれぬ方を先ぞ忘れぬ
唯今殿下御出でてひしめきし折節ひまもなかり
しかど人の道をすさむるになりぬべしまだ返り
事せずば本意なかるべければやがて筆をとりて
返しに申し遣す十首

宇治に來て唯には云て山城の思ひけるこそ哀よの空
月影はおりるの山に傾きて鳥のそらねも有明のそら
音すべき木葉おちぬる山風を浪に隠さぬうち川霧
宇治山の嵐に類ふつちの音を人の衣と思ふうたね
草枕ならはぬ夢の枕にはさこそ聞くらめ宇治の川浪
暗き夜に紅葉の枝を吹く音は風の色ある心社すれ
杉の屋の合ぬ杉まの霜はいさ結ばぬ夢の月をしぞ思
假初と君は見るらむ我が宿の庵哀なる宇治の山かけ
諸人の今宵宿かる春日野の草の緑りの身のどこそ
昔よりこの里人と思ふ身を旅寝の夢に何たぐふらむ
此の歌のこゝを定家の朝臣申したりけるとて又
左大将よみて遣したる
喜撰餘流
あたら夜を我もたゞには山城の世を宇治山の古の跡
鳥の音の哀をかくる袖のうへに月も色ある宇治の曙
秋の色の今はのこらぬ梢より山風おつる宇治の川波

文治六年に公衡の中將祈禱成就之後遺卷數返
事之次皆水精念珠弘法大師三鉢等送り給ふ包め
る薄葉に書きつけて侍る歌
西王母桃花始めて開き候ふに向後彌其憑候歎
返事に申しつかはす

祈念の心ねより咲花は順てかひある身こそ成べき
建久元年九月に静賢法印の許よりなくなりたる
そばに花の咲きたる枝を折りて歌をつけて人の
つかはしたるごとおこせたるを見れば

是を見よ菊より外に此頃は花なしと云ふ人はあり共
返しめかしうて遣す

花もも同じ匂の枝を見て法の蓮のまことをぞ知る
その次の日櫻の花のめでたく咲きたりしを折り
て又これより遣す

野分せし秋の紅葉の一枝に折りたがへたる花櫻かな
返し
賢

紅葉ばに折りたがへたる櫻花霧は霞と見え渡りつゝ
建久元年十一月十九日東大寺棟上御幸法皇先
十七日巳刻令着宇治平等院給淨衣御幸第
二度例也殿下十五日夕先立令入給御所小川
也本堂の北廂を爲院御所御裝束如例御堂所
々修理等傍増先例是破壞之條當時之故也殿下
御供に左少將定家朝臣令參同十八日早旦十首
詠送之物忌之間沈思和歌甚無骨然而爲其道
之人不忘其時之景氣不賦止之條好上之至
也尤有興殿下十七日御幸御詠之後十八日巳
刻南都御下向御幸春日詣之義也前驅衣冠隨身毛
車を被用左大将同被參明且十九日先參御社
自其東大寺棟上御幸に可令參給件十首詠

草枕まだ香づれのなきまゝに波におどろく故郷の夢
紅葉吹く峯の嵐のくらし世に面影似たる袖の色かな
霜降る杉の板屋のめも合さこそ袖に月氷るらめ
此の寺の昔の跡をおもふにも心すみぬる宇治の山陰
奈良の都春日の里に我行かば知る由すべき人のなきも
其の後雪ふりたりける風めて誰どもなく左大
將十首の歌をよみて定家朝臣の許にさしおかせ
られたりければ誰ならむと怪みて哀さにこそと
て夕になりて返しして進らせたりけるとなむ
大將殿の十首

今年さへ花より雪に成に是何ともなくて山里にのみ
見せばやなほほれる露に影止て庭の木葉に宿る月影
柴の戸の嵐に堪ぬ荒間より冴えたる月に床を任せて
跡もなき庭は枯野の景色にて心のうちを霜埋むなり
冬枯にみぬの梢をなしてはた秋ながら有明の月
風寒み庭のやり水こほりて松に残れる岩波のこゑ
寂しとよた我が友と頼みこし竹の葉分の冬の山風
都にはしぐれしほごと思ふよりまづ此の里は冬の曙
初雪と君は見るらむ山里にながめなれたる唯今の空
法を思ふ心の末を分止めむ君に殘せる身の行へより
いかに怪しく思し召すらむ大原より尼が申すなり
定家の朝臣の十首
知言とはで契りし道も絶にけり櫻の雪に降りかはる迄
露こぼる木葉の下に跡とちて月や山路の色埋むらむ
山嵐の峯の彼方に知べしてなるらむ床の月は我みて
思へたゞ心の道も落つるかどかさなる露の明方の空
一待ちもろしき梢の空の冬枯にひとり有明は都なりけり
いかならむ結ぶ氷柱に冬深て外山の聲は四方の松風
山里のうき世隔たる住ひには籬の竹も友となりけり

積るらむ雪やはよそに雲暗く霰時雨に睡るまぬ夜は
初雪も身はふりまさる心ちして冬哀れなる唯今の空
頼むかな通ふ心し絶えせずばわくらむ法の末の契を
まことに心えぬことどもにて候へども京より法師
が申し上げ候ふよしびんきを伺ひてひろう候ふべ
しあなかしこく

かゝることこそ有れど此の歌どもとり出で、
見せさせ給ひしかば詠みて奉る歌
何ぞなくあまた一年うつり来て積る哀は唯雪にのみ
引かへて寂しき磨く野への月氷らぬ露に宿りし物を
一閑の上を夜はの嵐に任すれば哀に月を誘ひ來にけり
一月影のむすぶ契のかれぬ野は心の道の淺茅なりけり
木枯にかたぶく峯をばらはせてたゞ月影は冬の有明
山川のおのが流にこほりて松の梢に岩たゞくなり
三吳竹は冬の萩とぞ成にけるこそは吹きし秋の夕風
三都にはなほ時雨とや眺むらむ初雪ふりぬみ山への里
三昨日けふ都の空のいかならむ今もふりぬる冬の夕暮
三おもひごとく御法のすゑの身の末は雪のみ山の雪の露
これはしつはらには入道法師のやさしき御事ども
を承りてきうけうすとかやをし、也なならわら
せおはしましそ

西山法橋かくれて後三位の中將の許へこまかに
物申しなむとせしにあれより歌よまれたり
知色深き其の葉を見ても又袖の上のみ打しぐれつゝ
返しに申しやる
別れにし人の名残の言の葉ぞ袖の時雨の色と成ける
建久二年右少辨實實に山本の莊を給へたるよし
聞きておほちの日野の民部卿入道の許より慶ぶ
よし申すこと一絶をつかはしたるを見れば
書所懐皇三子孫 老沙彌如之
孫枝子葉誇恩日 枯木自然如過春

尚思へ思は同じ思ぞと有るにつけても無きに附ても
耳垂を年へぬる身と思ふとも角ぐむ草も後の世の夢
諸共に君より外と頼めども報まだ見ぬ此世なりけり
我はまだ思ひもわかぬ思かな世に從ふを世の習ども
前世の罪の報を思ひ知る心ばかりやうきがなぐさみ
一物思ふ心の秋に成ぬれば争でか袖ももみぢざるべき
三そのとよた願ふことこればかり心濁らぬ山陰の庵
三過にけり都の内に住ながら吉野の奥を淺しとはいさ
別遣二首

今日迄は數多の道に惑へ共行きつく末やげにも山陰
雪のふれりける曉月いと隈なかりしよめる歌
を左將軍へ奉る
雪月は秋あきは月とぞ思ひしを雪ふかゝらぬ冬の有明
御返し
雪雪ならぬ間にも秋は知られけり誠にひるの唯今の月
左の本幕下一條へけふ參らむなど申したりしか
ばいひつかはしたりき
三大方も君を待つる今日ぞかし時しもあれや庭の白雪
返事

今日否憂身の跡をつけじとぞいとも畏き庭の白雪
建久二年九月如法經かきて天王寺太子の御墓な
ごに詣で、其の次でに住吉に詣で、八月一日住
の江殿にて百首よみてたてまつりみな住吉住の
江の詞をおけり歸りて尋常の料に左大將殿にか
せ奉りて寶殿にこめむとする間に草本を俊成
入道見て點どもあはせ奥にかきつけたる
入道釋阿
神もいかに心に染て照しけむ御法の後も言の葉の色
返し
法の末を今こそ神も照すらめ君が添つる言の葉を見て
同じ十月に初雪ふれる朝山へのぼると聞きて同

水菰徒今宜詠謝 後榮不識七句身
これを見て和してつかはすとて
木の本の春に逢なる春なれば老木に花も咲ざらめやは
こぶしの花のゆゑしくとく出で來たるを靜賢法
印が許へつかはすとて
三み吉野の山の櫻に非すとて此初花は待たずや有らむ
返し
給はれるこぶしの花に合すれば梅も櫻も何ならぬ哉
千手といふ稚兒の外へ行きなむとすと聞きて其
のこゝろなご尋ねにつかはすとて
三つひにさは流止るか山川の底計こそ聞かまほしけれ
三月六日山にありしに雪ふりたりしかば左大將
の御許へ

三都にはやよひの空の花盛知るやみ山はなほ雪のちる
幕下御返事
三知らざりつ今日九重の花を見て尙白雪の深き山とは
建久二年五月の比隆寛阿闍梨の許より十首の詠
おくれりける
三露の身は思へば束の間なれども宿す計の草村もなし
三朝夕の煙をよその眺めにて哀いつまで明しくらさむ
三何事も有るが上には有物をなきが爲にはなき世也
三七そ、や此年へぬる身は耳垂て見と見る人は後生の角
三三今もまた君より外にと思へども弱る心の底を悲しき
三九おのづから眞を知れる人返り世に從ふを世の習にて
三〇かきくらし心しぐれて幾返り袂に秋の色を見すらむ
三一大方は人の憂にもなし果て、我が身に積る前世の罪
三二底清き岩間の水をむすびて、我が心にさらぬ山陰もがな
三三押こめて喩ふべき身を思ふには芳野の奥も尙淺き哉
返事にいひやる

露の身を宿す草葉はおほかるを所を嫌ふ野への夕暮
盡もせず去年のながめの夕煙いつ身の上に有明の空

じき人の許より消息したりける次にかくなむ
入道釋阿

一都だに初雪ふりぬ山のおく冬の奥をも思ひやるかな
かへしに
三冬の奥を厭はぬ宿の初雪は心の底に消えぬとぞ知れ
三同じ十一月晦日山の座主事仰せられたりし時住
三吉の百首のことなど思ひ合すとて俊成入道の許
三より雪の降りたる朝にかくいへる、十二月九日
三三峯の雪心の底を聞きし時山の主とはかねて知りなき
三猶々同時御慶旁重疊之條更々非申限候とて又
三六日吉のや杉の印と更にいはずを哀れなる住吉の松
三返しに

三秋いざや雪頭の上にうつす迄山の主とも思ふべき身か
三三今こそ思ひ合すれ日吉のや杉のしるしも住吉の夢
三同じ閏十二月二十八日甚しき雪の朝公衡卿の許
三より
三三知らじかし早晩雪を分れども心の通ふ跡は見えねば
三返し
三三あどつかぬ心づかひの通路は知る人ぞ知るゆきの曙
三同じ朝に詠三十首左將軍の御許へ奉る此間法皇
三の御惱願る大事に聞ゆる比なり

三三跡はをし訪では如何庭の雪よ危まれたる昨日今日哉
三〇雪に社かつ見つれ君が宿の三笠の山の花の盛を
三降閉ぬさらでもさ社柴の戸は過行く跡をよそに厭て
三三都人はみな越路にぞなりにける人のあどなき雪の曙
三三今朝見ればよもの山べは花盛朝日の風の散すべき迄
三三見せばやな淡路の島のけさの雪を宛移す池のあたりを
三三宿ごとに降りつむ雪の眺かな深き心を庭にまかせて
三三六人の宿の眺はいかに今朝の雪に哀憂身は心さへなき
三三七かき曇りふり來る雪に此頃の世の歎まで空に見る哉
三三八花よ月かすめすこしの途になほ雪の朝も達磨也けり

返し 幕下
我は向雪の跡をぞ思ひつる情あるべき今日と見乍ら
雪にだに花の盛り三笠山眞の春はいかばかりかは
柴の戸の雪の通路いかに又ふらでもよそに厭けむ跡
此花は嵐の音を埋めども峯の朝朝にちらむとやす
一とせは冬の奥にもなりけり都にふかき雪の白山
に又何たごらむ池水の朝けにかすむ雪のなか鳥
はたの春の隣ならで宿ごにおもひのこさぬ雪の曙
人はいさ我住む宿の雪の中は心には思知なむ
今朝は又雪の空も霧はれて頼あるべき世の歎かな
いな達磨人だにもなし雪の歌深き心は密宗といはむ
建久二年三位の中將夜宿の月あかりければ申
しつかはす

昔思ふ袖の露にぞ宿りける山路わけ入る秋の夜の月
返し忘却道可三思出
中將出京之朝少生等管絃などして歸りて後申
しつかはしたりし

哀愁も音に聞きこし琵琶の音に縁りは最ぞ引く心哉
風渡る軒の松の響きにも調べし琴の餘波をぞ思ふ
合合せつゝ違はぬ鐘の聲々にうちつけなりし我が心哉
かへしごも申すよしにて

琵琶の御返事
引さめて嬉しご思ふ君にけさ逢坂山の關の調べは
等の御返事
いざ知ず松風吹かぬ宿ならば我琴の音は思出でじを
方聲の御返事
うちつけに思ひけるこそ怪しけれ各なりし鐘の響も
圓位上人の十二卷の歌合の瀧糸の下巻書きて遣
すさて 大納言實家

心ざし深きに堪へず水莖の浅くも見えぬ哀かけなむ
返し

法華堂、御幸の夜よめる
鳥邊山煙の下に見つるかな一方ならぬ人のなげきを
建久三年八月觀性法橋の舊跡の西山往生院に罷
りて如法經かくとて歌あまた詠みて人々の許へ
遣すなかに殿下へ申す
山寺の秋は昔にかはらねど主なきいろは心にぞくむ
御返事
山寺の主なき色は聞く人のよその胸だに苦しき物を
幕下の御許へ申し遣す
三人のいふ秋のあはれは主もなき此の山寺の夕暮の空
御返事
主ありし昔の秋は見し物を荒れたる寺に聞くぞ悲き
往年斗藪忽浮心今日詞華彌錦肝者歎
菩提院三品羽林の許へつかはす
暮ね來る我が袂には露おちて昔のあざに秋風ぞ吹く
返し
詠むらむ昔の跡を思ふにはよその袂も露はおきけり
靜賢法印之許へつかはす
法のはなのこる句におく露は昔をこふる涙なりけり
返し
法の花ふかき契を結び涙の露もかゝらざらまし
建久四年正月に七佛藥師法とて内裏に候ひしに
雪のあしたに實修法印の許より
九重の玉の臺の磨けるを今朝ふる雪やなほ清むらむ
返し

雲の上に今日のみ雪を見ざりせば世にふるかひも
建久四年九月十三夜に左將軍幕下に奉る
君に問はむ長月の夜の月や曇らぬ空に秋を収めて
今宵かも心の底に待しは秋は山のはにだに雲の無哉
人知らじ君計こそ思ふらめ今宵の月を今宵なりとは
月をのみ思出にする憂身かな今年もこども續捨の山

心ざし深く染めける水莖は御裳澤川の浪にまかせつ
建久三年正月無動寺より同じ大將軍の御許へ申
す青陽之初上春候自深山幽谷一報花洛尊閑詞
云
見せばやな神も佛も君にのみ惠あるべき春の景色を
見せばやな都の宿の初には似ぬ物からの春の景色を
見せばやな鶯出る谷の戸に我が門占むる春の景色を
見せばやな遙にこそは詠むらめ山の霞の春の景色を
見せばやな吾妻の里の遙か迄詠むる峯の春の景色を
見せばやな谷の水はまだ乍ら我住む山の春の景色を
見せばやな雪の梢の昨日けふ春思はする春の景色を
見せばやな積りし雪は消果て小鳥木傳ふ春の景色を
見せばやな志賀の幸崎麓なる長柄の山の春の景色を
見せばやな峯の朝日のうら／＼と君打頼春の景色を
忽被三紙之任伴如對四明之勝趣不堪三情
感慈以答和而已歌苑取草

我が思ふ神も佛も恵みあらば心ぞいと春の景色に
我が思ふ君がすみかの面影は松たつ門の春の景色に
我が思ふ鶯いかに初音なく谷のさぼその春の景色に
我が思ふ山の高ねに迎る哉いづくも霞む春の景色に
我が思ふ心そへて詠むべし吾妻に續く春の景色に
我が思ふ契を水にむすばせて都ははやく春の景色に
我が思ふ櫻はまだし雪消えぬ山をぞ思ふ春の景色に
我が思ふ心も雪にぞけぬれば鳥もさ社は春の景色に
我が思ふ心や行て霞らむ志賀のあたりの春の景色に
我が思ふ日吉の影もうら／＼と君故照せ春の景色に
法皇かくれおはしまして後靜賢法印が許へ申し
つかはす
見るが上に驚かれぬる限哉はこやの山の春の夜の夢
返し 靜賢
思へ唯はこやの山の山人の花ちりはつる春の悲しさ

類なき光に色も深ひなまし今宵の月を君と見たらば
御返事
まどふ人につけて心の色を見む思籠めたる秋の夜の月
七情初めてまだた塵かぬ雲迄も思しよの山のはの月
君ぞ知る今宵の月は今宵迄誰かはどのみ詠つる身を
三年もへぬ我がおもひ知れ秋の月なほ行末も續捨の山
君と見む其面影を宿しても袖あはれなる我が宿の月
おなじ秋の暮に 定家少將

初霜よなれのみ時はわき顔に人は数へぬ秋の暮かは
三十餘り二年へぬる秋の霜まことに袖の下とほる迄
ふけまさる我が世の風弱らし袖まで脆き秋の暮哉
見し人のなき数まさる秋の暮別馴れたる心社せね
霞までとほれし人はまがひにき空しき秋の暮の白雲
六明暮れて是も昔になりぬべし我のみ元の秋の暮惜めど
七とはぬ人なれつる秋の露あらじ跡確なる庭の淺茅生
八願はるゝ思の末も風寒く谷のさぼそも秋やいぬらむ
九まださめすよしなき夢の枕かな心の秋を秋に合せて
小山田の露の假いはの宿りかな君を頼まむ稻妻の後
返事に
暮の秋を數へて知はかひもなし微有けり三輪の初霜
下とほる袖まで君も思ひ知れよそち重なる霜の袂を
我が秋のふくれれば冬の山嵐つよく身にしむ山嵐の空
三人の世の霜に時雨を染かへて別馴れたる心社すれ
藤衣そめけむ春のかすみよりさてしも秋の暮の白露
思ひ出づる昨日の秋は昔にてこの頃思ふ行く末の春
我が袖はけきこそ最ぞ哀なれ秋に後る庭を詠めて
君はさ思知らでや辿らむ願ふ栖ぞ秋のこまりよ
九獨のみ夜も明やらぬ秋の夢のさはまだ覺ぬ君も有見
秋も冬も眺ばかりは君をのみ頼むの雁の月に任せて
建久四年に人の許よりなにごかうをつけてつか
はしたりければ

一思ひける程は道に留む共今は在りかも何にかはせむ返し
今よりも盡じそ思ふ句には尙も在かを添る也けり
建久四年十月八日朝初雪のことの外に降りたりしに日吉の行幸近かるべきにてありしに左大將殿より

冬來ては幾夜もあらぬ吳竹の霜かと思れば初雪の空
雲をやがて嵐の吹きためて時雨をうづむ初雪の空
月みつるよはの心は消にけり雲やとつらき初雪の空
厭ふべき日影は軒に忘れて雨うらめしき初雪の空
ひえの山いつより風の凍りけむ都はけさぞ初雪の空
詠むべきその日も近し志賀の山暫しは思へ初雪の空
こゝながら山路思ふぞ哀なる君にわくべき初雪の空
兼てより日吉の影も添ぬらむ行幸につらき初雪の空
大方もいつかは君を思はざる雲明けそむる初雪の空

御返事に

吳竹の夜も明け方に詠むれば霜よりあつき初雪の庭
梢ふく木の葉も音たえて時雨にかふる初雪の庭
神無月いくかもあらぬ夕づく夜光につく初雪の庭
雨かくは中々に唯ふらであれな旭を待たぬ初雪の庭
大たけも日ごろは白く見えざりき都も今ぞ初雪の庭
志賀の山麓を廻るしる髪ねかつく見する初雪の庭
深山路をわくる心は浅けれどよそには深き初雪の庭
思遣る山の奥こそ知られぬれいつしか深き初雪の庭
神もいかに兼て嬉しと思ふらむ雪積べき初雪の庭
思へどもかくとも我は岩代の松もかひある初雪の庭
建久四年俊成入道の許へ侍思禪門長此道欲
貽三十首贈答於後代よし申し遣すこと十月下旬
有明の月いつよりもめでたかりしを詠めて風情
あまた出で來たればかつは空しくはいかゞとて
遣す

と聞きて
今朝は最庭の雪にもとよせて深き命を思閉づらむ
思ふらむ心のするも命なりゆきにぞふかき山里の色
返し
思ひごとく心の末も道たえてなほ夢ふかし雪の明ほの
せきかぬる心は君がやどに見よ朝日の軒の雪の衣手
建久五年に大理兼光基長とて最愛無雙の子息あり
けり侍従になしたりけれご我に似ぬことなれば
少納言になされてなむありき其の後八月に煩
ふこと久しからずしてはかなくなりき兼光聊
別當も右衛門督も辭しはらひて日野に籠り居たり
しかばとぶらひなごして後八月も過ぎて九月
の中旬の比にもなりき十五日念佛なごしてま
まごろみたりし曉に此の歎を重ねてとぶらふよ
しの夢を思ひかけず見て寢覺哀にて二首の歌を
よみたればこれを黙止すこと本意なかるべくて
日野へ消息して侍りき其比右中辨棟範も頓死し
たり又内大臣の子の大夫も家にて殺されたりと
て世にも沙汰すめり又作範僧都もはかなくなり
なごして無常の悲いつよりも思ひ知られたるか
くはあれど驚く人もなし恩愛の涙も程のふるま
まにはかなく事なればかくよめるなり

いかにばかりよその枕の夢までも思合せて袖濡すらむ
驚くやうつゝと思ひし歎きさへ夢になり行く曉の空
返事に袖がきなごしてひたり披きて見れば涼
秋八月暗然消魂以來鐘聲隨風之夕梧桐落雨之
曉只拭零涙從及窮秋多年不離傍一日無
不見而三秋欲過再觀長絶而述枕上之抄夢
忝賜形外之和語披而伺之淚不異岷山之碑
仍忘後剛慈詠短歌而已 兼 光
悲しさの思の空に満ぬれば通ひもす覽よその夢路に

夜を重ね西へ急ぐ月影を打詠めてはなむあみだ佛
霜かる籬の薄秋にかへて同じみ空の月を見るかな
秋の月の残る袂に月さえて庭の小萩は本つ葉もなし
紅葉ふく風の便りに月おちて霜にうらある庭の面哉
音づるゝたのむの雁も聲なれて哀を返す冬の夜の月
冬ぞかし糸ゆふ遊ぶ春の空の面影までにすめる月影
我が物と千里の氷げにききて冬こそ月の栖なりけれ
神無月木の下蔭もなき空を有明さまに詠め入りぬる
疎からぬ色をかさねて詠むれば月影うづむ雪の有明
我がよふけて詠むと君や思ふらむ尙長夜は有明の月
返し 俊成入道

夜を重ね西に傾く月を見て幾返りかはなむあみだ佛
霜枯の淺茅が庭は荒果てぬ同じみ空の月はすめども
秋過て霜おき増る梅の袖に月宿らずば如何に我せむ
聞にさへ涙ぞこぼる木葉落て霜にうらある庭の月影
いつまでとたのむの雁を思ふにも泪連る冬の夜の月
浮かれ遊ぶ糸ゆふ迄も哀也又や春の空を見るべき
こほりしく千里の月を詠めても冬ぞ泪の限なりける
思ひやれ木の葉もすてゝちる庭を獨詠めて有明の月
冬も月も幾返りかは見つれ共尙身にしむは雪の有明
思へ唯八十の秋を詠め過ぎて今までかくて有明の月
忽預三十首嘉什一候之條此道而何事過之候哉と
て殊に悦びたりき有興有感
建久四年十一月中旬ことに月限なかりしに筆
管方聲など打ちてちごどもあそびしによみたりし
月も冬木の葉も今は嵐より松のみ獨ことしらぶなり
月のうらは氷らぬ池に氷柱みて晴たる空も霞しに梟
同じき年左大將殿のうばの尼上うせられたりし
比雪のふりたりし朝に語りし東山光明院に長家
はありき北政所は九條殿より通ひておはします

芳髮衰翁蕭索裡俗里其本懷在彼内舉而彼已
歸黃壤僕獨明紅淚更無一事之可期猶垂
五句之殘韻耻欲之餘聊述鄙懷而已
浮世をば何事に又言づけて背きもやらぬ我身なる覺
建久六年に前右大將頼朝卿東大寺供養にあはむ
とて三月四日入洛の後地頭何かの沙汰して五月
まで在京之間内裏にて對面したりき又六波羅の
家にてあひつゝ契など淺からず其の後又遣し
たりしかば殊に物のたどへに人の心の我が身な
らねばと歌にも申したり又かゝる手にて御返事
こそなにはこのこともと覺ゆれなご申したりしか
ば返事に消息の中に何となきやうに書きませと
申し遣したりし

辭びじと思ひ餘の印をば草には非でよしとこそ見れ
返事 前幕下
覺東な霞と見えける難波瀉習はざりけむ恨をぞする
其の翌日自彼又申し遣したるを見れば
逢見てし後はいかこの海よりも深しや人を思ふ心は
返し
頼むとを深しといは渡つ海も却て淺く成ぬべき哉
副へて遣す歌
思ふと否みちのくのエぞ云はぬ壺の碑かき盡さねば
立歸り又返事に
陸奥のいはで恐ふはえぞ知らぬかき盡してよ壺の碑
凡此人如レ此贈答之人尤希有歟羊僧始爲對揚尤
爲珍事
又鎌倉へ歸り下りなむとすると聞きて京に住ま
はれむこそ世のためにもよからめと申す序に
東路の方に勿來の關の名は君を都にすめとなりけり
返し
都には君に逢坂近ければなこそその關は遠しとを恐れ

歌のよき由語りしかば此の歌をそへたり
梅雨の絶間勝なる雲のあひを空裏をする人にぞ有ける
此の返しに申し遣す

君故に心晴たる身にしあれば空ほめならぬ空裏ぞする
なほもなほ君に逢坂遠くより關のしみづぞ心涼しき
又かへし

くくるくく千代返君に逢坂の久しくすまむ關の清水も
又やうくくのごとも語りしかば
又言の葉を見れば心も浮島のはらたつまじと云は真か
かへし

夏たぬ誠駿河の身にしあれば心清見が關守に問へ
又暮下の許より
又夏引の糸五月雨で結ばれ逢見し人に離れえぞせぬ
三日下向はのびたりとあれば返事に

夏引のいと離れえぬ契にて三日月過ぎば秋の夜迄も
又あれより
秋夜の望月の駒引く迄は都にいかきのみすむべき
かへし

なほも唯都にをすめもち月の駒に心をげに勇むまで
又あれより
夏の夜はたゞ一聲に郭公明石の浦にはほめきぬらむ
返しに

一人なみに頼みかくとや郭公明石の浦に思ひよりける
副歌
吾妻こそ君が栖と思ひしに和歌の浦にも立馴にける
かやうの文わが女のなかに君のいかなる名かた
むなど申し遣しけるによせて又

君故はあやしき妻のなだつとも恨はあらじ墨染の袖
返し
千代返も又や千代まで和歌の浦かく住吉な都近くて
墨染といふ迄知りぬ衣かは清き名ぞたつ陸奥までも

ついでに
常よりも今日の絶間ぞ待れける間か問はぬか立居
いつの間にか馴初めて東の間も問はれば人の恨めしき哉
問はぬ間は恨めしけれどなぞも斯戀しきは隙なかる覺
かへしに
待兼ねて心弱くも訪物を誰があらせける絶間なる覺
程もなく馴ぬるにてぞ知られる唯前世の契也けり
戀ふと云な恨む共聞くとに斯に嬉し心ち社すれ
禮紙に紅梅の檀紙をしたればかくいひ遣す
折なくて包込めたる梅の花心の色を見するなるべし
かへし
九色も香も包む袖より洩出る梅にはあらで蓮花なる覺
興隆庵藤島の事申すごとこなたかなたにかへる
べきなりと常にそへごとに申さるれば
君故に越路にかへる藤波は我が立つ袖の松の末まで
返し
墨染の立つ袖なれば藤島の久しき末も松にかへるか
其の後又四五日過ぎてあれより
絶間にぞ心の程は知れぬる我のみ忍ぶ人はとほぬに
かへし
思ふらむ心の底を探るまに却りて人に恨みられぬる
あすこと呼びたれば罷らむとてあるに又あれよ
り
いかにこは隙なく人の戀しきはいつ習ける我心ぞも
今日も又忍ぶ氣色を見せばやな夕も夜もけきも訪ねば
返しに
我ぞ唯何とも知らず身は焦せ非ぬ戀とて習はずと云
折々にさしも待ける心こそ此言の葉の色に見えぬれ
これより申さむとしつるにこそをへて遣す
偽の君が宿には吹かざらむ身にしむ物はあすを松風
かへし又立ちかへり

又あれより
偽の言の葉茂き世にしあれば思ふと云も真ならめや
頼むれば頼れじとは思はねど思ふも知す思ぬもみす
返しに
偽に習ひけるこそ怪しけれ頼む中にはよそに思ふを
嬉しくも厭はざるらむ心より人の思ふは思知らなむ
此の返事を見て立ち返りはしたなき口答のねた
く思ふとあれば其の返事に
君に馴て外心なき妻なればうら返りたる嬉さなる覺
又たちかへり返事
み馴たる袂も袖も夏衣うらなきとは知らざらめやは
又翌る日にあれより來たりしことをこに思ひ
出づるごと
夏衣たちきたりしは墨染の一重にけさも人ぞ戀しき
又かへしに
君を思ふ心はけさに限らぬを薄く戀ひける夏衣かな
あれよりいはぬ日のありしかばこれより
見せばやな君が玉章取出てとほ絶間は忍ぶ氣色を
神も聞け尙朝倉の返しても嬉しきとは君になれぬる
かへし
忘れじと結びしものを玉章のかき亂れたる我心をば
返しに
又あれよりそへたる歌
東の間も通ふ心の離れねば哀に夜はの夢に入りける
これより又そふ
玉章を松につけても岩代のむすぶ契を思ひ知るかな
かへし
君と我と結びてけりな岩代の松と友にて久しくと
大事の間ゆることなど申し遣したりし返り事の

松風の音せぬ折は忘るゝか憂身とならで驚かさばや
副歌
偽は色にも見えず風吹かす心ぞしみて人はこひしき
六月十七日に今日罷らむする日の朝にあれより
いかに斯過過ぎにける月日ぞやけき東雲の明る久しき
かへし
時の間も逢ふを待間の慰めに此玉章を見るぞ嬉しき
副へて遣す
逢ふとを頼てと思ふ心には遙かなるべき今日の道哉
さてやがて行き向ひて心閑に講して翌日朝にけ
さのみあれよりのみあれば十八日ごとに三千遍
の拜みをするよし語りきゆゝしき勤なりたぐひ
なきことなり
花の本月のものとには非ね共君に逢ても立うかりしを
君が代は類ひも有じ今日とに三十勤むる末を思ふに
三笠山さして頼まば石清水きよき流の末もすみなむ
返し
夏夏の池の掬ぶ泉にあらぬ身は何故人の立うかりける
墨染のよそ入までも三六日みそちの勤め頼もしき哉
朝日さす三笠の山は石清水今ゆく末ぞ遙かなりける
石清水頼をかくる人は皆久しく世にはすむと社きけ
清かりし源なれば石清水すゑ遙々とすみぞましける
後二首の返事又申しつかはす
石清水よそも頼もし況て如何に君は久く住まむとぞ覺
代々ふとも我も濁らじ石清水その源を頼む身なれば
これより物申すことある次に
君故は信しきともあるまじと思し程に蟲の音を鳴く
幕
秋近く成もて行けば蟲の音も勇む聲々有かぞぞ聞く
九月盡日自天王寺遺石暮下之許和歌也
かさりとも思ざりせば秋と共に心盡しに返らまし身の

ついでに
常よりも今日の絶間ぞ待れける間か問はぬか立居
いつの間にか馴初めて東の間も問はれば人の恨めしき哉
問はぬ間は恨めしけれどなぞも斯戀しきは隙なかる覺
かへしに
待兼ねて心弱くも訪物を誰があらせける絶間なる覺
程もなく馴ぬるにてぞ知られる唯前世の契也けり
戀ふと云な恨む共聞くとに斯に嬉し心ち社すれ
禮紙に紅梅の檀紙をしたればかくいひ遣す
折なくて包込めたる梅の花心の色を見するなるべし
かへし
九色も香も包む袖より洩出る梅にはあらで蓮花なる覺
興隆庵藤島の事申すごとこなたかなたにかへる
べきなりと常にそへごとに申さるれば
君故に越路にかへる藤波は我が立つ袖の松の末まで
返し
墨染の立つ袖なれば藤島の久しき末も松にかへるか
其の後又四五日過ぎてあれより
絶間にぞ心の程は知れぬる我のみ忍ぶ人はとほぬに
かへし
思ふらむ心の底を探るまに却りて人に恨みられぬる
あすこと呼びたれば罷らむとてあるに又あれよ
り
いかにこは隙なく人の戀しきはいつ習ける我心ぞも
今日も又忍ぶ氣色を見せばやな夕も夜もけきも訪ねば
返しに
我ぞ唯何とも知らず身は焦せ非ぬ戀とて習はずと云
折々にさしも待ける心こそ此言の葉の色に見えぬれ
これより申さむとしつるにこそをへて遣す
偽の君が宿には吹かざらむ身にしむ物はあすを松風
かへし又立ちかへり

七年たけて生田の杜に返る秋を眺め煩ふ身とは知らずや
我袖の上にくる時雨いかに染行く浮世なる覽
建久六年十二月二十日より寒の御祈を奉りて侍
りしに第五日に大雪ふり侍りたりし次の朝に定
家の朝臣かくなむ申し遣して侍りし

定 家

庭の秋こすゑの春に驚けば君にぞなびく越のしら山
豊なる年のしるしを今日こへば一つみ山の谷の白雪
降初めて露によりし夕風に夏の氷室を風よちぢむ
尋ても山は今日こそ見べけれちの岩の雲の月影
みづうみは雪の雲に見えじかし霞を包む峯の朝立
誰わきて神の心をさけぬらむとつしの濱の雪の一
ふむ跡も本より庭のすみか哉いかい眺むる白川の里
いづりも心よめ庭のあそ今日ぞ誠の君が白雪
神葉やあまてる神のゆふ稗かけてさえつる庭の白雪
和ぐる光をおなじ雪に見てかよふ心を空にくもらぬ
返事

返事

限りあれば冬の微に降り積る雪故にこそ春秋も見れ
流れくる雪の上尋ぬれば誰かはしらぬ北の山もど
氷室さへ嬉しくなりぬすべらぎの君に契を結ぶ餘に
尋ても野べは今日こそ見べけれ千里の氷月に通ひて
河に鼻雪の雲に外れつ、越路を見する志賀の辛崎
君と我と共に分てやとけぬ覽とつ神路の雪の二條
君がかくたづぬる跡ぞ哀なる雪のすみかの白川の里
嬉しくも聖の跡を今日踏つ君がみゆきを我物と見て
木綿稗かけて祈しかひなれやひえのみ山に積る白雪
これよりそへて申し遣し侍りし

返事

君が夢春を導く白雪をこそどとはいはじ花のかよひち
同じ年俊成入道成家の朝臣中将になさむこと殿

哀哉檜原杉原風さびびてましらも鳥もかしましきさへ
建久七年十二月二十六日つとめて内大臣の

深き神に感ふ心ぞ無りける頼む日吉の影をまつとて
年の暮て神より神に移る哉いつか出べき我春の日は
御返事

御返事

世の人の宛暗き中にあて我春の目をさりともとのみ
我頼む日吉の影は君故に最ご開無くならむとやる
同じ年雪の朝に内大臣殿より
今日來むと頼めし君を待程に跡惜ますと雪や怨むむ
御返事

御返事

跡惜む雪の恨を思ふとて今日こぬ人となりける哉

御返事

元久二年正月十三日長房卿有問答之次世間有
漏之法數个篇目贈答之次消息上に檢付け遣はす
歌也

御返事

世の中よこはいかにせむとに斯に思ふも苦し春の曙
思ふ道にまづ先だつぞ哀なる涙よ何の知べなるらむ
御返事

御返事

九十に満ぬる年の春の花この品にぞ匂ふべらなる
人のとよのの野澤の春の草は生ひて嬉し心ち社すれ
何か惑ふ本の雫も末の露も常なき道も知べとを
露置て涙こぼる、袖の上に曇らぬ月の宿らざらめや
悲、露命之終於他、思、雲客之首於自、是皆世上之
常途也勿、憚、貴下之前途、御判
承元二年二月二十三日愚狀之次進御所、詠、一首、
都には似ぬかいかにも山への春の景色を人のとへか、
勅答
山里はうきが慰むとこそあれ間はぬならひは_七終に尙契し庵に年もへむ待たれてこしは人ならね共
八山陰やとほる、人もとよ人も昔も今も夢かうつ、か

に申せどて

敷島や道を尋ねば三笠山なかの跡しも隔てやはせむ
返事不覺悟出家入道之後如何此餘執無答之由
也方今遙思四明之風景一忽述三十首之露詞不
願容、嘲、寄、禪、居、而已、門下槐樹
一君がすむ山の奥をも見つる哉長き夜頃の夢の通ひぢ
二風につけ月に任てあくがる、心の果は君があたり
三世のうきをよそに聞なる山の奥に尙鹿なれば同秋風
四年へぬる我が立つ袖の杉村に幾秋風の君をさぶらむ
五年まだ見ねば知らず長柄の山なれご梢の秋に通ふ面影
六哀れいかに志賀の朝霧仄々と浦漕ぐ舟の跡眺むらむ
七悟り哉空しき色を君見よと木の葉降布く比良の山風
八世中の覺東なさに迷ひぬと君にを上げよ山の道は曇らじ
九研くなる玉の光のかひあらば君がみ山の道は曇らじ
一〇傳へ来る跡はつきせじ岩がねの動くとなき寺の微に
御返事
二ふみ見ても我が思をも思ひ知る忍ぶ日頃の戀の通路
二月に吹く峯の松風誘ひ来て我が眺をば君につぐらむ
三鹿はなげと世の憂事をよそに聞く山の奥には非ぬ秋風
四風ならで君がとふこそ嬉しけれ我が立袖の杉の微に
五袖に志賀の漣かけくらしながらの山の秋の梢は
六辛崎や秋の朝霧仄々としまなき舟の跡をしぞ思ふ
七君がとふ言の葉風の微せば空しき色の散を見ましや
八諸共に秋の月にぞ契りおかむ世にふる道の末の有明
九岩がねよ君が縁りの君なくば動かぬ寺も跡無らまし
四十一首

御返事

漢字素不、知、隔、四、韻、於、坐、禪、之、床、和、語、自、得、開
吟、三、八、義、於、止、觀、之、窓、而已、禪林朽木
〇君知るや山路はるかのかの夕にも心使のかよふしげさに
一峯の月麓晴れ行く志賀の浦の雲の千里に今宵いく村
二動きなき寺の砌に跡どちていつか開かむ君まつ門

驚かぬ都の中の言の葉を思ひ知れどや山のおくまで
一人知れぬ春の夢路に感ひても現の袖やなほ萎るらむ
進、慮、橋、歌、
一祈りえて嬉しき雨のぬれ色に匂をそふる軒のたち花
追、啓、
熊、染、
無、
百、
山、
有、
披、
謙、
三月十七日 内宮禰宜氏良上
越後律師御房
春日拾、五、十、鈴、河、吉、橋、良、山、御、百、首、
詠、三、三、首、和、歌、
知、
神、
件、
吉、
天、
十、
師、
五、
神、
七、
八、

神感有、瑞忽
禰宜正四位上荒木田神主良
一禰宜正四位上荒木田神主氏良
は五十鈴河波
神風の空
長柏、謂、
生水上也
婆羅門僧正
太平九年
天竺僧佛壇、殖、
神風の聲
禰宜正四位上荒木田神主成定
神風をひるす神風
權禰宜正四位上荒木田神主滿良

〇三つくく身を知る雨の袖の玉願ふ蓮の飾をなれ
 〇秋はつと聞初めしより霜枯れて春もめぐまぬ谷の陰草
 〇から枝をきればはゆる葉の松たつきの音に絶間有すな
 〇斧音今に不止之尤可勝之 御判
 〇出家之由兼不告之由令申たりしかば遺す
 〇家を出て家に止れる君なれば道の知べを尋ねざる覽
 〇出ながら尙古里にさまる身は君を頼む道知べせよ
 〇隆寛阿闍梨父の資隆入道におくれて山里に兄弟
 〇あまた集りて追善すと開きて遺す歌
 〇故郷にのこれる杉の紅を染むるしぐれは涙なりけり
 〇一列に飛ぶ雁がねの諸聲に子を思ふ道に感はさる覽
 〇返し
 〇神無月涙しぐる古里はそめしにも非ぬ衣をぞきる
 〇立ち昇る煙絶えにし大空に雁のよばふるよはの諸聲
 〇公衛中將の許より
 〇今ぞ知る其言の葉に咲花は雪のうちより微ありける
 〇返事
 〇言の葉にやがて花咲く微をば雪の中より誰も知る哉
 〇歎く事ありて遺しける
 〇何故に消残りける身なるらむ哀かひなき袖の露かな
 〇侍従定家の許より定長入道の物語を聞きたる
 〇立つ袖や月の雲るにやどしむる心をみかく峯の秋風
 〇返し
 〇比良の山月の雲るに宿はあれど心の谷の岩陰にのみ
 〇山にて詠じたりし歌を副へ遣す
 〇定家
 〇み山木は嵐の時雨にて残れる月や色まさるらむ
 〇峯の月谷の岩戸もまたわか唯世を厭ふ道をのみ見て
 〇殿の大納言殿彼十首歌本歌再寂運和可御覽之

〇住まじやと思はぬだにもたづね入る契は深き鶯の山風
 〇影殘す月のみかほの寂しきにくもふき拂ふ鶯の山風
 〇うつしおきし人の心を知る人の心すよき鶯の山風
 〇三度まで我が立つ袖に立返り行方知らる鶯の山風
 〇思ひいるきみが心にすむ月の光をみかく鶯の山風
 〇荒果てかきかえが苑と見えぬべき草の中より鶯の山風
 〇あなたふそ有縁無縁のもろびこの心の塵に鶯の山風
 〇始めおく御法の聲に打ち添へて年を限らぬ鶯の山風
 〇今こそは思合はすれ君が爲に移しおきける鶯の山風
 〇かきつけし言葉は昔に埋れて深きそとばに鶯の山風
 〇尋ね入る鶯のみ山の露にすまばそ月の影も宿らむ
 〇月入りし鶯のみ山の跡に迷はぬ人も有ける物を
 〇移しおく鶯のみ山の深き跡も御法の道を知る人の爲
 〇此の頃や鶯のみ山の月影も我が立つ袖に光さすらむ
 〇常にする鶯のみ山の月かげの横川の水にうつる印も
 〇今日ぞ思鶯のみ山の月一つ水我思ふ人に限らずもがな
 〇教入る鶯のみ山の法の道おどろの露を君拂はずば
 〇跡あらじ鶯のみ山の月なれば訪来る人を照ざらめや
 〇常にすむ鶯のみ山の月なれば訪来る人を照ざらめや
 〇二つある鶯のみ山の月なれば訪来る人を照ざらめや
 〇和歌贈答消息
 〇春の暮月々之三朝は天神曲水宴御作序作賦不
 〇略其句一朗詠被書入候とこそ承り候へ如し此
 〇事非我有候へどもめでたきも中々は被庶幾
 〇候間今朝蘭の桃の色の濃く候もどに立ちて見え
 〇候へば
 〇三十年になるてふ桃の花盛君もろ共に見るぞ嬉しき
 〇志之所之申状尾籠候哉恐々謹言
 〇三月三日
 〇諸共に君に千年を契りおきて思ひひらくる桃の花園
 〇只今如此申さばやと思ひ候ひつるに此仰こそ眞

〇由被示仍持参之令進訖其後又和遣其詞云遣
 〇懷四明幽趣奉和三十首之佳什 志賀都遺民
 〇知られぬは見ぬ山ち迄思道る心や秋の空につきけむ
 〇浮世哉いかならまし鈴蟲の頼む山路に聲たてつ也
 〇大たけの高ねに見ゆる秋の月宿の物とや君は眺むる
 〇我も知る心は行きて見る宿に離の野を分けぬ計ぞ
 〇さを鹿の夜深き聲におく露を獨外山の袖に知るらむ
 〇長き夜の更行く月を詠めても近づく闇を知人ぞなき
 〇志賀の里の稻葉に風は傳來て長柄の山を越る鹿の音
 〇木の葉分け歸りし山の初時雨聞分く袖に色や見ゆ覽
 〇法の水心にくかくせき入れて昔にかへす比良の山風
 〇我立袖之中幽居露之洞有靈山院忍驚嶺
 〇隱欣彼惠心之素懷呈此愚老之丹棘攬戀慕
 〇於雙淚裁至孝於竹箒唯志之所之更忘人之
 〇嘲而已
 〇鶯の山昔の跡に尋ね来て住まばやと思ふ我が心かな
 〇鶯の山入りし月の跡の山に感はぬ人のなきぞ悲き
 〇鶯の山音にのみ聞きし嶺なるを移す聖の跡の有ける
 〇鶯の山ふかき心におもひやれば今日も昔も有明の月
 〇鶯の山我が山にうつる月影を鶴の林に何をしめけむ
 〇鶯の山佛の道の一つなるに我が思ふ人を教入れつる
 〇鶯の山なき人まごふ法の道の音羽の露を打拂ひつる
 〇鶯の山曇りし影を思ひ出で我が立袖の月を見る哉
 〇鶯の山絶にし道は踏分けて訪来べき人と誰か知けむ
 〇鶯の山退凡下乗の率都婆まで跡ある跡を見るぞ嬉き
 〇昔惠心僧都道移慈父在世之儀近開賢聖圍繞
 〇之圖今靈山院是也我公大和尚忝就此勝絶之
 〇地敬報彼諸靈之恩御願雖似新興隆猶依舊
 〇濟度以有縁爲先和益及無縁爲本感於貴哉
 〇大哉抑有三十首花篇金玉顏聲聞不碍情感跪
 〇以奉和矣 戒心谷愚老權律師隆寛

〇實に嬉しく候へ中々に候へば委曲止候了恐々謹言
 〇乃刻
 〇蕪蒲草軒にけふ見る夕ぐれに匂ふ雫は五月雨のそら
 〇蓬屋にも誰か思ひより候ひつるに今日の蕪蒲を
 〇もて詣でふき候ひつる程にやがて五月雨もそぼふ
 〇り候につけてかくこそ思ひ給ひ候へ如何
 〇五月五日
 〇披芳札及感涙候了人はをりふしを知ること
 〇世に候ひにても候へ
 〇時しもあれ軒の蕪蒲の黄昏に雨にも名の郭公かな
 〇難黙止候之間申状見苦候々謹拜
 〇則時
 〇七夕の夜申さで候はむも無本意こそ候へ御詠
 〇歌など尤可候日ぞかし
 〇七夕にぬきてかしつる唐衣露おく袖を今朝返すらし
 〇後朝の心珠に思ひやるべきよし思ひ給へ候如何如
 〇何謹言
 〇七月七日
 〇露の袖を返す名殘の夢なれや契りまさしき星合の空
 〇如此事不堪無極候身のつねにおき出されまゐ
 〇らせて見苦しきことをのみ申し候こそ難堪候へ
 〇恐惶謹言
 〇即刻
 〇長月は今日このぬかの白菊を君が宿には最ぞ眺むる
 〇今年菊のませ盛りに候こそかへすうちすて難
 〇く候へ秋の夜も明し難く候に此間御會候はやや如
 〇何
 〇九月九日
 〇諸共に眺てしなませの中に花咲菊のけふの名残を
 〇此仰返すく悦び思ひ給へ候とかく仔細候まじ十
 〇三夜にかならず人々を伴ひ申候て可參啓候也穴

賢く努力く

躰身にさまる年をも人は送る也春を迎ふる心ならひに
降る積る雪をこえ行く年波に色をあらはす末の松山
歳暮難^三歌^二止^一候へば二首詠進候早可^レ承^レ御返事^一
候歎恐^レ謹言^一
十二月二十八日

飛來る春を迎ふる人の習より争でか年を送らざるべき
地雪のうちいとい色こき深縁ふいきや波の末の松山
地雪ふれば我身に止る年波を返る人の云初めけむ
此はしにもをばさこひかへさせたまし物をな^{〇〇〇}
積む年の夢をば誰も見る物を驚ねばや返ると云らむ
おきのりかへすは歌の道にはかくやすらむものを

今様

春のやよひの 明ぼのに 四方の山べを 見渡せば
花さかりかも しら雲の 懸らぬ峯こそ 無りけれ
郭公

花たちばなも 匂ふなり 軒のあやめも 薫るなり
夕ぐれさまの 五月雨に 山ほととぎす 名告して

秋のはじめに 成ぬれば 今年の半ばは 過にけり
我が世更行く 月かげの 傾く見るこそ 哀れなれ

雪 冬の夜さむの 朝ぼらけ 契りし山路に 雪ふかし
こころの跡は つかね共 思ひやるこそ 哀れなれ

それ大和詞云ふは我が國のことわざとして盛んな
るものなり五七七七にて五つの句あり五大五行を
表するなるべし眞俗これを離れたるものなし眞諦に
は五大を離れたるものなし佛身非情草木に至る俗諦

けるなるべし爰に煩悩にそめたる濁世を厭ひ離れて
菩提を悟る淨土を願ひ求めよと教へ給ふ諸教の中に
四教五時の眼にて侍るを願はせり斯りける國にしも
生れて侍るこそ誠嬉しく侍れ其の菩提をばいかに
してか悟るべき其の濁世をば如何にしてかは又離る
べき釋迦佛本時所化の菩薩の老として地より出で給
ひし有様を宣ふには志樂於靜處捨大衆情關こそそは
侍るめればさばまことしく其の理りを思ふ人の深き
色に染める花の都の塵に交はりて阿私仙に仕へし秋
の木の実を忘れたるはなし佛法をひろめ給ひし大師
達の跡の我が立拙に冥加を祈りしも高野の山へ入定
と聞ゆるもさてのみこそは侍りけれ悲しきかなや佛
法するにさなるまゝに其の跡は皆戦ひの庭となりて果
には鮮光を争ひむつかしき相論をのみ好みて天聰を
愕かすことになるとぞかし家を出でながらみな俗塵
に交はりて心をそらす心をそめざることをよかるまゝ
には法師の道に更に二途の道をなして遁世の聖と云
ふもの出で來たり暫しはたふさしと聞きこしかども
今は又聖と云ふものは皆さ々悪しきものなりかゝる
まゝには却りて道もなき心ちし侍れどさりては
て此の至れるまことにせめ出されて深き山に入りつ
て佛道を思惟し侍る中に初に申しつる理りに任せて
大和歌のことを思ふに戀の歌とてよめることこそ眞
に浮世を離れぬためしには皆思ひなれたることにて
侍るめれと思ひ學びてさればこれに寄せてこそは厭
離の心を教へ欣求の心をも願ひさむとて百歌に敷へた
していそちに使ひ侍りぬ若し歌の道を申すまゝに思
さむ人は情關を捨つとも思ひなし静處をねがふとも
思ひなし佛道へ入るとも思ひなし煩悩を離るとも思
ひなしして此のさいうに心を留めておごりまさりをな
むつけられ侍れかし立田川の紅葉ならねば錦と御目

に又五行を離れたることなし天地より海山に及ぶこ
れによりて大やまご日高見の世には豊草原をうち拂
ひて開け初めしより神々のおほん詞を傳へ來れる此
の外に更にさきさする詞あるべからずたゞし印度漢
朝の詞の文字又いるがせならずして其のあまより佛
の道をもさることなれと唐國には梵字を用ふるこ
となし孔子のをしへ作文の道いみじけれと大和ごと
を離れて其の心を覺らすいかなれば此の國の人の漢
字を知らずとてかろく思へる神の御代の神々神功皇
后よりさきの十五代の君の御事を未だからの文字傳
はりこざりしかばとて愚に申すべしやは此のごとわ
りを思ふに聊かもからの文字に疎してとて此の國の人
は歌の道を次に思ふべからず唯其の國々の風俗なり
更に勝劣なかるべし限あれば眞言の梵語こそ佛の御
口より出たる詞なれば佛道におもむかむ人は本意と
も知るべけれ漢字にも假名つくる時は四十七言を出
づることなし梵語は却りて近く大和詞に同じといへ
り土器と云ふものありこれをかばらけといふも弓を
ばみたらしと云ふ皆かやうの事數多あり天竺に云ふ
梵語と同じことこそは申すれ我が國のことわざなれ
ば唯歌の道にて佛道をも成りぬべし又國をも治めし
らるゝことなり此の道理に迷ひつゝ和歌といひつれば
淺香山の山の井よりも淺く夏の梢の蟬の衣よりも薄
く思へりこれこそわりにも背きまことにも違ふこ
とにて侍るぞかしこれ若しひが思にて侍らば其の由
をつぶさに承らばや抑そめいろの山の四方に四つの
國あり其の中には南瞻部洲とて佛の出で給ふ國なり
此の洲には天竺を始として様々の國多かり皆其の詞
かはれるなるべし佛此の國ばかりに出で給ひてすべ
て内外の淨土より始めて二十五有の有様を教へ給ふ
されば惠心院の源信僧都も之をとりなしつゝ書き置

にどまり難く吉野山の櫻ならねば雲かさ心にかゝり
難しふかばあれど我が國の言の葉より佛の道へ入ら
むと志し侍ることみつのみまきの深き江より起りて
さは田の秋の稻に納まり侍らむ連枝の契にもまさり
比翼の縁よりも深かるべしとこそは神も佛も照し給
ふらめと覺え侍りてなむ
事の序を悦びて申し出で侍るなり立田の紅葉吉野の
花のことを申すとて思ひ出で侍りにけり和歌の人々
こそこれを申す目にはたて侍らむすらめ序に申し行は
れもせよかしとてなむふるかりし者のかたることあ
りき和歌の會の座は披講の後なごりもなきやうに侍
るなりそれに講師讀師本座にのかれて後彼の古今の
序に貫之が書きて侍る秋の夕立田川に流るゝ紅葉は
御門の御目に錦と見え春の朝よし野の山の櫻は人丸
が心に雲かとなむ覺えけるを朗詠に聲々合せつゝ二
三反ばかりして其の座を起つがめでたきことにて侍
るなり此の詞を朗詠にする音曲ならひ傳へ侍ると申
しゝ人のありしに今々と思ひてえ傳へすなりにし口
をしよう侍りたゞし今も心えたらむ人は易く其の音曲
などは興し立てられぬべしと語り侍りき此のごと
いみじう覺え侍るなり新古今の具に興し立てられて
末の世にとゞめ侍らばや
前和歌所寄人桑門慈鎮

老若歌合 五十首和歌

老若歌合 春十首
君が代の春の例は住吉の松にかゝれる霞なりけり
鶯の初音の松をひく野べに春を重ねてたつ霞かな
神風や慙ても春に成にけり浪に角々むいせの濱萩
朝霞梅が匂を袖にしめてたなびく山に春風ぞ吹く
今日迄は厭はしからぬ景色哉花まつ空に春の山風

秋二十首
一あすを秋と待つる今宵睡らまで野寺の鐘を風

横のやに秋も暮れぬる夜はの夢を早晩残す初時雨哉
三秋の爲かひなき月の契かな音せし萩も霜にうづみぬ

立春日 残雪 霞 春水
櫻 春駒 歸雁 柳 鶯
若菜 春駒 歸雁 柳 鶯

世の中の現の間に見る夢に驚く程は寝てか覺めてか
思ふべき我後世は有か無か無れば此世にはすめ

除夜
此題懸雜無之不審此百首御詠題相違之仔細共有
爲三秀歌
作者十五人
御製 前太政大臣 右大臣
内大臣 前大納言 前大納言
侍從宰相 左衛門督 大宮宰相中將
泉宗朝臣 家隆朝臣 雅經朝臣
秀能

春といへば霞ごどもに舞きて空にぞしるき雲の上人
七のどけかれ今は水柱も打どけて春立浪に志賀の浦

愚かなる高野の山に有明の月をもよそに何思ふらむ
一皇の君までならぬ御子の徳は難波の心を思知れどや
二浮世かないとふ心は大原やおぼろの清水心にぞすむ
三初瀬山鐘の音さへすが原や伏見の夢はまだ夜深き
四哀なり耳を河瀬に洗ひしも厭はでいとふ心なるべし
五故郷を離れ越路の奥の峯に諸行無常と消ぬ身ぞうき
六紅葉せぬ松の門には入乍ら心色ある身をいかせむ
七真知らば何か我世を厭べき厭はで行かむ驚のみ山路
八世中を卯月の山の峽なれや待ぬに來鳴死で田長は
九あるにして心に深く結ばば濁るるらむ山の井の水
〇雪深し心も深し山深しとひくる人のなきぞうれしき
一今我都の春をいとひ出でみ山の秋にすむ心かな
二うれしくも春の櫻の色をすて夏に蓮にそむ心かな
三都出て鹿すむ宿のませの内に尙厭はしき女郎花かな
四嬉しくもこの呉竹の風の音にやすく打ふす片敷の袖
五今は又我が袖いとふ涙かな露はいづくぞ深草のさ
六嬉しきは花も紅葉も山おろし色なるを誘捨てつる
七極樂を願へど計り教へてや唯西へのみ月は入るらむ
八柴の庵に時雨は草葉かりにてもな故郷を思出らむ
九鐘の音を誘ふ風を聞くからに散し心ぞ散すなりぬる
〇罪深き海に風を思はで沈むとや知る浮ぶとや知る
一花をねに返すは風のならひなり我が庵過ぐる山嵐哉
二遠ざかる心嬉しき山路かな春はあづまに秋は筑紫に
三冬むすび夏さへ消えぬ水こそ心の水にうかぶ月かけ
四兼て思へば夜はの時雨の山廻り終にはいづち雪の曙
五憂を厭ふ心の色を人は見よ散言の葉をよそに思はで
六君が代を久しかれとは祈れ共憂身に松の色は思はで
七なはたのめ頼む心ぞふかき山思をすつる思知るなり
八我山のなれる様社哀なれ厭へどなして懸らましかな
九跡ぞかし暫しな入りそ夜はの月深き契を志賀の辛崎
〇夢ぞかし思儘なる身也共嬉しかるべき此世とや知る

一色にそむ心をおもへどとりべ山夜はの煙は何か悲しき
二夜はの露に人こそ袖を濡す共消て嬉しき我身也せば
三今は又世にすむ人に厭はれて心の底の嬉しきやなに
四我を厭ふ都の人を見る度に濃き墨染の袖ぞぬれぬる
五いかせむ佛の教さざる身の悟らぬ人の同じ聞なる
六都より袖うちぬれて歸る人は心にくも懐しきかな
七覺東な我山をさへ世に倣て尙厭ふとや神は見らむ
八斯計り厭へどなれる世中に暫し住ける身社つらけれ
九里の犬の尙深山べに慕ひ來るを心の奥に思ひ放ちつ
〇嬉しくも占し山べに宿ふりて馴すと聞き鹿ぞ馴ぬる
一感ふ道の涙しられし袖の色を悟る袂に絞るかへつ
二打返し裏になりてや小夜衣をぬれ袖の玉を知るらむ
三難波津に今は春べと眺れば西に開けて咲くや木の花
四家を出でや家をぬに成にけり眞の道に眞なき身は
五なにはづや深き昔もあしがきのま近き物を轉法輪所
六夢さめて心も空に詠れば我が世もふけぬ月も傾ぶく
七さぞなげに老に傾ぶく月日とて惜むか人の朝夕の空
八浮世をば離れて思ふ心にもなほ懐しき我が山路かな
九片岡に松もかひある朝日影出れば消ゆる淺茅生の露
〇悟りなばつひの友とや都出て我入る山に月も入らむ
一浮世思ふ人の心やあま小舟海に嵐のたえぬ日ぞなき
二さみだれにやま郭公待たじとは迷に廻る心なるべし
三植えてけり我後世の形草身を捨てに住む宿の垣ねに
四寶さて仇なる物を積置くや我に知らぬ命なるらむ
五あさましや佛の道に入る人の何を心に思ひますらむ
六世中に有るは有すと悟れて世に在程の世に生ればや
七皆人は心の底を知らねば深山にも尙住てありなむ
八斯て猶積りし罪を雪がすば浮世出たる名をや汚さむ
九徒らに涙は袖に餘れどもたへぬ心は行くかたもなし
〇春の火に心の野をやくからに言の葉絶る春雨の空
七影をかへて助くる神の驗あらば遂に佛の道知べせよ

何ごこは思ふもいふも道ぞなき此庵までは誰誘けむ
六十まで人も知らぬ心かな隱さぬ物を山のはの月
心こそ思ひし程になりけれ故郷とて今も厭はじ
四何ごなき口すさび迄契ける佛の御名は南無阿彌陀佛
七鳥の山のあなたも知られにき入ても月の面變すな
七たのむぞよ雲山海會釋迦大師誰故とてか世に出給ふ
康元三年十月十四日明月心隆頓右丞筆詠二十八
首一經一宿一翌日十五日之朝念佛之終數日之安樂
推同者也
百首句題
春賦
雪中早春
雪は深く春は浅きや一年に二年込るしなるらむ
七時あれば今日立つ春の霞こそ雪の上にも舞きにけれ
水郷朝霞
朝まだき淀のわたりの渡し守霞のそこに舟通ふなり
一ほのほと通ふ小舟を立こめて霞によする淀の川波
野外晚霞
夕霞片岡のへをつゝめどもなほこぼるゝは鶯のこゑ
岡上若菜
此春は衣笠岡に芹つみて神に手向くる若菜とせむ
竹籬聞て鶯
我が友と頼む籬の竹のうちに嬉しく來啼く百千鳥哉
谷底残雪
春來ても幾日になりぬ音もせで雪深かりし谷の川水
谷陰や深く積りし名残には春の雪と覺えざりけり
河邊古柳
詠むれば立田川原のふし柳なれも老木の春ぞ悲しき
戸前梅花
横の戸を鎖でぬる夜の梅が香に人こぬ間は慰みやせむ
夜風告梅

心ありて夜はに吹來る風なれや聞は綾なき梅の句に
田家春雨
一賤のをがへす山田に嬉しきは時に時しる雨の夕暮
一春の田にかへすも嬉しきは時しる雨の夕暮の空
杜間花稀
一珍らしや信太の杜の千枝の隙に一木櫻の花を見る哉
舊宅花殘
一住捨てし舊き籬の庭にしかもゝる句の花を植ゑける
嶺上望花
一山高み散りなばいかに花盛雲と見つるは櫻なりけり
一見人絶えずもあるかな山高み櫻の枝に瀧の白糸
行路見花
橋下落花
旅宿歸雁
一かりがねの聲なつかしみ都へと歸る旅寝のはるの曙
浦邊春月
一月影の明石の浦の春の夜は霞も暫し晴れやしぬらむ
近砌款冬
一山吹のあかぬ句をたぐるさてあでの河波立や歸らむ
遠岸紫藤
一藤咲かばながむる西の山のはに松にかゝれる紫の雲
三月盡
一行く春を惜む涙にたぐへどや霞は晴るゝ夕ぐれの雨
夏
薄暮卯花
一夕づく日さすや岡への卯花の色より傳ふ月を見る哉
久待郭公
一待促びて日數へにけり郭公今は山路に行きて尋ねむ
故郷郭公
一郭公高津の宮に呉はとりあやしきまでの聲の色かな
船中郭公

〇郭公なき出づる山の麓行く舟におち来る聲聞ゆなり
 〇昔へて思ひ出でゝぞなぐさむる花だに花の軒の匂に
 雨後早苗
 〇並へ行く菅の小笠に雨ふれば探もかひある我早苗哉
 澤邊葛蒲
 〇人の宿の軒に宿かる萬蒲草いつか澤邊を朝立てこし
 山家夏月
 〇詠むれば明る程なき楨の戸を叩くは水鶏さすは月影
 隣蚊遣火
 〇夕されば續く垣ねの蚊遣火を我宿ともやよそに見覽
 庭五月雨
 〇梅雨は日をふる儘に水こえてほらぬ池にも鳴く蛙哉
 遠近鶴川
 〇宇治川の瀬々の網代に鶴飼舟哀とや見るまきの島人
 湖邊螢多
 〇粟津野の尾花よ風にちりやらで鴛てる露は螢也けり
 朝折粟
 〇朝なくませの内なる撫子を惜くもあらず手向つる哉
 樹蔭流水
 〇我が門に植ゑしもしるし柳蔭いさゝを川に夕涼み見む
 野草秋近
 〇初花は野べの小萩に咲初めぬ今幾日有りて萩の上風
 秋
 〇家初秋
 〇ほに出づる門田の稻葉けさ見れば早晩重き秋の白露
 七夕後朝
 〇忘るなよ天の河瀬に歸る浪又こむ今朝を思ふ遙けさ
 閑居裁萩
 〇萩を裁て袖の類ひの露を見むさのみや獨濡てほすべし
 晩女郎花

〇女郎花誰に契を結ぶらむ暮るゝまがきに色ぞ殊なる
 野徑萩風
 〇萩の葉よ籬もおなじ秋風の旅の野原は色ぞ添ひける
 晩更初雁
 〇玉章をかけて越路の初かりの聲ばかり聞く曉のそら
 遙聞鹿聲
 〇さを鹿の妻戀ふ野べは孰くぞと片岡返る宿に聞く哉
 庭草露滋
 〇人とはで野と成にける庭の面を露に任する秋ぞ悲き
 關路霧深
 〇沖つ風稍吹く影に誘はれて須磨の關屋に晴れぬ朝霧
 樺花藏垣
 〇暮れ行かばもとの籬に返るらしたゝ一時ぞ朝顔の花
 旅泊待月
 〇我思ふ明石の浦の浮ねをや却りて波に月は待つらむ
 月照山居
 〇山にすめと教し月は無れ共出るも入るも我に倣つゝ
 月滿海上
 〇出るより入る迄波の上にして山のはもなき月を見哉
 古渡望月
 〇今宵をば秋の最中と算つゝ佐野のわたりの月を見哉
 瀧邊殘月
 〇布引の瀧に光をのこしてや影さえやらぬ有明のつき
 野亭擗衣
 〇いかにせむ隣の寺の賤が庵に鐘より外に衣うつなり
 蟲聲隨風
 〇誰か聞く遠里小野の萩が枝に風にみだるゝ蟲の聲々
 紅葉未遍
 〇龍田山霜も時雨もふる物を今年は秋の色ぞつれなき
 河邊紅葉
 〇たつた姫神に手向る錦をば御裳濯川に洗ふなりけり

秋暮菊殘
 〇うつろひて残る色こそ哀なれ秋のかたみの白菊の花
 冬
 初冬時雨
 〇昨日まで露と覺えし我袖の今朝は時雨に成にける哉
 落葉埋石
 〇山陰や苔に埋るゝ石の上に木の葉定めぬ風渡るなり
 朝野寒草
 〇朝まだきまだ霜さえぬ淺茅原冬野の草は末ぞ悲しき
 椎柴霜深
 〇椎柴をつま木になしてこる賤が歸る袂に消えぬ朝霜
 竹間聞霰
 〇風はやみ庭には玉をししく霰竹のさ枝に音ぞはげしき
 原上初雪
 〇色變るひえの高嶺の雲をすれば初雪降りぬ眞野の萱原
 樵路雪深
 〇山人の跡絶ぬべき雪の中に伐りおく枝ぞ尙迎らるゝ
 雪中待人
 〇都人まつは待ぬに成ぬべしこはいかにせむ雪の夕暮
 池上冬月
 〇月かげのおなじ光やをしがもの上毛の霜も池の水も
 岸邊寒蘆
 〇住吉の岸片凍る蘆の葉は枯れて色ある心ちこそすれ
 浦邊千鳥
 〇淡路島千鳥しばなく朝ぼらけ残れる月の影ぞ寂しき
 江水初氷
 〇住の江に松の秋風吹きこめて遂には凍る嵐とぞなる
 鷹狩風寒
 〇御狩野の雪になり行く風の音に歸る心の恨めしき哉
 深夜水鳥
 〇夢さめてをしをしの聲聞く池水や冬の宿には情なるらむ

古寺歲暮
 〇如何に聞きいかに思はむ初瀬山今年は今日の入相の鐘
 戀
 初祈請戀
 〇哀にもこひこそ人の祈るとは今日や初て神も知らむ
 忍經年戀
 〇忍ぶれば色には出す我戀はさて幾年の月日なるらむ
 契違約戀
 〇我戀はいとぞ曇る空だのめ空に知るべき人の心を
 馴不逢戀
 〇馴々て中々なると思はじと思さへこそ苦しかりけれ
 待夜深戀
 〇鐘の音を逢見て後も厭はやや空しく深る夜はの悲き
 邂逅遇戀
 〇逢見ても又待つ程の久しさはたまさか山に鳴く郭公
 後朝隱戀
 〇いかにとよ契置べき歸るさに頼ても人の立忍ぶらむ
 憚人絶戀
 〇いかにせむ互につらき中ならで人の計に絶果てれとや
 顯後悔戀
 〇顯はれて悔しかるべき中ならば忍果ても慰めなまし
 隔遠路戀
 〇いかにせむ都遙に詠むればしのおもぢすり心亂れて
 傳人怨戀
 〇中々に怨みじ今は人づては思ふ計りは語らざるらむ
 〇人知れず思ふ心の行くかたは眞葛が原の風に任せつ
 遇隠名戀
 〇音羽山音ばかりにて過ぎねとや誰とて人に逢坂の關
 被厭賤戀
 〇芹摘し昔の水に袖ぬれて乾く隙なき身をいかにせむ
 被忘後戀

いかにせむ人も拂ぬ夏の池の菱も物の思取られぬ
 如何にせむ心も尚も高瀬舟さしも髪身と思しかども
 世中を厭ふ心のあらまじに死なでも人に別ぬる哉
 我が心奥まで我が知べせよ我が行道は我のみぞ知る
 人心つらしと思人なれど人をそ侍む人のるるがり
 昔の世を思知るよりなく涙今我が袖に乾くまもなし
 後世は今宵かあすかなく涙思ふ計りに尙ぞ溜りぬ
 神よいかにかうしや北野の馬ばゆふ塚の外なる人の心は
 哀かなよ人の心は佛だに思兼ねてぞ捨て給ひにし
 つひにさは昔聖の立つ袖をたえにし物の又音のする
 逢難き中に近江の山高み三度きける身を如何にせむ
 守りこし名残は末も久しかればこやの山の松の村立
 いかで尙鶴すむ洞に生れても無らむ世迄君を守らむ
 以上百首は大略併詠次に年三首一入撰集之程許
 して奉納神居畢具在別草

詠三首和歌一 以古今為其題目

慈 鎮

春二十首

年のうちに春は來にけり一年を
 こぞこやいはむ今年こやいはむ
 雪の中に春は來にけり吉野山雲こや云む霞こや云む
 袖ひちてむすびし水の氷れるを
 はる立つ今日のかせやどくらむ
 春風の結ぶ氷を吹解けば更にや今日は袖もひちなむ
 春霞たてるやいづこみよし野の
 よし野のやまにゆきはふりつゝ
 春霞たてるは都さてもなほ山の奥には雪やふるらむ
 霞たち木のめもはるの雪ふれば
 はな無きさともはなぞ散りける
 あわ雪の花なき里に嬉しきは木のめも春の夕暮の空

春やさき花や運きと聞きわかむ
 うぐひすだにも鳴かずもある哉
 春はとし霞かゝれる木末より花ぞおそきと鶯の鳴く
 あづさ弓おして春雨けふ降りぬ
 あずさへふらばわか茶摘みてむ
 春雨のふるから小野の梓弓おして今こそ若菜摘てめ
 遠近のたづきも知らぬ山なかに
 おぼつかなくもよぶ子ごりかな
 呼子鳥嬉しくもあるか遠近のたづきも惑ふ山の夕暮
 うぐひすの笠にぬふてふ梅の花
 折りてかざしむおいかくるや
 春毎にかざし年ぞ積りぬる我が老かくせ梅の花笠
 世の中にたえて櫻のなかりせば
 はるのころはのどけからまし
 春の心のどけしとて何かせむ絶て櫻の無世せば
 櫻花咲きにけらしなあしびきの
 やまのかひより見ゆるしらくも
 櫻花まだ見ぬさきも三吉野の山のかひある峯の白雲
 花の色は霞にこめて見せずとも
 香をだにぬすめはるのやまかせ
 花の色をだに思ひし花の霞より色をもおくる春の山風
 花の木も今は堀裁るじ春立てば
 うつらふいろにひさならひけり
 堀裁て見るは嬉しき花の木の新ふにこそ習佐比ぬれ
 春の色に至り至らぬ里はあらじ
 咲ける咲かざるはなの見ゆらむ
 春風の至り至らぬ木々ぞなき咲るが散れば咲るも散る
 三輪山をわかかすかかはる霞
 ひとに知られぬはなや咲くらむ
 人知れぬ花を霞にたづねれば己よそなる三輪山の杉
 咲花は千種ながらにあだなれど

たれかははるをうらみ出でたる
 惜め共留らぬ花のゆかりとて恨果つべき春の上かは
 木傳へばおのが羽風になる花を
 たれにおほせてこゝら鳴くらむ
 こゝら鳴鳥の妬くや思らむ惜むに留る花ならなくに
 駒なめていざ見にゆかむ故郷は
 ゆきこのみこそはなほ散るらめ
 故郷の花の白雪見にゆかむいざ駒なめて志賀の山越
 吹く風と谷の水としなかりせば
 みやまがくれのはなを見ましや
 奥までは尋ねぬ花を見せがほに風に流るゝ山川の水
 我が宿に咲ける藤波立ちかへり
 過ぎがてにのみひとの見るらむ
 立返り見れ共あかぬ藤波はすぐる心に懸るなりけり
 けふのみと春を思はぬ時だにも
 立つことやすきはなのかけかは
 暮れぬとて花の下にし宿かれれば日數計ぞ春に別るゝ
 夏二十五首
 わが宿の池の藤なみ咲きにけり
 夏に咲く池の藤波色に出でゝ山郭公鳴くを待つかな
 花ちれる水のまにゝどめ來れば
 どのめ來れど春なき山の梢より今は厭はぬ風渡るなり
 郭公ながなく里のあまたあれば
 わいく里を語らひすてゝ郭公今我が宿の初音鳴くらむ
 今朝來なきいままだたびなる郭公
 夜はに聞く山郭公なるなり旅のやどかせ橋のえだ
 おとほやま今朝こえ來れば郭公
 郭公あふ坂こえて尋ねれば今ぞ音羽の山になくなる
 おもひいづるとき公紅葉の山にあらぬ物ゆる
 紅のふり出でゝぞ鳴く郭公紅葉の山にあらぬ物ゆる
 聲はして涙は見えぬほとゞきす

郭公涙は汝に聲は我にたがひにかして幾代へぬらむ
 やよやまてやま郭公こぞづてむ
 五月雨にものおもひをれば郭公
 さみだれに物思ふ宿は郭公鳴く一聲もなほぞ夜深き
 夜やくらきみちやまどへる郭公
 夜や暗き道や惑ふと問ふべきに山郭公鳴かで明ぬる
 やどりせしはな橋も枯れなくに
 郭公來鳴かぬ宿の橋はたゞ枯れねど思ふべらなる
 去年のなつ鳴きふるしてし郭公
 宿も宿なく聲も聲郭公身のふりぬるや今年なるらむ
 さみだれの空も心にほどきす
 郭公空もといろに鳴く頃はよた雨ふる袖の上かな
 はちす葉の濁りにしまぬ心もて
 露の身を玉もなまむ蓮葉の濁にしまぬ我が心より
 夏と秋と行きかふそらの通路は
 夏衣かたへ涼しくなりぬなり夜や更ぬらむ行合の空
 秋二十首
 秋きぬと目にはさやかに見えぬぞも
 風の音に驚くのみか萩の葉の清かに靡く秋は來に鳥
 こよひこむ人にはあはじ七夕の
 今宵來む人に逢はむ七夕の絶ぬ契に逢むと思へば
 我が爲に來る秋にしもあらなくに
 思ふべし我身一の秋ぞかし誰かかくしも月を詠めむ
 久方の月のかつらもあきはなほ
 秋のさかり曇らぬ空や久方の月の桂の紅葉なるらむ
 秋風に初かりがねぞきこゆなる
 山里は秋こそここにわびしけれ
 鳴く鹿の聲にめざめて忍ぶ哉見果てぬ夢の秋の面影
 秋はきの下葉色づくいまよりや

一小萩原ぬ夜の露や深からむ獨りある人の秋の柄は
二主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に
三藤袴花にぬしとふ夕ぐれにこたふる風や萩の上ぞと
四みどりなる一つ草ぞ春は見し
五哀にもおなじ緑の春草のこゝろに色かはりゆく
六里は荒て人はふりにし宿なれや
七古郷のぬしの涙やおきつらむ庭もまがきも秋の白露
八草も木も色かはれどもわたつ海の
九わたりつ海の秋なき波の花に尙霜おく物は夜はの月影
一〇紅葉せぬときは山は吹く風の
一一霧はれぬ倉橋山の秋風は音にや月を聞きわたるらむ
一二我門のわさ田も未刈りあげねば
一三白露の色はひこつをいかにして
一四秋の染めて色々になす紅葉の又色々露をそむらむ
一五露の夜の露をば露おきながら
一六霜のたて露のぬきこそ弱からし
一七脆く見し霜と露との経緯は風の織りたる錦なりけり
一八手はやぶる神代も知らず龍田川
一九龍田川袖のみみちにおきかねて唐紅の下とよむとは
二〇見る人もなくて散りぬる奥山の
二一みみち葉を夜の錦になす物はまだ見ぬ山の風也けり
二二夕づく夜をぐらの山に鳴く鹿の
二三道芝は尋ねも行かむもみち葉を
二四紅葉を幣と手向けて行秋を惜み留めぬや神なびの森
二五冬十五首
二六龍田山にしきおりかくかみな月
二七錦おる賤はた山の初時雨げに経緯となりけるかな
二八山里は冬ぞさびしきまざりける
二九宿さびて人めも草もかれぬれば袖にぞ残る秋の白露

一おほぞらの月の光しきよければ
二秋の夜の影見し水の薄氷月にこたふる冬は來にけり
三夕されば衣手さむしみよし野の
四あけば見よ四方の山への雪の色は衣手寒し東雲の空
五この川にもみちば流るおく山の
六奥山の雪げの水に流れ出で、秋と冬を見する紅葉
七ふるさは吉野の山し近ければ
八吉野山峯の白雪いかならし麓の里もふらぬ日はなし
九しら雪の所もわかすふりしけば
一〇岩に咲雪の花こそ哀なれ春も見ざりき秋も見ざりき
一一うらちかく降り來る雪は白浪の
一二白浪のこえて返ると見えつるや雪に風吹く末の松山
一三朝ぼらけ有明の月と見るとも月と見つるも
一四梅のほなそれとも見えす久方の
一五白雪のなべてふれば梅の花冬咲きはかひ無りけり
一六雪ふれば木毎に花ぞ咲きにける
一七梅が枝の匂うれしきた、ちかな木ごとに花の雪の曙
一八我が待たぬ年は來ぬれど冬草の
一九冬草の枯ぬと何か思べき花の春には人も訪ひ謀てむ
二〇雪ふりて年の暮れぬる時にこそ
二一色かへぬ冬の縁を見よとてや遂にもみちぬ松の白雪
二二昨日といひ今日と暮して飛鳥川
二三飛鳥川流れてけふも暮ぬれば春に逢瀬は今宵也けり
二四行く年のをしくもある哉ます鏡
二五年のあけて影いかならむます鏡今宵一よに面變して
二六祝五首
二七君が代は千代に八千代に細石の
二八さし石の苔蒸岩となりて又雲懸る迄君を見るべき
二九しほの山さしでの磯にすむ千鳥
三〇君が代にさし出での磯の友衛やちよの聲を聞き嬉き

一斯しつゝにも斯にも長らへて
二斯計り深き心の報には君が八千代にあはざらめやは
三ふして思ひおきて數ふる萬世は
四千早振神を知るらむ我が君をねても覺めても祈心は
五萬世をまつにぞ君をいはひつる
六長へてかひ有るとをまつなれや君が千年の影に隠れて
七戀十五首
八郭公なくやさつきのあやめぐさ
九五月雨の軒ばになる、郭公なくや五月の涙なりけり
一〇我が戀は空しき空にみちぬらし
一一あふことの酒にしよる波なれば
一二戀をすまの恨みて歸る風の音を逢と浪に聞ぞ悲しき
一三人知れぬ我がかよひちの關守は
一四途通行く夢路にすうる關守は打もねぬ夜の我身也けり
一五君や來む我や行かむの十六夜に
一六今こむといひしばかりに長月の
一七今こむといひしばかりに長月の
一八今こむといひしばかりに長月の
一九今こむといひしばかりに長月の
二〇今こむといひしばかりに長月の
二一今こむといひしばかりに長月の
二二今こむといひしばかりに長月の
二三今こむといひしばかりに長月の
二四今こむといひしばかりに長月の
二五今こむといひしばかりに長月の

一色見えでうつろふ物は世の中の
二一顧はれて移ろふ色のしるければ人の心の花を見る哉
三流れては妹春の山の中におつる
四我が涙吉野の川の上さらば妹春の山の中に流れよ
五風吹けばおきつら浪たつた山
六龍田山夜はにや君が獨りてれし夜の夢の行方をぞ知る
七雜十首
八ほのぼのと明石のうらの朝霧に
九明石がた船の昔に言とへば島がくれ行くあとの白浪
一〇いそのかみふるからを野の故柏
一一君が代にふるから小野の故柏本に返るや我身なる覽
一二世の中にふりぬる物は津の國の
一三櫻あさのをふの下草老いぬれば
一四櫻あさのをふの下草老いぬれば
一五櫻あさのをふの下草老いぬれば
一六櫻あさのをふの下草老いぬれば
一七櫻あさのをふの下草老いぬれば
一八櫻あさのをふの下草老いぬれば
一九櫻あさのをふの下草老いぬれば
二〇櫻あさのをふの下草老いぬれば
二一櫻あさのをふの下草老いぬれば
二二櫻あさのをふの下草老いぬれば
二三櫻あさのをふの下草老いぬれば
二四櫻あさのをふの下草老いぬれば
二五櫻あさのをふの下草老いぬれば

拾玉集卷第七

詠暮春和歌

散残る花の木の間有明に長月の夜を見るかな
吉野山見にし花はちりはてし歸る空には有明の月
おしなべて皆浮雲の旅の空にも風の拂ふをぞ待つ
世を厭ふ心ばかりはありた川岩に砕けて住みぞ煩ふ
我もさぞ宮も葦屋も水の面に映れる月の影と社見れ
旅の宿假初臥に見る夢のさむるをぞ待つ長き夜の空
今よりは法の道より尋行む虚しき空は過ぐか住むかは
うき人も皆我が子とぞ云人や佛なき世の佛なるらむ
過ぐを知らば我も知られぬ是も皆哀昔の契ならめや
思ふ人のそしる詞に従はし悟る心のかひやならむ
思ふとて心の水にうつらし空に知らする星の光は
法の水を今日かき流す難波江に月かけさむし秋の曉
嬉しさを包習ひし袖に又其身に餘る今日とこそ見れ
無跡にあらましかばの心をも移す計の人だにもがな
春野
浅緑木芽も春の野への草に昨日もけふも雨は降きぬ
打群れて若菜つみつる春の野の緑を分て雉子鳴なり
霞
春霞よもの山べにたなびきて花待比になりける哉
花
三吉野の花に露けき涙かな鳴きてや雁の立歸らむ
郭公
卯の花の垣ねばかりの月影に山郭公そらになくなり
五月雨
早苗とる手玉もゆらに五月雨で心に水を任せつる哉
秋野
袖の露はらひもあへぬ夕かな鶉鳴く野のをぎの上風

浮寝する浪路はるかに月さえて心やおよぶ有明の空
葉飛渡水
立田川紅葉の舟のこわたるをまかする楫や木枯の風
深夜千鳥
さよ千鳥更行く聲を聞くなべに折しも歸る袖の浦波
話聲に千鳥鳴也須磨の蜚の更くる我よを思知れとや
忍驛年戀
忍びつゝ年もつもの濱楸かくる涙に願はれやせむ
あらぬ色に我黒髪の成行くを涙ならねば人を怪めぬ
植竹爲友
窓近く葉がへぬ竹を植置て友なき宿と人に云はれじ
風の音も籬の竹に訪づれてよるさへ友と成にける哉
已上十首一法師等の題よみたべと申し、かば詠み
てたびつ後にとり返してき又十首詠加細素歌合
十題
薄暮卯花
姨捨の山も尋ねし卯花の垣ねよりこそ月は出でけれ
曉更慮橋
昔思ふ夜も明方の橋は物のあはれのはひなりけり
古池菖蒲
津の國の池の蘆間に引代てけふの菖蒲や小屋の八重葺
遠山郭公
山高み名残はいかに郭公鳴くも跡なき聲のかよひち
風前夏草
秋ならば身にしむ色や濃らままだし萩の野への夕風
雨後夏月
夏の空を洗ひて過ぐる夕立は秋始しとや山のはの月
所々照射
鹿はいかに静心なく思らむ燈す照射は野にも山にも
家々納涼
一末に又結びとめける我が門のいさゝを川に通ふ秋風

君がため長月の夜のうれしきは九そちまで有明の空
紅葉
山おろしの紅葉の錦敷庭にさしくる物は夜は月の影
山陰に一むらのこせから錦立田の里の秋の木がらし
千鳥
あはち鳥とわたる千鳥心せよしほ風はやし須磨の曙
沖つ風吹上のうらの濱千鳥たつ白波の花かぞ見る
一風さゆるさほの川原の川千鳥空行く月に聲交すなり
雪
さらぬだに待べき人もなき宿に深く成行く庭の白雪
庭の雪をよきて通はむ道もがな跡をしかるで人に問れむ
水
鴉鳥の己が浮巢もどちられて池の水柱に鳴明すらむ
重ねてや汀の水結ぶらむよせてかへらぬ滋賀の浦波
雪中子日
小松原花咲に梟子日する今日こそ雪は降べかりけれ
小松原緑の上に花咲きてけふは子日の行幸なりけり
尋花宿山
花を思ふ心ぞ深き吉野山おくの岩ねに宿をかるごと
草むすぶ深山がくれに宿からむ花を尋ぬる夕暮の空
夕採菖蒲
菖蒲とる賤のすが笠ならふめり浅香の沼の雨の夕暮
心さへ萎れやしぬる賤のをは菖蒲になづむ雨の夕暮
獨開時鳥
心ありてしばし語らへ郭公たゞ獨聞く宿と知らずや
郭公ひとり心に待ちとりの外山の裾におつる初音を
始見草花
待かねて心の内に任せつる庭の小萩は色に出でけり
ほに出で招く尾花も見えなくに紐とさ初る女郎花哉
旅泊曉月

蟬聲夏深
おの露はのが泪か鳴くせみの聲も老會の杜の下草
螢火秋近
秋の夜のながき思の隣かな螢みだるゝ沼のまちかき
又人にかはりて
卯花
うれしくも卯の花垣根しめてけり夕べ慰む有明の頃
慮橋
うつつには花橋のにはひ來て夢もかひある曉のころ
菖蒲
み草ある池に菖蒲の年も老ぬ庭は蓬が柚となるまで
時鳥
郭公ほのかなりつる一聲の名残になるゝ深山への里
夏月
夕立のはれぬる空の光ぞと思はぬほどの秋の夜の月
夏草
知行末をしのお心にながむれば夏野の草に秋風ぞ吹く
照射
心有て燈さぬ賤も有なまし鹿聲立つる秋の夜ならば
納涼
宿からやすむ心もかざるらむ岩井に清水庭に松風
蟬聲夏深
山里の梢の蟬に風こえて峯よりかよふひぐらしの聲
螢火秋近
螢こそ秋の夜を知るしるべなれ星の光を峰に残して
獻南海漁父秋十首
昨日今日曇る空社つらからね望月は過ぎ長月はこす
空は一つ山にも茂る野分哉檜原に風の吹き替るまで
蟲もなかず野への氣色に雲閉て哀は秋の雨に移りぬ
杉しるや深山の秋の物憂きに其かあらぬか風の夕暮
八とへかしと思ふ人だにもたぬ庵に鹿立馴る秋の夕暮

^九霧こめて庵隣もいつしはとたざれば宮にあかの通路
^〇思ひやれ住みかほは志賀の山の峰されば袖に漣の聲
^一心から大津の里の夕けぶり秋の霞にながめわびつ
^二風さわぐまくすが原の夕ぐれを都に知らぬ秋の山陰
^三夕ながめいつより萩に傳ふ風心言葉をかきけたぬる
 細素歌合十首 番左將軍御歌

禁庭殘菊

^四此冬はげに藤つぼの菊の上に昔の色を呈げてや見む
^五田家時雨
^六杉たてる秋の山田の故郷を寂しく過ぐる初時雨かな
^七深山落葉
^八庭深き嶺のみちに音たえて庭にぞのこる木枯の風
^九野徑寒草
^〇寂さになる、心に眺行けば色なき野べぞ色は有ける
^一海邊千鳥
^二あはち島千鳥とわたる曉に松かせ聞かむ住吉のうら
^三潮上水鳥
^四鳥を分てあき妻舟も過ぬれば同じみせをにぞ又歸入る
^五旅宿初雪
^六誰か又朝立ちやらで詠むらむすみ田川原の初雪の空
^七故郷冬月
^八故郷の闇もる月をあるじにて秋吹きかへす庭の松風
^九古渡寒水
^〇舟とむる水も知らじ梓弓おして矢走の今朝の渡りは

山家歲暮

^一今年又なほ驚かて明けぬべし浮世はなれぬ山里の夢
^二大納言殿密々會の時尋去にかはりて雪の十首
 禁庭雪
^三九重の花にのみやは心あらむ今朝の雪にも朝清めすな
^四故郷雪
^五雪の跡を厭べかりし故郷を更にきて見る人と成ぬる

山家雪
^一山の家の軒の笥のうす氷とけても雪の下となりぬる
^二野亭雪
^三霜枯の秋のなごりを隣にてさながら野べは庭の白雪
^四社頭雪
^五梢まで一つに埋む雪よりもしるしに惑ふ三輪の山本
 古寺雪
^六あればは、年ふる寺の軒の跡を昔より外に埋む白雪
^七雪中戀人
^八人戀ぬ人の心のいかならむたゞ有り難き雪の空かな
^九雪中述懐
^〇雪も尙暫しは花に紛ふ降り降かひなきは憂身也けり
^一雪中遠望
^二雪はいかに外面の岡の岸をさへ遙の越の山に見す覺
^三雪中旅行
^四過ぎ來つる方にも尙や迷ふべき駒に跡なき雪の夕暮
 春
^五志賀浦
^六舟かよふ浦より見るぞ哀なる志賀の霞の山陰のいは
^七泊瀬山
^八春ふかき花の梢に風おちて雲吹き拂ふ小泊瀬の山端
 夏
^九立田川
^〇たつた川いくしのでに波こえて秋風通ふ夕暮の空

宮城野
^一宮城野の秋の奥こそ知られぬ萩の哀を霧に残して
^二須磨關
^三打よする波に有明の月さえて秋や悲しき須磨の關守
 冬
^四深草里
^五打歎き寝ぬぞや人の思らむ深行く月の友と成る身を
^六夜な〜の人の思を思ひ知れむろのやしまの曙の空
^七我が思今は空にもみちぬらむ煙はふじの雲に譲りて
^八宿も荒て人の來ぬ床に置露を求めて宿る月も有けり
^九眺め能ぶる空に思の夕煙やく隨籠のうらめしの身や
^〇我戀はつひに心の行へと頼めし庵に今は待つらむ
^一君が爲物思へとていける身の住はぬ袖の色を見せばや
^二松の葉も濃くさへならぬ物ぞかし我戀の色を何に譬へむ
^三我が戀は夕の空に吹く風つひにしがぬ袖の上かは
^四空頼め絶て幾世に成ぬらむ戀せよとても生たる身は
^五覺てしも何にかはせむ思寝の夢に絶ぬる哀ともがな
^六途にさは孰ち消べき身なる覺枯野の露を袖に残して
^七夢にだに尙なかりける契かな幾夜衣を返しかぬらむ
^八入月の影さへつらき山の井の浅くは袖の濡る物かは
^九夢なれやさのみはいかに槌の音の絶ぬ枕に明る東雲
 春山朝
^一よし野山待ちしは春の朝ぼらけ霞の色につゝむ初花
^二春の來て花もかすみも曙の空に色あるみよし野の山
 夕早苗
^三早苗にも春の苗代せきしより五月になりぬ雨の夕暮
^四植はへる伏見の小田の夕早苗いつしか靡く秋の初風
^五梅雨は少し晴間の夕早苗探るもかひある賤が小山田
 行路秋
^六月は秋と思ひ出つゝ旅の空を行暮す峯に松風の吹く
^七秋行きて聞けば鹿の音來る物は萩に白露山のはの月
 曉時雨
^八槇の屋を野中にしめて待時雨夢より後に訪れて行く
^九夢覺て又濡果てぬ袖の上に絞れとばかりふる時雨哉
^〇松經年
^一君に契る心の色はもみぢせずこや住吉に年へたる松

^一冬枯はいとゞ物こそ寂しけれ現になれし深草のささ
 祝
^二春日山種蒔置さしすべらぎの千世の恵を待つと白菊
 戀
^三三島江
^四三島江の蘆の枯葉に吹きとめつ心さびしき人の夕風
 旅
^五清見海
^六清見海月に心ののりしよりよは哀なる舟のかよひち
 述懐
^七浮田森
^八春も夏も思ふことある身にぞしむ心浮田の森の秋風
^九已上十首依左將軍命詠之之 聖徳天皇
^〇建久二年十月三日左將軍御會歌合五首詠之之
 薄暮思秋
^一人の知る秋の外なる秋なれや雲に色ある夕暮の空
 連夜時雨
^二冬枯の梢の下の村時雨ひとり夜がねぬ横の宿かな
 行路冬風
^三草は枯れ梢は遠き道のべに風を見するは霞也けり
 山水初氷
^四さ社に寒けかりつる宵ぞかし今朝山川の音の物うき
 綱代眺望
^五見すもあらず波に錦を立混せて綱代を過る風の水
 上
^六秋月一和歌五首
^七あまの原空さえとこそおもひしに袖の涙に氷る月影
^八來ても見よ同じみ空の月なれど秋は明石の有明の空
^九野べの鹿よ月に契れる己が聲にあやにく曇る我涙哉
^〇盡ぬ物は過ぐる千年の秋の今夜曇らぬ月の光也けり
^一過時が爲笛に占ける月夜よし夜よしと云は誰か答へむ

慈 鎮

山家雪
^一山の家の軒の笥のうす氷とけても雪の下となりぬる
^二野亭雪
^三霜枯の秋のなごりを隣にてさながら野べは庭の白雪
^四社頭雪
^五梢まで一つに埋む雪よりもしるしに惑ふ三輪の山本
 古寺雪
^六あればは、年ふる寺の軒の跡を昔より外に埋む白雪
^七雪中戀人
^八人戀ぬ人の心のいかならむたゞ有り難き雪の空かな
^九雪中述懐
^〇雪も尙暫しは花に紛ふ降り降かひなきは憂身也けり
^一雪中遠望
^二雪はいかに外面の岡の岸をさへ遙の越の山に見す覺
^三雪中旅行
^四過ぎ來つる方にも尙や迷ふべき駒に跡なき雪の夕暮
 春
^五志賀浦
^六舟かよふ浦より見るぞ哀なる志賀の霞の山陰のいは
^七泊瀬山
^八春ふかき花の梢に風おちて雲吹き拂ふ小泊瀬の山端
 夏
^九立田川
^〇たつた川いくしのでに波こえて秋風通ふ夕暮の空

〇雪のうちに舊き縁を顯はして幾世に成りぬ住吉の松
 左將軍女房の人に百首よませて披講に五首の會
 ありけるを安成に代りて

春 春ぞかし去年もおろかに過し來て花に驚く白川の里

夏 夕立の露吹き拂ふ松風に夏さへ晴る、小野の山かけ

秋 身にささる思を萩の上葉にて此ころ悲し夕ぐれに空

冬 寂しさの限りは雪にふりこめつ立田の里の鹿の通路

戀 打返しあまる思になぐさめて戀に宿かる我が涙かな

詠五首和歌一 加法師丸上

春 雁がねは霞のそこにおどづれて春かあらぬか曙の空
 春ぞかしこもおろかに詠め來て花に驚く白川の里
 春も知らぬ我山里の夕霞色とはよその人や見るらむ

夏 時鳥なのりて過る尾上よりはなれて落る聲の色かな

秋 夕立の露吹きはらふ松風もなほころせき夏の山陰

冬 身にささる思を萩の上葉にてこの比かなし夕暮の空

戀 寂しさの限りは雪にふりこめつたつたの里の鹿の通路

春 打返しあまる思になぐさめて戀に宿かる我が涙かな

春山朝 昨日迄またしき花も咲果て今朝身にしむは春の山風
 よし野山花まつ春の曙の心のいろをかすみにぞ見る
 春の今朝花には厭ふ山風の霞を分てのごかにも行く

夕早苗 早苗さらぬ麻の衣の夕濡り交りてぞ見る田子の裳裾を
 秋遠き鳥羽田の面の夕早苗頓ては末に風の見ゆらむ
 頓てさは伏見の小田の夕早苗葉末の風の秋の色なる

行路秋 糸薄より合せたる山路かなさを鹿の音に蟲の聲こそ
 草枕鹿に契を結びおきて野にも山にも秋ぞかなしき

曉時雨 夢覺むる野中の庵の横の屋にわく方もなき初時雨哉

松經年 住吉の松を久しと數ふれば過る千年の末もありけり

詠五首和歌一 前大僧正御判

春夜 春の夢の覺むる涙の袖の上に月や非ぬと問人もなし

夏曉 夏の月に有明の山は淡路島住吉の松に風ぞすしき

秋朝 萩が枝に朝行く鹿も心せよ夜はの白露はさで眺めむ

冬夕 大はらや誰すみまがまの夕煙心ばそくて年もへぬらむ

久戀 〇ことはに感ふ習を習て戀こそ人の此世なりけれ
 〇我世更て春の夢路を行末の現も知らぬ身を如何せむ
 〇如何にせむ夢にも花を思ひねの覺むる枕に春の山風

關路花 一風立ちし秋より冬に年越えて今日は花見る白川の關

海上燈 〇さす沙の星の光のみだるゝや難波の蘆の螢なるらむ

野宿月 〇野への草を結ぶ光をよそに見て月は雲路に止る物かは

川邊雪

〇降る雪の下に汀や氷ならむ音さへほそき賀茂の川波

暮山戀 夕まぐれ月待空の山のはを今夜たのめて誰詠むらむ

詠五首和歌一 慈 鎮

春夜 〇いかにせむ秋社馴し夜はの床に春さへ多く露の置らむ
 〇たどふべき心ぞいさゞ曇り行く長柄の橋の跡の霞に
 〇志賀の浦の波よりかすむ曙に山吹きおろす春の初風
 〇志賀の浦の心や空に消えぬらむ波より霞む春の曙
 〇難波江の蘆の枯葉の春風に秋見し露の袖にこぼるゝ

水郷春望 〇霞吹く松風いそぐ波の上にはまなの橋を誰作りけむ
 〇四方の海や霞のどけき松が浦の春の湊に春風ぞ吹く
 〇淺緑澤へに移す春の色はみつのみ牧の真菰なりけり
 〇志賀の浦や長柄の山の春風に待とる波に花咲にけり
 〇住吉の松に霞の色そめて春のみなごに春かせぞ吹く
 〇難波がた霞のどけきあけほの春風よする沖つ白波
 〇よさの海の霞に消えて行く雁の遅るゝ列や蟹の釣舟
 〇春の色を誰をさめけむ伊勢の海二見の浦の曙のそら
 〇曙は春なりけりな難波がた汀のあしもなほ一かすみ
 〇春に見る霞なりけり鏡山こしに波立つ志賀の明ぼの
 〇春風に波の花こそ咲きにけれ大津の宮の春の明ぼの
 〇尋ねきてなづさふ田子の浦風に袂をあらふ春の藤波
 〇如何にせむ曉月夜の有明もいなのみなどの春の松風
 〇波にかへて霞の袖をかく海人の心そらなる春の曙

山路秋行 〇袖にまた木の葉横ぎる嵐かなれぬ山路の秋の夕暮
 〇足曳の山立ならす鹿の音は我が行道の知べなりけり
 〇秋の風を松に任せて鳴く鹿は我行道の知べなりけり
 〇立田山秋行く人の袖をみよ木々の梢も時雨なりけり

〇心さへ時雨れてぞ行く立田山木の葉横ぎる秋の嵐に
 〇木の葉ちる山路分來て悲しきは秋を泊瀬の入相の聲
 〇月影の出べき嶺の鹿の音は我が行道の知べなりけり
 〇秋霧の晴れ荒みたる尾上より袖に紅葉をかす嵐かな
 〇旅衣露はすひまもあらしかなれぬ山路の秋の夕暮
 〇志賀の浦や長柄の山の春風をまつ船波に花咲にけり
 〇暮ぬとも月待出て尙行かむ雲こそなけれ山の空
 〇心さへ時雨でぞ行く立田山木の葉よこざる秋の嵐に
 〇住吉の松に霞の色そめて春のみなごに春かせぞ吹く
 〇袖にまた木の葉よこざる嵐かな立田の里の秋の通路

詠三首和歌一 大僧正慈鎮

春風不_レ分_レ處 〇惜兼ねて花なき里を詠むればいづくも同じ春の山風

梅花薫_二曉袖_一 〇思寢の夢も明やらぬ袖の上に梅より過て風の落來る

曉霞隔_二旅山_一 〇あれや尙明けてこゆべき嶺ならむ霞を送る遠の白雲

〇手折つゝ我もかへるの山のはに霞に宿を雁の聲なる

〇旅衣ぬれてかたしく山のはに霞の袖に色のこりける

詠三首和歌一

遠島朝霞 〇はるかなる波路の春の曙にしばし霞の島がくれ行く

隣家夜梅 〇春のみや主も綾なし梅の花咲ぬ宿にも香やは隠るゝ

〇梅の花咲ぬ宿にも月はすむ色をも香をも風ぞ嬉しき

〇人どはぬ山路の雪も村消えて春の暮にぞ跡は有ける

〇來る人もなくて年ふる山ざとに春の跡つく雪の村消

山家殘雪 〇山かげや過ぐる日敷に村消えて春の跡つく庭の白雪

〇山陰や春をも知ぬ庭の雪を去年さや云む殘_二とや云む_一

海上霞

一月を見し秋かあらぬ霞しく春のみなごの有明の空
 一押なべて霞にけりな難波漏今朝のなごろは音計して
 一見渡せば沖つ波間の舟ながら押こめてける朝霞かな
 一波の音も霞のそにしづむなりあやしや里の春の曙
 山路花
 一山櫻匂ひをどめて尋ねきぬ散りなむ道を菜にはして
 一昔より花に契をむすび來て春のみこそは志賀の山里
 祈神戀
 一打返しうけずばいかに古も戀せしこそしける襦を
 一ねぎ返るいぬきの中丸寝より哀さも見よ我夜床迄
 草野秋近
 一萩が枝の露の色こそたいならぬ夏野の草の秋の夕暮
 一鹿の音を隣にしむる萩が枝の露に色ある野への夕暮
 水路夏月
 二月にのる波の夜はこそ短けれ詠めてくだす淀の川舟
 二月影のさすに任せて行舟は天の川瀬や泊りなるらむ
 雨後聞
 一夕立の雲より出づる夏の日を待ちとる物は蟬の諸聲
 一晴ぬるか杜の下枝の雨隠れまたひぬ露に蟬の鳴く也
 詠三首和歌一
 晩聞三首和歌一
 一ほのゝとまだ倉橋の五月雨に山隠れ行く郭公かな
 一郭公有明の月にかへて聞かむ五月の雲にもる一聲
 一尋ねつるかひも有馬の郭公月と旅寝の空に鳴くなり
 松風暮涼
 一山かげやなれて岩根に夕涼み松にぞ夏も秋風は吹く
 一山かげやむすぶ岩根の水のおも秋の波立つ松の夕暮
 遇不逢戀
 一誰に問て慰めましの詠めより重ねし袖の濡て答ふる
 一枯果る現社あらめいかにせむ人も木草も夢に成行く
 詠三首和歌一

社頭祝言
 一 行末の流もつきし過ぐる代は苗代水を神にまかせて
 雨中時鳥
 一 時鳥ぬれて鳴く音ぞなつかしき句も雨も立花のころ
 野亭水涼
 一 おかねども扇も露もわすれ水野澤の庭の夏の夕ぐれ
 詠三首和歌一
 初秋風
 一 初秋の風は何ぞ萩の葉を籬に思ふ人ぞ知るらむ
 山家暮
 一 住みしかや酉の山下朝づく日よそに成行く夕暮の空
 社頭雜
 一 大堰川松のお山の麓行は神さぶる身の影ぞうつれる
 詠三首和歌一
 月前雁
 一 玉章の月に契や結ぶらむ數さへ夜はの秋のかりがね
 月前旅
 一 清見湯波に敷へぬ旅寝にも今夜の月に今夜をぞ知る
 月前戀
 一 雲ならぬ涙も拂へ秋の風今夜ばかりの月をだに見む
 五月二十四日清範奉書給三首題來二十八日於
 日吉郷在歌合可被發遣勅使
 寄月祝
 一 君が代の雲吹き拂ふ松風に住吉の浦の月を見るかな
 寄旅戀
 一 誰にとはむ波か涙か藻鹽草敷津の夜はに袖の萎るゝ
 一 よしさらば獨都を出でしより旅ねに宿る我が心かな
 一 夢の裡にさらぬだにぞや答ふらむ旅寝に宿る我心哉
 一 草枕我が思ひ寝のおなじ夢を都の床に誰か見るらむ
 寄山雜
 一 いかにせむ我が立柚の古に吹き替り行く風の音かな
 詠三首和歌一

切法の火を君挑げずば如何にせむ我が立柚の夕方の空
 一 君が代に月待ち出で誰か見む我が立柚の夕闇の空
 已上三首合點同二十六日遣之其外擬作也
 詠三首和歌一
 月前秋風
 一 月影の出でつる峰の松の風ふくれれば野べに萩の上風
 一 秋といへば月を弄ぶ風かな待出る山の峰の木の間に
 水路秋月
 一 影清き月は波間にいづみ川秋の十日の今日みかの原
 曉月鹿聲
 一 月影にあかて有明の山のはや秋鳴鹿の立どなるらむ
 詠三首和歌一
 信 光
 秋日易暮
 一 三程もなく今日も暮ぬと云ふとや誠に秋の哀なるらむ
 終夜擽衣
 一 衣うつ砧のおとは曉の鐘のあはれにつゞきぬるかな
 一 擽つ人は替りやしぬる唐衣よすがら袖に我が涙かな
 毎月過戀
 一 七夕の年の契の哀さを月になしてもつきせぬやなぞ
 古寺秋風
 一 思入し吉野のたけの夕暮に外にならぬ秋風ぞ吹く
 月前曉雁
 一 有明の雁の涙にくもる月はさゆる心の限りなりける
 蟲聲増戀
 一 松蟲よ物思ふ袖の露になけ向こりすまの類にをせむ
 一 來ぬ人を待ちつる宿の淺茅生に露置添ふる蟲の聲哉
 詠三首和歌一
 落葉
 一 三笠山時雨せぬ夜の木葉にはもらぬ袂も濡増りけり
 曉月
 一 風に残るさほの川原の川霧の上にくまなき有明の月

松風
 一 音のみぞ時雨なりける高砂の尾上の松にすぐる木枯
 一 松風に吹かすもあらなむ初瀬山鐘より後の窓の有明
 詠三首和歌一
 前大僧正慈鎮
 寒夜冬月
 一 詠むべし霜に枯れ行く武藏野の露の名残に宿る月影
 一 宮城野や霜や度おく萩の上に枯れぬは月の光也けり
 一 花の露を枯野の霜に結かへて同じ野べにも澄る月哉
 一 野べの月露に宿りし影を又淺茅が霜におき重ねらむ
 山家暮風
 一 冬かいな木の葉こそるに嵐山ふもとの里の松の夕風
 一 葛城や外山の裾の夕嵐すの簷屋に木の葉吹くなり
 一 今朝ならば叩く風に明てまし誰かは今は我柴の戸を
 初戀
 一 我戀は仄めき初むる夕づく夜曇らで見せば有明の空
 一 芽ぐみいづる我戀草の春雨は袂よりこそ降増りけれ
 左大將の亭にて三首の歌俄に人々よみければ
 朝見三首和歌一
 一 夜の内は明くと見えたる初雪をげに明て社又雪と見れ
 一 夕聞時雨
 一 七かき曇る心のそこに雲とちて時雨をうづむ夕暮の空
 晝夜思戀
 一 待宵と別る今朝と暮は待て空しき夜はと晝の思と
 社頭冬月
 一 一夜とて年古にけり松が枝に霜置添ふる冬の夜の月
 一 古池寒草
 一 蘆も尚霜がれてこそ猿澤の池に生たる草と見えけれ
 聞詞増戀
 一 北野の葉に色を添つる氣色哉いと涙の時雨せよとや
 詠三首和歌一

社頭松

石清水神の心のすみしより影を並べてたてる松かな
皆人の頼む八幡の松山は君が千年のためしなりけり
はる／＼と君が千年をまつ山に萬代よばふ男山かな
月前雪

降積る雪に重ねて眺むれば明けても消えぬ庭の月影
冬の月の真にふれる雪の上に冴たる影を何に譬へむ
旅宿嵐

野べ寒し萩が上葉を片敷きて過る嵐を旅寝にぞ聞く
哀なるたつ田の里の旅寝かな峯の嵐の庭の木の葉を
故郷の萩の枯葉に待ちとどりて峯の嵐の音を聞く哉
詠三首和歌一 桑門慈鎮

曉尋千鳥

友千鳥月に鳴くやと尋ねればさほの川原の有明の浪
山家知春

海邊歲暮

山ざこは春のとなりとなるまゝに梅も匂も鶯もなく
今日寄せて明日立返る年波は和歌の浦わに懸る也見
山居春曙

水郷秋夕

難波江やたが庵ならむ蘆の葉の垣根に靡く秋の夕暮
粟津野の尾花が末に日ははれて波より移る秋の夕暮
住江に折から秋の夕づく夜こゝに聞けどや松風の聲
松島やをじまの海人になれてだに情は深き秋の夕暮
難波江や夕の空に秋はきて又秋ゆゑに夕ぐれものそら
思はずよ長柄の山の初時雨しか行く人の袂までとは

是體如は東大寺なる慮遮那佛げにあか金の大佛哉
如是力に世をおこさばや音に聞く大諾健那又は良長
作如是に憂身も尚を頼しきなすと無きをなす事にして
是因如に衣身の茂を思ふかな萩なき宿に秋の夕ぐれ
如是縁に哀れ佛種も何よりか名残初けも今日の舍利講
是報如の女の理り十にして虚しき空に秋の夜の月
是本末究竟等にも春くれて梢の花の根にかへりぬる
如是相を見るぞ悲しき二月や細かにわけし望月の影
作如是こそ耐久しき御法なれ常誓かきはに殿作して
如是相 春

吉野山雲

吉野山雲か花かどながめけむ心はおなじ心なりけり
性如是 夏

如是力 冬

夏を待つ虚しき空のくれぬ間の心惑はず女郎花かな
梅が枝は土につく迄降雪に松の梢はたるまざりけり
文治六年二月九日西山報恩講々具足菩薩行
迎りこし誠の道をすぎなれて今こそみつれ望月の影
霞中閑居

待 契約 戀

立とむる春の光の霞こそすのの篠屋の通ひなりけれ
待ち出づる今夜の月は宵ながら心のうちは有明の空
其の夜の當座
後會、契、花時
又來むと契る便やなからまし花待比の圓居ならずば
尋、所縁、戀
武蔵野の草の緑りを尋ねども先我袖に露のこぼるゝ
柳爲、寺牆
玄めおきし野毎の塙は朽果てゝ残る柳を頼む計りぞ
隔、谷戀

秋ふかき長柄の山に霧はれて志賀の浦わの夕暮の空
霧中眺望

我がこゝろ心もあらず東路や雲なき空にふじの煙の
旅の空幾への雲を越ぬらむ重なる山の峰にとはや
清見瀧波に風立つ秋のよも心のうちをせく物ぞなき
東路やふじに煙を見るからに旅の思ひは心にぞ立つ
昨日こゝろ明日もこゝろを皆一つに置る朝霧の空
ふじのねは一結して立煙に馬引さめて見る空ぞなき
志の路や月待つ比の轉寢に雲こそなけれ姨捨の山
月の入長柄の山をめぐらして今夜は過む野路の篠原
もしは草しきつの浦に入る月の有明の空は淡路島山
詠三首和歌一 前大僧正慈鎮

御法故身の浮雲や晴ぬらむよもの空にも四方の月影
副詠、處々六月祓
さもこそは川の瀬毎に河祓へ井堰にも又波の昔ぬき
毎日納涼
涼むかな昨日もけふも一昨日も坂井の清水野澤松蔭
上人勸進講四十八願之席同詠三首和歌一 西山隱士

彌陀四十八願 第六願 遍見極樂衆生之德也
ながめかはす四方の淨土の光かな我極樂の望月の空
月
七十の山のはに社成にけれ西へのみ行く夜はの月影
無常

はかなしや我が袖の上に置露は皆人毎の袂なりけり
袂毎に置すや有ぬ夜はの露我袖の上に遁るべきかは
夏日舍利講演次同詠三首和歌一 前僧正慈鎮

如是相を見ぞ悲き拘戸那城雙樹に分し佛舍利かきは
性如是のくちぬ惠ぞ頼もしき佛の種は此身也けり

通來る谷の小川に袖ぬれてかひなき峯に幾夜明しつ
霧中待花

まだ咲かぬ山路の花に日數へて我行里の梢いかにぞ
同三月九日報恩講
皆已成佛道
様々に浮世の花は匂へども同じ佛の身とぞなるべき
毎山花盛
春は唯四方の山への名を變て皆み吉野と云べかり見
夜半喚子鳥
獨寢の枕うごかす喚子鳥かねよりさきに夢殘せとや
當座十首
依、花、忘、行

春毎に花に心の入りぬれば家を出にしかひ無りけり
遙望、藤花
眺めやる高ねの藤の花盛り心にかゝる雲かぞを見る
款冬交、路
山吹を分行く人の衣手や春のかたみの露のうはすり
躑躅留、人
紅のよそめの衣ぬきかへて躑躅咲野に日を暮しつる
旅泊春暮

湊川浮寝の夢に見てしがなづくか春の泊なるらむ
一所戀
玉章の通ふ便りをまつ人は中々戀のひまもあるらむ
老後無常
思へ唯かみに霜なき人だにも消行くとの哀れ浮世を
山家述懐
誰か知る浮世を捨て柴の戸を頼て出しと思ふ身ぞとは
不殺生戒
誰も皆我身をつみて思ふべし命は惜しき物と知すや
社頭遇、友
今よりも頼めぬ人に逢瀬をば尚御手洗の川と尋ねむ

○波は藤藤は波にぞかゝりける田子の浦わの春の暮方
 一南無阿彌陀心ぞいと静かなる松より外に藤の夕色
 旅宿暮春
 二東路や旅の篠屋にけふ暮ぬいざさは頓て春を送らむ
 更衣
 三四十餘り衣ばかりを脱ぎ更へて心は同じ卯の花の里
 四九重に匂ひし花の色なればなごりうれしき白襲かな
 五花の色を惜む心はそれながら更へて嬉しき藤衣かな
 卯花
 六此ころは櫻が枝に雲はれて卯の花垣に月を見るかな
 郭公
 七花はちりぬ月はまだしきなつ衣慰めえたる郭公かな
 八五月雨の雲に色ある梢かな山ほごきす一聲のそら
 九明けぬとて月は高嶺に入りぬらむ聲をば殘せ山郭公
 〇はのゝとまだ倉橋の五月雨に山隠れ行く郭公かな
 菖蒲
 一あやめ草沼の岩根の長き根に心ひきをも鳴く蛙かな
 盧橘
 二五月雨の雲は梢にはれのきてはな橘に風そゝぐなり
 三いにしへを忍ぶみぎりの諸人の袖よりつたふ橘の風
 四古をしのぶみぎりのたちばなは匂も露も袖の夕かせ
 野徑晩立
 五宮城野の萩に宿かる夕立に錦をきても雨にぬるゝ
 六夕立や雨もふる野の末に見て急ぐ頼みは三輪の杉村
 蓮
 七ながむべし池に蓮の花ざかり濁にそまぬ我が心かな
 八幾宵か西に心の通ふらしはすのうは葉の露の夕ぐれ
 螢照る古郷
 九古のおもかげみだす螢かな高津の宮の松のこすゑに
 〇螢とぶ志賀の大わた開ふかく海人なき浦に螢の漁火

松風暮涼
 一夕まぐれむすぶ岩井に袖ひちて松の梢は夏も秋かせ
 二松をばらぶ野守の夏の夕風に鐘の音さへ秋の聲なる
 松風忘扇
 三宿すし扇は秋の夕まぐれ夏かあらぬか庭の松かせ
 六月祝
 四去年の今日のあすより後の一年の罪なき月の祝也
 立秋
 五風の音の變初ぬる今日はまづ萩の上葉に秋や立らむ
 六鹿は今幾かありてか聲たてむ夏野の萩に秋の夕ぐれ
 七小萩原まづ咲く花に露ちりて夏野の草の秋の夕ぐれ
 野露
 八秋の野べに秋の白露置初めて袖にしたしき秋の夕暮
 九野へにおく千年の秋の初露に潤ひぬらむ君が代の民
 森露
 〇吹ぬなり濡てぞ人の身にもしむ信太の森の露の下風
 七夕
 一七夕はまつらむ物を夕月よあまの川原の有明のころ
 蟲
 二秋の野の小菝が下の蟲の音に心亂れぬ人はあらしな
 旅宿蟲聲
 三庵さす野べの小萩が蟲の音に乾くまもなき旅衣かな
 四いつよりも秋は旅こそ哀なれ野路も山路も蟲の色々
 月
 五秋の夜はたがひにすめる詠めかな心は月に月は心に
 六飛鳥川定なき世をいとはねば淵にも潮にも宿る月影
 七秋の月由なし今は雲に入れ汝し澄すば我も世に在じ
 八月にのみ心を添ふる我身哉曇れば最ご世の厭はしき
 九照さなむ法のむしろの秋の月けふ諸人の行末のやみ
 〇今宵社云ねど秋と知られぬれ月より前の山のはの空
 一世々をへて法の筵を照さなむ秋の限りぞ秋の夜の月

二月ゆるは憂身ぞいと厭はしき涙曇らで誰詠むらむ
 三月も今宵昔をそへて見ゆるかな山の高嶺の法の筵に
 四月秋といへば月より月に移る世の心の果ては有明の空
 五月悟行く雲は高嶺にはれにけり長閑に照せ秋の夜の月
 六月月影にいざよふ波を敷れば君が千年の行へ知らずも
 七月秋の空の清くなり行く月影に氷をあらふ宇治の川波
 林中晩月
 八み空とて横立つ山に木隠れぬ月さへよそに有明の空
 深山見月
 九月影は峯の檜原にかたぶきぬ熊を友にて有明のそら
 〇山の家は有明の空に鹿鳴きてつきせぬ物は哀也けり
 横簾厭夕
 一夕影をいさふ花かど心みむしばしなくれ朝顔の花
 秋旅
 二動きなき君が行幸に馴々れて旅心ちせぬ宇治の山哉
 三萩の下に今夜枕を並べつる鹿は旅ごも思はざるらむ
 九月盡
 四いかにせむ今日を限の秋の露を物思ふ我が袖に懸つる
 五あすは荷梢の秋や忍ばれむ庭の木葉に時雨ふるごも
 六關路より秋の心に迷ひけむ人の愁も今日やつきなむ
 時雨
 七神無月山めぐりするわび人の袂にかよふ村雲のそら
 八枯果つる木の葉の庭に音はして梢寂しき村時雨かな
 九打時雨寂しき色に成にけりいざよふ秋の鹿鳴すごも
 河邊千鳥
 〇いかにせむさほの川原の霧の間に我友齋鳴て立ぬる
 一友千鳥さほの川原に鳴く夜はに聲打そふる嶺の松風
 二川千鳥思兼ねたる冬ぞかし浮世も悲し孰ち行かまし
 三思兼ねいづち行まし小夜千鳥川瀬の波に聲も寒けし
 炭竈

鹿嶋ひ果てははや山里の炭竈よその煙より思立つらむ
 雪
 一三吉野の奥ゆかしくも思ふかな外山は淺き初雪の庭
 二あらゝかに心を風の誘ふかな雪まだおちぬ雲の夕暮
 社頭雪
 三降雪にたゞすの竹も折れふして氷に返る賀茂の川波
 四埋れ行く森の下風神さびて雪に色なきあけの玉がき
 五深く頼む神のいがきに積るらし浮世の後を思ふ白雪
 野亭深雪
 六積る雪の少し高きや人の庭道こそなけれ煙だにたて
 七積雪の障る梢もなき野べの宿の庭にぞ深きをば知る
 歳暮
 八年の明て浮世の夢の覺べくば暮る共間を歎ざらまし
 九年の明て覺べき夢を待つとして暮行く間を厭ふ也
 久忍戀
 〇包めごも尙年月の重なれば物や思ふご又問はれぬる
 一我戀は忍の種をまきそめて坂間に草の生ひかはる哉
 近不逢戀
 二思ひ分かず小屋の萱垣隙をなみ逢はぬ恨と近き情と
 三台在隠戀
 四歸なむ又來る人を待夢を正しく見ては世にも如何は
 五契來世戀
 六諸共に戀しなばこそ後世を契るかひある中と思はめ
 七逢無實戀
 八逢うて逢はぬ戀とはなにぞ唐衣重ぬる夜はの恨也
 見夢増戀
 九打返し逢ふと見つるを現にて覺むる思を夢とさきばや
 夜戀
 〇夜はの秋幾度計り寢覺しつと語らば社は夢も見べき
 一君が代の久しきに寄せて慰めむ夜はの長きも心強きも
 遇不逢戀

恨みじやあひてかひなき袖を此度争て泣重ぬらむ
重ねても今一しほの色ぞこき心ばかりにぬるゝ袂は
思 思ひより通ふ筆のいか計り苦しき海の波となるらむ
思ならぬと社無れ世中は憂に堪たる身こそつらけれ
寄月戀 誰故に秋さへ月のよそならむ涙ならでは曇る空かは
詠むれば晴れず時雨るゝ袂哉月より落つる我涙かは
戀 戀と云心の人に無かりせばあるかひも有じ秋の夕暮
どに斯に由なき道に入にけり逢ぬ恨とあふ嬉しさ
曉嵐に鐘の音過ぎて

夢はいかに嵐に鐘の音過ぎて誰あみだ佛の聲聞ゆ也
寄海水朝 思知る浮寝の床の朝霧にたが行舟のよそになるらむ
ほのゝと波に離るゝ朝霧にませて吹こす磯の松風
寄山暮 山深き我庵よりや知るべせむたぐひに迷ふ秋の夕暮
松風に雲うちなびく夕暮の空に物おもふ秋の山ざと
秋の山によそなる松の梢より袂にかへる夕時雨かな

山風 君が代を幾千年と調ぶらむ松より傳ふ宇治の山風
君が爲め心ばかりを散すかな紅葉まだしき秋の山風
野 野べはいつも哀なれども秋は尙花の千種に露の色々
近江路や野路の篠原夕行けば志賀より歸る小波の風
野を見るに尙あまり行く心かな秋より外の秋の夕暮
法の庭を鹿鳴野べの外かはと思へば今日も秋の夕暮

川 一行末は法の關ともなりぬべし今日の筵にあふ坂の山
別 古の別を忍ぶ法の庭もいく度あかで暮れかゝらむ
無常 五十餘り別し人を數へ來て残る憂身も残るべきかは
述懐 世中にいと心えず見ゆる哉神も佛も知るや知らずや
我が心神と佛と思はえて此世の人のよそになりぬる
心なき心にだにも厭はるゝ身はいかにして長へぬ覺
今年計り惜しき命の故やなに花の春より月の秋まで
自ら誠の道に入りし身をかはる心のなきばかりこそ
今日たのむ神も佛も誠あらば絶えずも通へ法の席に
おろかなる心なれども思ふことは往生淨土臨終正念
思ひ入れて詠むる春の曙は眞如の理にも通ふ也けり

雨中述懐 雲る夜の空吹き拂へ神風や雨なつかしき袖も由なく
軒の雨になり行く袖の雫かな心の雲や空にみつらむ
大方もうき身はいかにされる世ぞ窓打雨も物語せよ
袖に移る雫ばかりやかはるらむ都もおなじ雨の夕暮
大空に友なき友とひぢぬらむ雲よりも又涙落ちけり
なれもうき此世をおもふ涙かも窓うつ雨よ物語せよ
いかにせむ詠むる空もかきくもり軒の雫よ袖の涙よ
袖の上なるか涙と諸共に窓うつ雨に物がたりせむ
今は唯憂身浮世に有りかねて窓うつ雨よ友と成ぬる
語るべき人だにもが暗き雨の窓打聲に覺むるよの夢
懷舊 長らへば思ひ出でよと思ひけり昔情の人のふるまひ
我友と頼みし人はうせ果てゝ忍ぶ昔ぞいと戀しき
管絃 七古をこぶ聲のねを哀れとや琴ひきそふる庭の松かせ
釋教

哀れなり我が山川の岩波を心にかけて幾世かもへむ
瀧 堰入ることも心もあらじ音羽川世の浮ふしの瀧の白糸
山家 さまむしろや尙大原にしくはなしつゞく聖の跡も哀に
松 七哀とや思ひ出づらむ住吉の松たのみこし藤の末葉を
苦 山川の物うき音は岩が根に拂はぬ苔を潜るなりけり
山川の音なきほどに袖ぬれて苔より苔につたふ白波
昔人埋れぬ名を嬉しとや苔の下にも今日は見らむ
鶏 忍びかね袂をしほる限りかな人こぬ宿の鳥の八聲に
曉更鶴 和歌の浦に月影送る有明に蘆べのたづの聲ぞ悲しき
籠の内におのが毛衣霜さえて子を思ふつるの曉の聲
雜 思ひくまの人は中々なき物を哀に犬の主を知るかな
友 唯二人頼むかある中ならば先だつ雲を見ぬ由もがな
花や月を獨ながめぬ情には雪にぞ深く思ひ知りぬる
神祇 立ちかへる世と思はや神風や御裳濯川の末の白波
旅 東路や清見が關の月の夜を數へてこそは思立ちしか
露とも結ぶとすれば草まくら夢もねざめも曉の空
自からたのむ星さへ曇りつゝ間には旅の空ぞ悲しき
さみだれて苦の下伏袖深し入れねよ鳥の一聲のそら
旅宿曉思 草枕秋の心にまごろめば覺むる夢路も春のあけぼの
三都にも月かはらぬ有明のくさの枕に露ぞこぼるゝ

出現於世 月影の出ですばいかに詠めまし我が關深き庭の蓮を
垂是寶車 今ぞ知る今日の車に法の道は門より外に有ける物を
不求自得 舟の内に老にし人を思ふにも求て社は尙えざりしか
等雨法雨 それも露普き法の雨なればいるあぢしまの森の下草
無有魔事 目に見えず怪しと思ふ類まで今日の御法を守べき哉
化城喻品 是もなほ心にとまる旅人のかりのやどりの後の通路
化作大城郭 思ふなよ浮世の中を出果て宿りおくにも宿は有けり
繁著內衣裏 今はわれ思ひ返して唐衣かけける裏の玉を見るかな
内秘菩薩行 せそれも尙到らぬ隈は無かりけり心の内に月を隠して
寶塔品見二如來 孰れか日孰れか月と詠むれば鷲の高嶺のみ空也けり
皆見龍女 見見るもうし雨の海のいろくづの五の雲の晴る氣色を
我不愛身命 身を捨て御法を思願あらば死なむ後にも今日を忘な
又夢作國王 御法ゆゑ夢に成りにし天皇は覺むる現も又夢のほど
分別功德品 法の宿のまさしき胸の砌より流れてとほる山川の水
北泉川こども今はみかの原三笠の山の春をまぢかき
長しと云ふ命の數は身にしめて人の外行く峯の松風

一年を幾たび夢に三熊野の浦の濱ゆふ重ねきぬらむ
定増壽命
千年まで萬代までと定まりて松に十廻花の咲くまで
月波を御法の川に懸てこそよみかなへつれ定増壽命
祝
君が代に千年比べをせさせば長井の浦の松と鶴とに

山家和歌集 山家和歌集上

春

和尙御詠類聚事
度々御百首嘉曆之比類聚已訖今所殘懷紙舊草自然
擬作諸人贈答等也重集之仰 璠子丸 令清書之先
爭云始之後經三十九年其間天下變革世上騷亂幾許
哉而今真俗書籍曾不紛散金玉篇什重終書寫偏是
護法天台之冥助祖師和尙之擁護也不堪欣悅聊述
由致于時貞和二年五月二十三日吉水末流尊圓親王
記
藻鹽草尙書添へて和歌の浦に残れる玉も拾盡しつ
璠子丸書追之時雙紙裏紙に書付歌
古の和歌の浦わの藻鹽草しらで書置く跡や残らむ

此拾玉集者申請竹内門跡御本也書寫之處不審繁也
仍申出青門御本也再三比較而止鳥島之差誤尤可
爲證本一者也
文獻第附林録初二 丹山隱士玄旨 在列

立春の朝よみける
七年くれぬ春來べしとは思寝に正しく見えて適ふ初夢
〇山の端の霞む景色に著きかな今朝よりやさは春の曙
一春立つと思ひも敢ぬ朝戸出にいつしか霞む音羽山哉
一立かはる春を知れども見せ顔に年を隔つる霞也けり
一解け初むる初若水の氣色にて春立とのくまれぬる哉
家々に春を翫ぶといふことを
一門毎に立つる小松に騎されて宿てふ宿に春は來に見
元日子の日に侍りけるに
一山に春たつといふことを
一山里は霞渡れる氣色にて空にや春の立つを知るらむ
難波わたりに年越に侍けるに春立心をよみける
一いつしかも春來に見と津の國の難波の浦を霞置たり
春になりける方違へに志賀の里へ罷りける人に見
具して罷りけるに逢坂山の霞みたりけるを見て
一わきて今日逢坂山の霞めるは立後れたる春や越らむ
春來てなほ雪
一霞の共春をばよその空に見て解けむさなき雪の下水
題しらす
一春知れど谷の下水もりぞ來る岩間の氷ひま絶にけり
一霞ますれば何をか春と思はましまだ雪消ぬ三吉野の山
海邊の霞といふことを
一藻鹽やく浦のあたりは立ちのかで煙あらそふ春霞哉
同じ心を伊勢に二見といふ所にて

波こそと二見の松の見えつるは梢に懸る霞なりけり
子日
一春毎に野べの小松を引人は幾らの千代をふべきなる覽
一子日する人に霞は先立ちて小松が原をたなびきに鳥
一子日しに霞たなびく野べに出で初鶯の聲を聞く哉
一若菜に初子の合たりければ人の許へ申遣しける
一若菜つむ今日に初子の合ぬれば松にや人の心ひく覽
雪中若菜
一今日は唯思も寄で歸りなむ雪つむ野べの若菜也けり
若菜
一春日野は年の内には雪積て春は若菜の生ふる也けり
雨中若菜
一春雨のふる野の若菜生ぬらしわく摘まむ儂手ぬきれ
一若菜に寄せてふるきを思ふといふことを
一若菜つむ野べの霞ぞあはれなる昔を遠く隔つ思へば
老人の若菜といへることを
一卯杖つき七草に社出にけれ年を重ねて摘める若菜は
寄若菜一述懐といふことを
一若菜生る春の野守に我なりて浮世を人に摘知せばや
一鶯によせて思を述べけるに
一うき身にて聞くも惜しきは鶯の霞にむせぶ曙のこゑ
一閑中鶯といふことを
雨中鶯
一鶯のはるさめくさなきるたる竹の葉や涙なるらむ
一すみける谷に鶯の聲せずなりにければ
一古巢疎く谷の鶯成果ては我や代りて鳴かむとすらむ
一鶯は谷の古巢をいでぬども我行方をば忘れざらむ
一鶯は我を巢守に頼みてや谷のほかへは出でゆく覽
一春の程は我住む庵の友になりて古巢ないもそ谷の鶯
さいすを

一もえ出る若菜あさると聞ゆなり雉子なく野の春の曙
一生ひかはる春の若草待侘びて原の枯野に雉子鳴く也
一片岡に芝移りして鳴く雉子立羽音とて高からぬかは
一春霞眺ち立出で一行にけむ雉子住む野を焼てける哉
梅を
一香にぞ先心占置く梅の花色はあだにも散ぬべければ
一山里の梅といふことを
一香をこめむ人を社まで山里の垣ねの梅の散らぬ限は
一心せむ賤が垣はあやな由なく過る人留めけり
一此春は賤が垣はにふれわびて梅が香こめむ人親まむ
一嵯峨に住みけるに道をへだて坊の侍りけるよ
り梅の風に散りけるを
一主にかに風渡るとて厭ふらむよそに嬉しき梅の句を
一庵の前なりける梅を見て詠める
一梅が香を山懐に吹きたためていり來む人にしめよ春風
一伊勢のにしよく山と申す所に侍りけるに庵の梅
かうばしく匂ひけるを
一柴の庵に夜る梅の句來て優しき方も有る住ひ哉
一梅に鶯の鳴きけるを
一梅が香にたぐへて聞けば鶯の聲なつかしき春の山里
一作り置きし梅の衾に鶯は身にしむ梅の香や移すらむ
旅のごまりの梅
一ひとりの草の枕の移香はかきねの梅の匂なりけり
ふるき砌の梅
一何となく軒懐かしき梅故に住みけむ人の心をぞ知る
一山里の春雨といふ事を大原にて人々詠みけるに
一春雨の軒垂籠むつれに人に知られぬ人の栖か
一霞中歸雁といふことを
一何となく覺束なきは天のはら霞に消えて歸る雁がね
一雁がねは歸るみちにやまごぶらむ越の中山霞隔て
歸雁

一花と見ば流石情を懸ましを雲とて風の拂ふなるべし
 一風誘ふ花の行方は知らねども惜む心は身に止りけり
 一花盛梢を誘ふ風ならでのどかに散らむ春はあらばや
 一庭の花波に似たりといふことを詠みけるに
 一風あらみ梢の花の流れ来て庭になみ立つ白河のささ
 一白川の花庭おもしろかりけるを見て
 一あだにちる梢の花を眺むれば庭には消ぬ雪ぞ積れる
 一高野に籠りたりける頃草の庵に花の散りつみけ
 一散花の庵の上を吹くならば風いるまじく廻り圍はむ
 一夢中落花といふを前齋院にて人々よみけるに
 一春風の花をちらすと見る夢は覺ても胸の騒ぐ也けり
 一風の前の落花といふことを
 一山櫻枝さる風なごりなく花を宛らわがものにする
 一雨中落花
 一梢うつ雨に萎れて散る花のをしき心を何にたどへむ
 一遠山殘花
 一吉野山一むら見ゆる白雲は咲き後れたる櫻なるべし
 一花の歌十五首よみけるに
 一吉野山人に心をつけがほに花よりさきにかゝる白雲
 一山寒み花咲くべくもなかりけり餘り兼ても尋來に息
 一かた計り雷むと花を思ふより空また心物になるらむ
 一覺東な谷は櫻のいかならむ峯にはいまだかけぬ白雲
 一花と聞くは誰もさこそは嬉しけれ思ひ沈めぬ我心哉
 一初花の開け初むる梢よりそぼえて風の渡るかな
 一覺東な春は心の花にのみ孰れの年かうかれそめけむ
 一いざ今年散れと櫻を語らば中々さらば風や惜むと
 一風ふくと枝を離ておつまじく花とちつけよ青柳の糸
 一吹く風のなべて梢にあたる哉かばかり人の惜む櫻を
 一何とかくあだなる花の色をしも心に深く染め始めむ
 一同じ身の珍しからず惜めばや花も變らず咲きは散らむ

一峯にちる花は谷なる木にぞ咲く痛く厭はじ春の山風
 一山嵐に亂れて花の散けるを岩離れたる瀧と見たれば
 一花もちり人も都へ歸りなば山寂しくやならむとす覽
 一散りて後花を思ふといふことを
 一青葉さへ見れば心の止る哉散にし花の名残と思へば
 一董
 一跡絶て淺茅茂れる庭の面にたれ分入りて董摘みけむ
 一誰ならむ荒田のくもに董つむ人は心のわりなかりけり
 一さわらび
 一等閑に焼捨し野の早蕨は折人なくてほごろごやなる
 一かきつばた
 一沼水に茂る真菰のわかれぬを咲き隔てたる燕子花哉
 一山路のつゝじ
 一這傳ひをらで躑躅を手にぞとる坂しき山の取所には
 一つゝじ山のひかりたりといふことを
 一躑躅さく山の岩陰夕ばえて小倉はよその名のみ也鳥
 一やまぶき
 一岸近みうゑけむ人ぞ恨めしき波にをらるゝ山吹の花
 一山吹の花さく里に成れば爰にも井手と思ほゆる哉
 一蛙
 一眞菅生ふる山田に水を任すれば嬉し顔にもなく蛙哉
 一水錆みて月も宿らぬ濁江に我すまむとて蛙なくなり
 一春のうちに郭公を聞くといふことを
 一嬉しども思ひぞわかぬ郭公春さくとの習ひなければ
 一伊勢にまかりたりけるにみつと申す所にて海邊
 一の春の暮といふことを神主ども詠みけるに
 一過る春潮のみつより舟出して波の花をや先にたつ覽
 一三月一日たらで暮れけるに詠みける
 一春故にせめても物を思へどやみそかにだにもたらで暮るる
 一三月のつごもり
 一今日のみと思へば長き春の日も程なく暮るゝ心地社それ

一行く春をさごめかぬぬる夕暮は曙よりも哀なりけり
 一夏
 一限あれば衣ばかりを脱ぎかへて心は花を慕ふ也けり
 一夏の歌よみけるに
 一草しげる道かりあけて山里に花見し人の心を見る
 一水邊卯花
 一龍田川岸の籬を見わたせば井堰の波にまがふ卯の花
 一山川の波にまがへる卯花を立返りてや人はをらむ
 一夜卯花
 一紛ふべき月なき頃の卯花は夜さへ晒す布かぞを見る
 一社頭卯花
 一神垣のあたりに咲も便あれや木綿懸たり見ゆる卯花
 一無言なりける頃郭公の初聲を聞きて
 一時鳥人に語らぬ折にしも初音きく社かひなかりけれ
 一不尋聞三子規といふことを賀茂の社にて人々
 一よみけるに
 一時鳥卯月の忌にあこもるを思知りても來なくなる哉
 一夕暮郭公といふことを
 一ことなるゝ黄昏時の郭公聞かず顔にて又なのらせむ
 一時鳥
 一我が宿にはな橘を植えてこそ山郭公待つべかりけれ
 一尋ぬれば聞き難きかと時鳥今宵ばかりは待ち試みむ
 一時鳥まつ心のみつくさせて聲をば惜む五月なりけり
 一人に代りて
 一まつ人の心を知らば郭公頼もしくてや夜を明さまし
 一時鳥をまて明けぬといふことを
 一時鳥なかで明けぬとつげ顔にまたれぬ鳥の音ぞ聞ゆなる
 一時鳥きかであけぬ夏の夜の浦島の子は誠なりけり
 一時鳥の歌五首よみけるに
 一時郭公きかぬ物故まよはまし花を尋ねぬ山路なりせば
 一時待つとは初音迄かと思ひしにきよふるさるされぬ時鳥哉

一きよおくる心をぐして郭公高間の山の峯越えぬなり
 一七六 大堰川小倉の山の郭公のせきに聲のこまらましければ
 一七六 郭公その後越えむ山路にも語らぬ聲は變らざらなむ
 一時鳥を
 一時鳥さくをりにこそ夏山の青葉は花に劣らざりけれ
 一時鳥思ひもわかぬ一聲を聞きつといかゝ人に語らむ
 一時鳥いかばかりなる契にて心つくさで人の聞くらむ
 一時語らひし其夜の聲は時鳥いかなるよにも忘れむ物か
 一時鳥はな橘はにほふとも身をうの花の垣根わするな
 一時鳥の中に郭公を待つといふことを詠みけるに
 一時鳥忍ぶ卯月も過ぎにしをなほ聲をしむ五月雨の空
 一時鳥
 一五月雨の晴間も見えぬ雲路より山郭公なきて過ぐ也
 一山寺の時鳥といふことを人々よみけるに
 一郭公きよにこそしも籠らねど初瀬の山は便ありけり
 一五月の晦日に山里にまかりて立歸りにけるを時
 一鳥もすげなく聞き捨て歸りし事など人の申し遣
 一はしける返りごと
 一時鳥名残あらせて歸りしが聞捨つるにも成にける哉
 一時鳥
 一三空晴て沼の水嵩を落さずば菖蒲もふかぬ五月なるべし
 一さることありて人の申し遣しける返り事に五日
 一折にひて人に我身や引れまし筑摩の沼の菖蒲也せば
 一高野に中院と申す所に菖蒲ふきたる坊の侍りけ
 一るに櫻の散りけるが珍らしく覺えて詠みける
 一櫻ちる宿に重なる菖蒲をば花菖蒲とや云べからむ
 一散花を今日の菖蒲のねに懸て薬玉ともや云可るらむ
 一五月五日山寺へ人の今日いる物なればとてさう
 一を遣したりける返り事に
 一以西にのみ心ぞかゝる菖蒲草この世は假の宿と思へば
 一皆人の心のうきは菖蒲草にしに思のひかぬなりけり